

KASHII-B 2

THE REPORT OF THE 8TH ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
OF THE KASHII-B SITE
IN FUKUOKA, JAPAN

March 2013

FUKOKA CITY BOARD OF EDUCATION

香椎B遺跡2

香椎B遺跡第8次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一八六集

二〇一三

福岡市教育委員会

KASHII

香椎B遺跡2

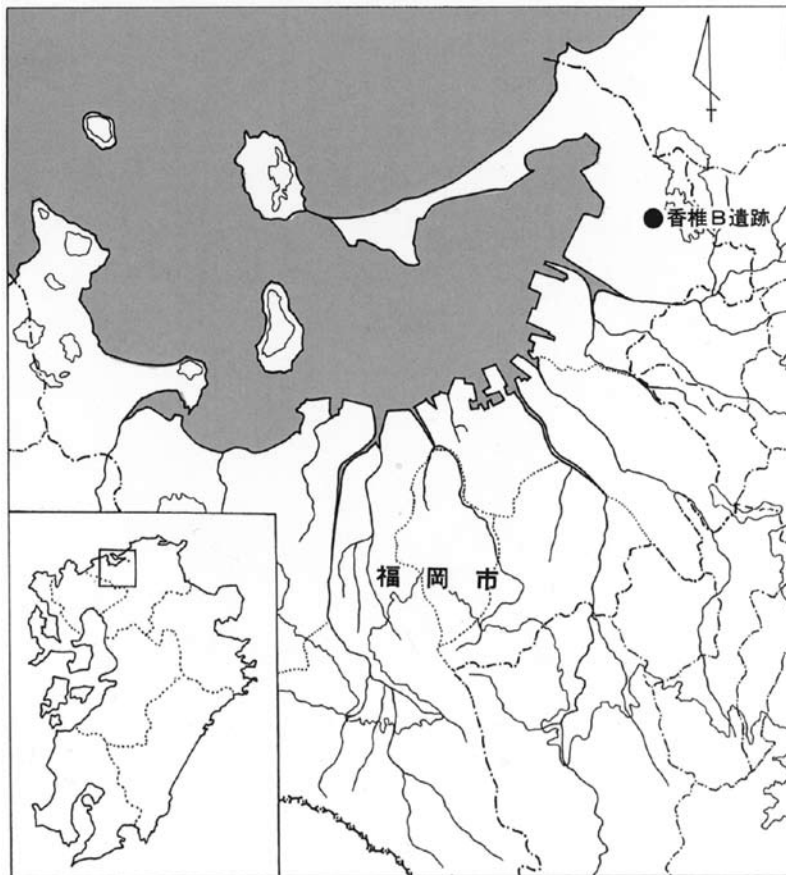
香椎B遺跡第8次調査報告

2013

福岡市教育委員会

K A S H I I
香椎 B 遺跡 2

—香椎 B 遺跡第 8 次調査報告—



調査番号 1014
調査略号 KSB-8

平成 25 年

福岡市教育委員会

序

福岡市は、原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めるとともに、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。

今回報告いたしますのは、福岡市東部に位置する香椎B遺跡の発掘調査成果で、中世の屋敷跡等が中心となっています。

今後、本書および調査資料が学術研究だけにとどまらず、市民各位の埋蔵文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、朝陽産業株式会社や地権者の皆さまをはじめとする関係各位にはさまざまなご理解やご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市東区大字香椎字生水1433-1他の住宅地造成予定地内において、2010年度(平成22年度)に実施した香椎B遺跡第8次発掘調査の報告書である。
2. 本書における調査の細目は次のとおりである。
3. 遺構実測図に付した座標値は平面直角座標形第Ⅱ座標系(日本測地系)による座標値である。方位は磁北で、真北に対して6°40′西偏する。
4. 本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にSA(柵・塀)、SB(掘立柱建物)、SC(堅穴建物)、SD(溝・河川)、SE(井戸)、SK(土壇)、SR(墓)、SX(その他)などの遺構の性格を示す分類記号を付した。
5. 本書に係る遺構・遺物の実測および遺構・遺物の写真撮影は相原聡子、瀧本正志、大塚紀宜が担当した。
6. 本書の執筆は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ-1・2(1) - 1)、2)瓦類・(2) - 1)・(3) - 1)、2)瓦類・(4) - 1)・(5) - 1)、Ⅳを瀧本、Ⅲ-2(1) - 2)・(2) - 2)・(3) - 2)・(4) - 2)・(5) - 2)、Ⅲ-2(6) ~ (10)を大塚が行い、編集は瀧本が担当した。
7. 本書の発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地	面積	調査期間
香椎B遺跡8次	1014	KSB-8	東区大字香椎字生水1433-1他	2651.2㎡	2010年6月22日～2010年11月19日

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
1.	発掘調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と歴史的環境	3
1.	遺跡の位置と立地	3
2.	遺跡の歴史的環境	3
第Ⅲ章	調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	遺構と遺物	9
(1)	1区の調査	9
(2)	2区の調査	15
(3)	3区の調査	17
(4)	4区の調査	45
(5)	5区の調査	53
(6)	6区の調査	58
(7)	7区の調査	59
(8)	8区の調査	67
(9)	9区の調査	90
(10)	10区の調査	93
3.	自然科学分析	98
第Ⅳ章	結語	99

插图目次

Fig. 1	調査地位置図 (1/200,000)	4	Fig.50	5区出土遺物実測図2・拓影 (1/1・1/2・1/3・1/4) ...	57
Fig. 2	調査地周辺航空写真	4	Fig.51	6区全体図・6区南壁土層図 (1/200・1/100)	58
Fig. 3	調査地周辺遺跡分布図 (1/70,000)	6	Fig.52	7区第1面全体図 (1/300)	59
Fig. 4	第8次調査周辺地形・調査区域図 (1/900)	8	Fig.53	7区第2面全体図 (1/300)	60
Fig. 5	1区遺構実測図 (1/100)	折り込み	Fig.54	7区東壁土層図 (1/100)	60
Fig. 6	SE1010実測図 (1/40)	10	Fig.55	SP7001～7024遺構実測図 (1/40)	61
Fig. 7	SE1013実測図 (1/40)	10	Fig.56	SD7025遺構実測図 (1/150)	62
Fig. 8	1区出土遺物実測図1 (1/3)	12	Fig.57	SD7032遺構実測図 (1/150)	63
Fig. 9	1区出土遺物実測図2 (1/3)	13	Fig.58	SD7032出土遺物実測図1 (1/3)	64
Fig.10	1区出土瓦実測図・拓影 (1/4)	14	Fig.59	SD7032出土遺物実測図2 (1/4)	65
Fig.11	2区遺構実測図 (1/100)	15	Fig.60	8・9区全体図 (1/200)	67
Fig.12	2区出土遺物実測図 (1/3)	16	Fig.61	8区竪穴建物・土坑実測図 (1/60)	68
Fig.13	3区遺構実測図 (1/100)	折り込み	Fig.62	SC8001出土遺物実測図 (1/3)	69
Fig.14	SD3003土層実測図 (1/40)	20	Fig.63	SK8006出土遺物実測図 (1/3)	69
Fig.15	SD3008・3010土層実測図 (1/40)	20	Fig.64	SK8007出土遺物実測図 (1/3)	70
Fig.16	SD3008土層実測図 (1/40)	20	Fig.65	SK8009出土遺物実測図 (1/3)	71
Fig.17	SK3013遺構実測図 (1/20)	21	Fig.66	SK8014遺構実測図 (1/40)	72
Fig.18	3区遺構実測図 (1/90)	22	Fig.67	SK8014遺物出土状況実測図 (1/20)	73
Fig.19	3区出土遺物実測図1 (1/3)	28	Fig.68	SK8014出土遺物実測図1 (1/3)	73
Fig.20	3区出土遺物実測図2 (1/3・1/4)	29	Fig.69	SK8014出土遺物実測図2 (1/3)	74
Fig.21	3区出土遺物実測図3 (1/3)	30	Fig.70	SR8019遺構実測図 (1/50)	75
Fig.22	3区出土遺物実測図4 (1/3)	31	Fig.71	SR8019墓壇実測図 (1/40)	75
Fig.23	3区出土遺物実測図5 (1/4)	32	Fig.72	SR8019地山面実測図 (1/50)	76
Fig.24	3区出土遺物実測図6 (1/3)	32	Fig.73	SR8019墓壇遺物出土状況 (1/20)	77
Fig.25	3区出土遺物実測図7 (1/3)	33	Fig.74	SR8019出土遺物実測図1 (1/3)	77
Fig.26	3区出土遺物実測図8 (1/3)	34	Fig.75	SR8019出土遺物実測図2 (1/3)	78
Fig.27	3区出土遺物実測図9 (1/4)	35	Fig.76	SR8019出土遺物実測図3 (1/3)	79
Fig.28	3区出土遺物実測図10 (1/3)	35	Fig.77	SR8019出土遺物実測図4 (1/3)	80
Fig.29	3区出土遺物実測図11 (1/3)	36	Fig.78	SR8019出土遺物実測図5 (1/3)	81
Fig.30	3区出土遺物実測図12 (1/3・1/4)	37	Fig.79	SR8019出土遺物実測図6 (1/4)	82
Fig.31	3区出土遺物実測図13 (1/3)	37	Fig.80	SR8020遺構実測図 (1/40)	83
Fig.32	3区出土遺物実測図14 (1/3)	38	Fig.81	SR8020出土遺物実測図 (1/3)	84
Fig.33	3区出土遺物実測図15 (1/3)	39	Fig.82	8区土壇墓遺構実測図 (1/40)	85
Fig.34	3区出土遺物実測図16 (1/3)	39	Fig.83	8区遺構実測図 (1/40)	86
Fig.35	3区出土遺物実測図17 (1/3)	40	Fig.84	8区出土遺物実測図 (1/3・瓦は1/4)	87
Fig.36	3区出土遺物実測図18 (1/4)	41	Fig.85	SD9001遺構実測図 (1/150)	90
Fig.37	3区出土瓦実測図・拓影1 (1/4)	42	Fig.86	SD9001出土遺物実測図 (1/3)	90
Fig.38	3区出土瓦拓影2 (1/4)	43	Fig.87	SX002遺構実測図 (1/50)	91
Fig.39	4区遺構実測図 (1/100)	46	Fig.88	SX9002出土遺物実測図 (1/3・瓦は1/4)	92
Fig.40	SC4007カマド全体図 (1/20)	47	Fig.89	SX9003遺構実測図 (1/40)	92
Fig.41	SC4007カマド上部 土器出土状況 (1/20)	48	Fig.90	9区出土遺物実測図 (1/3)	92
Fig.42	SC4007カマド下部 (1/20)	482	Fig.91	10区東壁土層図 (1/200)	93
Fig.43	SC4007出土遺物実測図1 (1/3)	49	Fig.92	10区全体図 (1/200)	94
Fig.44	SC4007出土遺物実測図2 (1/3)	504	Fig.93	10区遺構実測図 (1/40)	95
Fig.45	SK4008・SK4008出土遺物実測図 (1/20・1/3) ...	50	Fig.94	10区出土遺物実測図 (1/3)	96
Fig.46	SK4009出土遺物実測図 (1/3)	51	Fig.95	SP10129・SP10130遺構実測図 (1/40)	97
Fig.47	4区出土遺物実測図 (1/3)	52	Fig.96	10区出土遺物実測図 (1/3)	97
Fig.48	5区遺構実測図 (1/100)	54	Fig.97	暦年較正結果	98
Fig.49	5区出土遺物実測図1 (1/3)	56			

插图目次

Tab. 1	軒丸瓦048A (50014) 計測値表	44	Tab. 2	放射性炭素年代測定結果	98
--------	----------------------------	----	--------	-------------------	----

図版目次

- P L. 1 1960年(昭和35年)の調査地周辺地形と推定古代海岸線
P L. 2 2001年(平成13年)の調査地周辺地形と推定古代海岸線
P L. 3 1949年(昭和24年)の調査地と周辺地名
P L. 4 1949年(昭和24年)の調査地と周辺地形
P L. 5 1961年(昭和37年)の調査地と周辺地形
P L. 6 1975年(昭和50年)の調査地と周辺地形
P L. 7 1987年(昭和62年)の調査地と周辺地形
P L. 8 1998年(平成9年)の調査地と周辺地形
P L. 9 2004年(平成15年)の調査地と周辺地形
P L. 10 (1) 調査地調査前遠景(南から)
(2) 調査地遠景(南から)
(3) 調査地遠景(南から)
(4) 調査地遠景(南から)
(5) 調査地現況(南から)
P L. 11 (1) 調査地調査前遠景(南東から)
(2) 調査地遠景(南東から)
(3) 調査地遠景(南東から)
(4) 調査地遠景(南東から)
(5) 調査地現況(南東から)
P L. 12 (1) 1区北部遺構検出状況(南から)
(2) 1区南部遺構検出状況(東から)
(3) SE1010検出状況(東から)
(4) SE1010堆積状況(東から)
(5) SE1010完掘状況(東から)
(6) SE1013堆積状況(北から)
P L. 13 (1) 2区遠景(南から)
(2) 2区遺構検出状況(東から)
P L. 14 (1) SD3001(南から)
(2) SD3001土層(北から)
(3) SD3002(西から)
(4) SD3001・SD3003(南から)
P L. 15 (1) SD3003(南から)
(2) SD3003土層(南から)
(3) SD3012(東から)
(4) SD3003・SD3012(北から)
P L. 16 (1) SD3004～SD3007(南から)
(2) SD3004～SD3007(西から)
P L. 17 (1) SD3010(北から)
(2) SD3008(南から)
(3) SD3010(南から)
(4) SE3015(南から)
(5) SK3013検出状況溝(西から)
P L. 18 (1) SA3120(東から)
(2) SA3140(北から)
(3) SA3150(北東から)
P L. 19 (1) SB3100(北から)
(2) SB3110(東から)
(3) SB3025(西から)
P L. 20 (1) 4区発掘前状況(東から)
(2) 4区第1面遺構検出状況(東から)
P L. 21 (1) 4区第2面遺構検出状況(東から)
(2) SC4009(南から)
P L. 22 (1) SC4007(南から)
(2) SC4007(東から)
P L. 23 (1) SC4007カマド土器出土状況(南から)
(2) SC4007カマド土器出土状況(東から)
(3) SC4007カマド土器出土状況(南から)
(4) SC4007カマド土器出土状況(南から)
(5) SC4007カマド(南から)
(6) SC4007カマド(東から)
P L. 23 (7) SC4007カマド(南から)
(8) SC4007カマド(東から)
P L. 24 (1) 5区第1面遺構検出状況(西から)
(2) 5区第2面遺構検出状況(西から)
P L. 25 (1) 6区全景(北西から)
(2) 6区全景(北から)
(3) 6区南壁土層(北から)
P L. 26 (1) 7区全景(西から)
(2) 7区1面全景(東から)
(3) 7区2面全景(東から)
(4) SD7032(北から)
(5) 7区東壁土層(西から)
P L. 27 (1) 8区全景(東から)
(2) SC8001(北から)
(3) SK8006(西から)
(4) SK8007(西から)
(5) SK8009(北から)
P L. 28 (1) SR8014蔵骨器・副葬遺物(北から)
(2) SR8014上段石積み(北から)
(3) SR8014中段石積み上面(東から)
(4) SR8014下段上面(東から)
(5) SR8014蔵骨器出土状況(東から)
P L. 29 (1) SR8019(北西から)
(2) SR8019(西から)
(3) SR8019主体部(西から)
(4) SR8019副葬品出土状況(南から)
(5) SR8019地山整形(南西から)
P L. 30 (1) SR8020(北から)
(2) SR8020(東から)
(3) SR8020副葬品出土状況(南から)
(4) SR8003(南西から)
(5) SR8004(南から)
(6) SR8016(北東から)
(7) SR8022(北東から)
P L. 31 (1) 9区西側(南から)
(2) 9区北側(西から)
(3) SX9002(東から)
P L. 32 (1) 10区全景(南から)
(2) 10区全景(北から)
(3) SR10001(西から)
(4) SK10002(東から)
(5) SK10009(西から)
(6) SK10010(西から)
P L. 33 1区出土遺物
P L. 34 2区・3区出土遺物
P L. 35 3区出土遺物
P L. 36 3区出土遺物
P L. 37 3区出土遺物
P L. 38 3区出土遺物
P L. 39 3区出土遺物
P L. 40 3区出土遺物
P L. 41 3区出土遺物
P L. 42 3区・5区出土遺物
P L. 43 1～5区出土丸瓦・平瓦
P L. 44 4区出土遺物
P L. 45 8区SR8014・SR8019・SR8020出土湖州鏡
P L. 46 8区SR8014出土遺物
P L. 47 8区SR8019出土遺物1
P L. 48 8区SR8019出土遺物2
P L. 49 8区SR8020出土遺物

第I章 はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

平成20年(2008年)4月10日付で朝陽産業株式会社から福岡市東区大字香椎字生水1433-1番他の16,880㎡を対象とした埋蔵文化財事前審査願い(審査番号20-2-35)が福岡市教育委員会へ出された。当該地は、埋蔵文化財包蔵地域の「香椎B遺跡」内に位置し、隣接地における埋蔵文化財調査(香椎B遺跡第1～6次)では堀で区画された中世の屋敷群跡や山城跡が発見されている。以上の点から、申請地において遺跡の存在が十分に想定され、試掘調査が必要であると判断された。

平成20年(2008年)5月28日・30日と6月6日、埋蔵文化財第1課は申請地において試掘調査(試掘番号20-337)を行った結果、地表下30cmの地層面において中世集落に関連すると考えられる溝や小穴を検出した。遺物の出土は認められなかったが、遺構の残存状況や隣接地における発掘調査成果などから当該地においては中世の遺跡の存在が強く推定され、計画される開発事業が実施された場合には遺跡に影響が及ぶものと判断した。

試掘調査結果を依頼者に回答するとともに埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、埋蔵文化財への影響は回避できないことから、造成工事に先立って記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成22年6月20日付で朝陽産業株式会社を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成22年6月22日から11月19日まで発掘調査、平成23年度に資料整理、平成24年度に発掘調査報告書の作成・刊行を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：朝陽産業株式会社

調査主体：福岡市教育委員会

平成20年度(2008年度) 試掘調査

調査総括	文化財部	埋蔵文化財第1課	課長	山口 譲治
事前審査			事前審査係長	吉留 秀敏
試掘調査			文化財主事	藏富士 寛

平成22年度(2010年度) 発掘調査

調査総括	文化財部	埋蔵文化財第2課	課長	田中 壽夫
			調査第2係長	菅波 正人
調査			文化財主事	瀧本 正志
			文化財主事	大塚 紀宜
庶務		埋蔵文化財第1課		古賀 とも子

平成23年度(2011年度) 資料整理

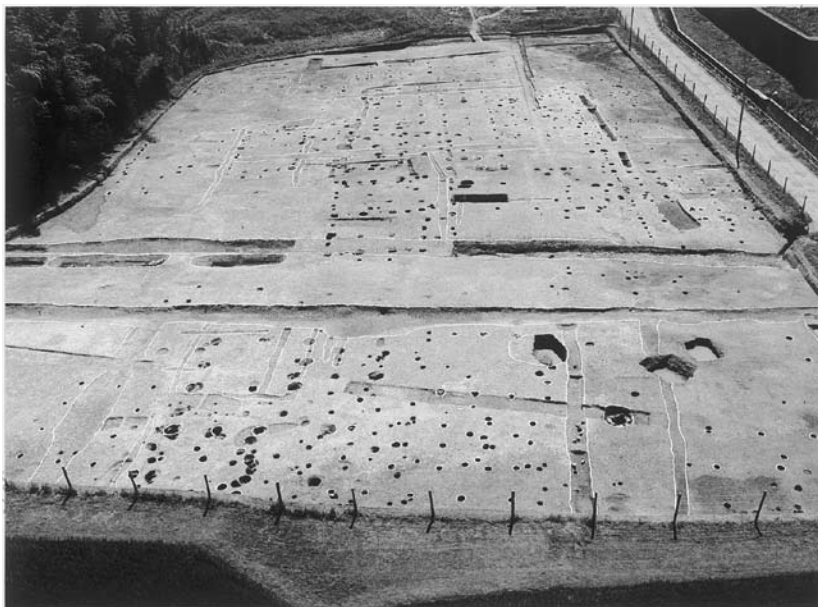
調査総括	文化財部	埋蔵文化財第2課	課長	田中 壽夫
			調査第2係長	菅波 正人
資料整理			文化財主事	瀧本 正志
			文化財主事	大塚 紀宜

庶務 埋蔵文化財第1課 古賀とも子

平成24年度(2012年度)発掘調査報告書作成

調査総括	文化財部	埋蔵文化財調査課	課長	宮井善朗
			調査第2係長	菅波正人
報告書作成			文化財主事	瀧本正志
			主任文化財主事	大塚紀宜
庶務		埋蔵文化財審査課		古賀とも子

※文化財部は、組織改編により2012年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に所管替えとなった。



中世屋敷跡(香椎B遺跡第1次調査)



御飯ノ山城跡(香椎B遺跡第3次調査)

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

博多湾にのぞむ広義の福岡平野は、博多湾へ向かって派生した油山、月隈の各低丘陵を境として、3つの小平野に区分され、西から早良平野、福岡平野、粕屋平野と称されている。最も東の粕屋平野は、北は立花山、西は月隈丘陵に挟まれ、南から東は三郡山系と犬鳴山系に囲まれた地域で、北西部の博多湾に向かって開口する。犬鳴山系に源を発する猪野川と犬鳴山系と三郡山系の接点に源を発する篠栗川の合流である多々良川と、三郡山系に源を発する宇美川と須恵川の沖積作用により形成された平野である。

香椎B遺跡群は粕屋平野の北縁の丘陵地に位置する。この丘陵は香椎丘陵と呼ばれ、第三紀の堆積岩によって構成されている。

遺跡は標高180mの城ノ越山から西に伸びる丘陵部と、丘陵に挟まれた谷部に立地する。遺跡北部は丘陵部であるが、城ノ越山との間に谷が入り、明治33年の地図に「老ノ山」と記されている標高90mの独立した山としてとらえられる。「老ノ山」は貝原益軒が著した「筑前國続風土記」に「御飯(おい)の山古城」と記され、立花城の端城であるとも伝える。遺跡南部は西側に開口した幅70m、奥行き800mの谷であり、標高は14m前後である。北側は「老ノ山」、南側は標高約36mの住宅地に挟まれる。南側の住宅地は以前丘陵地であり、宅地造成の際、谷部の南側を埋めており、谷の幅はかつて102mであった。

2. 遺跡の歴史的環境

粕屋平野内では旧石器時代の遺物が断片的ではあるが、発見されており、古くから生活の場であったことが証明されている。縄文時代晩期末(弥生時代早期)には江辻遺跡で農耕集落が営まれている。

弥生時代では蒲田部木原遺跡、蒲田水ヶ元遺跡で中期～終末期・古墳時代の集落や中期の甕棺墓が検出されている。香椎B遺跡の南方1kmの青葉台遺跡(糶の谷遺跡)でも中期の甕棺が出土している。また、青銅器鑄型の発見も多く、多々良大牟田遺跡では有鉤銅釧と広形銅戈の鑄型、土井遺跡で中細銅戈と中広銅劍の鑄型が発見されている。そのほか八田出土と伝えられる中細銅戈鑄方がある。

弥生時代終末から古墳時代初頭には多々良川左岸の多々良込田遺跡で外来系土器を多数持つ集落が検出されている。博多湾東岸の砂丘上に位置する唐の原遺跡では漁撈関連遺物を出土する集落と性格不明の多数の炉跡が発見された。

古墳は多々良川河口近くの右岸、丘陵上に名島古墳がある。全長約30mの前方後円墳で、三角縁吾作銘九神三獣鏡が出土している。猪野川左岸の舌状丘陵上にある天神森古墳からは三角縁天王日月獣文帯三神三獣鏡と小型の盤龍鏡出土している。香住ヶ丘古墳からは三角縁天王日月獣文帯二神二獣鏡が発見されている。これらの古墳より、この地域がはやくから畿内勢力と結びつきがあったことをうかがわせている。香椎B遺跡群の南1kmに所在する舞松原古墳は4世紀後半の造出付き円墳で、主体部は木棺直葬であることが近年の調査で明らかになった。南東1kmには三留古墳群や湯ヶ浦古墳群がある。唐の原遺跡では6世紀代の円墳が調査されている。

古代においては多々良込田遺跡で、多量の越州窯系青磁や緑釉陶器、灰釉陶器、石帯、硯、墨書土器など、官衙を想定させる遺物が出土しており、注目される。

古代末から中世にかけては、多々良遺跡で、輸入陶磁器や在地の土師器などが多数出土し、方形区画溝をもつ集落が検出されている。戸原麦尾遺跡でも12世紀から14世紀にかけての方形区画溝をも

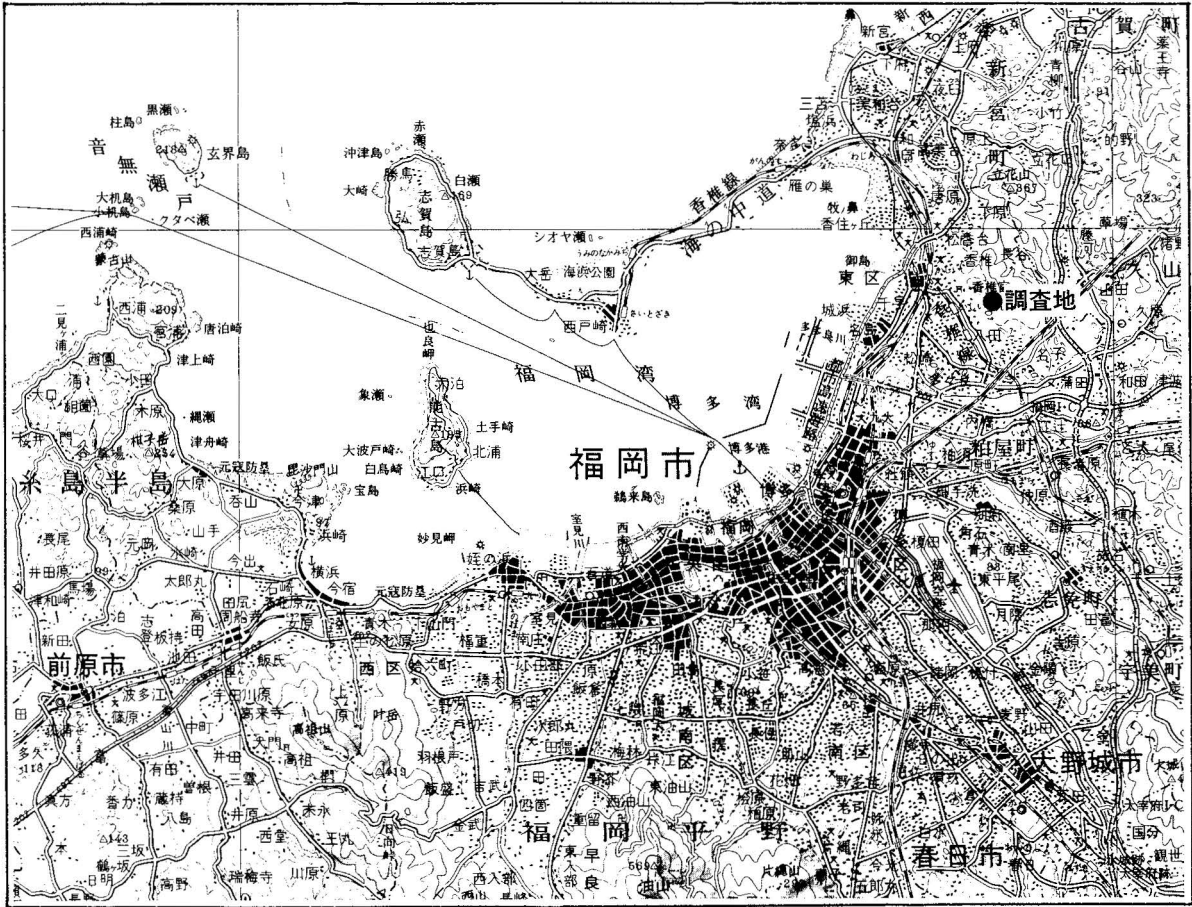


Fig.1 調査地位置図(1/200,000)



Fig.2 調査地周辺航空写真(1960年)

国土地理院所蔵写真

つ屋敷地や集落、水田址が調査された。香椎B遺跡の谷を隔てた西側には香椎A遺跡がある。2次調査では12世紀後半から15世紀の建物や井戸が検出されている。

多々良田遺跡の対岸には顕孝寺址がある。14世紀後半に大友貞宗により建立されたもので、大友氏の対外的な通商拠点となっていたと考えられる。

次に香椎B遺跡をとりまく歴史的環境をみていくことにする。

神亀元年(724)に創建と伝えられる香椎宮は香椎B遺跡が所在する谷の開口部にある。古くは香椎廟と言ひ、奈良時代以来勅使がつかわされた勅祭社である。儼県檀日宮で崩御した仲哀天皇を、神功皇后が祀ったのが起源とされる。その後、香椎宮は大宰府領や蓮華王院領、石清水八幡宮領に編入されている。

建久2年(1191)、2度目の入宋から帰国した栄西は臨濟宗を広めるが、翌年、香椎の地に建久報恩寺をたてている。日本最古の禅宗寺院である。

文永11年(1274)の元軍襲来の後、博多湾岸には元寇防塁が築かれる。香椎地区を担当したのは豊後国の大友氏である。これ以降、香椎宮周辺の大友領化が進んでいく。

元徳2年(1330)、大友貞載が立花城を築いたとされる。立花城は香椎B遺跡の北方約3km、標高367mの立花山に築かれた山城である。戦国時代を通して筑前の軍事拠点として重要な城であった。

元弘3年(1333)、鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇による建武の新政が行われる。建武政権と対立した足利尊氏は京都で敗れ、九州に逃れる。再起をかけて菊地武敏と戦ったのが建武3年(1336)の多々良浜の戦いである。尊氏は合戦場の多々良川河口に向かう途中に香椎宮へ戦勝祈願をしている。また、近世初頭に成立した「九州軍記」には足利尊氏・直義兄弟が「笈の山」に登ると記されている。

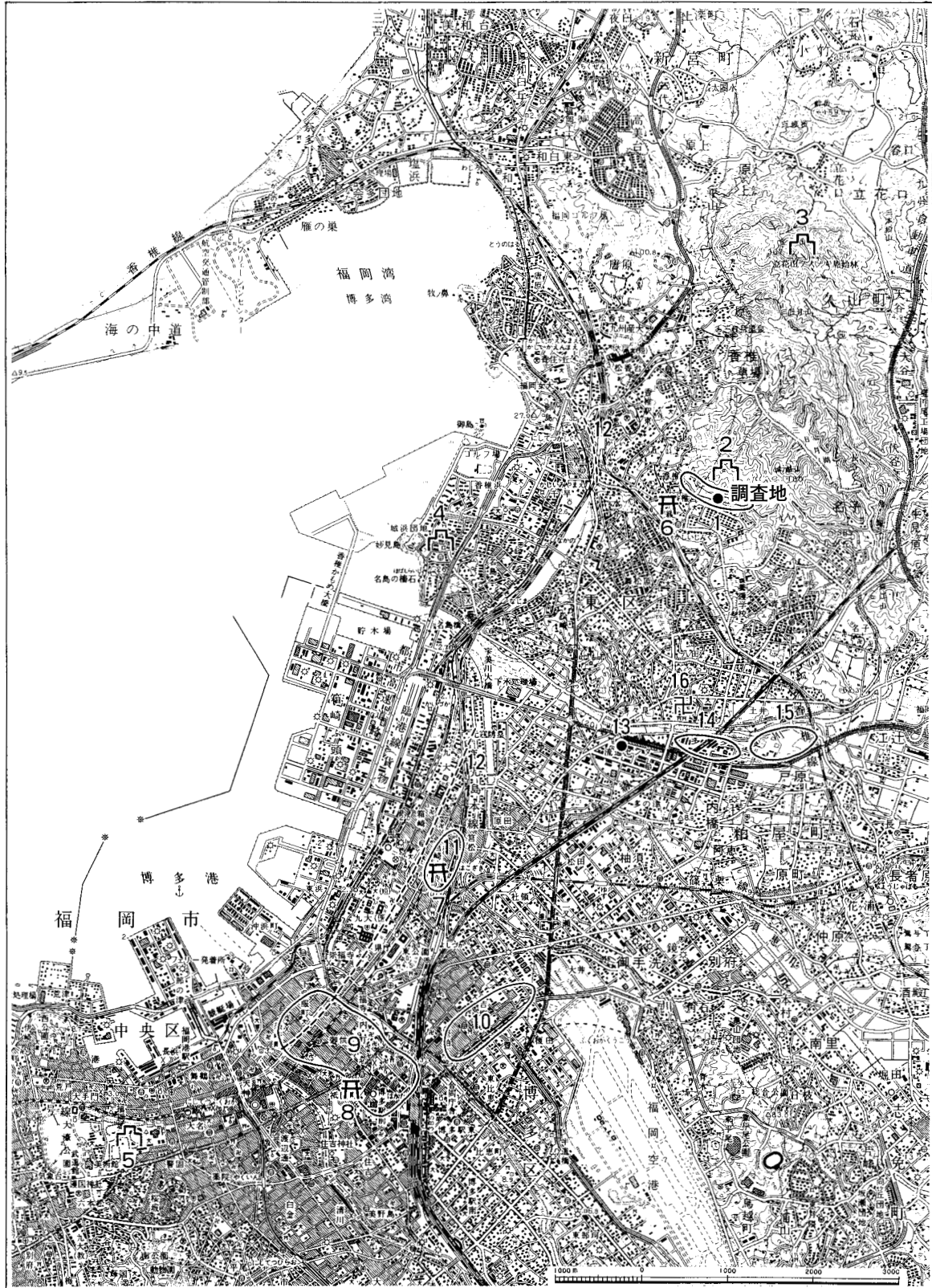
大友貞宗は建武政権から博多息浜を恩賞として与えられていたが、室町幕府により一時期はこの地を取り上げられ、永享元年(1429)には支配が復活している。その後、貿易の利権が得られる息浜支配をめぐって、周坊の大内氏と大友氏の争いが激しくなり、立花城は幾度となく争奪戦が繰り返された。永享3年(1431)大内氏が立花城を攻略するも文明元年(1469)ごろには大友氏が奪回している。天文元年(1532)には大内義隆が立花城を攻略したが、大内氏滅亡により、天文23年(1554)、大友氏へ復帰し、立花鑑載が城主となった。大内氏滅亡の後には、陶晴賢を討った毛利氏と大友氏による立花城争奪戦が続けられ、永禄11年(1568)には立花鑑載が毛利元就と通じて大友宗麟に反旗を翻した。毛利・大友間で激しい攻防が繰り返され、立花城支配は二転三転したが、元亀元年(1570)大友方の戸次鑑連(立花道雪)が立花城を奪回し、同2年(1571)、立花城城督となった。

天正14年(1586)、薩摩の島津軍が北部九州に攻め上り、立花城を攻め、博多や香椎を焼き払い、香椎宮も焼亡した。「筑前國統風土記拾遺」によると、香椎宮前大宮司家の息子が「老ノ山」に籠もったと記されている。

豊臣秀吉の九州平定後、筑前国守となった小早川隆景はいったん立花城に入ったが、多々良川河口に名島城を築いた。しかし関ヶ原の戦いの後、新たに筑前に入った黒田長政は福岡城を築き、名島城は廃城となった。

近世の香椎周辺は、黒田氏により香椎宮神殿の再建や補修が行われたものの、かつての繁栄はなくなり、一農村となった。

以上のように香椎B遺跡は古代からは香椎宮、中世からは大友氏、戦国時代には立花城と深い関係にあり、これらの動向が遺跡の変遷に大きく関わっているのである。



- | | | | | | |
|-----------|-------------|------------|----------|----------|-------------|
| 1. 香椎B遺跡 | 2. 御飯ノ山城 | 3. 立花城 | 4. 名島城 | 5. 福岡城 | 6. 香椎宮 |
| 7. 筥崎宮 | 8. 櫛田神社 | 9. 博多遺跡 | 10. 吉塚遺跡 | 11. 箱崎遺跡 | 12. 元寇防塁推定線 |
| 13. 多々良遺跡 | 14. 多々良込田遺跡 | 15. 戸原麦尾遺跡 | 16. 顕孝寺 | | |

Fig.3 調査地周辺遺跡分布図(1/70,000)

第三章 調査の記録

1. 調査の概要

発掘調査は、試掘調査結果や過去の調査成果を基にして遺跡が残存もしくは想定される範囲の内で、工事による掘削などの重大な影響を受ける範囲に10ヶ所の調査区(1～10区)を設定して行った。調査地は標高14mの谷部と標高26mを最高点とする丘陵部に大別され、谷部に1～4区、丘陵裾部に5区、丘陵部に6～10区が位置する。土地の小字名は、谷部は生水^{シヨウズ}、丘陵部西半部は老ノ谷^{オイノタニ}、東半部は里城^{サトジロ}である。

平成20年に実施の試掘調査成果から今回の調査対象範囲から除外された里城地区東部は、丘陵斜面を段造成した幅50m、奥行き30m、標高30mの平坦地で、御飯ノ山城の城主居館が立地していたと地元で語り継がれている場所である。このため、地権者同意の上で再度の試掘調査を本調査中に実施したところ、大規模な造成が行われていることが確認されたものの遺構・遺物の発見には至らず、あらためて里城地区東半部が削平を受けていることを知ることとなった。

谷部の調査は、香椎B遺跡1～2次調査で検出した中世の堀や溝で区画された屋敷群が本調査地を含む谷部開口部まで展開していることは確実であることを踏まえ、平成22年6月22日から谷部を横断する大型トレンチの様相を呈する1区から開始した。遺構検出では柱穴、井戸、溝、土壙などの屋敷群の存在を想定させる結果を得た。梅雨期には度重なる調査区の冠水被害を受け、その後は多数のマムシと格闘しながら、2区、3区へと調査を進めて行った。両区では谷を縦・横断する大小の溝で区画された敷地内に大型掘立柱建物、柵、井戸等からなる中世の屋敷跡を確認した。出土遺物や遺構が築かれる時間的前後関係から、谷部における遺構区分は本遺跡の1～2次調査で示された区分と大きく変わらないことを知る。

谷部の調査と並行して、丘陵部の調査を7月5日から職員を増員して開始した。土地の字名が里城の7区では、方形の大型柱掘方を持つ柱列を検出した。複数の柱列が等間隔に彎曲して配置されていることから、建物ではなく柵列が想定され、御飯ノ山城や字名との関連が考えられた。

丘陵の背上に位置する8・9区は、南側の谷部や谷開口部の西方への眺望が開かれた場所である。同区では竪穴住居や掘立柱建物のほか、石組みで整然と区画・築造した12世紀後半～13世紀前半期の大型墳墓や鏡を埋納した11世紀後半～12世紀前半の土壙を検出した。第2次調査の御倉谷で検出した火葬墓群との関係や谷部の中世屋敷群との関わりが問題提起された。

発掘調査は11月19日に無事に終了し、調査面積は2651.2㎡であった。



7区柱列



8・9区大型墳墓SR8019調査風景

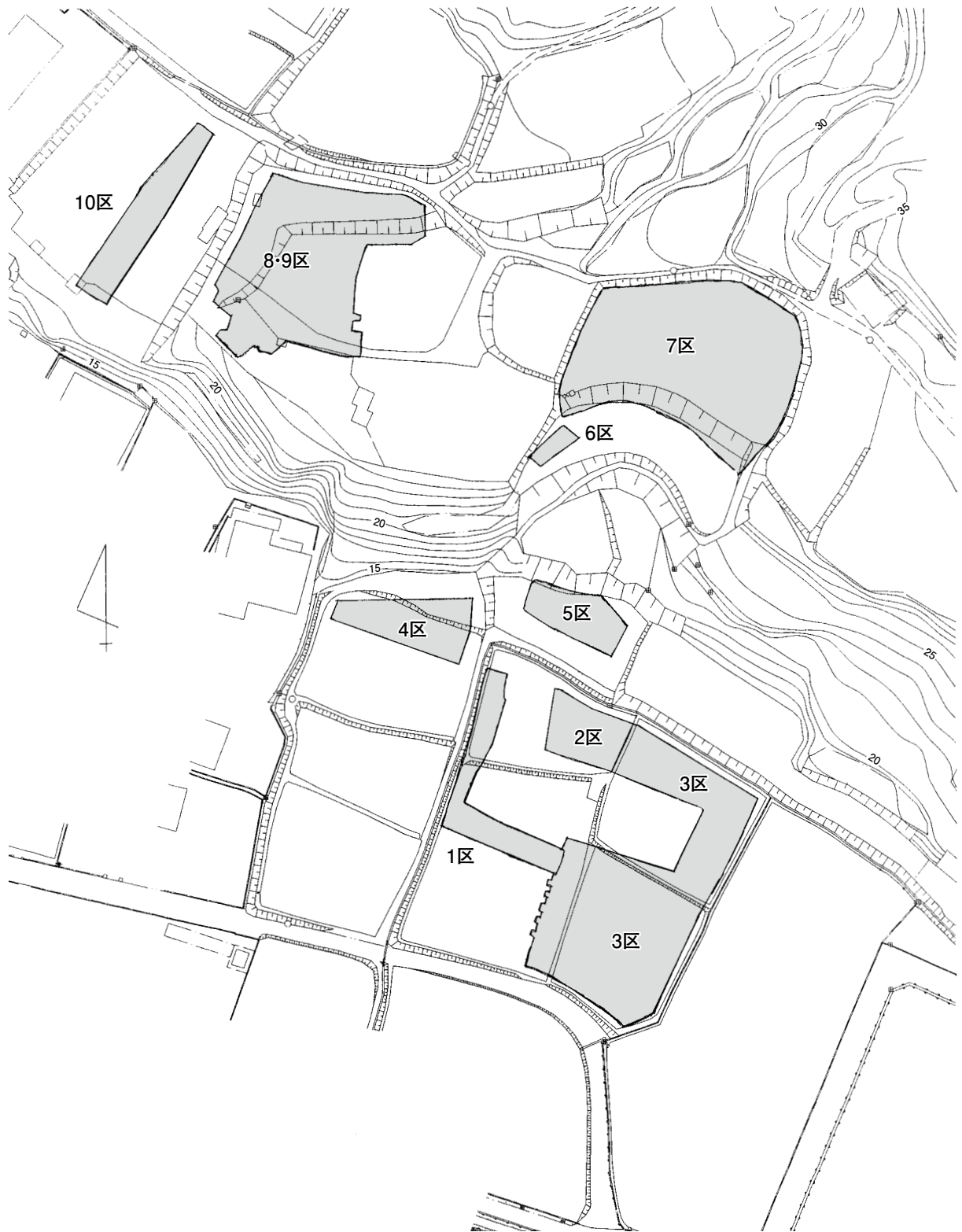


Fig.4 第8次調査周辺地形図・調査区域図(1/900)

2. 遺構と遺物

(1) 1区の調査

1) 概要

2・3区の西に位置する。黒褐色～茶褐色土の土器包含層は丘陵寄りでは層厚で黒味が強いが、谷中央部に行くにしたがって黒色が薄くなる。遺構面は丘陵側から谷部中心に向かって、谷奥の東から谷開口部の西方へ向かってそれぞれ緩やかに傾斜する。検出面の標高は北端部で13.4 m、南半部東端で13.5 m、西端部で13.1 mを測る。中世集落を構成する一部の井戸・溝・柱穴を検出した。調査面積は103.1㎡である。

2) 遺構

SD1001 (Fig.5 PL.12)

調査区東西部に位置する南北溝で、溝の東辺を確認した。南側は土坑SK1012で削平され、北側は調査区の外につづく。推定規模は、幅0.6～0.9 m、深さ0.2～0.3 m。検出した長さは9.5 mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)、瓦器椀、施釉陶器壺、青磁碗、平瓦が出土。

SD1004 (Fig.5 PL.12)

調査区東半部に位置する東西溝で、SD1005と並行する。西側は土坑SK1007で削平され、東側は調査区の外につづく。幅0.5～0.6 m、深さ0.1 mを測り、検出長は11.9 m。須恵器甕、土師器小皿・杯(糸切り)、瓦器椀、無釉陶器鉢・壺が出土。

SD1005 (Fig.5 PL.12)

調査区東半部、SD1004の南側に並行する東西溝である。西側は底面が浅くなり途中で立ち上がる。東側は調査区の外につづく。壁は底面から外側に彎曲しながら立ち上がる。幅0.6～0.9 m、深さ0.2～0.3 m、検出した長さは3.7 mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)、白磁碗、青磁碗が出土。

SE1010 (Fig.5・6 PL.12)

調査区北辺に位置する井戸で、円形の平面形を呈する。壁は底に向かって直線的に内傾しながら隅丸方形の底面にいたる。上面で径1.9 m、底面で方0.9 m、深さ1.8 mを測る。井戸側板や柱側、井筒などは認められず、素掘り井戸と思われる。土師器小皿・杯(糸切り)・椀、内黒椀、施釉陶器四耳壺、白磁碗(Ⅱ-1・Ⅳ-1)、青磁碗、滑石製石鍋、丸瓦、平瓦が出土。

SE1013 (Fig.5・7 PL.12)

調査区南辺央に位置し、遺構の大半が調査区外にある素掘り井戸。円形の平面形が推定される。直線的に内傾しながら底面にいたる。上面で推定径2 m、深さ1.5 m以上である。土師器小皿・杯(糸切り)椀・鍋、龍泉窯系青磁碗(Ⅱ-1)、同安窯系青磁碗、白磁碗(Ⅲ・Ⅳ-2)が出土。

SK1007 (Fig.5 PL.12)

調査区南部西側に位置する土坑で、調査区外へ広がる。土坑SK1013より先行。土師器小皿・杯(糸切り)椀・鍋、施釉陶器四耳壺、陶器捏鉢、青磁皿、白磁碗(Ⅳ-1・2)が出土。

SK1012 (Fig.5 PL.12)

調査区南西隅に位置する土坑で、円形の平面形を呈すると考えられる。壁は底に向かって直線的に内傾しながら底面にいたる。井戸の可能性はある。土師器小皿・杯(糸切り)椀、施釉陶器壺、青磁皿、白磁碗(Ⅵ-1)、滑石製石鍋が出土。

SK1013 (Fig.5 PL.12)

土坑SK1007の北辺に位置する。円形の平面形を呈する。土師器小皿・杯(糸切り)椀、施釉陶器壺、丸瓦、滑石製石鍋が出土。

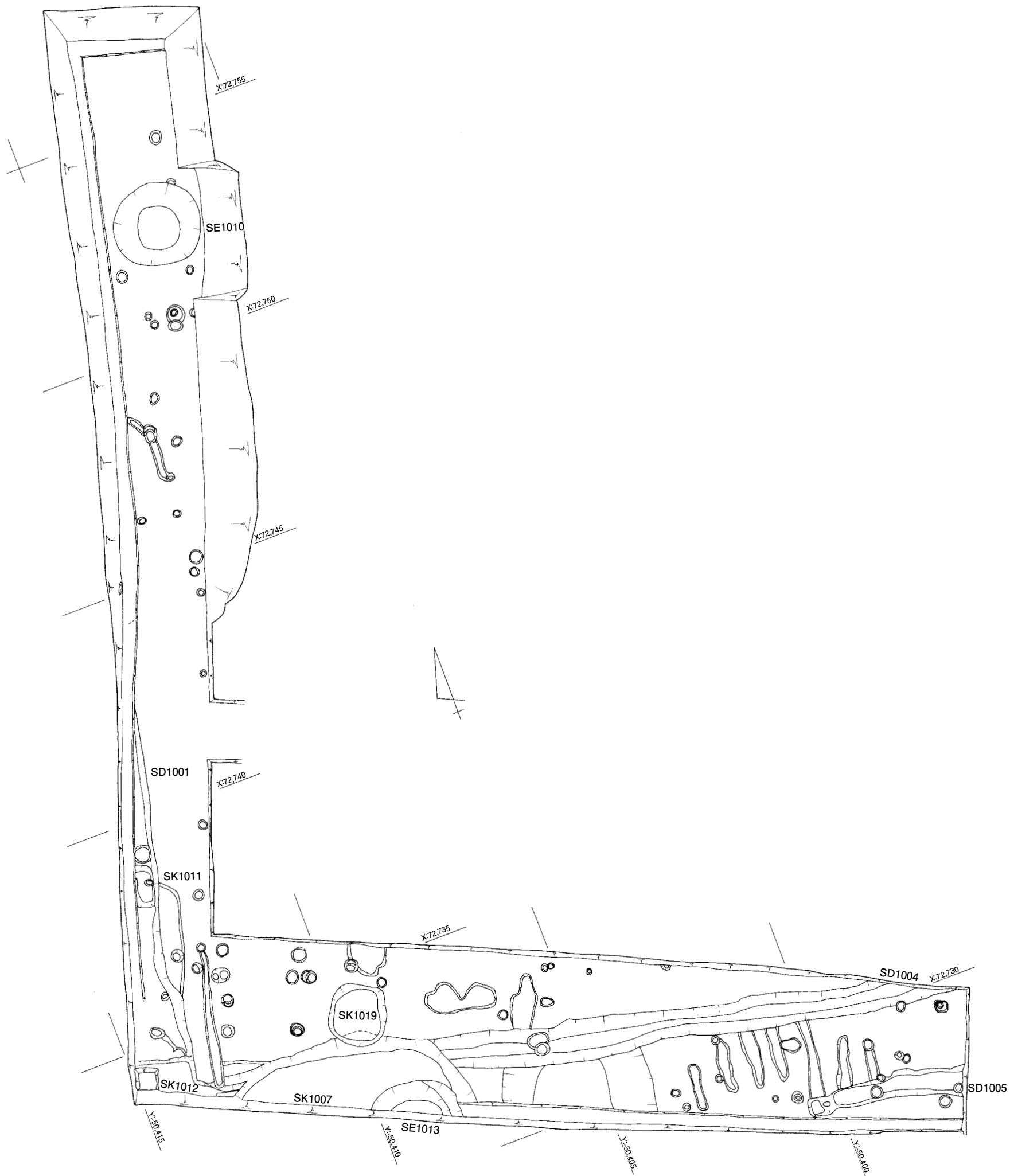


Fig.5 1区遺構実測図(1/100)

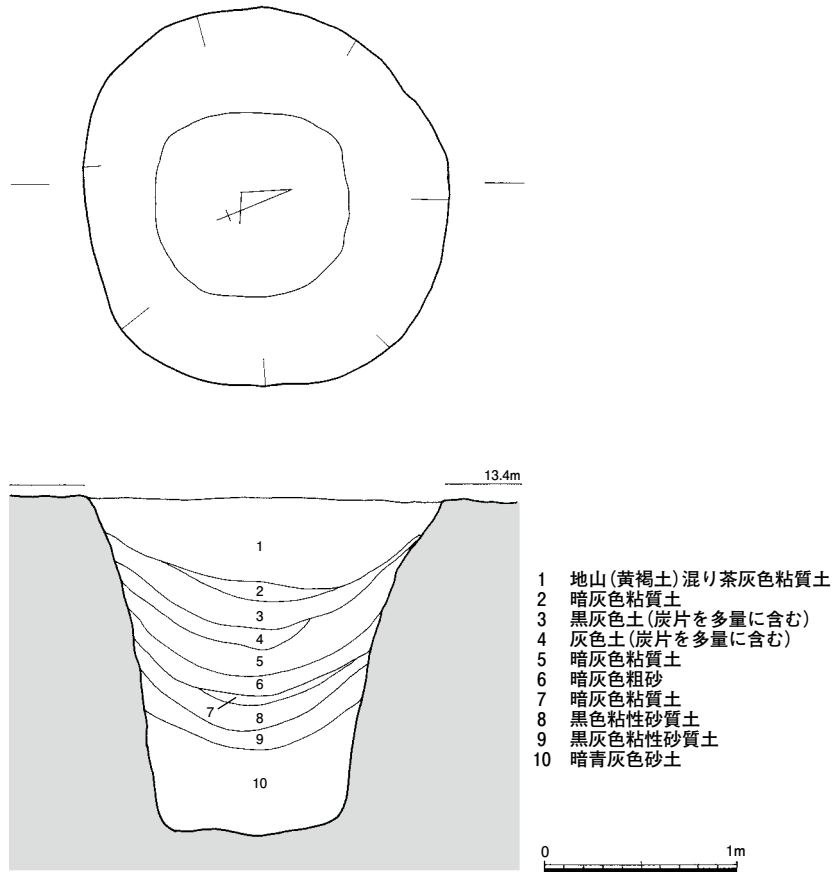


Fig.6 SE1010遺構実測図(1/40)

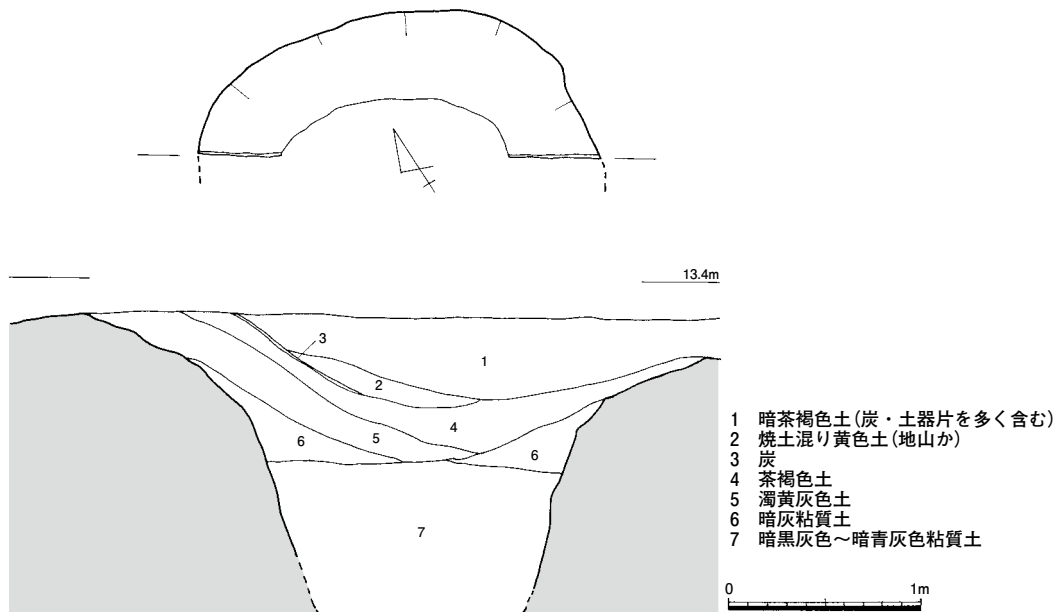


Fig.7 SE1013遺構実測図(1/40)

2) 遺物

SD1001 (Fig.8)

10002は土師器坏。糸切りとみられる。体部は開き、内外面を横ナデで仕上げる。

SE1010 (Fig.8・9 PL.33)

土師器皿・坏・埴、白磁碗が出土している。土師器皿は口径8.8～9.4cmで、底部はいずれも糸切り。10007・10008・10009・10012・10017・10018は底部に板目が付く。体部は外側に開くものが多く、10004・10006は底部がやや丸みを帯び、その他は平底を呈する。

土師器坏は10021・10032・10022が平底坏、10029・10036が丸底坏。10021・10032・10022は体部が直線的に開き、底部は糸切りで10021は板目が付く。10021は外面全面にススが付着し、10022は体部外面から底部縁にかけてススが付着する。丸底坏のうち10029は底部糸切りで10036はヘラ切り、10025はヘラ切り後ナデ。10025は灯火皿として使用されたとみられ、内面全体にススが付着し、口縁部に付着の強い箇所がある。外面にもススが付着する。

10037・10039は土師器台付皿。10037は体部が浅く、丸みをもつ。高台は貼り付けで、高く直立する。10039は体部が大きく開く。高台は貼り付けで、直線的に開き、横ナデで仕上げる。高台内側に糸切り・板圧痕が残る。

10041は瓦器埴。内外面は研磨を施す。胎土は黒灰色で、硬質。高台は貼り付けで細く低い。10040は瓦器埴底部。胎土は灰色で硬質。内面にミガキ痕が残り、内外面の一部にススが付着する。高台は貼り付けで高台内部は糸切り。

10047・10048・10050・10046は白磁碗。10047は底部を欠く。体部は丸みをもつ。胎土は乳白色で釉は青みがかった乳白色を呈する。外面は体部下部まで施釉され、底部付近は露胎とみられる。10048は口縁部が短く外反する。釉は黄白色を呈し、外面は体部下部まで施釉され底部付近は露胎。底部は削り出して低く作られる。10050は、体部は丸みを持ち、高台は削り出して低く作られる。釉は青みがあり、外面は底部付近まで施釉される。10046は口縁部を玉縁につくる。体部は直線的に開き、底部は削り出して低く太めに作る。釉はオリーブ灰色で、外面は体部中位まで施される。

SE1013 (Fig.9 PL.33)

土師器皿・坏が出土している。土師器皿は底部糸切りで、体部の立ち上がりは低い。口径は9.0～9.6cm、器高は1.0～1.2cm。土師器坏10057は体部が直線的に開き、底部は糸切りで板目圧痕が残り、平底に仕上げる。10056は体部がやや丸みをもち、底部は糸切りで板目圧痕が残る。

SK1007 (Fig.9 PL.33)

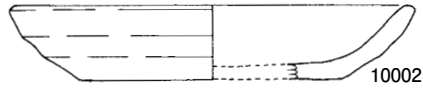
土師器坏・台付坏・白磁碗・青磁碗が出土している。10061・10062・10063は土師器坏で、10063は体部が丸みをもって立ち上がり、底部は糸切りで板目圧痕が残る。10062は体部が直線的に開き、端部がわずかに外反する。底部は糸切りで板目圧痕が残る。10061はやや大型で体部が大きく開き、底部は糸切りで平底に作る。

10068は台付坏の底部で、付高台は高く直立する。10070・10072は白磁碗。10070は同安窯系で体部がやや丸みをもち、底部は削り出して作る。釉は灰色で外面は体部下部まで施釉される。10072は青磁皿。釉は灰オリーブ色。10073は青磁碗で、体部は深く丸みをもつ。釉は濃緑灰色。

SK1012 (Fig.9)

10074は土師器皿。底部糸切りで体部は外反する。10075・10076は土師器坏。10075は底部糸切りで板目圧痕が付く。10076は体部が外側に大きく開くもの。底部は糸切り。20005は石鍋破片。滑石製で小型品である。20006は滑石製品。三角形で穿孔がある。

SD1001



SE1010

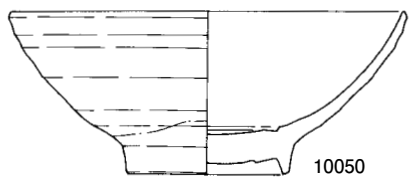
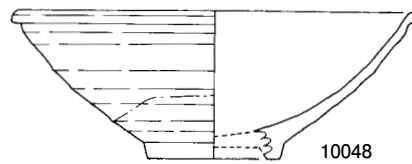
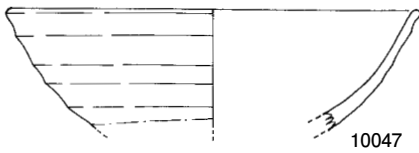
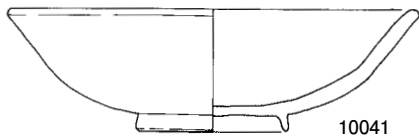
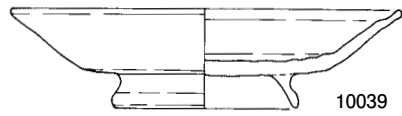
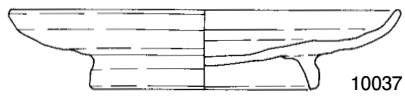
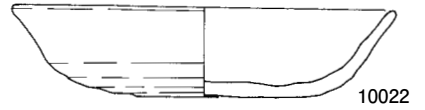
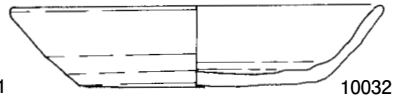
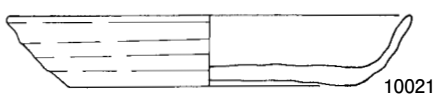
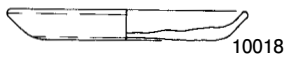
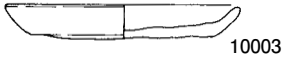
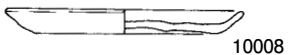
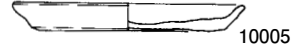
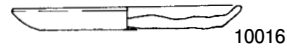
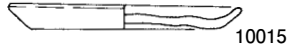
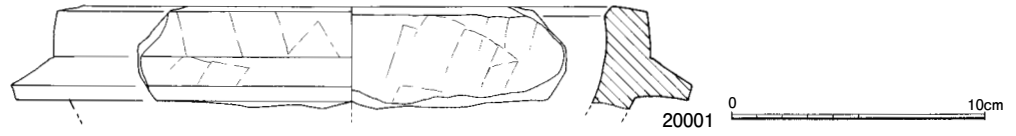
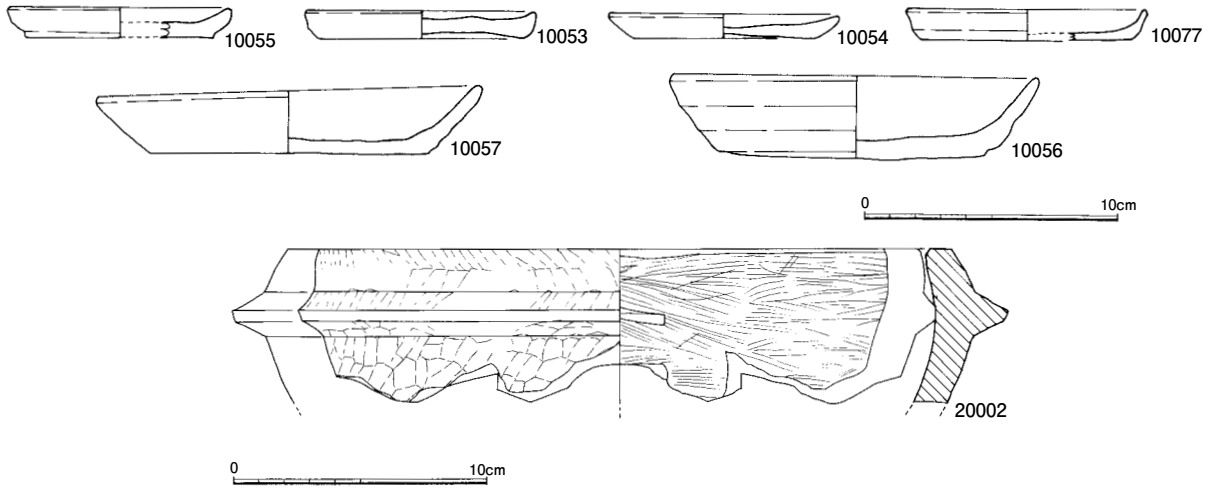


Fig.8 1区出土遺物実測図1 (1/3)

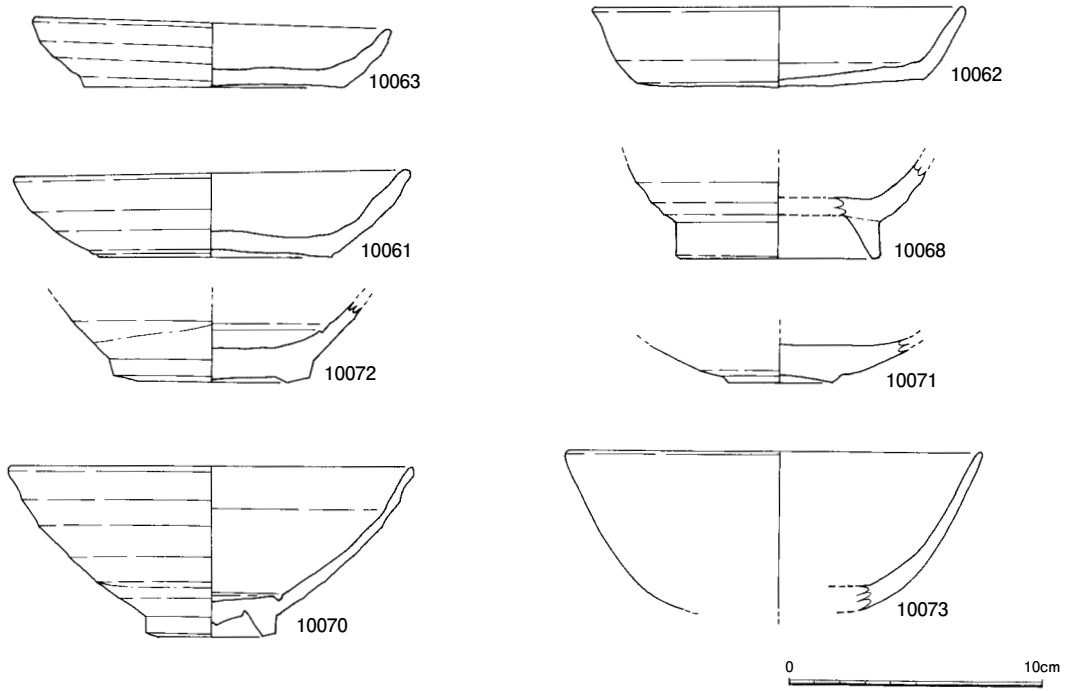
SE1010



SE1013



SK1007



SK1012

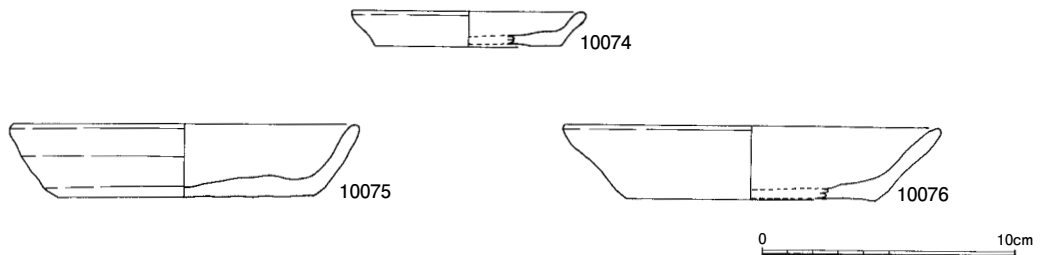
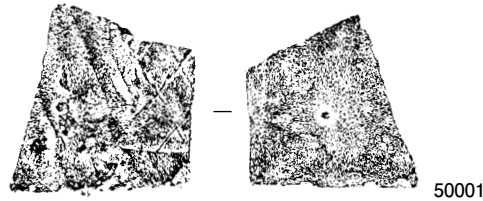


Fig.9 1区出土遺物実測図2 (1/3)

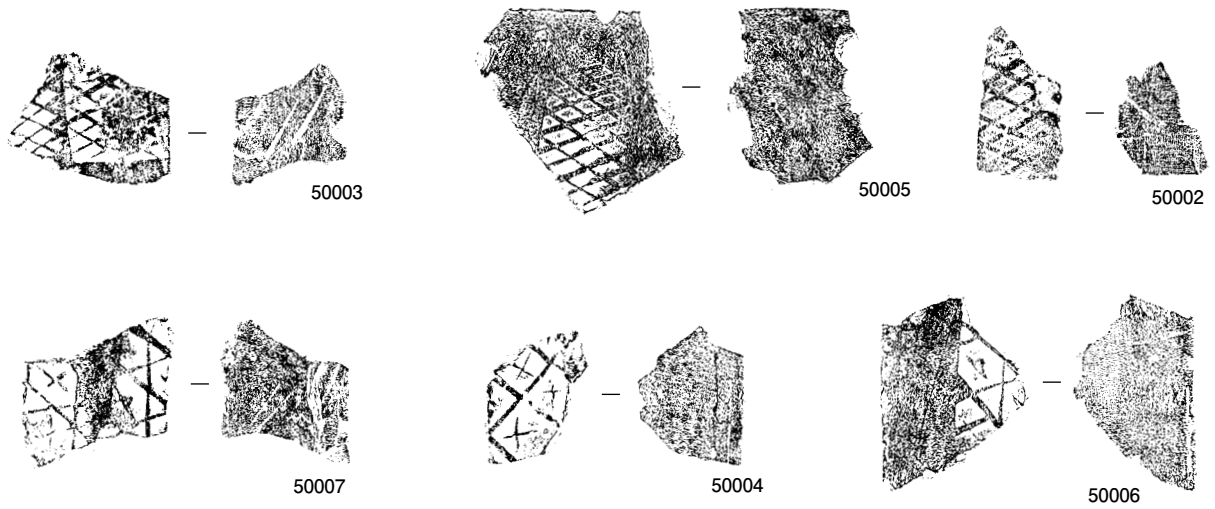
遺構検出



SD1004



SE1010



遺構検出

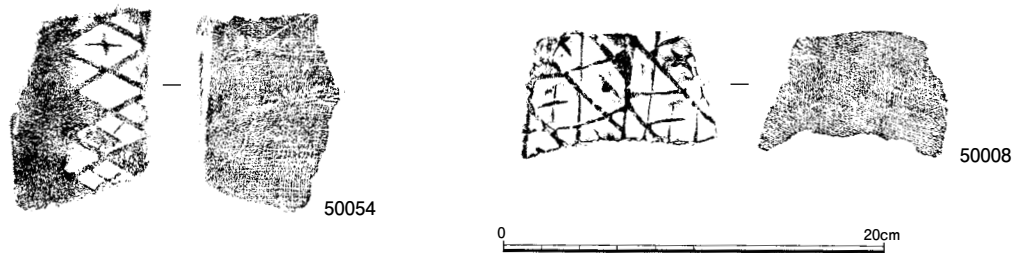


Fig.10 1区出土瓦実測図・拓影(1/4)

瓦類 (Fig.10 PL.43)

50052は花卉文の軒丸瓦である。50004はSE10110から出土した平瓦で、同じ叩き板によるものが鴻臚館跡から出土^(註1)。50005は凹面をナデ調整し、燻して焼き上げている。遺構検出の際に出土した平瓦50008も同じ叩き板によるものが鴻臚館跡から出土^(註2)。1区から出土した平瓦は、凸面叩き目の種類に関係なく、いずれも側縁調整が施されている。

註1 福岡市教育委員会 図12-103「元岡・桑原遺跡群17」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集 2010年

註2 福岡市教育委員会 図12-97・98「元岡・桑原遺跡群17」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集 2010年

(2) 2区の調査

1) 概要

5区の南、丘陵斜面から谷部に変換する地点に位置し、3区北部と接する。地表下0.7mの遺構検出面(標高13.9m)の茶灰色粘質土上面は谷央へ向かって僅かに傾斜する。中世集落を構成する掘立柱建物・溝・柱穴のほかに土器集積も検出した。調査面積は103.1㎡である。

2) 遺構

SB2200 (Fig.5.7 PL.12)

調査区北辺に位置する南北棟で、調査区外へ広がる。建物南側梁行(二間)部分と桁行一間分を検出した。柱間は、梁行2.45～2.50m、桁行1.6mを測る。

SD2001 (Fig.5.7 PL.12)

調査区南辺に位置する東西溝で、調査区外へ広がる。幅1m、深さ0.2mを測り、検出長は9.5m。土師器小皿・杯(糸切り)・椀、同安窯系青磁碗、白磁碗(IV-2)が出土。

SD2002 (Fig.5.7 PL.12)

調査区東部に位置する南北溝で、SD2001とは直交する。幅0.4～0.5m、深さ0.05mを測り、検出長は3m。須恵器甕、土師器小皿・杯(糸切り)・椀、白磁碗が出土。

SD2003 (Fig.5.7 PL.12)

SD2002の西側2mに位置する南北溝である。幅0.4～0.5m、深さ0.1mを測り、検出長は3.5m。土師器小皿・杯(糸切り)が出土。

SX2005 (Fig.5.7 PL.12)

炭を多く含む土器片が径約1.5mの範囲で集積。土師器杯(ヘラ切り)・椀、平瓦が出土。

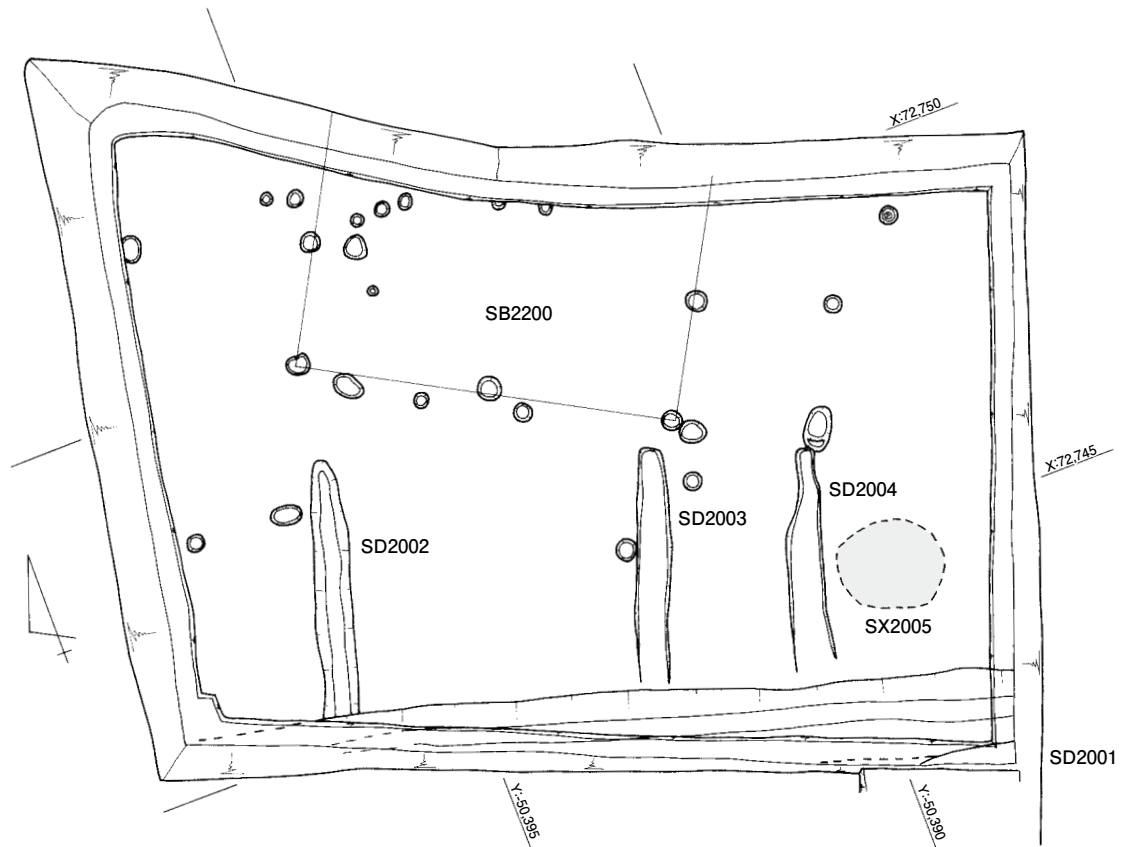


Fig.11 2区遺構実測図(1/100)

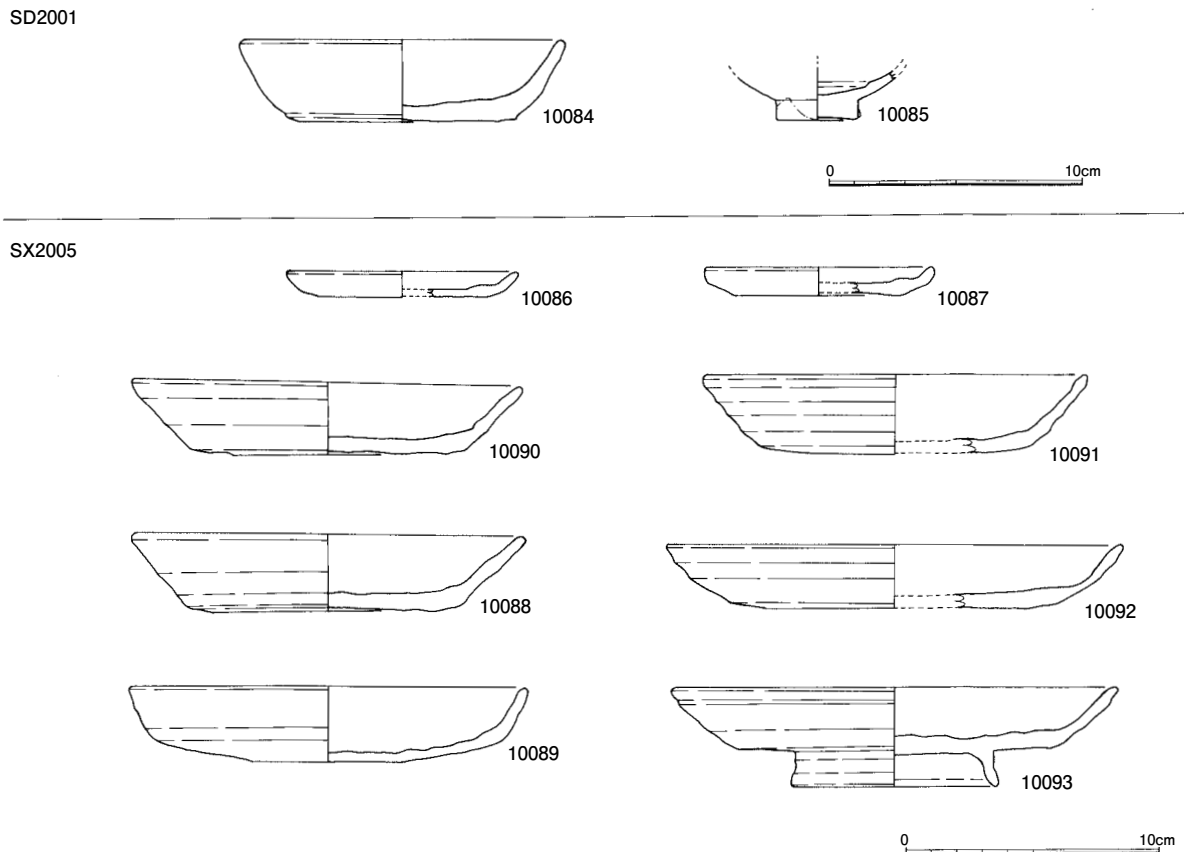


Fig.12 2区出土遺物実測図(1/3)

2) 遺物

SD2001 (Fig.12 PL.34)

土師器坏、白磁碗を確認できた。10084は土師器坏。体部は丸みをもって立ち上がる。底部は糸切りで、端部に段ができる。体部外面と内面はナデ調整。10085は白磁碗。小型品で、底部は削り出しで作られ、高台は中実で底部は平底を呈する。胎土は乳白色で釉は青みを帯びた白色を呈し、外面は高台付近まで施釉される。

SX2005 (Fig.12 PL.34)

土師器皿・坏・台付坏が出土した。10086・10087は土師器皿で、いずれも底部はヘラ切り。10086は底部は平底で体部は丸く立ち上がる。体部外面と内面はナデ調整。10087は体部の立ち上がりが弱く、全体に円盤状を呈し、口縁端部は膨らみをもつ。体部外面と内面はナデ調整。

10088・10089・10090・10091・10092は土師器坏。10090・10088は体部が外側に直線的に大きく開くもので、底部はヘラ切りで平底を作る。体部内外面は横ナデ、内面見込みはナデ。10089は底部をヘラ切りし、丸みをもって仕上げる。体部は直線的に立ち上がる。体部内外面は横ナデ、内面見込みはナデで調整する。10091は底部を一部欠くが、ヘラ切りが確認でき、体部は直線的に開き、横ナデで調整される。10092は口径17.8cmを計る大型品で、底部はヘラ切り。体部は底部から開き気味に丸く立ち上がり、横ナデで仕上げる。内面見込みはナデ。

10093は土師器台付鉢。高台は貼り付けで高く直立する。坏部は底部にハケ目が残る。体部は直線的に大きく開き、全体に浅く作られる。体部外面と内面は横ナデ調整。

(3) 3区の調査

1) 概要

1・2区に東接し、丘陵裾部から谷中央部までを含む。5時期の遺構を検出した。地形はほぼ平坦を成すが、谷部の自然地形に則して谷部中心線や開口部へ向かって緩やかに傾斜する。遺構検出面の標高は13.5m～14mである。溝で区画された屋敷地内に柵・掘立柱建物・井戸・土壙墓・土坑・小穴を検出した。調査面積は715㎡である。

2) 遺構

【第1遺構検出面】

SD3001 (Fig.13 PL.14)

調査区東辺部に位置する南北溝で、谷を横断するように谷筋とは直交する。溝の両端は調査区の外へつづく。幅1.2～1.6m、深さ0.4～0.5m。検出した長さは17mを測る。南端部での検出面の標高は13.9m、底面の標高は13.4m。溝壁は弧を描くように立ち上がる。須恵器甕、土師器小皿・杯(糸切り)・鉢・播り鉢、青磁碗、丸瓦・平瓦が出土。

SD3002 (Fig.13 PL.14)

調査区北部に位置し、山裾に並行して走行する東西溝で、2区調査区で検出したSD2001からの延長部である。東端は調査区外へつづく。幅1.2m、深さ0.4mを測り、検出長は10.5m。検出面の標高は13.9m、底面の標高は13.5m。土師器小皿・杯(糸切り)、瓦器椀・鉢、施釉陶器壺、陶質播鉢、同安窯系青磁皿、白磁碗(Ⅳ-2)、土錘が出土。

SD3003・3012 (Fig.13・14 PL.15)

調査区東半部に位置し、当初は南北溝であったが、後に調査区南辺近くで西方に折れ曲がりSD3012となる。平行するSD3001と同時期もしくは後出する可能性がある。溝の両端は調査区の外につづく。幅2.0～2.4m、深さ0.3～0.5mを測る。埋土上層からは土師器小皿・杯(糸切り)・椀・鉢・鍋、瓦質土器火舎、常滑焼甕、鉄釉壺、黄釉盤、龍泉窯系青磁碗、青磁皿、同安窯青磁碗、白磁碗(Ⅳ-2)、滑石製石鍋、丸瓦・平瓦、玉石が出土。下層からは土師器杯、瓦器椀、青磁碗、白磁碗、丸瓦・平瓦、土錘が出土。

【第2遺構検出面】

SD3004 (Fig.13 PL.16)

調査区中央部に位置する東西溝で、西端は調査区の外につづく。幅1.0～1.3m、深さ0.1m、検出した長さは15.8mを測る。遺構内からは土師器小皿・杯(糸切り)・椀、瓦質捏ね鉢、瓦器椀、無釉陶器双耳壺、青白磁合子、白磁碗(Ⅳ-2)、滑石製石鍋、玉石が出土。

SD3005 (Fig.13 PL.16)

調査区中央部、SD3004の南側に並行する東西溝である。溝の両端は底面が浅くなり調査区内で立ち上がる。幅0.6～0.8m、深さ0.05m、検出した長さは13.1mを測る。遺構から土師器小皿・杯(糸切り)・椀・鍋、鉄釉壺、鉢、白磁皿、青磁碗、滑石製石鍋、玉石が出土。

SD3006 (Fig.13 PL.16)

調査区東半部、SD3005の南側に並行する東西溝である。東端は底面が浅くなり途中で立ち上がり、西端は調査区の外につづく。幅0.5～0.7m、深さ0.05m、検出した長さは12.5mを測る。遺構から土師器小皿・杯(糸切り・ヘラ切り)・椀、白磁碗(Ⅳ-2)、スサ入り焼壁塊が出土。

SD3007 (Fig.13 PL.16)

調査区南西部に位置する南北溝で、SD3004～3006より後出する。北端は底面が浅くなり途中で立

ち上がり、南端は調査区の外につづく。幅0.3 m、深さ0.05 m、検出長は19.4 mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)、白磁碗、青磁碗が出土。

【第3遺構検出面】

SD3008 (Fig.13・15・16 PL.17)

調査区中央部に位置する東西溝で、調査区南辺近くで向きを西方に変える。ほぼ位置が重複するSD3010の最終形態の可能性がある。溝の両端部はそれぞれ調査区の外につづく。幅1.8～3.2 m、深さ0.3～0.4 m、検出した長さは26 mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)・椀、瓦器椀(筑前型)、陶器捏ね鉢、龍泉窯系青磁碗、白磁碗(Ⅳ-2・Ⅵ-1・2)・皿、丸瓦・平瓦、砥石、滑石製石鍋、玉石、石製埋納具が出土。

SD3009 (Fig.13 PL.17)

調査区中央部に位置する東西溝であるが、同時期の他の溝が直線的形態であるのに対してやや蛇行する。両端部は調査区の外につづく。幅0.4～1.0 m、深さ0.1 m、検出した長さは19.8 mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)・鍋、陶器壺、鎬蓮弁青磁碗、丸瓦が出土。

SD3010・3023 (Fig.13・15 PL.17)

調査区中央部、SD3008と一部重複する南北溝で、当初は直線状であった形状が後に調査区南辺近くで向きを西方に変えてSD3023となる。溝の両端部は調査区の外につづく。幅3.5～4.3 m、深さ0.7～0.9 m、検出した長さは直線時で21.3 mを測る。遺物は、最上層である1層から土師器小皿・杯(糸切り)・椀、瓦器椀(筑前型)、陶器甕・壺、白磁碗(Ⅳ-2・Ⅵ-1)、同安窯系青磁碗、砥石、滑石製大型・中型石鍋、軽石、玉石、スサ入り焼壁塊、丸瓦・平瓦が出土。2層から須恵器甕、土師器小皿・杯(糸切り)・椀、瓦質火舎・瓦器椀(筑前型)、陶器甕・壺、白磁碗(Ⅳ-2・Ⅵ-1)・平底皿・合子、同安窯系青磁碗、砥石、滑石製大型石鍋(A型)、滑石製石鍋片加工品、玉石、軽石、丸瓦・平瓦が出土。3層から須恵器甕、土師器小皿・杯(糸切り)・椀・鍋、瓦器椀(筑前型)、白磁碗(Ⅳ-2)、滑石製大型鍋(A型)、丸瓦・平瓦が出土。最下層の4層からは土師器小皿・杯(糸切り)・椀・鍋、内黒椀、白磁碗、滑石製石鍋、平瓦が出土。

SE3015 (Fig.13 PL.17)

調査区中央部に位置する井戸で、円形の平面形を呈する。壁は底に向かって直線的に内傾しながら円形の底面にいたる。上面で径1.3 m、底面で径0.7 m、深さ1.8 mを測る。井戸側板や柱側、井筒などは認められず、素掘り井戸と思われる。遺構検出面の標高は13.6 m、井戸底面の標高は11.8 m。掘方埋土から土師器小皿・杯(糸切り)、白磁碗、スサ入り焼壁塊が出土。井戸枠内埋土からは土師器小皿・杯が出土。

SK3013 (Fig.13・17 PL.17)

調査区東部に位置する平面形が隅丸長方形の土墳墓である。長辺1.4 m、短辺0.8 m、深さ0.2 mを測る。山石が墓墳底に残るが、本来は墓を区画もしくは覆っていた標石的なものが崩落したものと思われる。遺構検出面の標高は13.6 m、墓墳底面の標高は13.4 m。土師器小皿・杯(糸切り)、瓦質椀・播り鉢が出土。

SK3014 (Fig.13 PL.14)

調査区東辺部、SK3013に東接し、平面形が隅丸長方形の土坑である。長辺0.9 m、短辺0.7 m、深さ0.2 mを測る。壁は底面から外側に彎曲しながら立ち上がる。遺構検出面の標高は13.6 m、底面の標高は13.4 m。土師器小皿・杯(糸切り)、滑石製石鍋、スサ入り焼壁塊が出土。

SK3024 (Fig.13)

調査区南西隅に位置する土坑で、平面形は楕円形が想定される。遺構は調査区外に広がる。溝

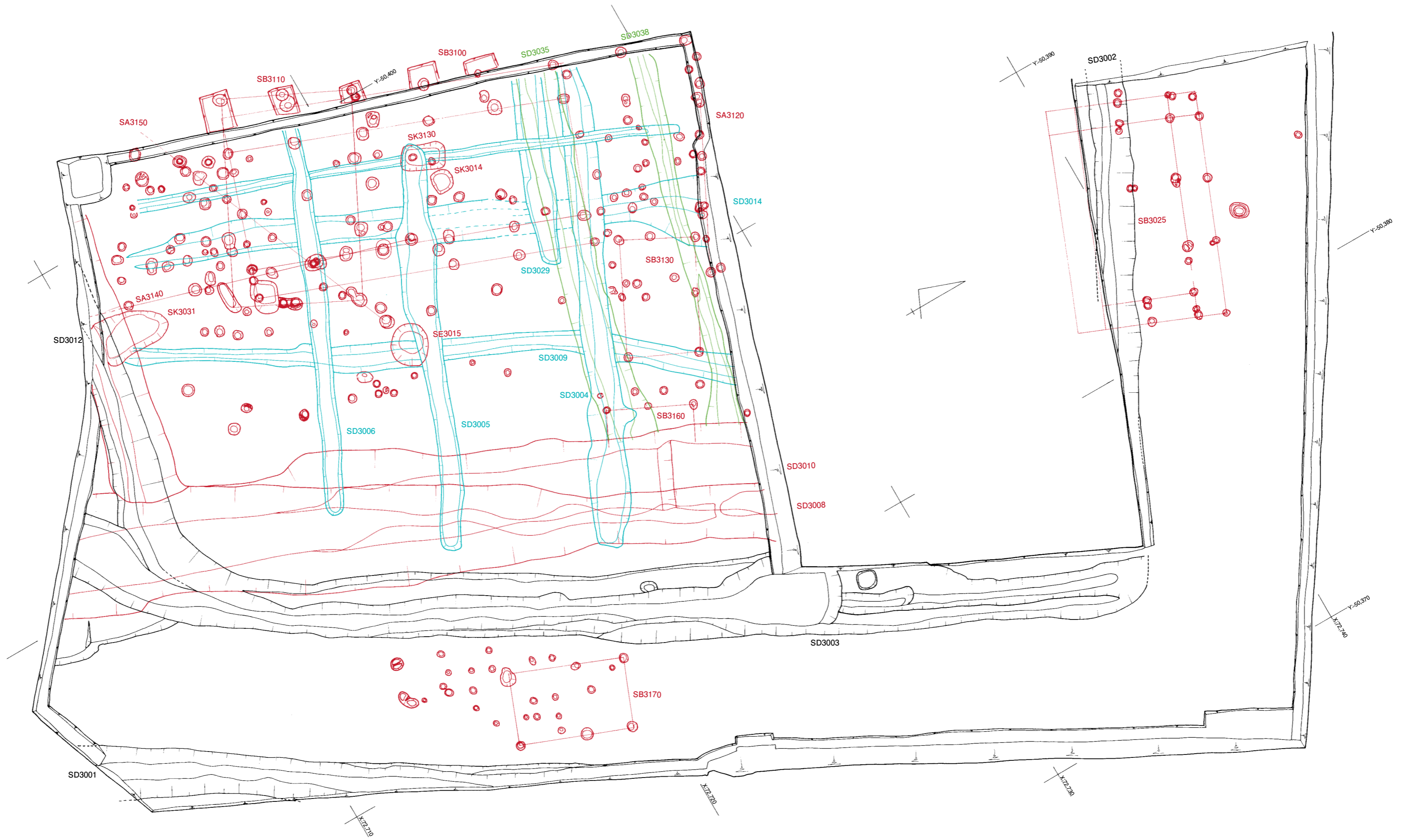


Fig.13 3区遺構実測図(1/100)(墨:第1面、青:第2面、朱:第3面、緑:第4面)

SD3023より後出する。壁は底面から外側に彎曲しながら立ち上がる。長径1.2m、深さ0.2を測る。土師器小皿・杯(糸切り)青磁碗、白磁碗が出土。

SK3028 (Fig.13)

SD3009北端の西に位置する土坑である。平面形は不整形な楕円形を呈し、長径1.4m、短径0.7～0.8m、深さ0.2mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)、瓦器碗、陶器捏ね鉢、白磁碗(Ⅳ)、平瓦が出土。

SK3029 (Fig.13)

調査区中央部、SD3004に遺構の一部が壊されている土坑で、平面形は楕円形を呈すると想定される。残存長径1.1m、短径0.7m、深さ0.1mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)が出土。

SK3030 (Fig.13)

調査区中央部、SD1005の北に位置する土坑で、平面形は不整形な楕円形を呈する。長径0.8m、短径0.5m、深さ0.1mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)、瓦器碗、白磁碗が出土。

SK3031 (Fig.13)

調査区南部、SD3023に遺構の一部を壊される土坑で、長径2.4m、短径1.5m、深さ0.3mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)・鍋、内黒碗、鉄釉壺、同安窯系青磁碗、白磁碗が出土。

SK3032 (Fig.13)

調査区南西隅に位置する土坑で、遺構の西半部は調査区外に広がる。幅1.1m、深さ0.05mを測り、溝底面の可能性もある。土師器小皿・杯(糸切り)、瓦質播り鉢、青磁平皿、スサ入り焼壁塊が出土。

SK3034 (Fig.13)

調査区西辺中央部、SD30007北端の東に位置する土坑で、半円形の平面形を呈する。径1.5m、深さ0.1mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)・碗、白磁碗、焼土塊が出土。

SK3036 (Fig.13)

調査区南西部、SD3009の西側に位置する土坑で、円形の平面形を呈する。径0.9m、深さ0.3mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)、瓦質播り鉢、陶器壺、白磁平底皿が出土。

【第4遺構検出面】

SA3120 (Fig.13・18 PL.18)

調査区中央部に位置する東西方向の掘立柱塀で、東端で南に折れ曲がる。円形の平面で径0.2～0.3m、深さ0.3～0.5mを測る柱穴が、1.1～1.2mの間隔で並ぶ。検出面の標高は13.6m、柱穴底面の標高は13.2m前後。柱穴から土師器小皿・杯(糸切り)、瓦器碗(筑前型)、スサ入り焼壁塊が出土。

SA3140 (Fig.13・18 PL.18)

調査区南西部に位置する南北方向の掘立柱塀である。円形ないしは楕円形の平面で径0.3～0.4m、深さ0.3～0.5mを測る柱穴が、2.5mの等間隔で並ぶ。遺構検出面の標高は13.6m、柱穴底面の標高は13.0～13.2m前後。柱穴から須恵器甕、土師器杯(糸切り)・ヘラ切り)が出土。

SA3150 (Fig.13・18 PL.18)

調査区南西部に位置する東西方向の掘立柱塀である。円形の平面で径0.2～0.3m、深さ0.2～0.5mを測る柱穴が、2.4m前後の間隔で並ぶ。検出面の標高は13.6m、柱穴底面の標高は13.0～13.3m。柱穴から土師器小皿・杯(糸切り)・碗、瓦器碗が出土。

SB3025 (Fig.13・18 PL.19)

調査区北西部に位置する東西棟の掘立柱建物で、四面廂付きの入母屋建物もしくは南北の両面に廂が付く切妻建物が想定される。建物南半部は調査区の外に広がる。柱穴から土師器小皿・杯、瓦器碗、白磁碗(Ⅳ-2)、播り石が出土。

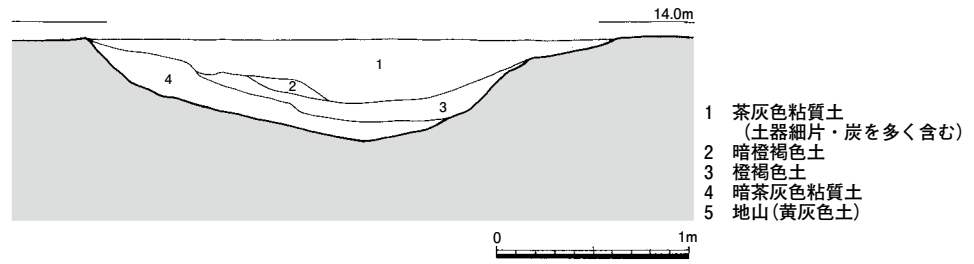


Fig.14 SD3003土層実測図(1/40)

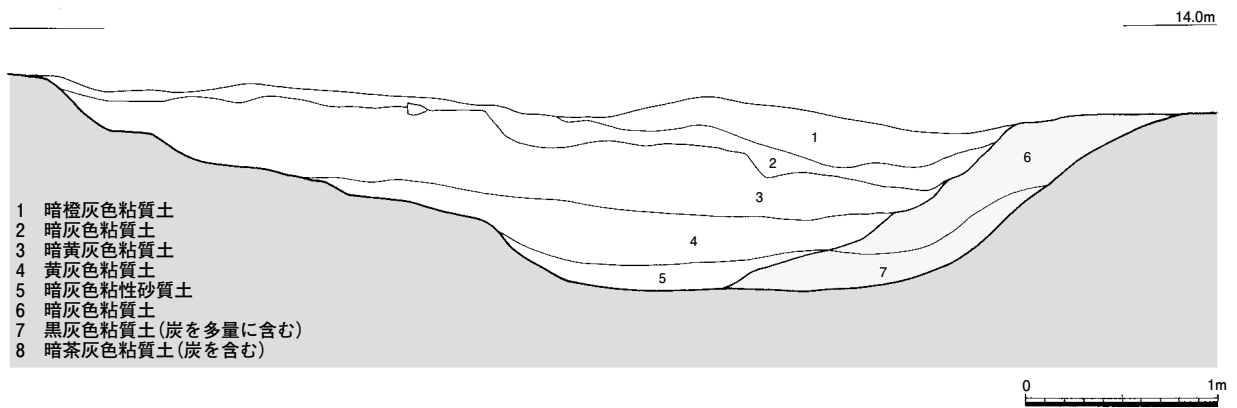


Fig.15 SD3008・3010土層実測図(1/40)

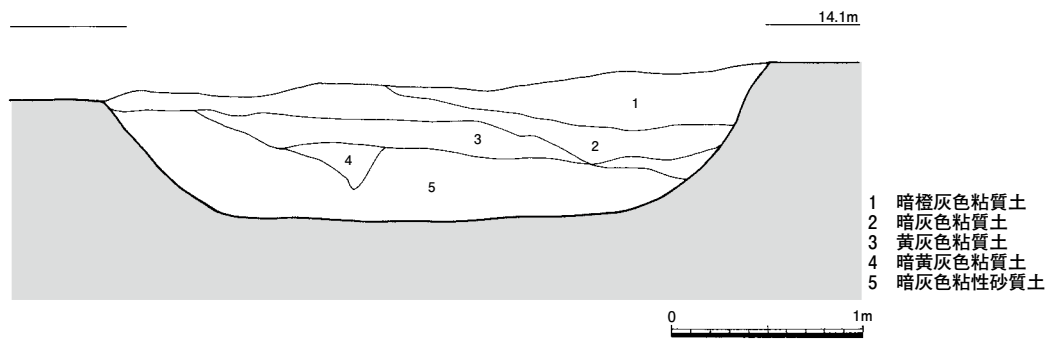


Fig.16 SD3008土層実測図(1/40)

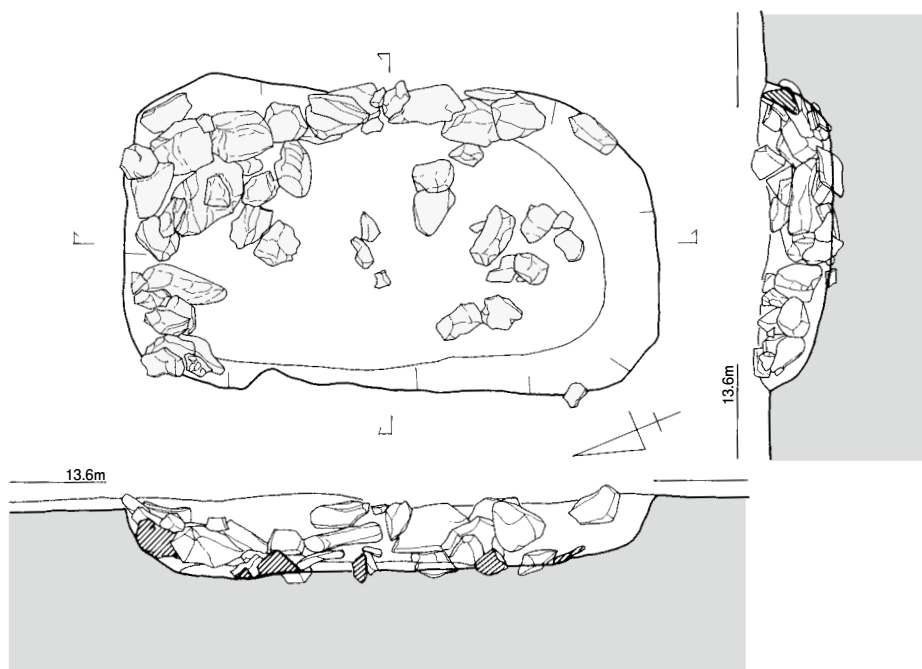


Fig.17 SK3013遺構実測図(1/20)

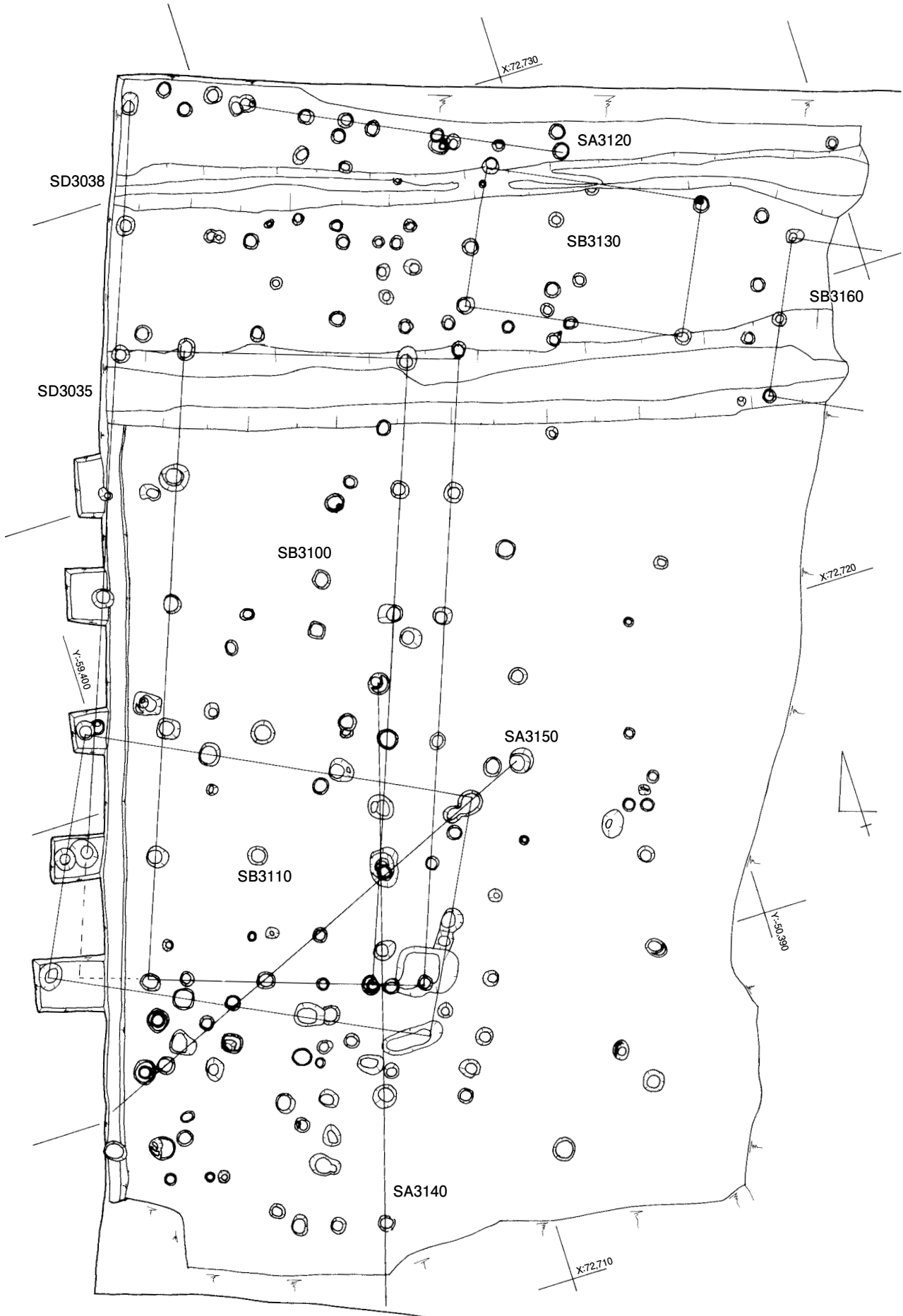


Fig.18 3区遺構実測図(1/90)

SB3100 (Fig.13・18 PL.19)

調査区南西部に位置する南北棟の掘立柱建物で、東西の両面に廂が付く切妻建物が想定される。母屋は梁行2間(3.8m)×桁行4間(8.4m)で、廂の出は東面側が0.9m、西面側が1.15mと異なりを見せる。柱穴は径0.3～0.5mの円形ないしは隅丸方形の平面形を呈し、深さ0.4～0.5mの底面に板石を据えた例がある。総じて、母屋柱穴より廂柱穴の方が規模は小さい。推定される柱径は20～25cmである。検出面の標高は13.5m、柱穴底面の標高は13.0～13.2m。柱穴から須恵器甕、土師器小皿・杯(糸切り)・鍋、瓦器椀、スサ入り焼壁塊が出土。

SB3110 (Fig.13・18 PL.19)

調査区南西部、SB3100の南に位置する東西棟の掘立柱建物である。梁行2間(4.15m)×桁行3間(6.65m)で柱間は等間である。柱穴は径0.3～0.5mの円形ないしは隅丸方形の平面形を呈し、深さ0.4～0.5mを測る。柱と掘方壁との間に石を詰め、柱の据え付けを強固にしている。復元される柱の径は20～25cmである。検出面の標高は13.5m、柱穴底面の標高は13.1～13.2m。柱穴から須恵器甕、土師器小皿・杯(糸切り)・鍋、白磁碗(VI-1)、鎬蓮弁青磁碗、スサ入り焼壁塊が出土。

SB3130 (Fig.13・18)

調査区中央部、SA3120の東に位置する東西棟の掘立柱建物である。梁行1間(2.2～2.4m)×桁行2間(3.7～3.8m)で柱間はほぼ等間である。柱穴は径0.2～0.3mの円形や隅丸方形の平面形を呈し、深さ0.2～0.4mを測る。北東隅の柱穴に柱根が残り、径20cm前後が復元される。検出面の標高は13.5m、柱穴底面の標高は13.1～13.2m。柱穴から土師器小皿・杯(糸切り)、内黒椀、青磁平皿が出土。

SB3160 (Fig.13)

調査区中央部、SB3130の東に位置する東西棟の掘立柱建物で、建物規模はSD3010により遺構が壊されて不明。西側の梁間だけを検出した。梁間2間(4.15m)×桁行3間の建物と考えられる。

SB3170 (Fig.13・18)

調査区東辺部に位置する南北棟の掘立柱建物である。梁行1間(2.15m)×桁行2間(3.5～3.6m)である。柱穴は径0.2～0.3mの円形の平面形を呈し、深さ0.2～0.4mを測る。検出面の標高は13.8m、柱穴底面の標高は13.4～13.6m。

【第5遺構検出面】**SD3035** (Fig.13・18 PL.18)

調査区中央部に位置する東西溝である。東端はSD3010により壊されて途切れる。西側は調査区の外につづく。壁は底面から外側に彎曲しながら立ち上がる。幅1.3m前後、深さ0.4～0.5m、検出した長さは12.1mを測る。土師器小皿・杯(糸切り)、瓦器椀、陶器鉢、青磁碗、白磁碗(IV-2)、スサ入り焼壁塊、丸瓦・平瓦、玉石が出土。

SD3038 (Fig.13・18 PL.18)

調査区中央部、SD3035の北側に並行する東西溝である。東端はSD3010により壊されて途切れる。西側は調査区の外につづく。壁は底面から外側に彎曲しながら立ち上がる。幅0.5～1.0m、深さ0.1～0.2m、検出した長さは12.7mを測る。土師器杯、瓦器椀(筑前型)、陶器鉢、平瓦が出土。

2) 遺物

SA3120 (Fig.19)

10310は土師器台付坏。体部は直線的に大きく開き、高台は貼り付け。体部外面と内面は横ナデ。

SA3140 (Fig.19)

10323は土師器皿。底部は糸切りで、体部は低く、外側に開く。10322は土師器坏。底部は糸切りで、体部は屈曲し内湾して立ち上がる。体部内外面は横ナデ、内面見込みはナデ。

SA3150 (Fig.19)

10324は白磁碗。口縁部には大きめの玉縁をつくり、体部は直線的に開く。高台は削り出して低く作る。見込みに圈線を1条廻らせる。釉は灰白色で体部中位まで施される。

SB3100 (Fig.19)

10311～10314は土師器皿。いずれも底部は糸切りで板状圧痕が付く。10308・10309・10315・10321は土師器坏。いずれも底部は糸切り。

SB3110 (Fig.19)

10317～10319は土師器皿。いずれも底部は糸切りで、体部の立ち上がりは低い。

SB3130 (Fig.19 PL.35)

10297は土錘。全長5.3cmで全体に細身である。10298は青磁皿。同安窯系で見込みに櫛描文が施される。釉はオリブ灰白色で外面は底部のみ露胎、内面は全面施釉される。

SD3001 (Fig.20 PL.35)

10100は青磁碗底部。釉は青みのある灰色を呈する。10099は播鉢。胎土は土師質で灰褐色を呈する。内面には5条単位の播目が付く。外面に炭化物が付着する。

SD3002 (Fig.20 PL.35)

10101は土師器坏。体部の開きは弱く、深めに作られる。底部は糸切り。10103は瓦器碗。胎土は精良で灰色～黒色を呈する。内面に部分的な研磨痕が残る。10102は瓦器碗で内面は黒変し、ミガキが施される。外面はナデとヘラケズリで、高台は貼り付けで低い。

SD3003 (Fig.20 PL.35)

10104・10105は土師器坏。10104は口径9.6cmの小型品で底部は糸切り。10105は底部が糸切りで、体部は内湾気味に開く。10116は白磁碗。釉は白色で、体部下部まで施釉される。10108以下は白磁碗底部で、釉はわずかに青みを帯びる灰色を呈する。高台は削り出して釉が高台外面まで及ぶ。10110は釉は灰色を呈し、残存部外面は露胎。見込み内面に段が付く。10114は釉はわずかにオリブ色味のある灰色を呈する。高台は削り出しでごく低い。

10354・10355・10111は朝鮮青磁とみられ、内面見込みに砂目痕が残る。10354は灰白～灰オリブ色の釉で、外面は畳付まで釉が掛かる。10355は釉が灰白色～灰色で、外面は畳付のみ露胎。10111は内面見込みに花文が白色象嵌で施される。

10113以下は青磁碗。10113は鈍いオリブ色の釉で外面は下部まで施釉される。10109は暗オリブ色の釉で高台外面まで施釉される。10117は内面見込みに花文をスタンプで施文する。10112は濃オリブ色の釉で、内面見込みに「金玉満堂」の銘をスタンプで施す。

10359は瓦質土器で火鉢とみられる。外面口縁部直下に雷文を施す。

SD3008 (Fig.21 PL.36)

図示した6点の土師器皿はいずれも底部糸切り。口径は8.6～9.4cm。

10158以下は土師器坏。いずれも底部は糸切りで、板目痕が残るものもある。10151は体部が外側に

大きく開く。体部は直立し、底部は糸切りで板目圧痕が残る。10161は土師器台付坏。坏部は丸みを持ち、底面は糸切り。高台は貼り付けで外側に開く。

10178以下は白磁碗。10178は灰白色の釉で、高台外側まで釉がかかる。10169は釉が乳白色を呈する。10172は口縁部に大きめの玉縁を作る。釉は薄いオリーブ色を呈し、外面は体部中位まで施釉される。10174は口縁部が短く外反する。釉はわずかに緑を帯びた灰色を呈する。10168は釉が白色で、体部中位まで施釉される。

10170・10177・10167は青磁。10170は青磁皿で、釉は灰オリーブ色。底部付近は露胎。10177は青磁碗で、濃オリーブ色の釉が高台外側まで掛かる。10167は青磁碗で内面に片彫りの草花文を施す。釉は青みのあるオリーブ色で、高台外面まで施釉され、畳付と高台内側は露胎。

SD3009 (Fig.21 PL.38)

10180～10182は土師器皿。底部は糸切りで、体部は低く開く。

10183は土師器小壺で小片。口縁部は屈曲して短く外反し、体部は丸い。10184は青磁碗。釉は濃オリーブ色を呈し、内面口縁直下に圈線を1条廻らせる。

SD3010 (黒灰色粘土層) (Fig.22～25)

10189以下は土師器皿。底部は糸切りで、板目が付くものもみられる。体部は短く外側に開いて立ち上がるものが多い。

10219以下は土師器坏。いずれも底部は糸切りで、10227はやや丸底気味でその他は平底である。10217は体部が直立に近く、深めに作られる。10225・10226は体部が薄く直線的に開く。

10229・10228は土師器台付坏。10229は高台は貼り付けで、高く直立する。体部は直線的に開くものとみられる。10228は高台は貼り付けで短い。

10243以下は瓦器碗。いずれも内外面に横方向のミガキ痕跡が残る。10236・10241は低い高台が貼り付けられる。10230は土師器土鍋。口縁は屈曲して外反する。胎土は砂粒を多く含む。

Fig.24は青磁。10278は青磁皿。見込みに櫛描文と劃花文を施文する。釉はオリーブ灰白色で、外面は体部下部まで施釉され、底面のみ露胎。10279は青磁皿。体部は屈曲して外反する。釉はオリーブ灰白色で体部下部と底面は露胎。10280は青磁碗。同安窯系で、外面は縦櫛文、内面に櫛描文と劃花文を施文する。釉はオリーブ灰白色。10264は青磁碗。同安窯系で外面には粗い縦櫛文、内面に櫛描文と劃花文を施す。釉は灰白色～灰オリーブ色。

Fig.25は白磁碗。10276は口縁部に大きめの玉縁を作る。釉は灰白色で体部上位のみ施釉され、内面見込みの釉を輪状に搔き取る。10275も大きめの玉縁口縁を持ち、釉は灰白色で体部下部まで施釉される。10274は底部破片で、高台は広く低い。釉は灰白色で体部下部まで施釉される。10273は底部破片で、内面見込みに櫛描文が施文される。釉は灰白色で高台外側まで掛かる。10277は高台内側に墨書で花押を記す。釉は灰白色で、内面見込みに櫛描文を施文する。10272は素口縁で、体部は直線的に開く。釉は灰白色で、内面見込みは釉を輪状に搔き取る。10271は身が浅く、体部は丸く大きく開く。釉は浅黄～灰白色で体部下部まで施釉される。10269は口縁が短く外反する。体部は丸みを持ち、釉は灰白色で体部下部まで施釉される。10270も口縁が短く外反し、内面に櫛描文を施文する。高台は高く、釉は灰白色で体部下部まで施釉。10268は口縁が屈曲して外反し、体部は丸みを帯びる。高台は高く削り出し、釉は灰オリーブ色～灰白色で高台上端まで施釉される。

SD3010 (茶灰色粘土層) (Fig.26～29 PL.39・40)

10193・10194は土師器皿。底部は糸切りで、10194は体部の立ち上がりが弱い。10193は体部が直線的に開く。

10197以下は土師器坏。いずれも底部は糸切りで、板目圧痕がつくものもみられる。10197・10204は体部が直立する。10203・10205・10201は底部径が小さく、体部が直線的に大きく開く形態である。体部は横ナデ、内面見込みはナデ調整。10196は体部が屈曲して開き、口縁部は焼成時の歪みが大きい。

10208は土師器台付坏。高台は貼り付けで高く直立する。坏部外底は糸切りで板目がつく。

10207は土師器碗。体部は丸みを持ち、高台は低く貼り付けられる。外面はナデ、内面はミガキで調整される。

10238以下は瓦器碗。10238は内外面に横方向ミガキを施す。体部は屈曲しながら立ち上がる。10237は底部破片で、高台内側に糸切り痕が残る。体部内外面にミガキを施す。10239は外面の摩耗が著しく、ミガキ痕跡が摩滅している。10240は外面ミガキ後の指オサエ痕跡が残る。

10265は陶器捏鉢。外面は暗灰黄色～にぶい褐色、内面は灰白色～灰黄色を呈する。口縁内側に蓋受けの突帯が巡る。10266は須恵器甕。胎土は灰白～灰色を呈する。外面は横ナデ後タタキ、内面は横ナデで、外面に平行タタキ当て具痕跡が残る。10267は陶器水注とみられる胴部破片。破片上部に把手貼り付けの痕跡が残る。破片外面上端に沈線が巡る。底部は碁笥底で、底部外面に目跡が残る。外面の釉は剥離しており、遺存しない。

10250は白磁皿。口縁端部は横ナデで面取りし、内面見込みに目跡が残る。10255以下は白磁碗。10255・10256・10259は口縁部に大きめの玉縁を作る。釉は灰白色で外面は体部中位まで施される。10254は玉縁がやや小さめで、釉は灰白色で体部下位まで施釉される。100258は底部で釉は灰白色を呈し、高台付近まで掛かる。10252は灰白色の釉がかかる。内面見込みに段を付け、内面に圏線を1条廻らせる。10253・10251・10261は口縁が短く外反するもので、釉は灰白色で外面は体部下位まで施釉される。10260は内面見込みに段を付けて茶溜りをつくる。釉は灰白色で外面は体部下位まで施釉される。10248は見込みには茶溜りを作り、内面の釉を輪状に掻き取る。内面上部に白堆線が入る。高台内側に墨痕が見られるが不明瞭である。釉は白色～灰白色を呈する。10257は内面に鉄絵が描かれる。釉は灰白色～灰オリーブ色で、外面は体部下位まで施され、内面見込みの釉は輪状に掻き取られる。10247は口縁が短く外反し、内面に櫛描文を描く。

SD3010 (黄灰色粘土層) (Fig.30)

10210は土師器皿。底部は糸切りで板状圧痕が残る。体部は浅く、横ナデで仕上げる。10211は土師器坏。底部は糸切りで、体部は直線的に大きく開き、横ナデ調整。10212は土師器鍋で、外面にススが付着する。口縁は外湾して大きく開き、横ナデで整える。

SD3010 (青灰色粘土層) (Fig.31 PL40)

10209は土師器皿。底部は糸切りで板状圧痕が残る。体部は薄く、大きく広がり、全体に浅めの作りである。10214・10213は土師器坏。10214は体部は丸みを帯び、底部は糸切りで比較的小さく作る。体部内外面は横ナデ、内面見込みはナデ。10213は底部糸切りで、体部は直線的に開く。外面は横ナデで、内面は風化により器表が剥離する。

10263は白磁碗の底部。高台は削り出しで高く作られる。釉は灰白色で高台外面まで厚く掛かる。内面見込みに櫛描文を施文する。

SD3012 (Fig.32 PL41)

10281は土師器皿。底部は糸切りで、体部は外側に大きく開く。体部は横ナデ、内面見込みはナデで仕上げる。10282は土師器坏。底部は糸切りで、体部は外側に直線的に開く。体部は内外面とも横ナデ、内面見込みはナデ調整。

SD3017 (Fig.32 PL41)

10284・10285は土師器皿。10284は底部には糸切り痕跡と板状圧痕が残る。10285は底部がやや丸みを持ち、糸切り痕と板状圧痕が見られる。

SD3019 (Fig.32 PL41)

10286は土師器皿。体部は薄く、外反して開く。底部には糸切り痕が残る、底部と体部の境界はナデで整える。10361は白磁碗。釉は灰白色で破片下部まで釉が掛かる。10362は青白磁皿で、釉は灰白色で高台外側まで施釉される。内面見込みに櫛描文と片彫りの劃花文が施文される。

SD3023 (Fig.32 PL41)

10288・10289は土師器坏。10288は風化により底部の調整が不明。体部は軽く内湾しながら立ち上り、横ナデで仕上げられる。10289は底部に板状圧痕が残る。体部は内湾しながら直立する。

SD3035 (Fig.32)

10305は土師器碗で、内面が黒色を呈し、黒色土器A類にあたるもの。体部は丸みを帯び、高台は貼り付けで外側に開く。外面は横ナデで体部下部に指圧痕が残る。内面は横ナデで見込みはナデ。10307は瓦器碗で内外面黒色を呈する。口縁部はごく短く外反し、体部内外面にミガキ痕跡が残る。

SK3015 (Fig.33 PL42)

10292・10291・10290は土師器皿。底部は糸切りで、体部は強く開く。10294・10293は土師器坏。底部は丸底状を呈し、口縁部は外反気味に開く。10293は内面上部にミガキ痕跡が残る、外面に指押サエ痕跡が残る。10296は瓦器碗で、内外面は黒色を呈し、ミガキ痕跡が残る。

SK3034 (Fig.33)

10300は土師器皿。底部は糸切りで板状圧痕が残る。10299は青磁碗。釉はオリーブ灰色で釉は高台外側まで施され、畳付と高台内部は露胎。見込みと畳付に目痕が残る。

その他の出土遺物 (Fig.34・35)

10320は白磁皿。釉は灰オリーブ色で、外面は高台外側まで施釉され、内面は見込みの釉を輪状に掻き取る。10301は瓦器碗。灰白色を呈し、内外面にミガキ痕跡が残る。

10333・10332は白磁皿。高台は低く、見込みに圏線を回す。釉は灰白色で10333は高台外側まで、10332は体部下側まで施釉される。10331は陶器碗。胎土は黄橙色～明黄褐色で釉は灰白色を呈し、畳付のみ露胎。高台外側に青色の短線を描く。体部外面に櫛描文が残る。

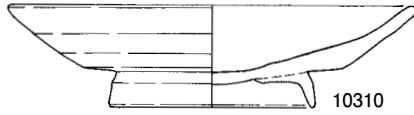
10287・10302は土師器坏。10287は底部糸切りで、体部は外湾して開く。10302は体部が直線的に大きく開く。底部は糸切りで板状圧痕が残る。10303は瓦器碗。高台は低く、体部外面はヘラケズリ後ミガキ、内面はミガキを施す。10304は青磁碗。釉はオリーブ灰色で体部下側まで施釉される。外面に櫛描文、内面に櫛描文と波状文が施文される。

10325は土師器皿。底部は糸切り。10326は土師器坏。底部は糸切りで、体部は横ナデで作る。10330は陶器壺。胎土は赤褐色で黒褐色の釉が掛かる。10304は青磁碗。外面に鎬蓮弁文を施文する。釉はオリーブ灰色で高台外面と高台内部まで施釉され、畳付のみ露胎。

10327は土師器坏。下部にヘラ切り痕が残る、体部は横ナデ。10328は青磁皿。内面に櫛描文と劃花文を施文する。釉は灰オリーブ色で底部のみ露胎。10334は褐釉陶器で水注とみられる。胎土は灰白色で釉は暗茶褐色を呈する。

21004・20007は磨製石斧でSD327出土。21004は刃部の一部に使用時の破損痕が残る。20007は基部を欠き、薄手である。20010は磨石。中央に研磨による凹みが見られる。20001・20002は滑石製石鍋。

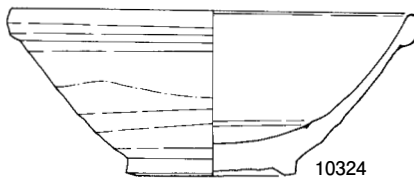
SA3120



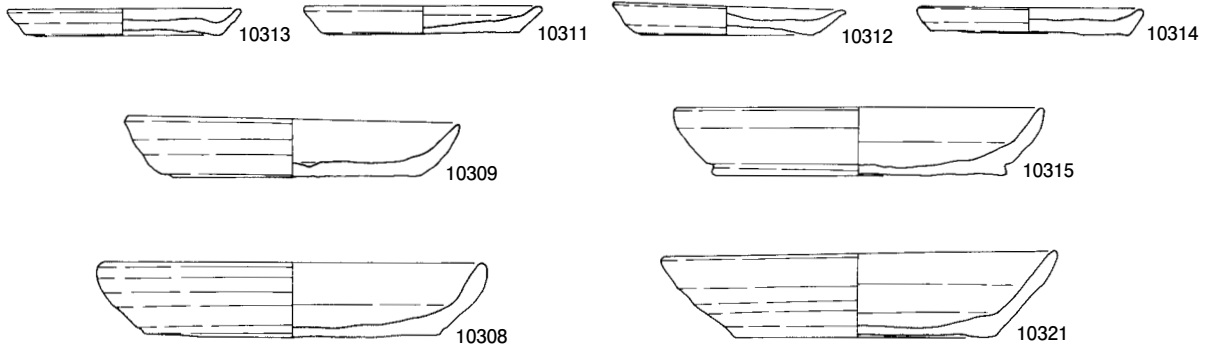
SA3140



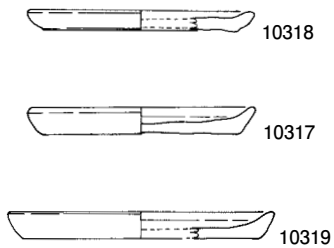
SA3150



SB3100



SB3110



SB3130

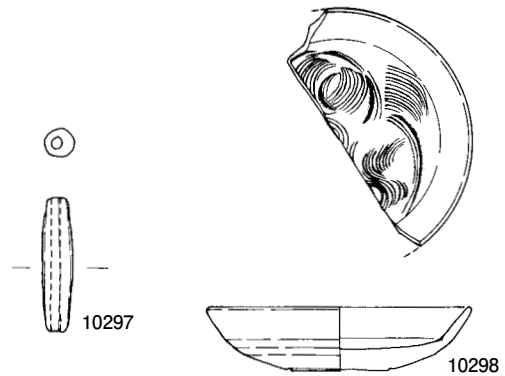
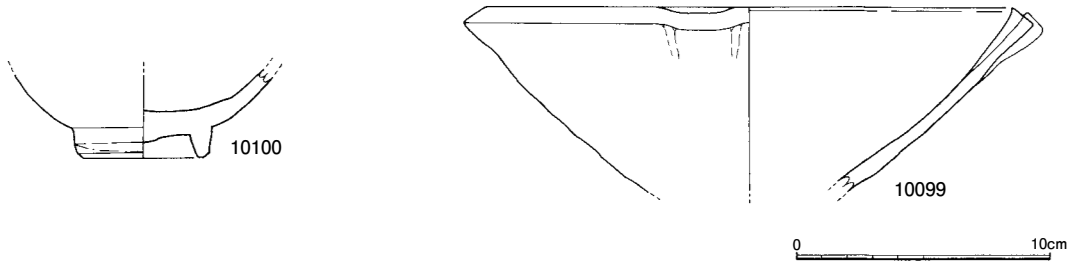
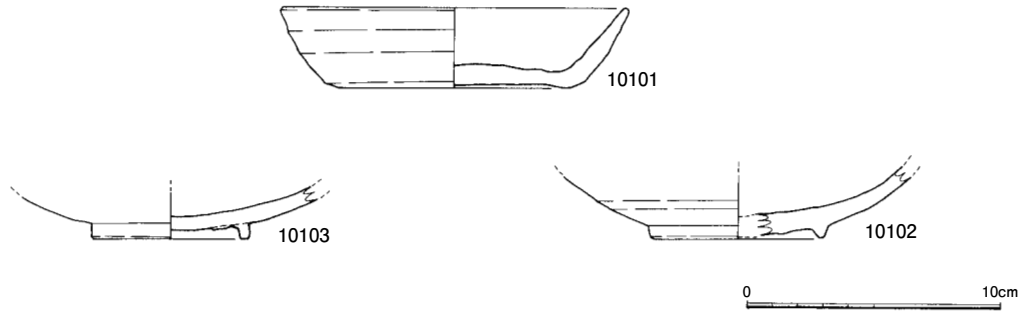


Fig.19 3区出土遺物実測図1 (1/3)

SD3001



SD3002



SD3003

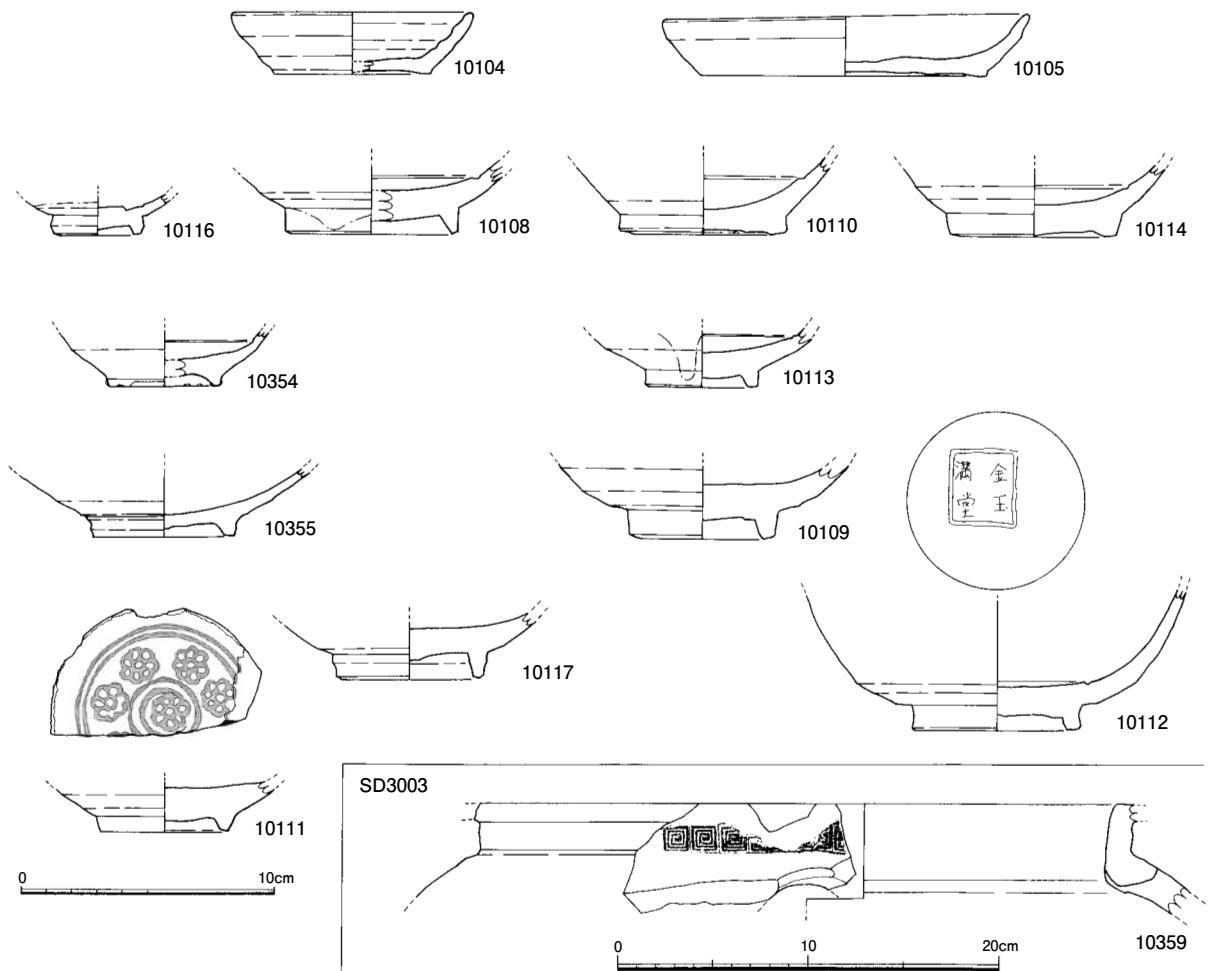
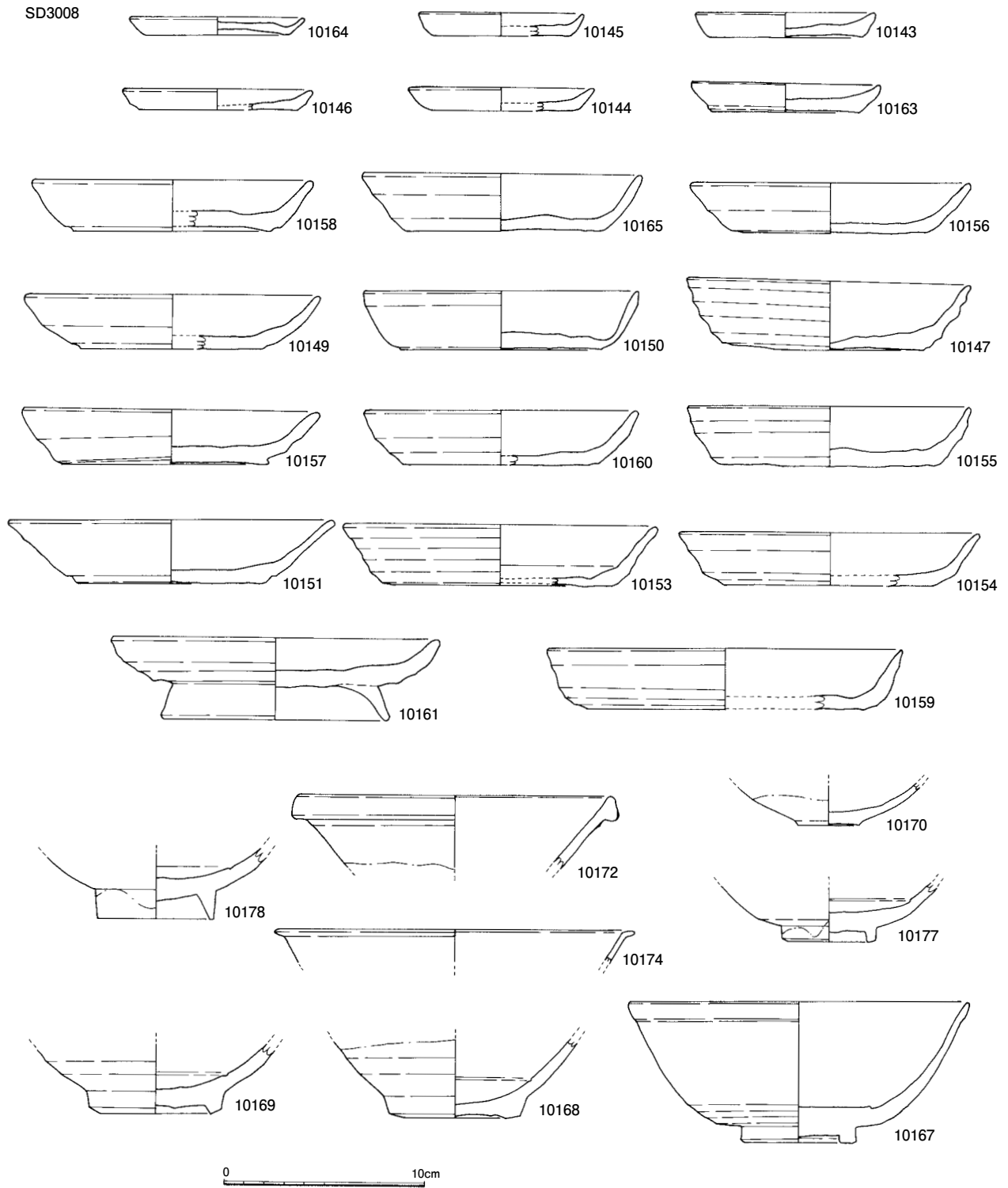


Fig.20 3区出土遺物実測図2 (1/3・1/4)



SD3009

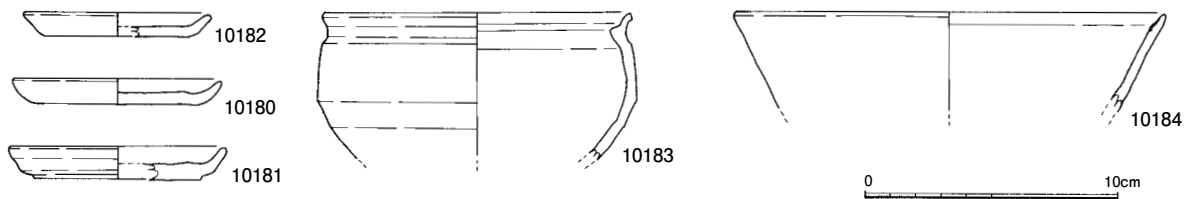


Fig.21 3区出土遺物実測図3 (1/3)

SD3010(黒灰色粘土層)

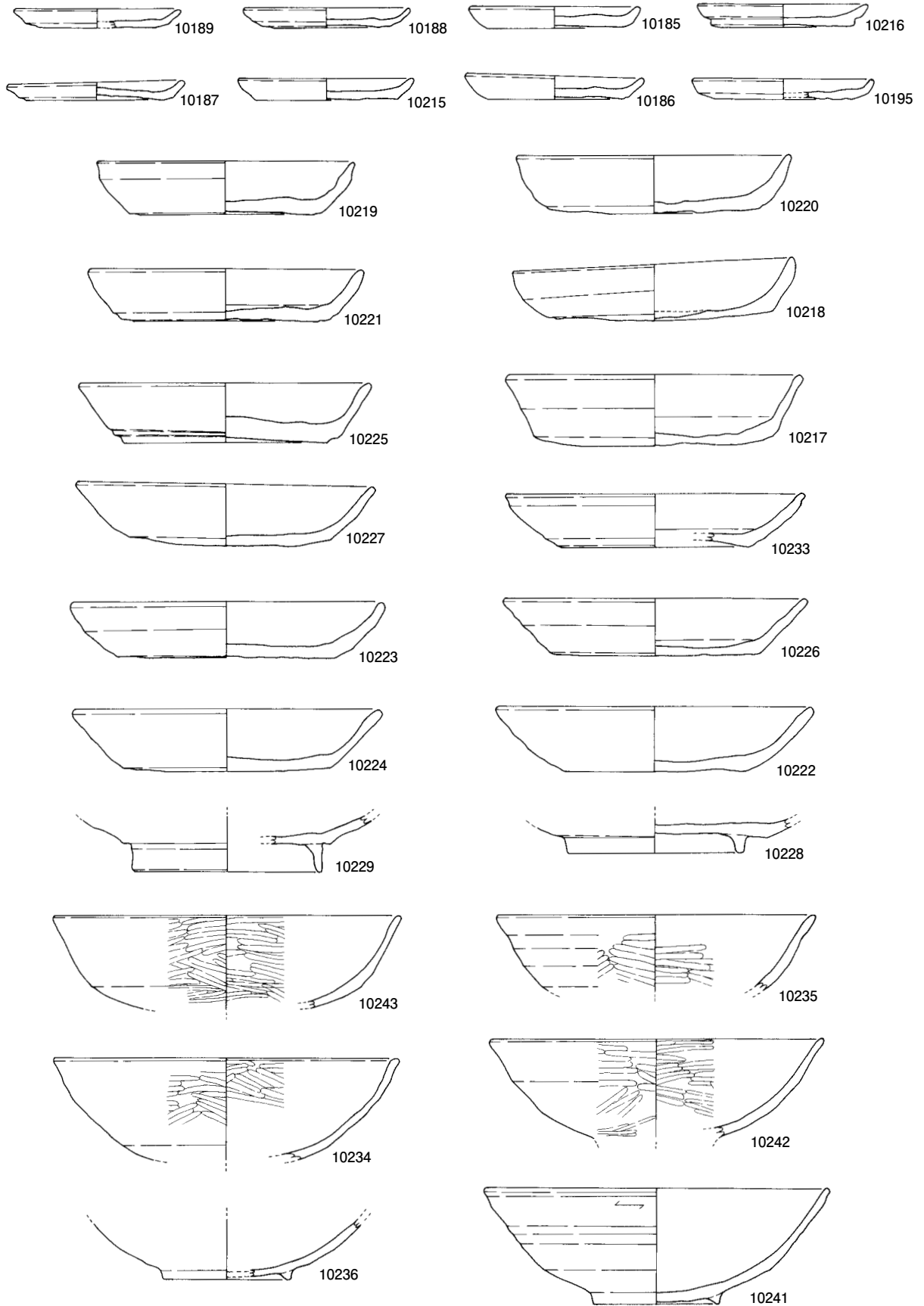


Fig.22 3区出土遺物実測図 4 (1/3)

SD3010(黒灰色粘土層)

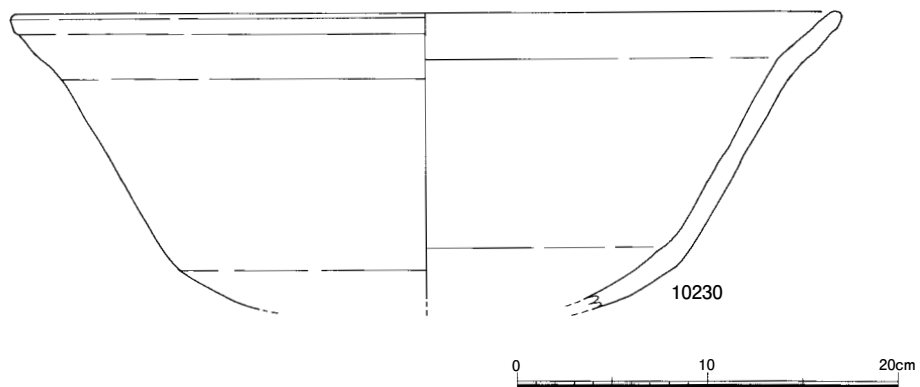


Fig.23 3区出土遺物実測図5 (1/4)

SD3010(黒灰色粘土層)

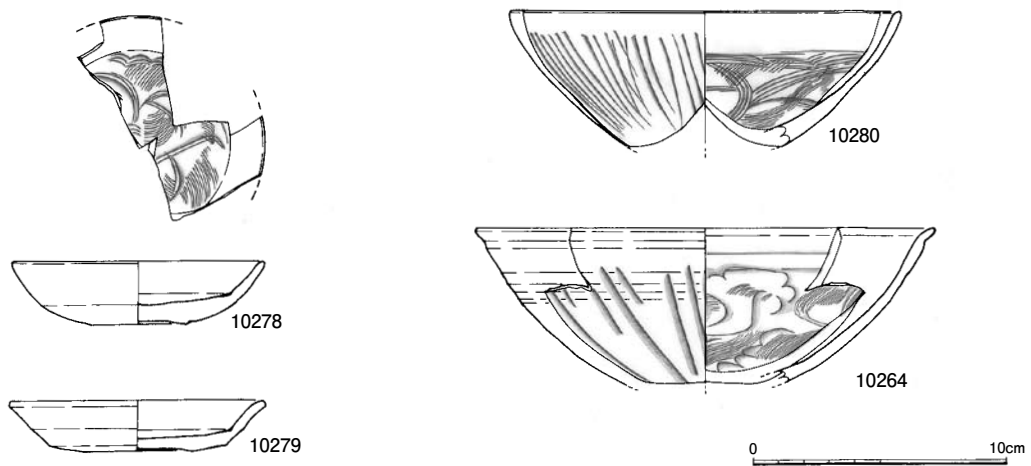


Fig.24 3区出土遺物実測図6 (1/3)

SD3010(黒灰色粘土層)

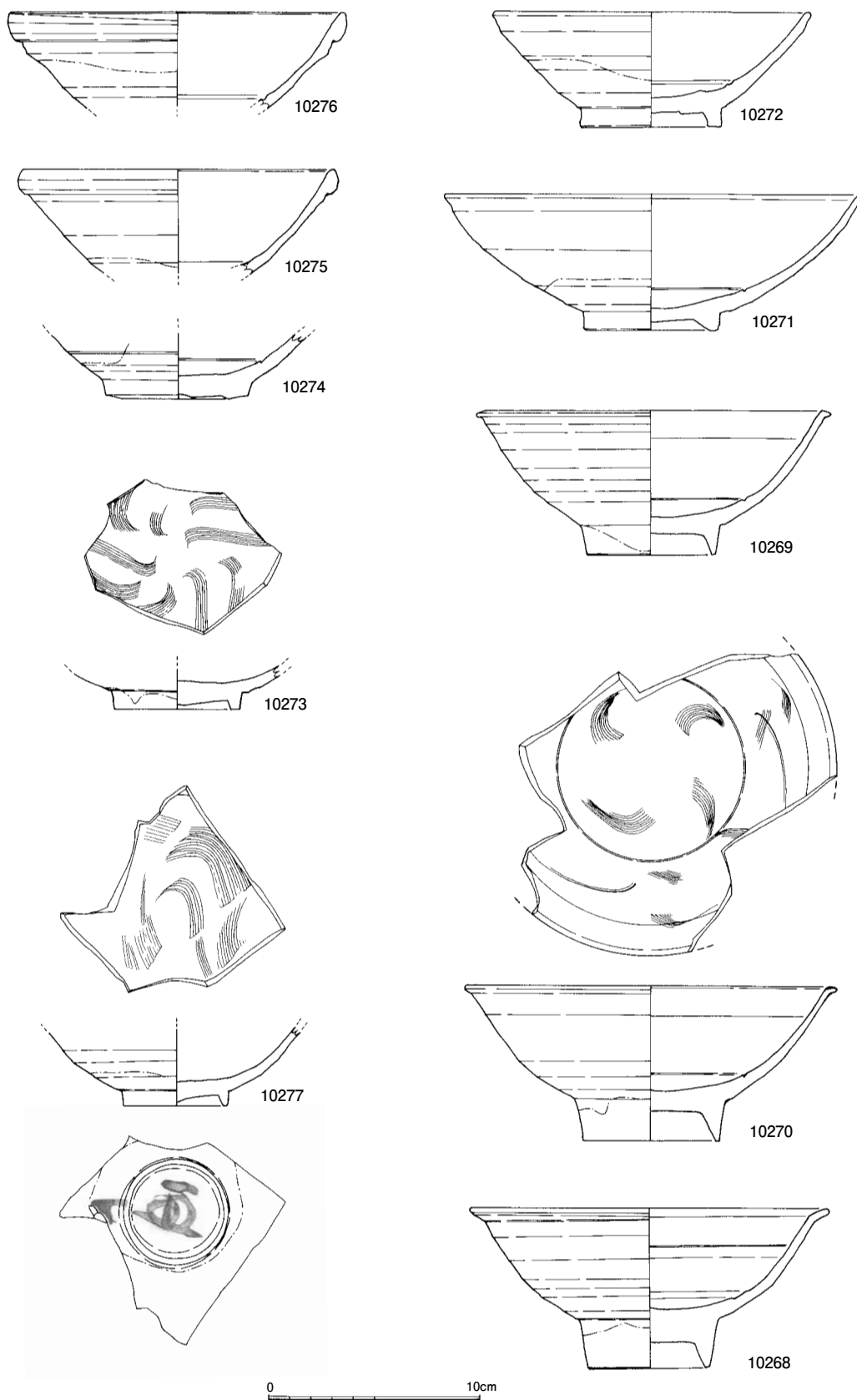


Fig.25 3区出土遺物実測図7 (1/3)

SD3010(茶灰色粘土層)

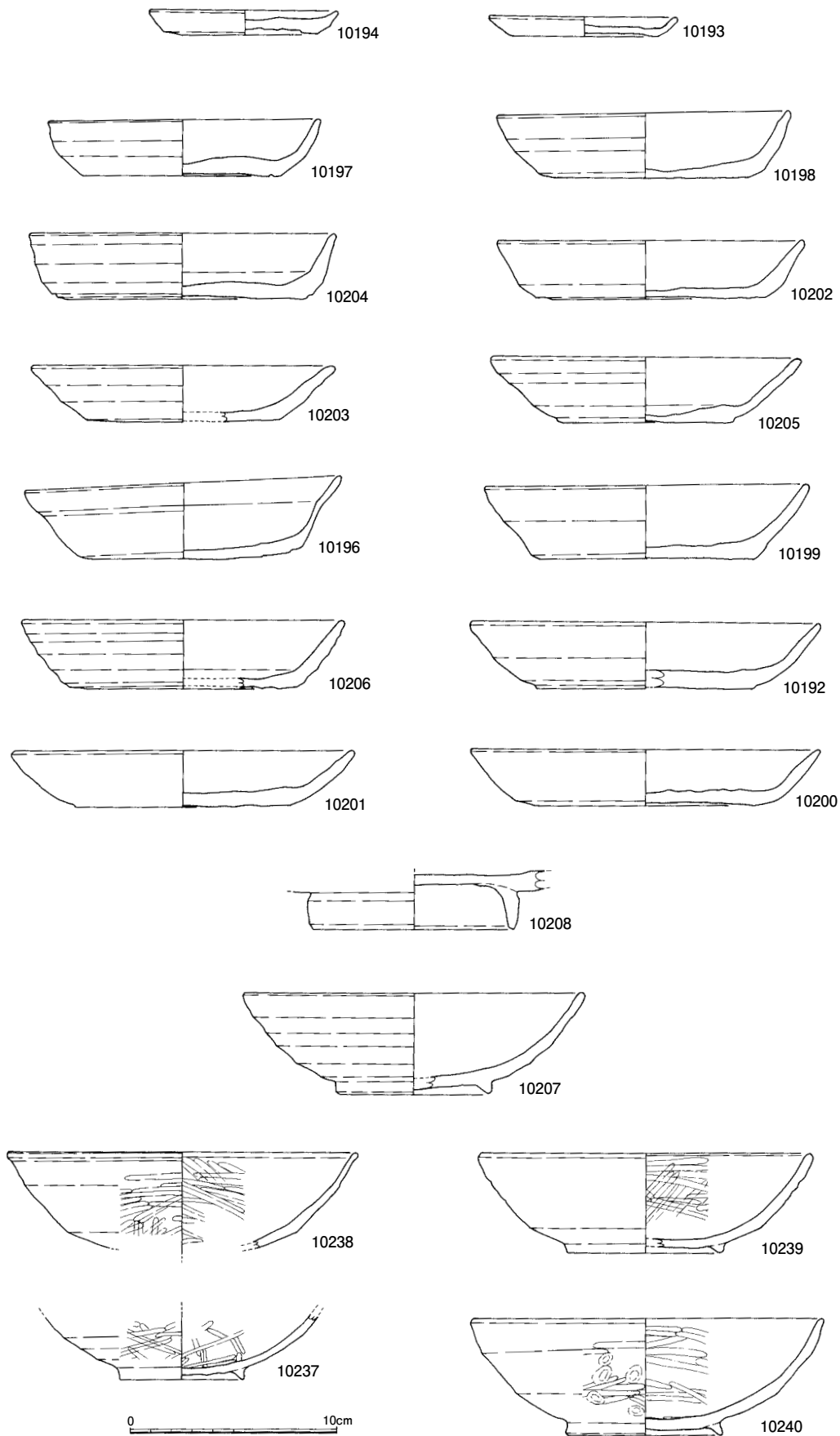


Fig.26 3区出土遺物実測図8 (1/3)

SD3010(茶灰色粘質土層)

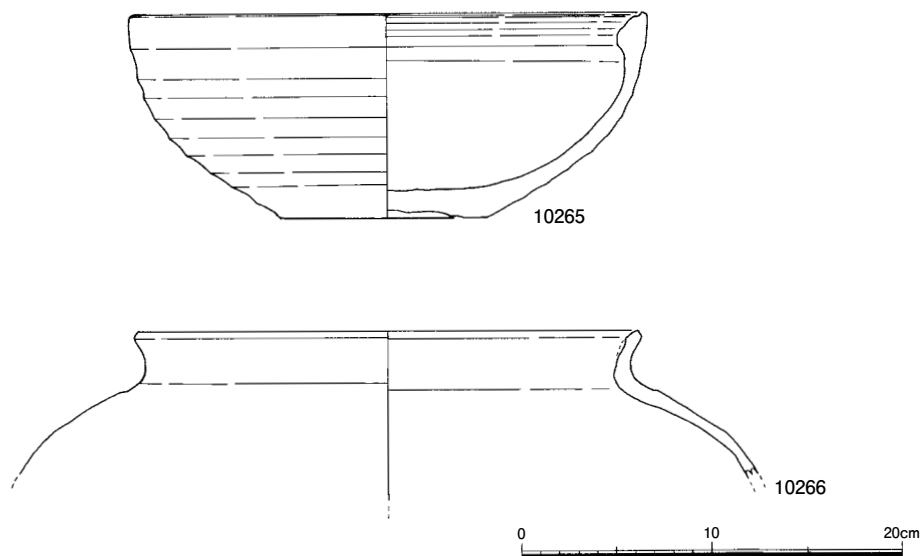


Fig.27 3区出土遺物実測図9(1/4)

SD3010(茶灰色粘質土層)

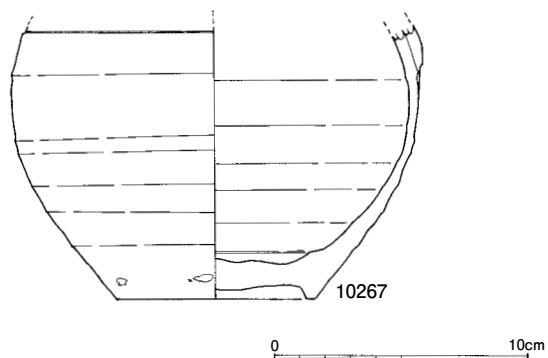


Fig.28 3区出土遺物実測図10(1/3)

SD3010(茶灰粘質土層)

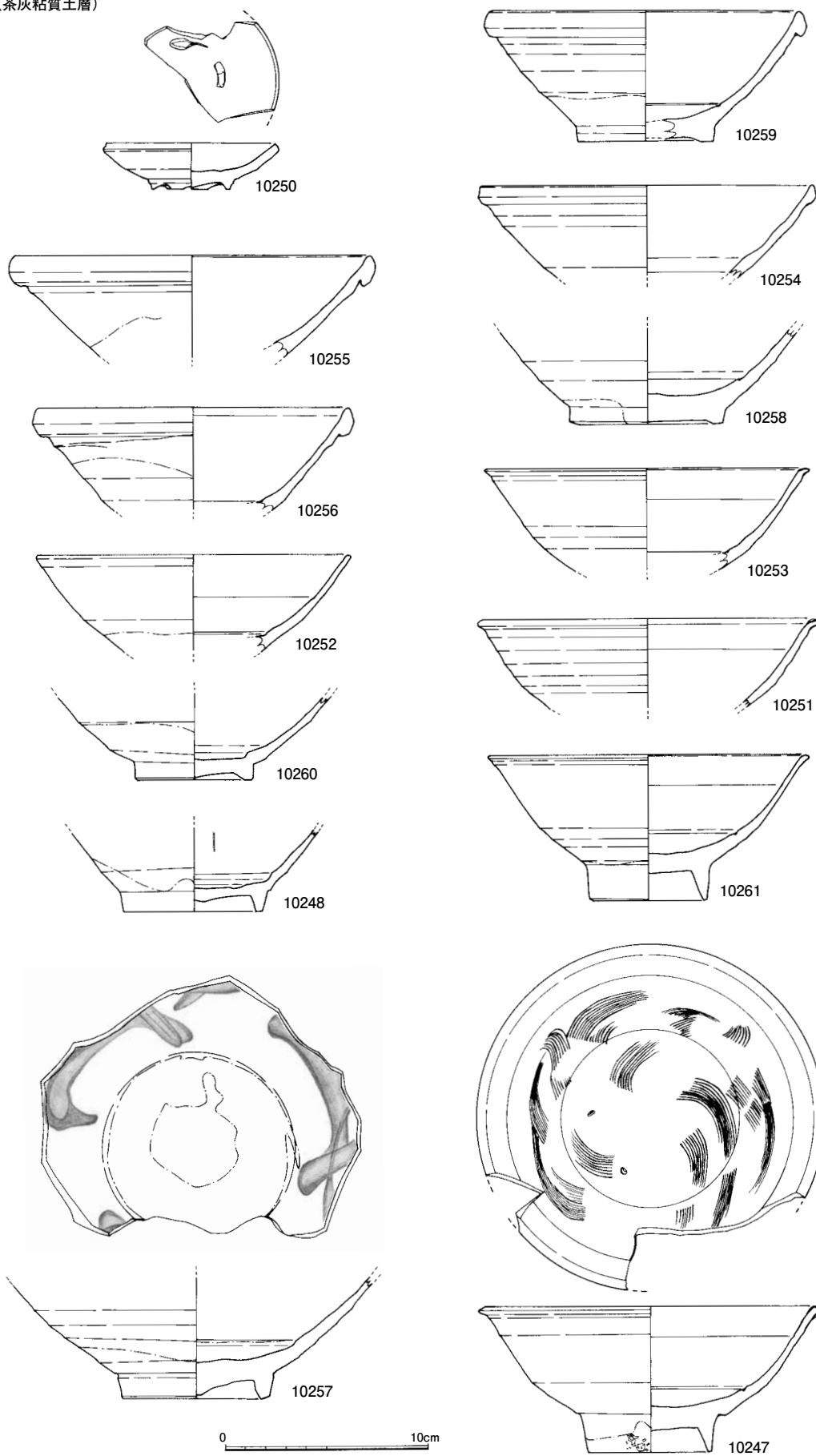


Fig.29 3区出土遺物実測図11(1/3)

SD3010(黄灰色粘質土層)

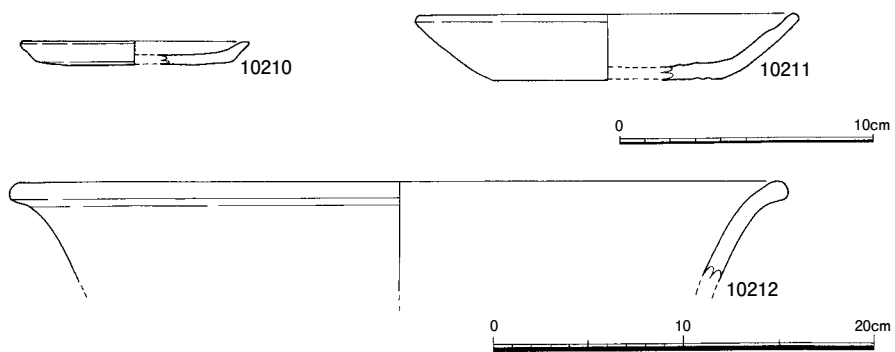


Fig.30 3区出土遺物実測図12(1/3・1/4)

SD3010(青灰色粘質土層)

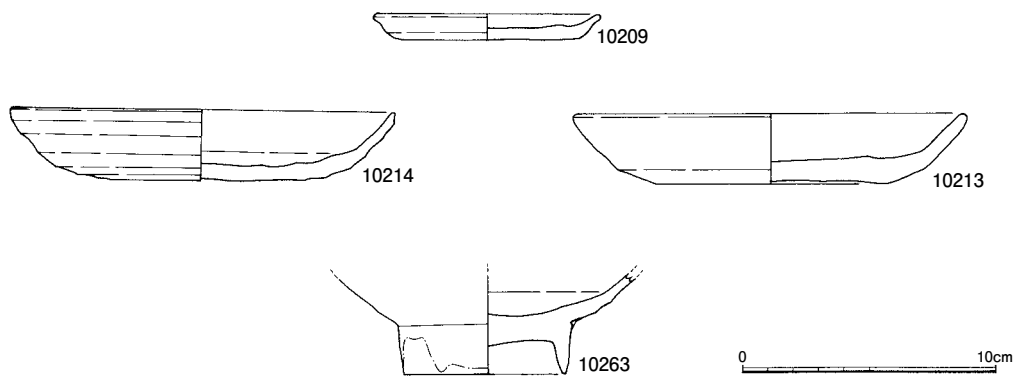
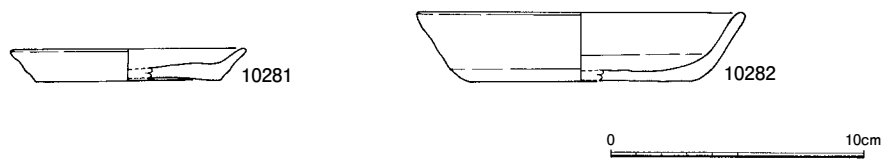
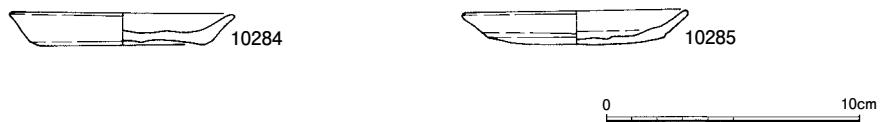


Fig.31 3区出土遺物実測図13(1/3)

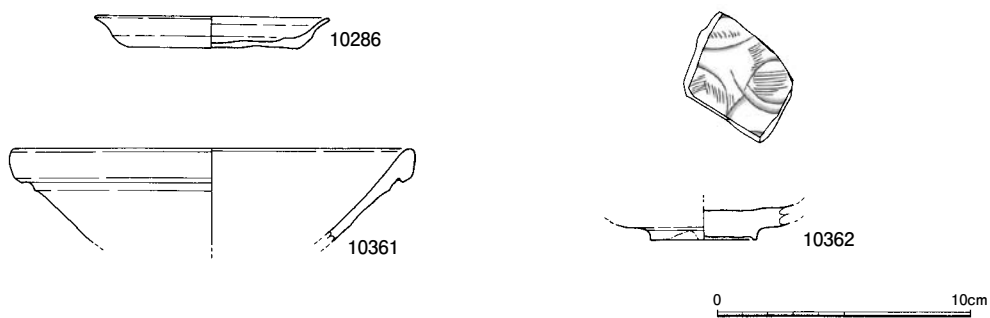
SD3012



SD3017



SD3019



SD3023



SD3035

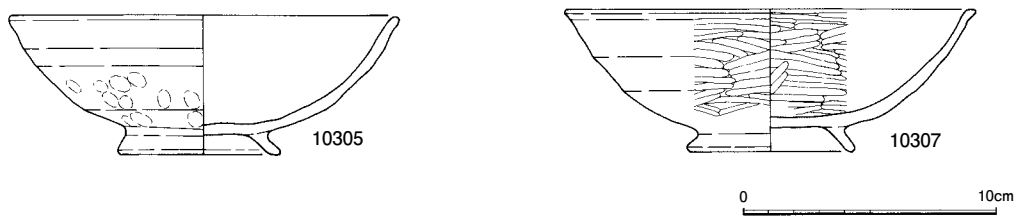
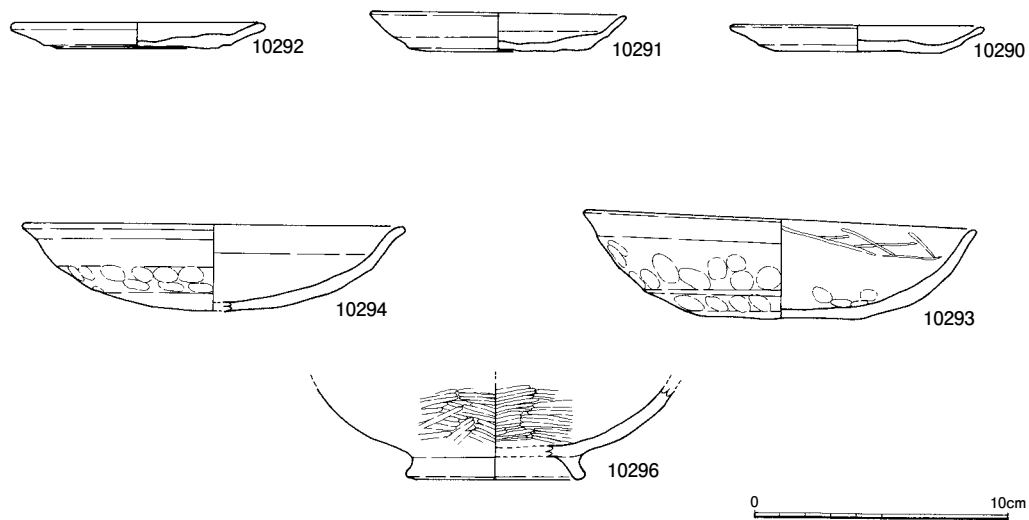


Fig.32 3区出土遺物実測図14(1/3)

SK3015



SK3034



Fig.33 3区出土遺物実測図15(1/3)

SP

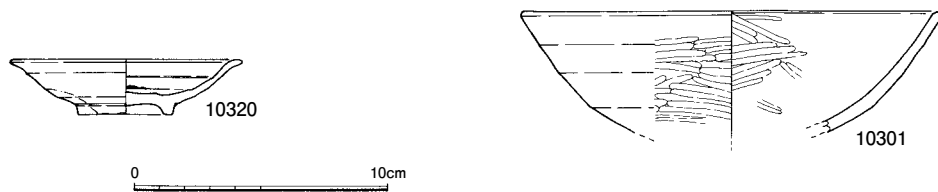
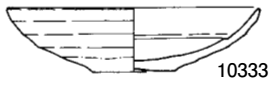


Fig.34 3区出土遺物実測図16(1/3)

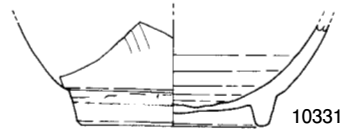
表 採



10333



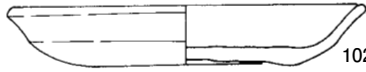
10332



10331



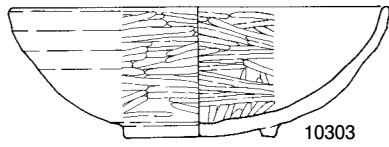
2面遺構検出



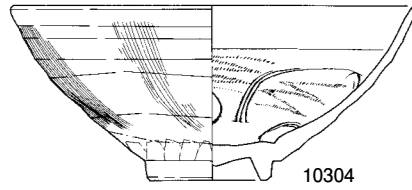
10287



10302



10303



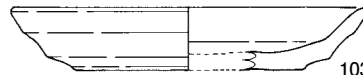
10304



3面遺構検出



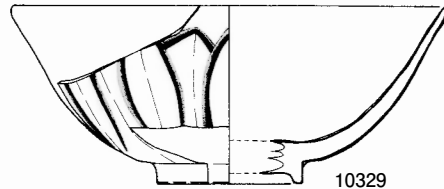
10325



10326



10330



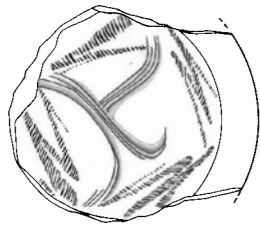
10329



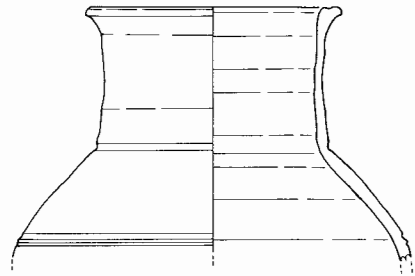
3面地山直上



10327



10328



10334



Fig.35 3区出土遺物実測図⑰(1/3)

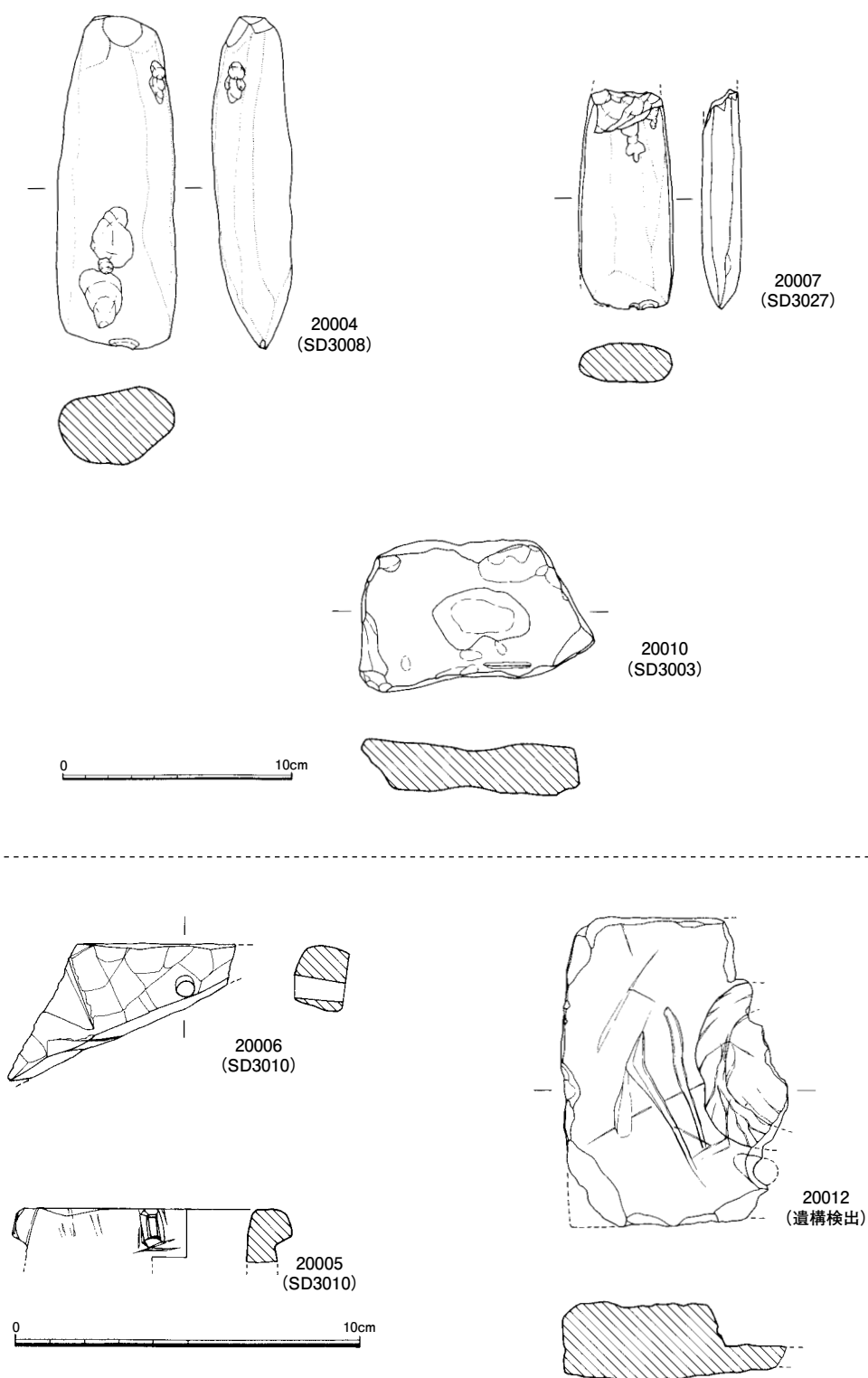
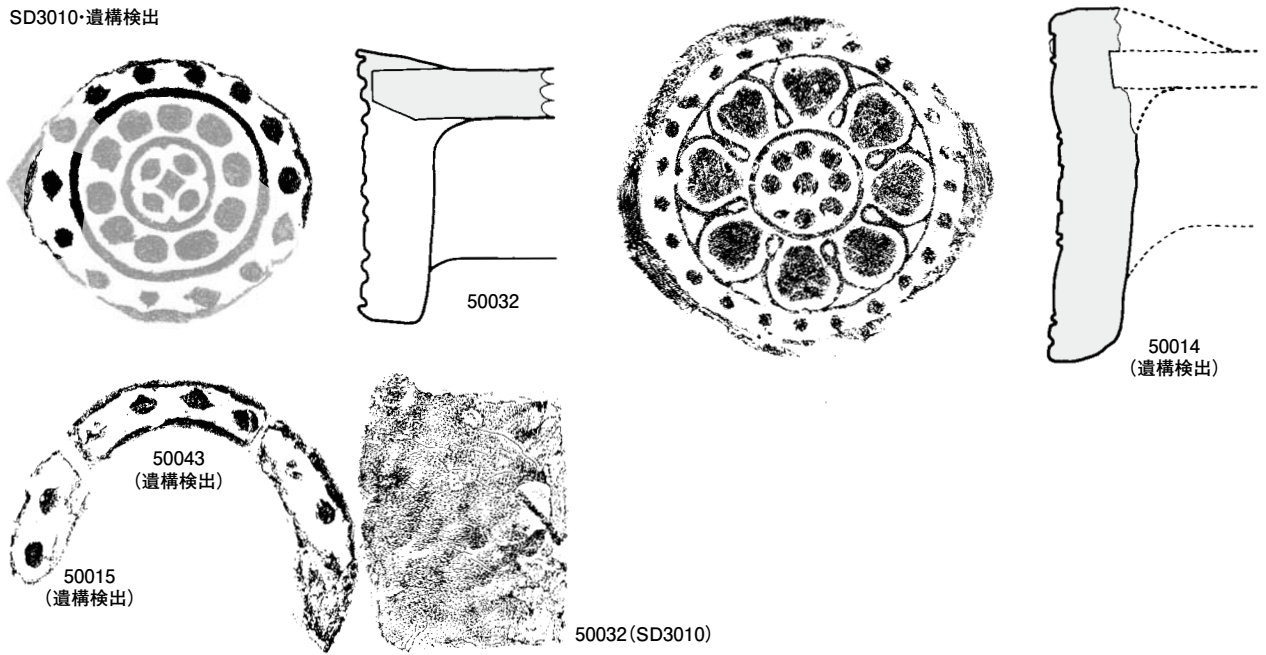
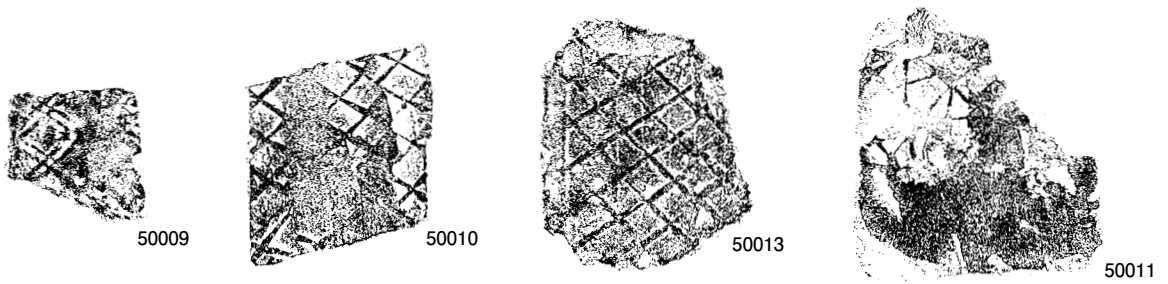


Fig.36 3区出土遺物実測図18(1/2・1/3)

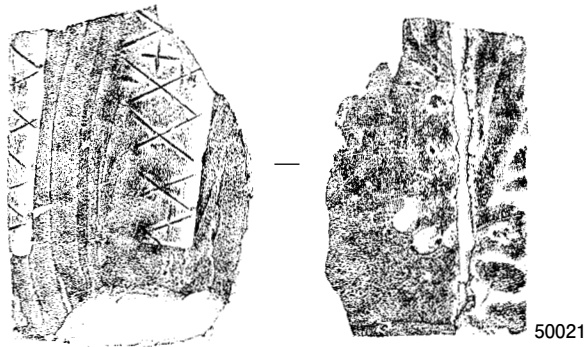
SD3010・遺構検出



SD3003



SD3004



SD3008

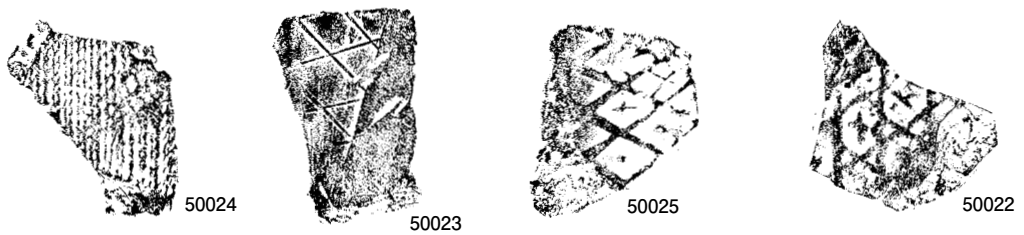
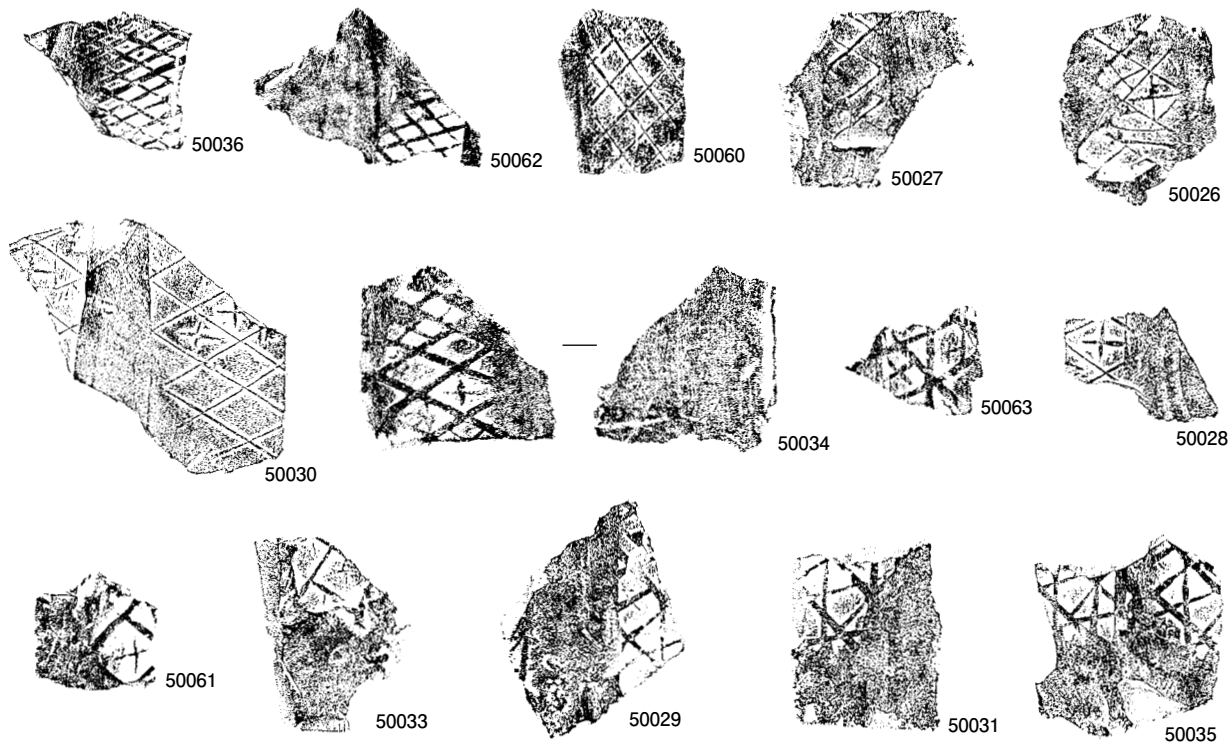


Fig.37 3区出土瓦実測図・拓影 1 (1/4)

SD3010



遺構検出

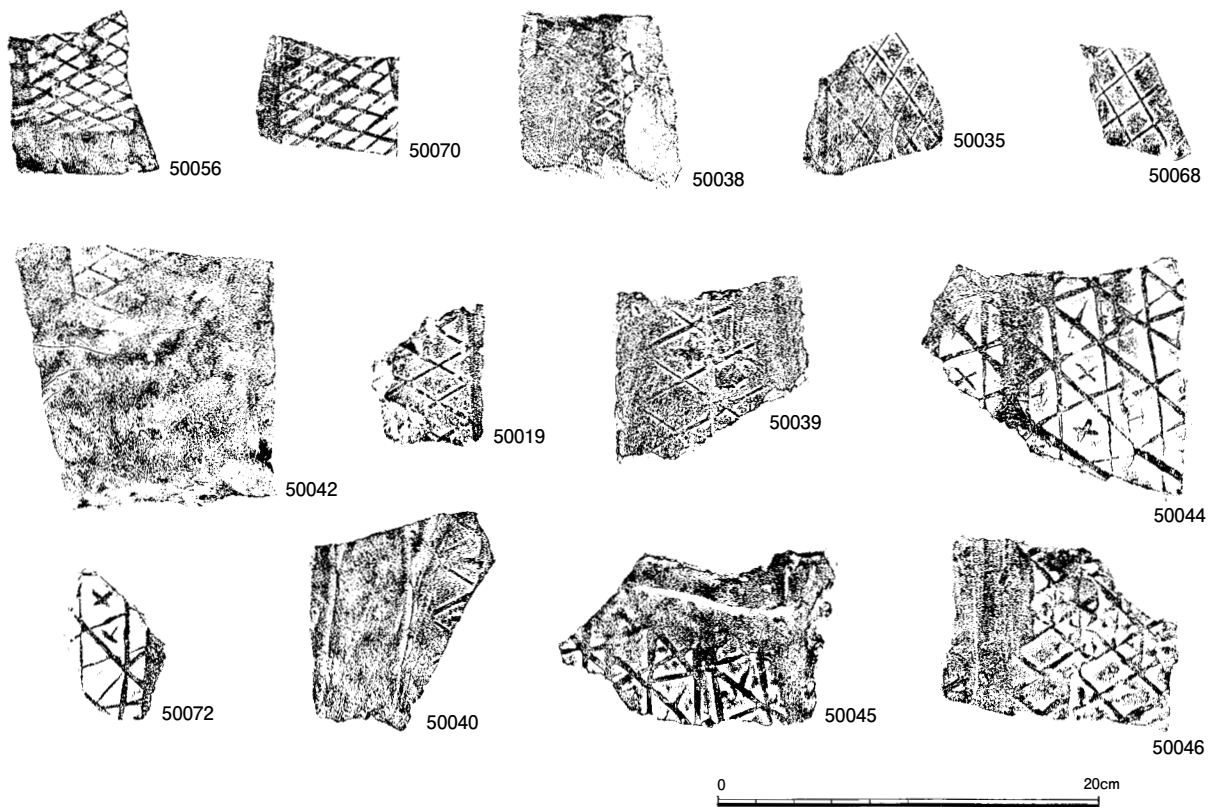


Fig.38 3区出土瓦拓影2 (1/4)

瓦類

3区調査区では溝等から多くの瓦類が出土している。

軒丸瓦

SD3010 (Fig.37 PL.40)

50032は単弁10弁蓮華紋軒丸瓦で、大宰府史跡出土軒瓦型式一覧における軒丸瓦049の外区部分である。丸瓦の凹面先端をヘラでけずり落として瓦当と接合している。

SD3012 (PL.41)

50051は軒丸瓦に接合していた丸瓦である。丸瓦の凹面先端をヘラでけずり落とし、接合部の凹・凸両面にへらできざみをつけている。接合する瓦当径は推定12cmほどの小型である。

遺構検出 (Fig.37 PL.34・42)

50015、50043は単弁10弁蓮華紋軒丸瓦で、大宰府史跡出土軒瓦型式一覧における軒丸瓦049の外区部分である。丸瓦の凹面先端をヘラでけずり落として瓦当と接合している。50043は瓦当裏面上部に丸瓦側との接合の溝状の凹みを指先で押しなでて作っている。50015はSD3012出土の軒丸瓦049と同一個体の可能性が高い。

50014は単弁8弁蓮華紋軒丸瓦で、大宰府史跡出土軒瓦型式一覧における軒丸瓦048Aである。軒丸瓦の製作手順は、①范型に粘土塊を押し当て、扁平状にする。②瓦当裏面上部に丸瓦との接合のために溝状の凹みを指先でなでて作る。③瓦当との接合部をけずらず、きざみもつけない丸瓦を凹みに当てる。④接合補強粘土(支持土)を接合部の凹凸面だけではなく、丸瓦側面も包み込むように施す。

観世音寺出土と同範であるが、珠文に7ヶ所の范割れが認められることから、観世音寺再建での使用^(註1)時期より遡ることはなく、一般的に考えれば後から瓦範を使用^(註2)していることを示す。

直 径	内 区				外 区					全 長	玉 縁 長	出 土 地
	中房径	蓮子数	弁区径	弁数	内 縁		外 縁					
					幅	文様	幅	高	文様			
178 ～ 198	60	1 + 8	138	T 8	13 ~ 15	S 24			-			観世音寺 学校院 大宰府条房 香椎B遺跡

単位:mm

Tab.1 軒丸瓦048A (50014)計測値表

丸瓦・平瓦

平瓦の製作は、一例を除いて粘土板を円筒に巻き付けた後に4分割している。

SD3003 (Fig.37 PL.43)

平瓦50013は一枚作りである。

遺構検出 (Fig.38)

丸瓦50044^(註3・4)と丸瓦50045^(註5)は鴻臚館跡出土瓦と同じ叩き目である。

註1 康平7年(1064)に講堂・塔を焼失。康治2年(1066)に再建された講堂の所用瓦とする説がある。(高橋章氏より御教示)

註2 同様な范キズを持つ048Abが観世音寺出土資料に存在するのかは未調査である。

註3 図12-97～101『元岡・桑原遺跡群17』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集 2010年 福岡市教育委員会

註4 Ph.38-10『鴻臚館跡15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第838集 2005年 福岡市教育委員会

註5 図12-102『元岡・桑原遺跡群17』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集 2010年 福岡市教育委員会

(4) 4区の調査

1) 概要

5区の西方に位置し、丘陵斜面から谷部に変換する所である。このため遺構面は自然地形に則して北東から南西へ向かって緩やかに傾斜する。遺構は、調査区南辺では標高13.2mの地山面から標高13.95mの床土との間に存在する7層の整地土層の全てに存在する。7層の中で下位に位置する土層には地山の黄灰色土を多く含み、上位の土層には炭や土器細片を多く含む特徴を示す。調査は、時間的制約や谷部の遺構との関連性から標高13.8mの黄橙色土層上面を第1面、地山直上を第2面として行った。第1面では柱穴や土壙、第2面で古墳時代前期の竪穴住居などを検出した。調査面積は137.2㎡である。

2) 遺構

SX4001 (Fig.39 PL.20)

第1面の調査区南東隅に位置し、土壙と考えられる。不整形な円形の平面形を呈し、調査区外に広がる。深さ0.2mを測る。

SX4004 (Fig.39 PL.20)

第1面の調査区南東部に位置し、土壙と考えられる。円形の平面形を呈し、径1.2m、深さ0.4mを測る。壁は直線的に内傾して底面に至る。

SP4001 (Fig.39 PL.20)

第1面の南東隅に位置する平面形が0.2×0.4mを測る楕円形の柱穴で、深さは0.2m。

SP4006 (Fig.39 PL.20)

第1面の東辺部に位置する平面形が0.3×0.4mを測る楕円形の柱穴で、深さは0.1m。

SP4014 (Fig.39 PL.20)

第1面の北辺中央部に位置する平面形が径0.4mを測る円形の柱穴で、深さは0.2m。

SP4044 (Fig.39 PL.20)

第1面の北辺中央部に位置する平面形が径0.2mを測る円形の柱穴で、深さは0.3m。

SP4046 (Fig.39 PL.20)

第1面の南辺中央部に位置する平面形が径0.2mを測る円形の柱穴で、深さは0.2m。

SP4059 (Fig.39 PL.20)

第1面のS X 4009の北に位置する平面形が径0.4mを測る円形の柱穴で、深さは0.3m。

SC4009 (Fig.39 PL.21)

第2面の調査区東辺部に位置し、方形プランを呈する4本柱の竪穴住居である。南面する丘陵斜面に方4.2mの竪穴を掘削し、底面である床面の標高は13.5mを測る。残存する壁高は0.3mで、壁溝は認められない。柱掘方は径0.3～0.4mの円形で、柱間は2.0m。床面の北東部には炭が混じる焼土面が0.4m×0.8m程の範囲で広がる。

SC4007 (Fig.39～42 PL.21～23)

第2面の調査区西部に位置する竪穴住居で、調査区外に広がる。平面形が方形プランを呈し、4本柱と想定される。竪穴住居の2/3は調査区の外に広がる。南面する丘陵斜面に方6.3mの竪穴を掘削し、底面である床面の標高は12.9mを測る。残存する壁高は0.3mで、壁溝は認められない。柱掘方は径0.3mの円形で、柱間は3.7m。4本柱の北西角の柱穴近くの床面には、炭が混じる焼土面が0.3m×0.6m程の範囲で広がる。北面する壁の中央部にはカマドが設けられている。

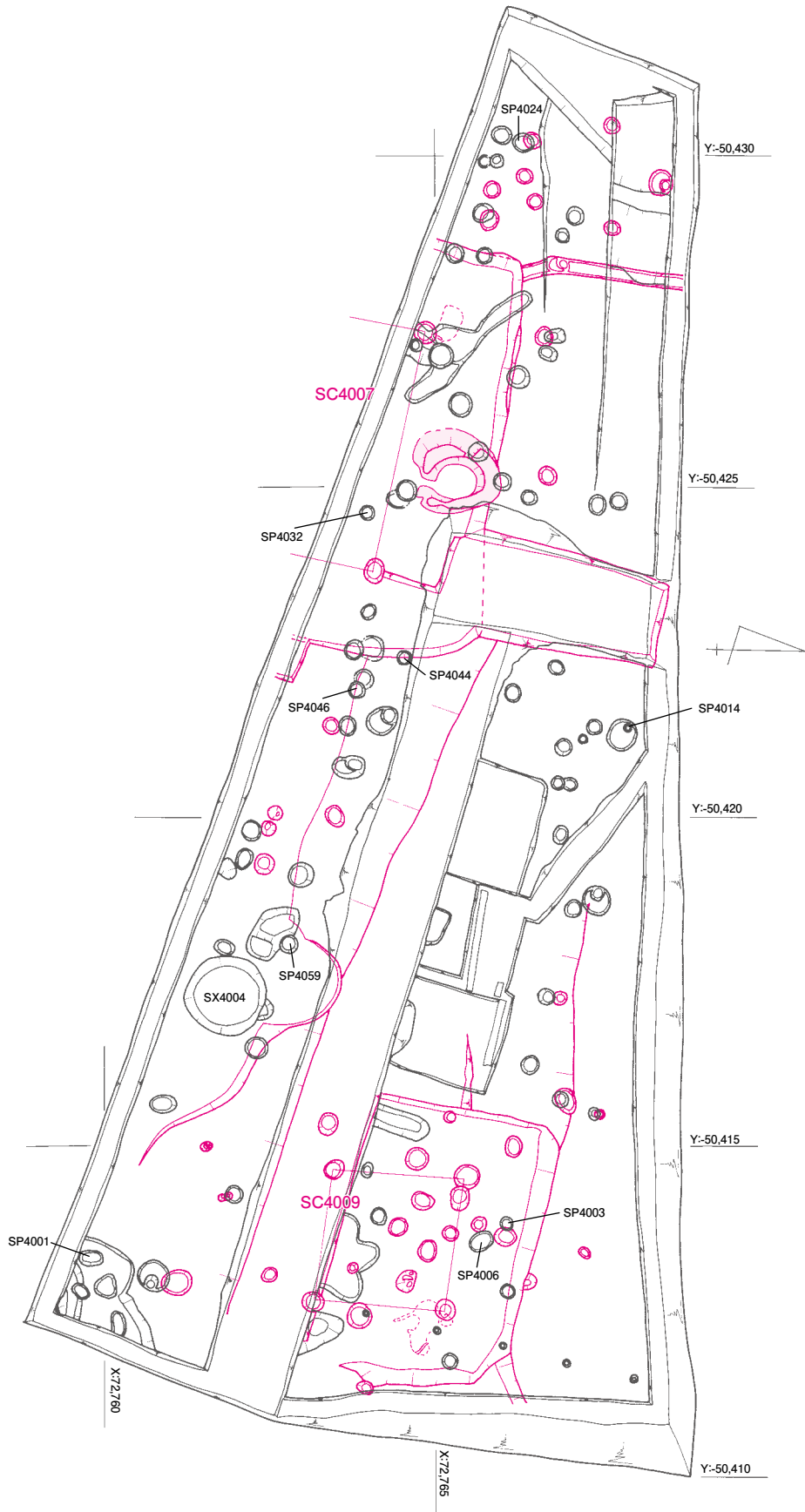


Fig.39 4区遺構実測図(1/100)

※第1面:黒色、第2面:朱色

カマド部は粘土で構築され、カマド本体の上に土器が置かれた状態で検出された。

カマドは西側袖部分が一部失われていたが比較的良好に遺存している。両側の袖部は幅25～30cm、高さ15cm程度の帯状に遺存している。奥壁部分は壁面上端まで遺存しており、遺存する粘土の内部に焼土面が遺存していることから煙道が備えられていた可能性が高い。カマド本体は地山土に近似した明黄色～明褐色粘土を使用して築かれており、粘土内に炭化物や焼土が多量に混在しており、特に焚口部分付近の粘土には赤色焼土が多量に混在していることから、この部分が強い被熱を受けたことが推測できる。カマドの上面には複数個体の甕の破片が散布しており、甕上部に破片が貼り付けられていたことが窺える。これはカマド上面の保護・養生の目的があったものと考えられる。

内面カマド内部の下部には灰黒色土が堆積し、西側袖部の内側表面は焼土面が本来の形状のまま遺存している。東側袖部は焼土面は遺存しておらず、粘土内に焼土が混在していることから、カマド壁体が崩れて原形をとどめていないものと推定でき、断面形状でもカマド本体上部が失われていることが確認できる。

カマド上部には土師器の甕と甑が口縁を合わせた状態で横置される。本来は倒置された甑が直立した甕の上に設置されたものと考えられ、カマドの崩落とともに甕・甑ともにカマド内部に落下したと推定される。検出時点では甑は完全に倒置し、口縁部が下向きになる。甕は横倒しになり、やや上向きの傾斜がつく。甕の内部には鉢と小型壺が横倒しの状態で検出されたが、これも本来は正置された坏の上に壺が置かれていたものと推定され、甕全体が横倒しになった際に転倒したものと考えられる。これらの土器はカマド廃棄の際の祭祀に伴い設置されたものと推定できる。

カマド壁体を除去し、カマド下部を精査したところ、カマド下部に方形の掘り込みを確認し、その周囲にピットと倒置された高坏を検出した。カマド下部の掘り込みは平面形が隅丸長方形で、カマド

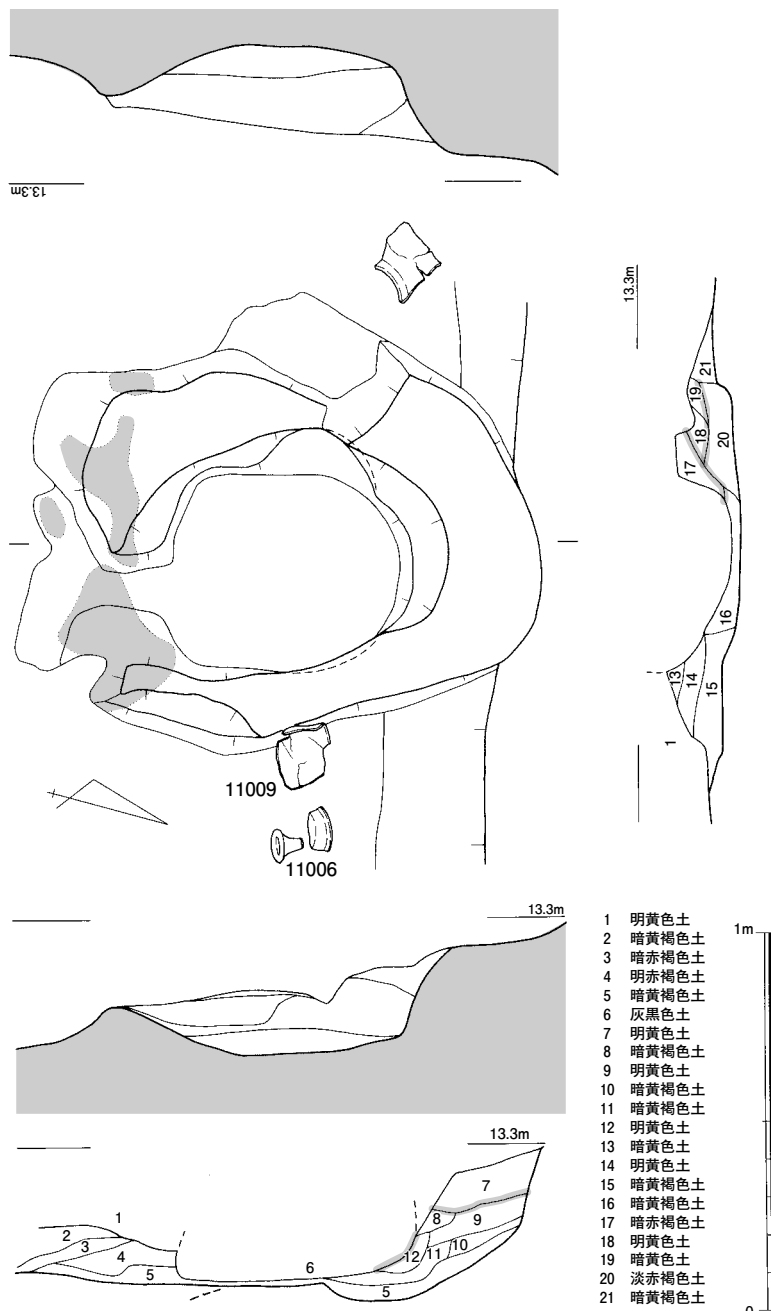


Fig.40 SC4007カマド全体図(1/20)

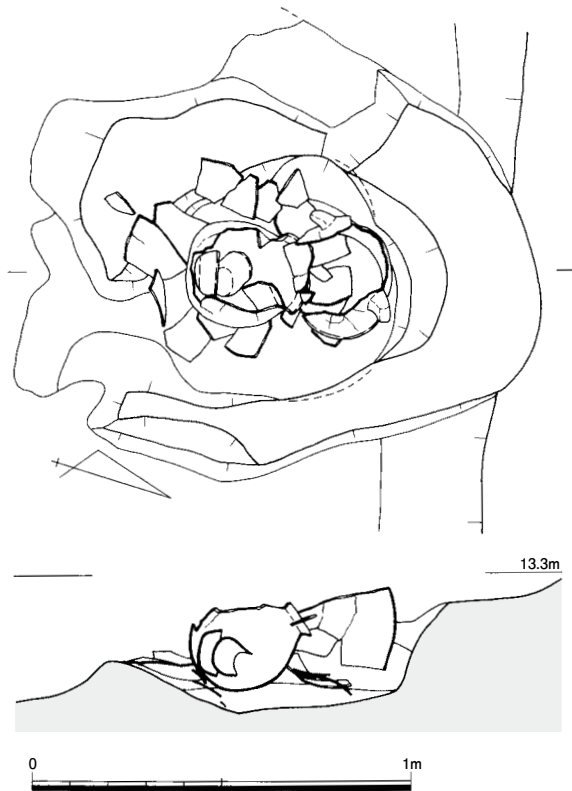


Fig.41 SC4007カマド上部 土器出土状況 (1/20)

内部の奥側に掘られ、カマド壁体の奥壁部分はこの掘り込みの上に重複するように構築されている。当初の構築計画よりもカマド壁体が大きく作られたことが想定できよう。この隅丸長方形の掘り方の前面主軸上にピットが1基あるが、このピットはカマド中心に近い位置にあり、カマド機能に直接関連するものと考えられる。このピットの横に倒置で置かれている高坏は支脚の用途を持っていたとも考えられるが、表面に被熱した痕跡が無いことから、カマド上部に置かれていた甗・甕と同様に、カマド廃棄の際の祭祀の中でここに据え置かれたものと考えられるべきであろう。

出土遺物 (Fig.43・44) カマド内から出土した甗・甕のほか、壁体付近より土師器が出土している。Fig.43はカマド内及びカマド上から出土した土器である。11002は甗。内外面とも風化が著しい。上部が大きく開き下部が窄まる筒状の形状で、両側に把手がつく。外面はハケ、内面はケズリ。11003は甗で、胴部は球形で下膨れ気味、若干歪む。頸部は緩く締め、口縁部は短く外反する。外面は縦方向ハケ、内面はケズリ。11004は甗内部で検出された小型壺。手捏ねで成形され、外面に指圧痕、内面に縦方向の強いナデがみられる。胎土は暗褐色を呈し、軟質で脆く、底部は丸底で使用に伴う摩耗がみられる。11005は鉢で、11004と同様甗内部で検出されたもの。11005の上に11004が置かれていたと推定される。体部は丸く、口縁部も内湾する。軟質で風化が進み、内外面の調整は明瞭ではないが、外面はナデ及び回転横ナデで調整されたものとみられる。

Fig.44はカマド周辺で出土した土師器。11008はカマド上面に貼り付けられていた甗破片で、体部は球形で、頸部は緩く締め、口縁は外反し細く尖る。外面は縦方向ハケ、内面は横方向のナデで強い指

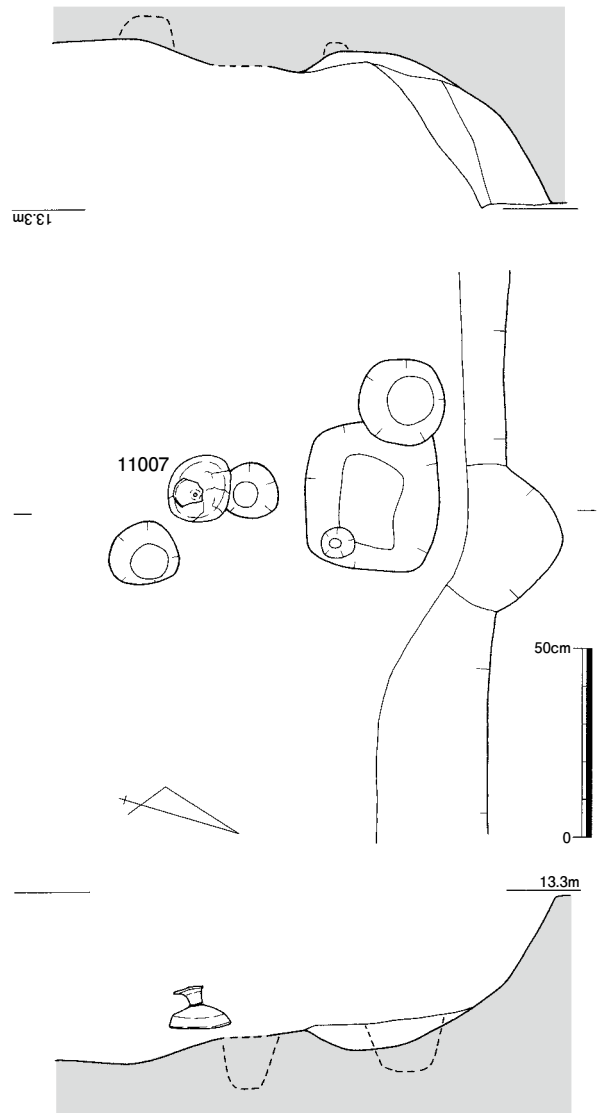


Fig.42 SC4007カマド下部 (1/20)

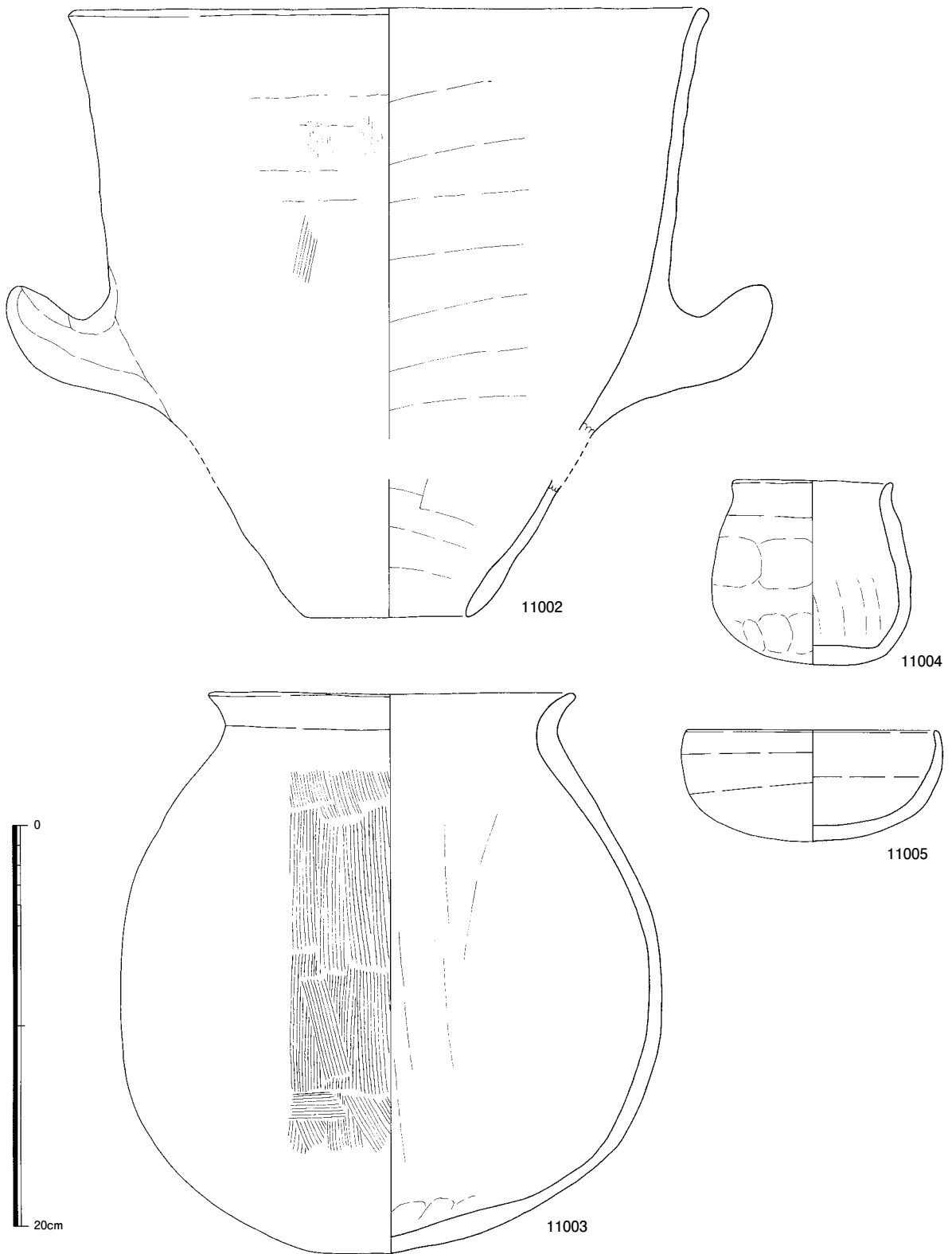


Fig.43 SC4007出土遺物実測図1 (1/3)

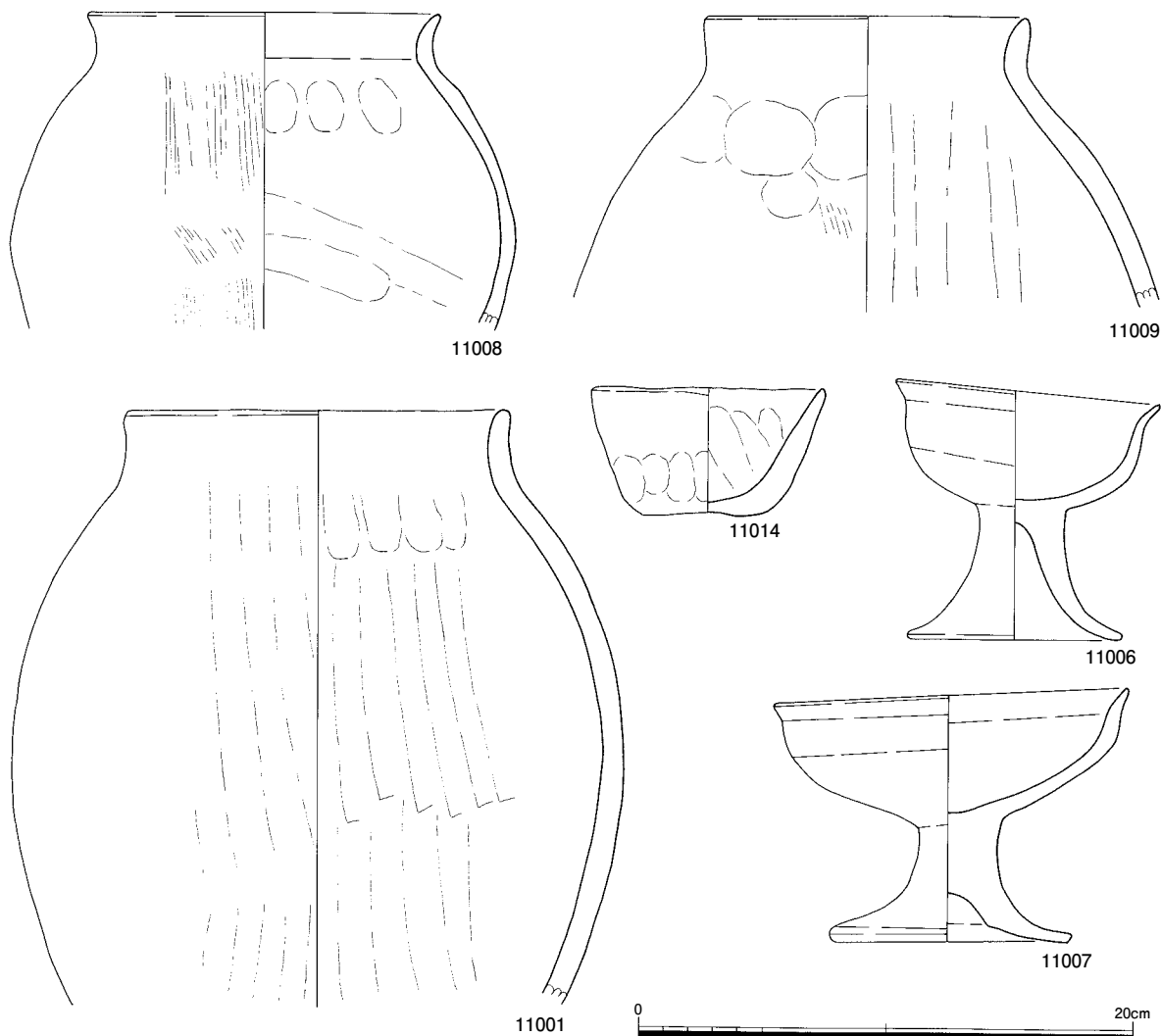


Fig.44 SC4007出土遺物実測図2(1/3)

圧痕が残る。11009もカマド上面に貼り付けられていた甕破片で、頸部が細く締まり、口縁は短く直立する。外面はハケ後ナデ、内面は縦方向のケズリを施す。11001もカマド上面に貼り付けられていた甕破片。長胴で頸部は緩く締まり、口縁は短く直立する。内外面とも縦方向のケズリを施す。11014は坏。手捏ねで成形され、内外面に指圧痕が残る。底部は平底で細かい凹凸が目立ち、体部は直線的に立ち上がる。内面に黒色顔料痕が残る。11006は高坏で、カマド内から出土した。坏部は大きく、口縁部は屈曲して外反する。脚部は下部で大きく開き、端部は横ナデで面をつくる。支脚として使用されていたと考えられる。

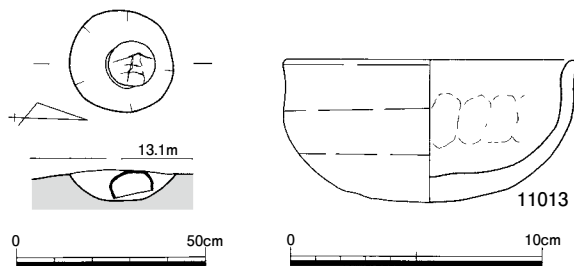


Fig.45 SK4008・4008出土遺物実測図(1/20・1/3)

SK4008 (Fig.45)

カマド東側で検出したピットで、内部で鉢が倒置された状態で検出された。断面形は碗形で、ピット中央に土師器鉢が伏せた状態で置かれていた。遺存する深さが鉢の器高とほぼ同じで、本来この深さで掘られていたものか、あるいはこの上部にさらに構造物が存在したものかは不明である。遺構の性格は不明だが、何らかの祭祀に

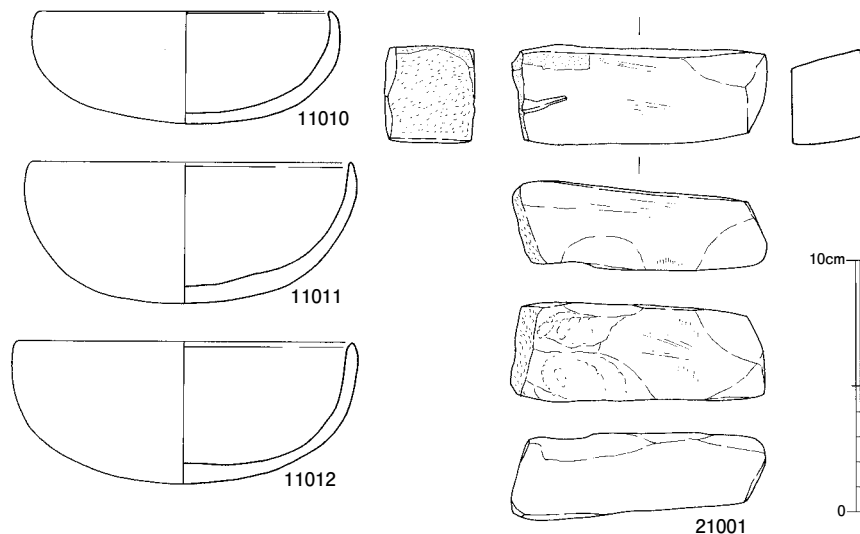


Fig.46 SC4009出土遺物実測図(1/3)

伴う埋納遺構と考えられる。

出土遺物 (Fig.45) 11013は土師器鉢で、外面は風化が著しい。口縁部はわずかに外反し、全体に深めに作られており、底部は丸底である。内面には指圧痕が残り、黒色顔料痕が残る。

SC4009遺物 (Fig.46)

調査区東側に位置する住居址SC4009内から出土した遺物である。11010～11012は土師器鉢で、11010は口縁部がわずかに内湾し、底部は丸底。胎土は精良できめ細かいが、焼成は軟質で表面の風化が著しく、内外面の調整は不明である。11011は口縁部が直立し、体部は半球状に膨らみ、底部は丸底である。胎土は砂粒を多く含み、やや粗めである。内外面とも風化が著しく、調整は不明。11012は口縁が直立し、端部は細く尖る。体部は半球状で底部は丸みを帯びる。胎土は砂粒を多く含み、硬質だが内外面の風化・剥落が著しく、表面の調整は不明。

21001は砥石とみられる石製品。材質は頁岩とみられ、表面は平滑できめ細かい。研磨面は側面の4面全てで確認できる。小口部分の片方には叩打痕があり、叩石としても使用されたとみられる。もう一方の小口面は自然面を残している。側面に叩打痕による2つの凹みがある。

その他の遺物 (Fig.47)

11033は土師器壺または鉢の底部で、SP4001出土。高台は高く立ち上がり、径が広く、太めである。胎土は明褐色で軟質。外面は横ナデ、内面はナデ。11016は須恵器坏で、SP4003出土。口縁はごくわずかに外反し、体部は外側に開いて立ち上がる。内外面とも回転横ナデ調整。11032は白磁碗で、SX4004出土。口縁は短く外反し、口縁上面は平坦である。体部は直線的に開く。釉は灰白色で厚く施される。内面に削り出しによる沈線が施文される。11031は土師器坏または壺の口縁部で、SX4004出土。口縁はごくわずかに外反し、端部は丸める。器壁はやや厚めである。外面は回転横ナデ、内面は横ナデ。胎土は明褐色を呈し、軟質で風化が進む。11019は土師器坏蓋で、SP4006出土。器形は須恵器坏蓋を模倣し、胎土は明褐色を呈し、軟質で風化が進む。摘みは円形のボタン形で、天井部は回転ヘラケズリで平坦面を作り、以下回転横ナデで整形する。蓋受けは突帯状で、回転横ナデで低く作られる。内面は回転横ナデ調整。11020は須恵器坏でSP4006出土。口縁は緩く外反し、端部は細く尖る。胎土は薄灰色を呈し、軟質で表面の風化・剥落が著しい。11021は須恵器の口縁部で、坏・瓶などの器形に該当するとみられるが、特定できない。口縁端部は丸く仕上げられ、内外面とも回転横ナデ整形。内面に非常に強

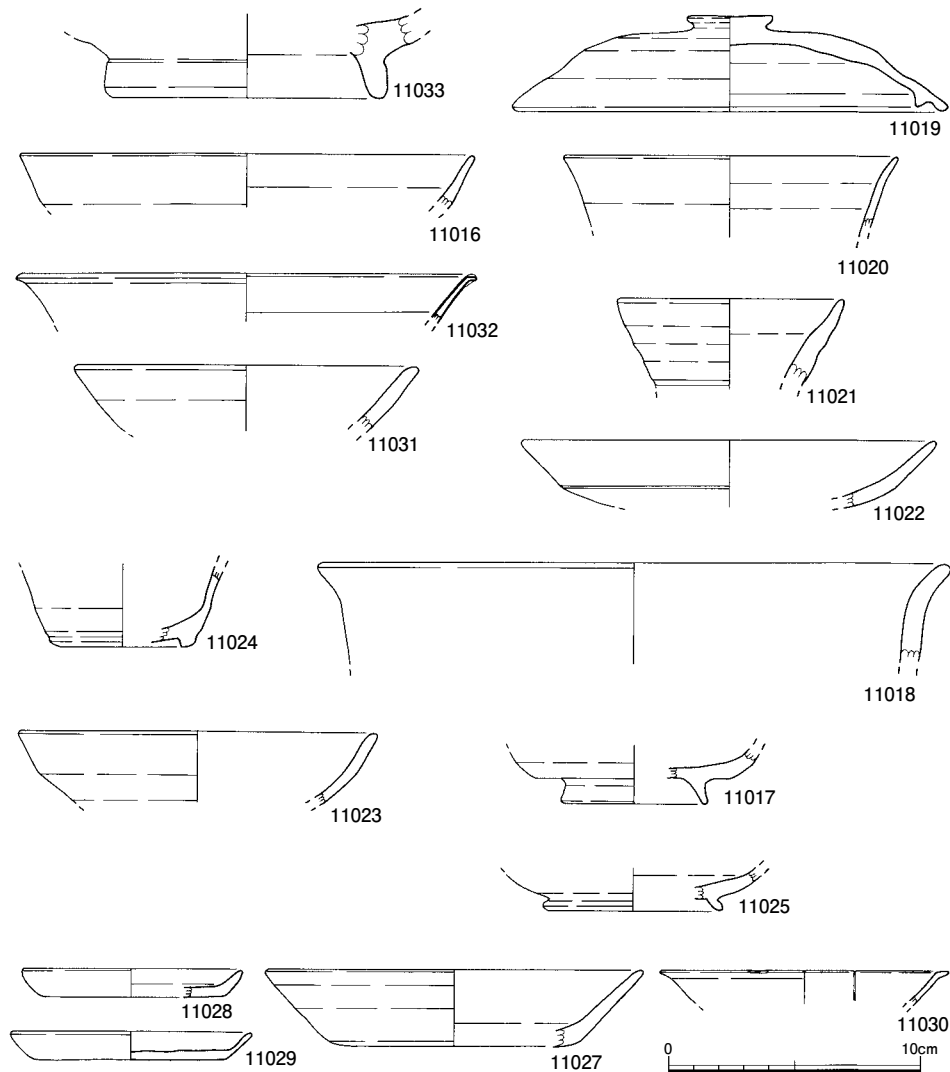


Fig.47 4区出土遺物実測図(1/3)

い熱を受けた痕跡があり、表面が溶解する。埴塼として使用された可能性も想定される。11022は土師器坏または高坏坏部で、SP4014出土。体部は浅く、屈曲部外面に沈線が1条施文される。胎土は灰白褐色で、きめ細かい。11024は須恵器坏の底部で、SP4024出土。小型で、高台は低く、体部は開き気味に立ち上がる。内外面とも回転横ナデ調整で、高台内側は横ナデ。11023は土師器坏で、SP4032出土。体部は屈曲して立ち上がり、口縁部端部は丸める。表面の風化が進み、内外面の調整は明瞭ではない。11018は土師器甕で、SP4044出土。口縁端部は外反し、短く延びる。表面は風化して剥落し、調整不明。11017は土師器埴で、内面が黒変する。SP4045出土。高台が比較的高く立ち上がる。11025は土師器埴で、内外面とも黒色。SP4046出土。高台は低く、外側に開く。胎土は軟質で、内外面とも回転横ナデ調整。11028・11029は土師器皿でSP4059出土。11028は内外面とも風化著しく、調整は不明瞭だが、底部に回転糸切りの痕跡が残る。11029は底部・体部ともに薄く作られる。胎土が軟質で風化が進み、内外面の調整は不明瞭だが、底部は回転糸切りとみられる。11027は土師器坏でSP4059出土。体部は直線的に開く。底部調整は不明。11030は白磁皿でSP4059出土。口縁部は輪花につくり、縦方向の線が入る。釉は灰白色を呈する。

(5) 5区の調査

1) 概要

5区は、2区の北側に位置する丘陵裾部の小さな谷地形を平坦に開削・造成した畑地で、谷部の水田より一段高く立地する。遺構面は、全体的にやや南側に傾斜を呈するものの調査区北辺際まで平坦で、以北は旧丘陵地形を残して急峻となる。2面が所在する遺構面は、上層面は下層の平坦面を僅かに整地した後に形成しているが、検出面による標高に大きな差異はない。南辺部で14.7 m、中央部で14.8 m、斜面の一部となる北辺で15.3 mを測る。溝・土坑・柱穴を検出した。調査面積は109.1㎡である。

2) 遺構

SD5002 (Fig.48 PL.24)

調査区西部に位置する平面形がL字状の溝で、西辺部で南に折れ曲がる。南側は調査区の外につづく。幅0.6～0.7 m、深さ0.1～0.2 m、検出長は4.8 mを測る。土師器杯・椀、丸瓦が出土。

SD5003 (Fig.48 PL.24)

SD5002の南に位置する平面形がL字状の溝で、中央部で南に折れ曲がり調査区の外につづく。SD5004より先行する。幅1.2～1.5 m、深さ0.2～0.4 m。検出した長さは5.8 mを測る。土師器小皿(糸切り)・杯(ヘラ切り・糸切り)・椀、瓦器椀、白磁碗(IV-2)・皿、滑石製石鍋、平瓦が出土。平瓦(50048)は鴻臚館跡出土平瓦^(註1)と同じ叩き目である。

SD5004 (Fig.48 PL.24)

調査区南部に位置する平面形がL字状の溝で、中央部で南に折れ曲がり調査区の外につづく。SD5003より後出する。幅0.8～1.0 m、深さ0.1～0.2 mを測り、検出長は6.3 m。土師器小皿・杯(糸切り)、瓦器椀、陶器壺・鉢、白磁碗・蓋、青磁碗、滑石製石鍋・石鍋転用品、丸瓦・平瓦、が出土。

SD5009 (Fig.48 PL.24)

調査区中央部に位置する平面形がL字状の溝で、中央部で南に折れ曲がり調査区の外につづく。SD5003より先行する。幅0.4～0.5 m、深さ0.1～0.2 mを測り、検出長は4.0 m。土師器小皿・杯、瓦器椀が出土。

SK5001 (Fig.48 PL.24)

平面形が円形を呈する土坑で、調査区南西部に位置し、調査区外へ広がる。壁面は直線的に内傾して平坦な底面に至る。土師器小皿・杯(糸切り)、白磁碗(IV-1・2)が出土。

SK5007 (Fig.48 PL.24)

北辺部に位置する土坑で、円形の平面形を呈する。壁面は直線的に内傾して平坦な底面に至る。土師器杯、黒曜石製の打製石鏃が出土。

SK5010 (Fig.48 PL.24)

下層遺構面で検出した。調査区北部に位置する土坑で、不整形な円形を呈する。土師器小皿・杯・椀・鍋が出土。

註1 福岡市教育委員会 図12-101「元岡・桑原遺跡群17」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集 2010年

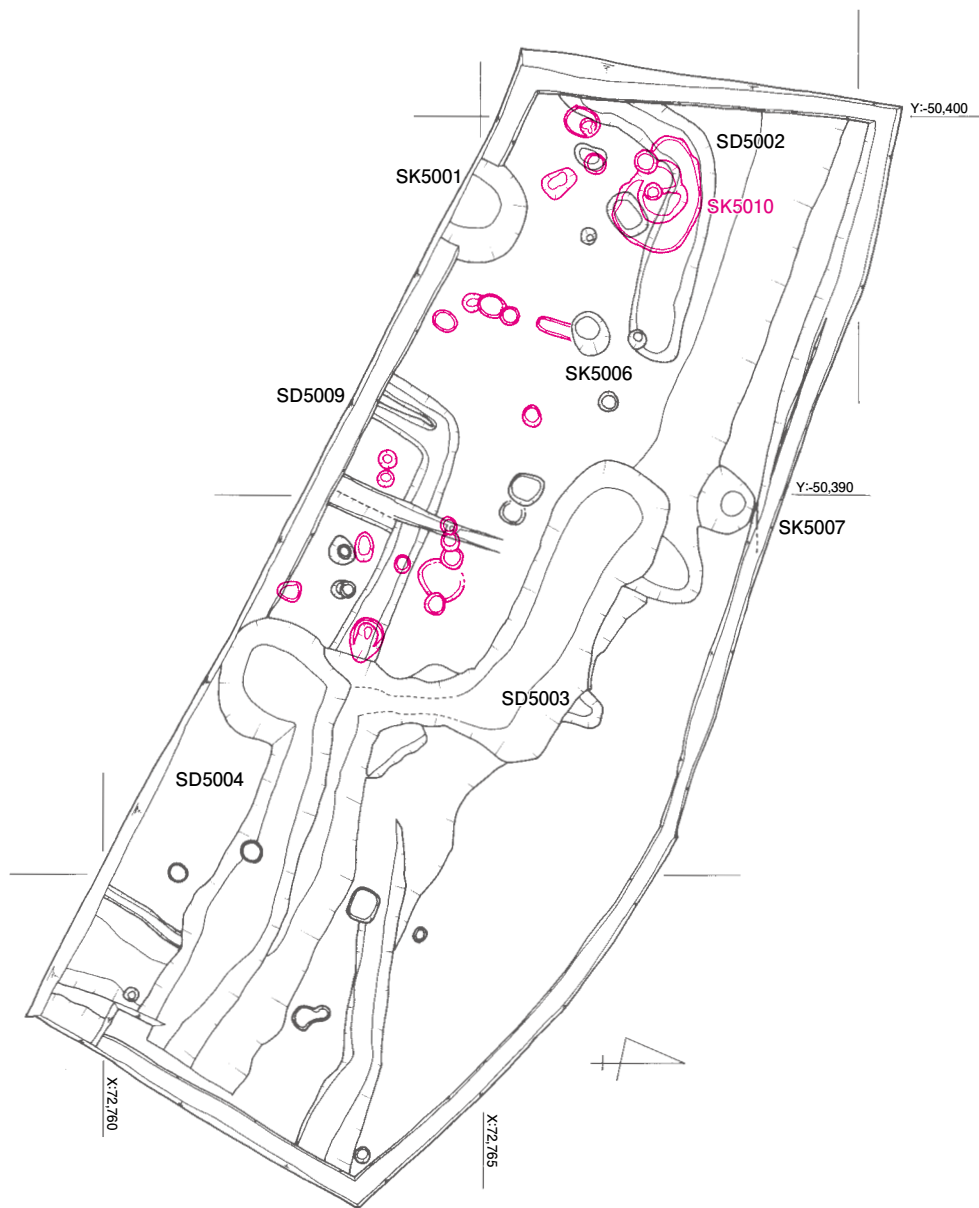


Fig.48 5区遺構実測図(1/100) ※第1面:黒色、第2面:朱色

2) 遺物

SD5003 (Fig.49)

10337・10336・10335は土師器皿。底部は糸切りで板状圧痕が残る。体部は大きく開き、浅く作られる。10339・10340は土師器坏。10339は底部がヘラ切りで板状圧痕が残る。体部は外側に直線的に大きく開き、器面は横ナデで調整する。10340は底部糸切りで板状圧痕が残る。体部は外側に直線的に開く。

10341は土師器台付坏。高台は貼り付けで、坏部は底部が平坦面を呈し、体部は直線的に開く。

10345以下は土師器碗。10345は胎土が浅黄～灰色を呈し、軟質。口縁は低く貼り付ける。体部内外面は横ナデ、見込みはナデ。10343は胎土が灰～浅黄色を呈し、軟質。高台は低く貼り付けられる。体部内外面は横ナデ、見込みはナデ。10338は高台以下が剥離する。胎土は浅黄～褐灰色を呈し、軟質。体部内外面は横ナデで、内面見込みはナデ。

10342・10344は瓦器碗。10342は体部内外面にミガキ痕が残る。胎土は灰白～灰色で軟質。高台は低く貼り付けられる。体部は丸みを帯び、体部内外面は横ナデ。高台は貼り付けで外側に低く開く。胎土は灰白～灰色で、軟質。

10347は白磁碗。口縁部に玉縁を作り、体部は直線的に開く。釉は灰白色で破片下部まで施釉される。見込みに圈線を廻らせる。

10346は白磁皿。底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。釉は浅黄色で、外面は体部下位まで施釉され、底部付近は露胎。内面に1条の圈線を廻らせる。

SD5004 (Fig.49 PL.42)

10348～10350は土師器皿。10348・10349は体部が直立に近く、全体にやや深め。底部は糸切りで、10349は板状圧痕が付く。10350は底部が丸みをもち、板状圧痕が付く。

10352は土師器碗。高台は貼り付けで低く開く。体部は丸みをもち、体部内外面は横ナデ、見込みはナデ。外面下部に指圧痕が残る。胎土色調は灰白色～灰黄色で焼成不良。10351は土師器碗底部で、高台は貼り付けで低く作られる。高台内側には糸切り痕が残る。

10364は青白磁小壺の蓋。釉は灰白色～鈍い黄橙色を呈する。頂部は凹み、身受部内側は中実で底面はわずかに凹面を呈する。

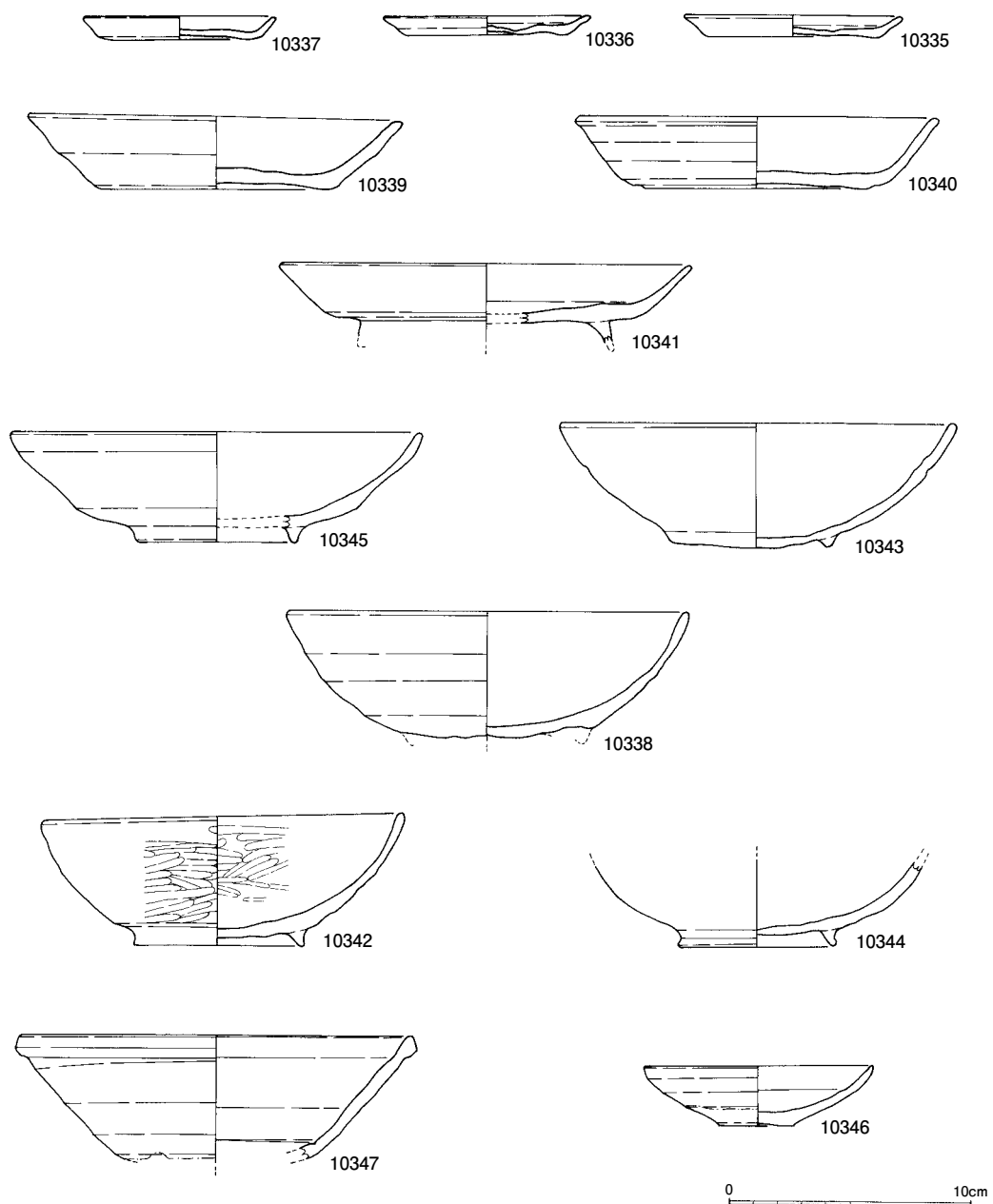
その他の出土遺物 (Fig.50 PL.42)

20009は打製石鏃。有脚鏃で、先端部と脚の一部を欠く。平面形は二等辺三角形で基部が深く抉られ、脚端部は尖ると見られる。黒曜石製で、重量は0.25gである。

20008は砥石。形状は細長い棒状を呈し、1面の使用面が確認できる。使用面は凹面状を呈する。

20003は滑石製品。本来は連結した小壺形とみられる。20012は滑石製品で円形の凹みを持つ。周囲や背面は四角形に整形される。

SD5003



SD5004

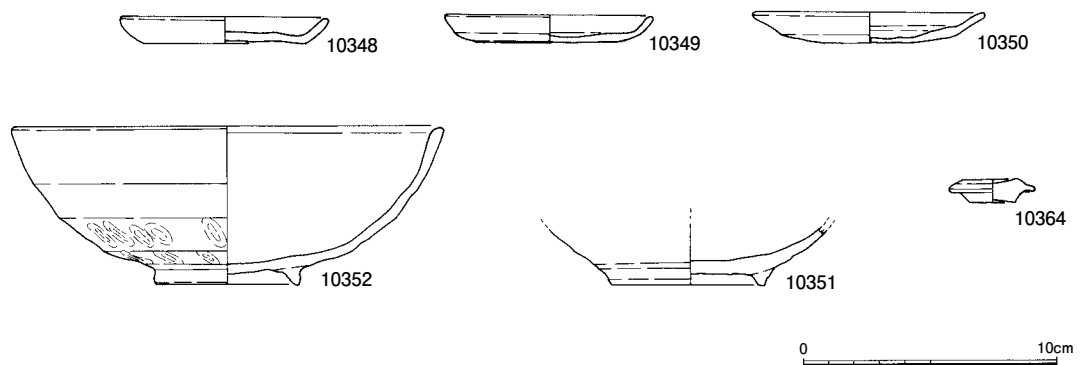
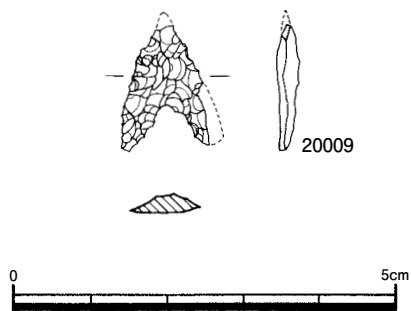
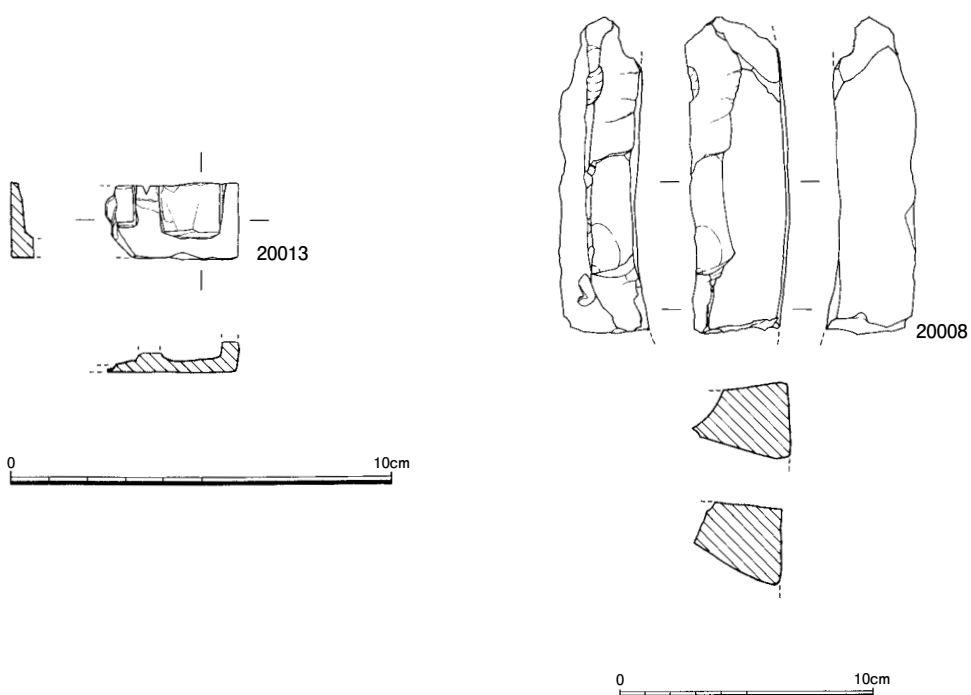


Fig.49 5区出土遺物実測図1 (1/3)

SK5007



SD5004



SD5003

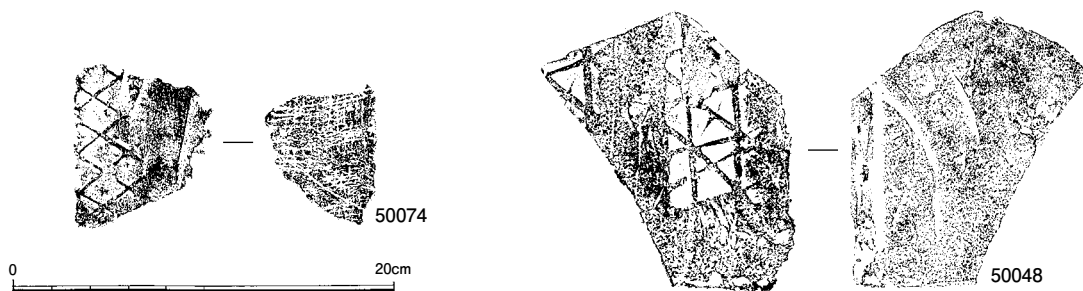


Fig.50 5区出土遺物実測図2・拓影(1/1・1/2・1/3・1/4)

(6) 6区の調査

1) 概要

6区は西に延びる丘陵の南側斜面にあたり、斜面を段造成した部分に位置する。調査区の標高は25mである。丘陵全体が農地として造成されており、6区が位置する区画もその一部として段造成され、本来の斜面は遺存せず、全体がひな壇状を呈している。

調査前の試掘で、この斜面に遺物が遺存しているとの結果を受けて調査区を設定し、遺構・遺物の確認を実施した。その結果、地山面まで掘り下げたが調査区内では遺構は確認できなかった。

2) 遺構・遺物

調査区は斜面のうち造成によって削平を受けるとされた緩い谷状の窪地の内側、西側斜面部分に設定した。東側斜面にもほぼ同様の標高の地点が造成により削平を受ける計画だったが、この部分については平坦面がなく、範囲も狭小で、調査開始後に再試掘を行ったが遺構、遺物は確認できなかったことから調査区は設定していない。

6区の調査範囲は、段造成によって平場となっていた部分に設定された。周囲への土砂崩落と濁水流出を避けるため、斜面部分には調査区を拡大できず、結果的に調査面積は19㎡にとどまる。表土・包含層を掘り下げたところ、調査区北側と西側の部分では地表面から30cmの深さで地山の花崗岩風化土層に達した。この層は東側で急激に落ち込み、調査区東側では現地表面から1m以上の深さがあると推定できる。この地山面が本来の傾斜面を呈していると考えられる。

斜面に堆積している包含層は暗褐色土と下部の暗灰褐色土で、いずれも段造成の際に埋められた整地層と考えられる。

表土と包含層から土師器破片が出土したが、小片で図示できず、時期も特定できない。

3) 小結

斜面部分については、その傾斜が急であることから大規模な遺構の展開は考えにくい。7～9区のような山上に展開する遺構群に通じる通路があった可能性もあり、遺物の流入・散布がみられる。谷裾部には4・5区のような集落が立地しているが、その範囲は斜面までは及んでいなかったものと考えられる。

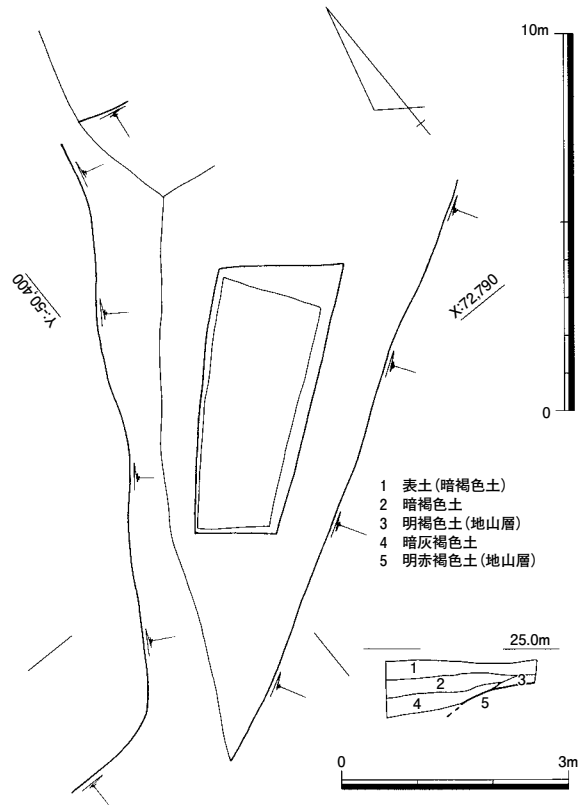


Fig.51 6区全体図・6区南壁土層図(1/200・1/100)

(7) 7区の調査概要

1) 概要

7区調査区は丘陵尾根にはさまれた窪地状の部分にあたり、6区が位置する谷地形の谷頭部分ととらえられる。調査面積は719.9㎡である。標高は27～29mで、南側谷部分とは15m以上の比高差がある。調査以前は畑地で、調査区部分は完全に平坦な面に造成されていた。

調査区は北側が高く、南側に緩く傾斜する。調査区南端部は谷部に向かって急傾斜で落ち込む。調査区の東側、北側は隣接地と段差がついており、東側で2m以上、北側で1～2m調査区が低くなっている。調査区内の傾斜と隣接地との段差から、7区全体が、造成によって人為的に作られた平坦面であることが推測できる。

調査区北側の平坦面は地山直上で検出され、遺構面は1面である。調査区南側では地山面上層に堆積した包含層上面の第1面と遺構面の第2面で遺構を検出した。第2面の傾斜は急で、本来の谷部の傾斜を呈しており、第1面の遺構面は造成によって作られた面と推定される。地山面調査区内で検出された遺構は、大型の柱穴24基によって構成された柱穴群、溝状遺構2基を初め、土坑・ピット等である。また調査区内に畑地用の排水用の暗渠が谷部に向けて直線的に掘削されており、溝状の攪乱坑として残されている。第2面からはピットと不整形の土坑を検出したが、性格の分かる遺構はない。

遺物は溝状遺構から多数出土したが、柱穴や包含層からはごく少量しか出土していない。これは今

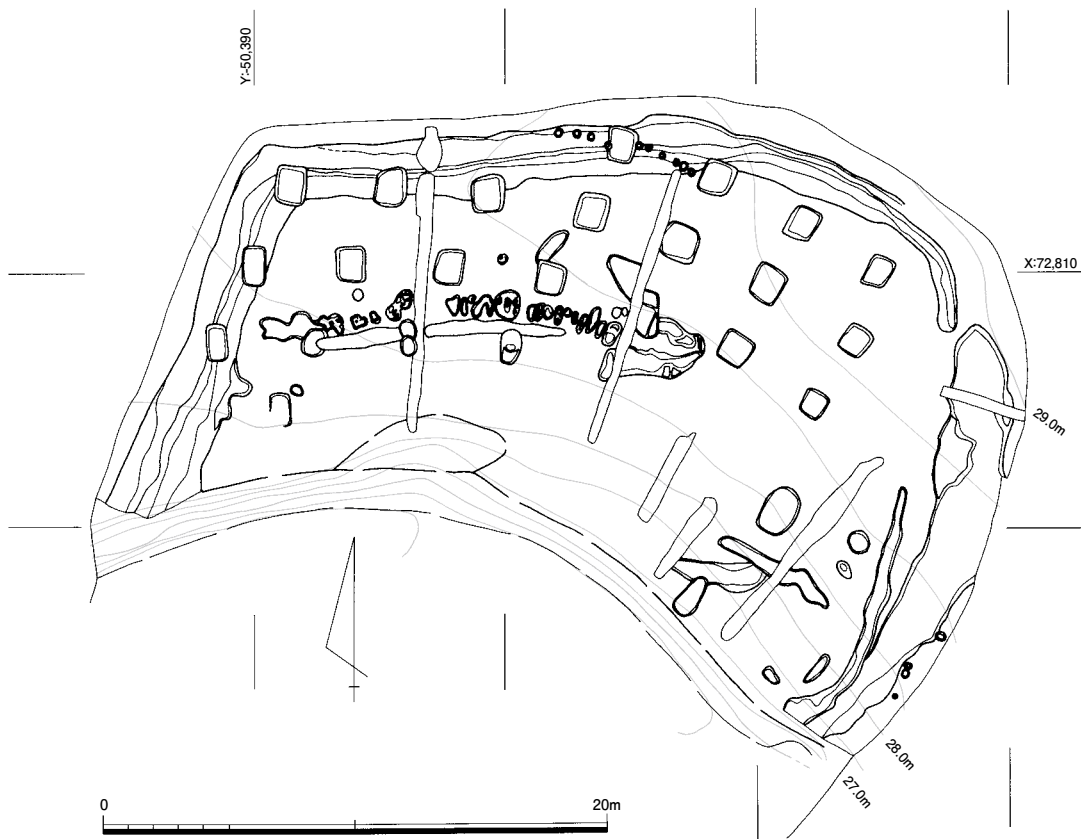


Fig.52 7区第1面全体図(1/300)



Fig.53 7区第2面全体図 (1/300)

回検出された遺構の前後の時期にこの地点に遺構が展開しなかったことを示し、遺構群がごく短期間しか存在しなかったことを物語るものである。

2) 遺構・遺物

SP7001 ~ 7024 (Fig.55)

調査区北側に展開する大型方形柱穴群。検出できたものが24基あるが、南側は本来柱穴があったものが削平されている可能性があり、最も南側に位置するSP7024も半ば削平されている。個々の柱穴の規模はほとんど一致しており、幅1.0~1.2m、長さ1.0~1.4m、深さ20cmの方形の掘り方を持つ。SP7021~7023の3基は平面形が楕円形で、規模も若干小さめである。

柱穴覆土は各柱穴の位置によって異なり、東側の柱穴は覆土が軟弱で水分を多く含むが、これは東側からの湧水が柱穴内に染み出していることによる。西側の柱穴は暗褐色土でやや強く締まる。東側の柱穴には一部柱痕らしき変色部が柱穴内に平面で確認できたが、断面の観察では確実に柱痕と捉えることができず、柱の痕跡を確定されることができなかった。

柱穴の配列は非常に規則的で、東西方向の柱穴中心の間隔は4m、南北方向の間隔は3mで、これは平面形態の異なるSP7021~7023を含む全ての柱穴に当てはまる。柱穴の配列を詳細に見ていくと、最も東側の列が柱穴の掘り方と配列の方向が一致する、最も整った列になっている。この列を基準として西側に一定間隔で

扇形に展開すると、柱穴掘り方と配列の方向が一致しなくなる。しかし、最も西側の列の方向は、調査区西側のライン、すなわち造成

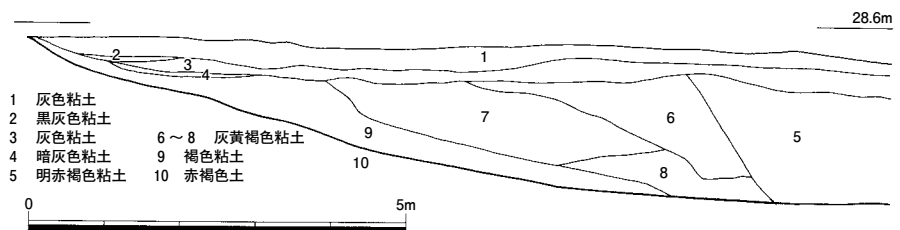


Fig.54 7区東壁土層図 (1/100)

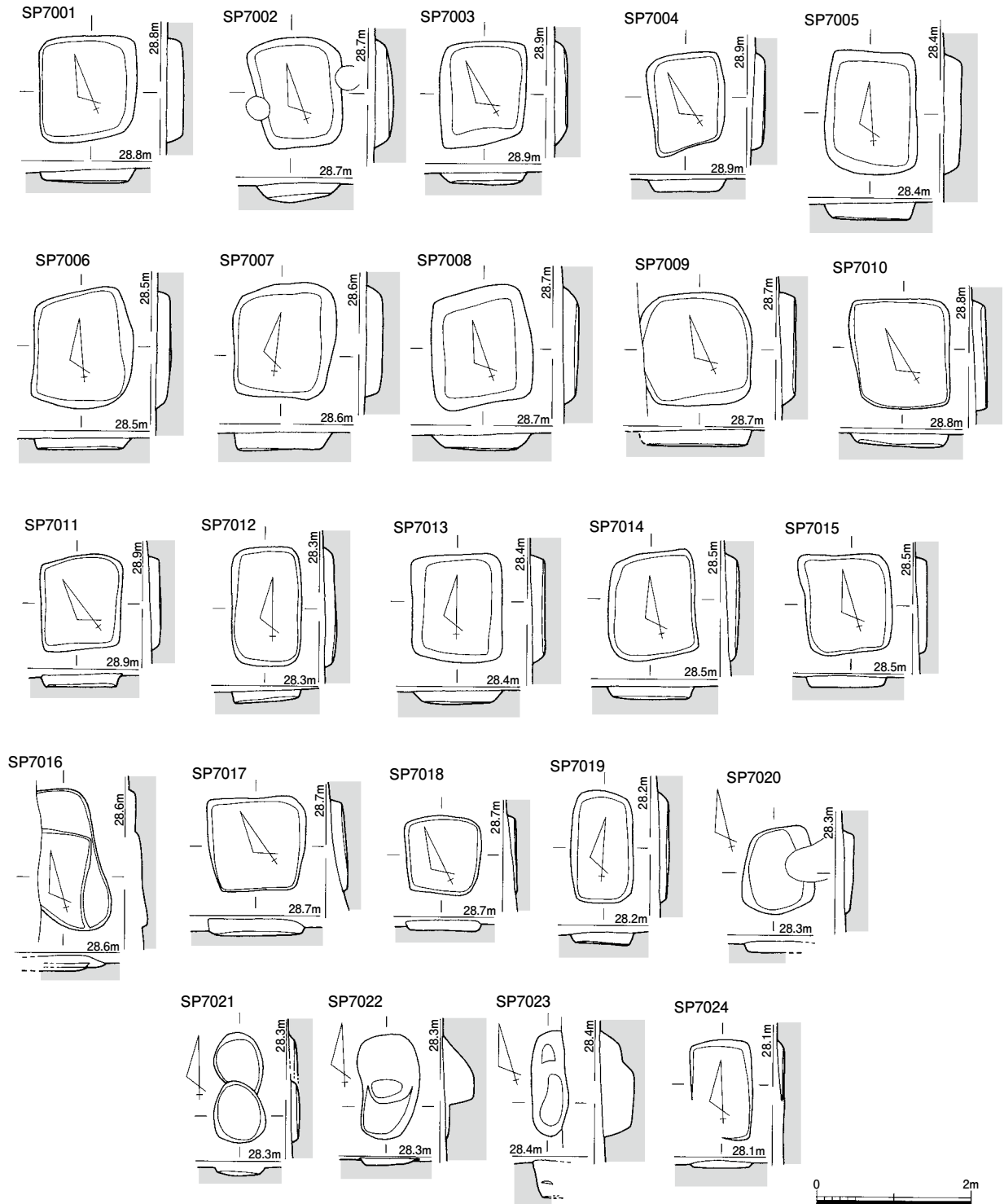


Fig.55 SP7001~7024遺構実測図 (1/80)

範囲のラインと並行するため、この柱穴列の展開はきわめて計画的なものといえる。

しかし、この柱穴群による建築物を推定するのは非常に困難であり、特に西側部分は柱穴の配置から建物を想定した場合、梁と桁が直交しないため通常の建物が配置できない。木柵やその他の施設を想定するのが妥当と考えられるが、具体的な上部構造については不明である。

柱穴内からは遺物がほとんど出土していないため、時期の特定は困難である。ただし他の遺構の切

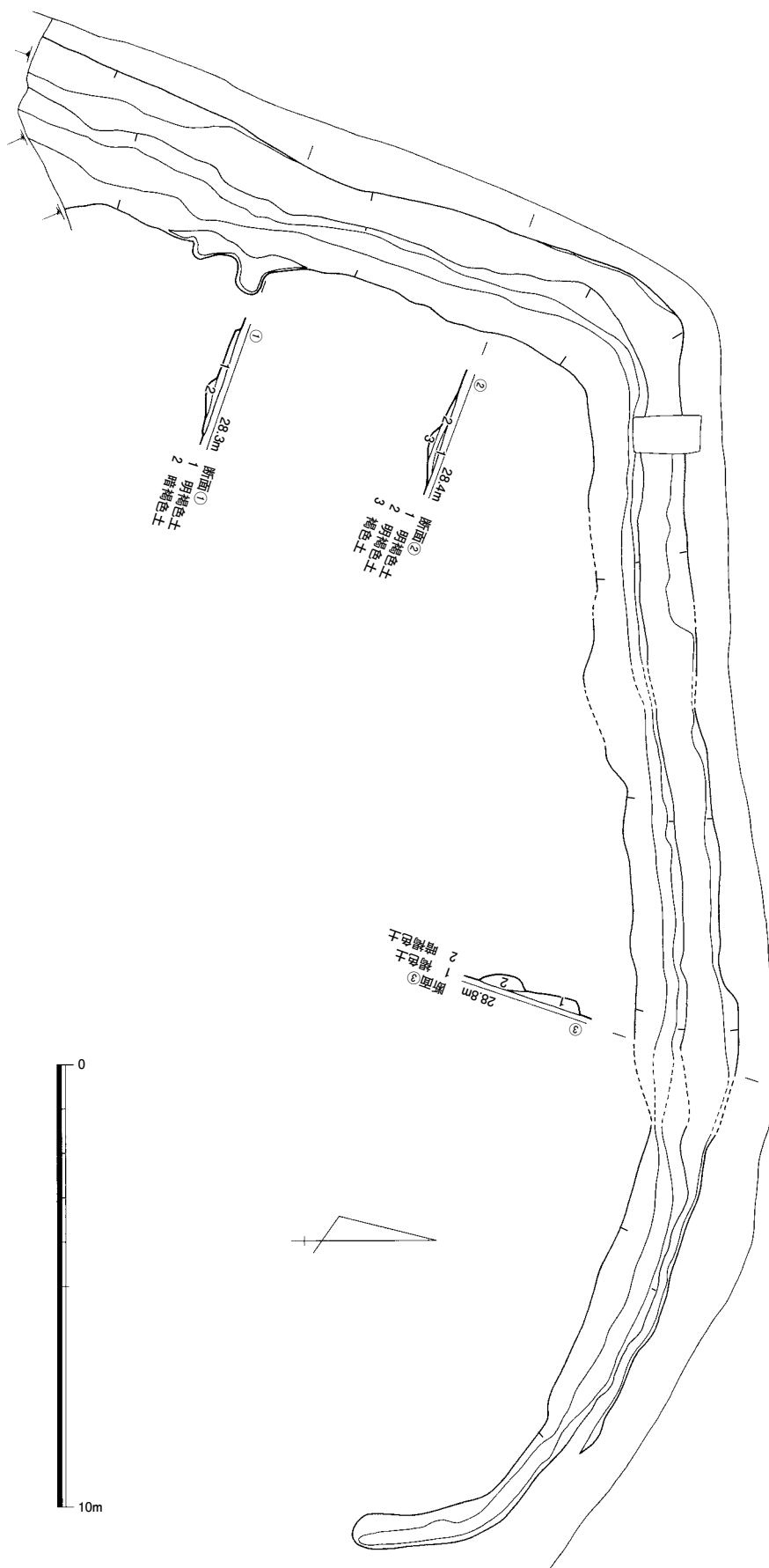


Fig.56 SD7025遺構実測図(1/150)

り合い関係、特にSD7025の埋没後に柱穴が掘削されている点などからみて、平地造成が完了して一定期間が経過した後で構築されたものと考えられ、山城の防衛に関する施設とも推測可能である。

柱穴内から出土した遺物は土師器小片などごく少量で、図示できず、遺構の時期を示す遺物もない。

SD7025 (Fig.56)

調査区北側から西側の縁に沿って掘削された溝状遺構。底面の標高は東端で28.7m、南西端で27.3mで、東から西に緩く傾斜しており、排水の機能も有していたものとみられるが、溝底面の形状や堆積土層から見て流水の痕跡はなく、常に流路になっていたものではないとみられる。

溝の規模は、最も広く深い西側では幅2.0～2.5m、遺構面からの深さ30～45cm、北側部分で幅2.0m、遺構面からの深さ30～40cm。北東側端部で幅60cm、遺構面からの深さ10～15cmである。

断面の形状は、北側部分では2段掘り状になっており、北側に平坦面をもつ。土層断面では一旦埋没した後の掘り直しが看取され、長期にわたって溝が維持管理されていたことを示している。西側部分でも断面形

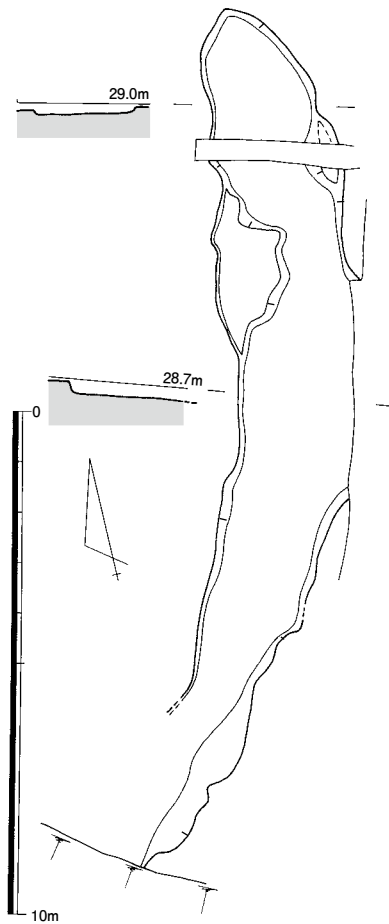


Fig.57 SD7032遺構実測図(1/150)

状は北側部分と同様に西側に平坦面をつくっており、この部分も掘り直したまたは西側への拡張が行われたことを示す。

出土遺物は少なく、土師器・陶磁器破片がみられ、SD-7032の遺物と近い様相を示す。細片が多いため、図示できるものはない。

SD7032 (Fig.57)

調査区東端で検出された溝状遺構で、断面形状は浅い皿状を呈する。遺構面から床面までの深さは遺構北側で10cm、遺構南側で20cm程度であり、床面の比高差は南側が北側より1m程度低い。造成部の端部に掘削されており、造成面の形状に沿って延びることから、SD7025と同様に造成面の排水機能を持つ溝と考えられる。ただし、断面形状が浅く、形状も不整形で幅広であることから、人為的に掘削された遺構ではない可能性もある。

遺構覆土は茶褐色土で、地山風化土に近似する。覆土の状況、床面の形状から、流路としての性格はなかったとみられ、降雨時に東側からの流水を逃がす一時的な排水溝だったと考えられる。

遺構東側の一部は調査区外に及び、造成部分が東側に拡大する可能性もある。

出土遺物 (Fig.58・59) 以下、白磁碗。11043・11042は釉色は灰白色を呈する。11044は口縁端部が短く外反する。釉は厚く、灰白色を呈する。11045～48・11055は玉縁状口縁をもつ。11046

～48は玉縁が小さめで釉が厚くかかる。11055は玉縁が大きく、釉が薄くかかる。11045は玉縁が大きく、釉が厚くかかるもの。11035は底部破片で、体部はやや丸みをもち、高台は厚い。外面底部付近は露胎で内面は全面施釉。11034は体部に丸みをもち、高台は低い。内面見込みに圏線が廻る。外面下部は露胎、内面は全面施釉。11038は高台が低く、内面見込みに圏線が廻る。11037は高台が高く、内側の圏線付近で周囲を打ち欠いて整形している。11041は内面見込みの釉を円形に掻き取る。外面の釉は高台近くまで施される。高台は小さく低い。11040も内面見込みの釉を円形に掻き取り、高台は低く小さい。外面は高台付近まで施釉される。11036は見込みに櫛描文を施す。釉は灰オリーブ色で厚く施され、外面は高台付近まで施釉される。

11056は青磁碗。小片で、内外面に文様は確認できないが、胎土・釉から龍泉窯系青磁とみられる。素口縁で、内外面に厚く施釉する。釉色は灰色がかかる。

11064は黒色土器で、内面のみを燻して黒変させた黒色土器A類にあたる。口縁端部がわずかに膨らみ、体部は屈曲して立ち上がる。胎土はやや軟質で、外面は回転横ナデ、内面はナデ調整。

11057は瓦器碗。体部は丸く、高台は低く小さい。内面は風化による摩耗がすすみ、調整不明。外面は上半部回転横ナデ、下半部は風化により調整不明。

11060・11059は土師器坏。11060は内外面とも風化が著しく、調整は不明だが、底部は糸切りとみられる。体部は直線的に開き、底部は平底。11059は底部糸切りで、体部は内外面回転横ナデで整形し、上部に大きく開く。11054は土師器皿。大型で、底部は丸みを帯び、全体に浅い碗形の形状を呈する。

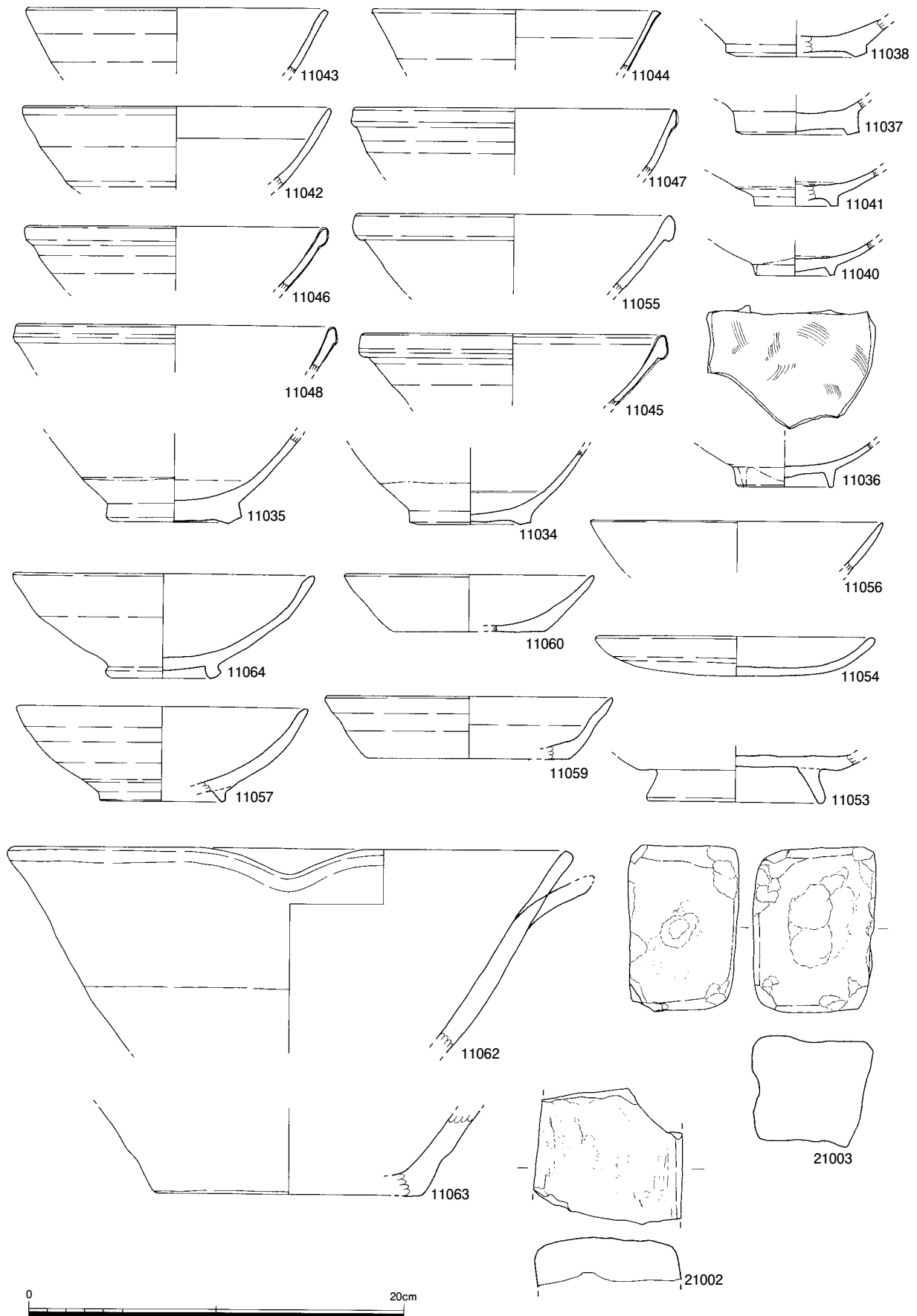


Fig.58 SD7032出土遺物実測図1 (1/3)

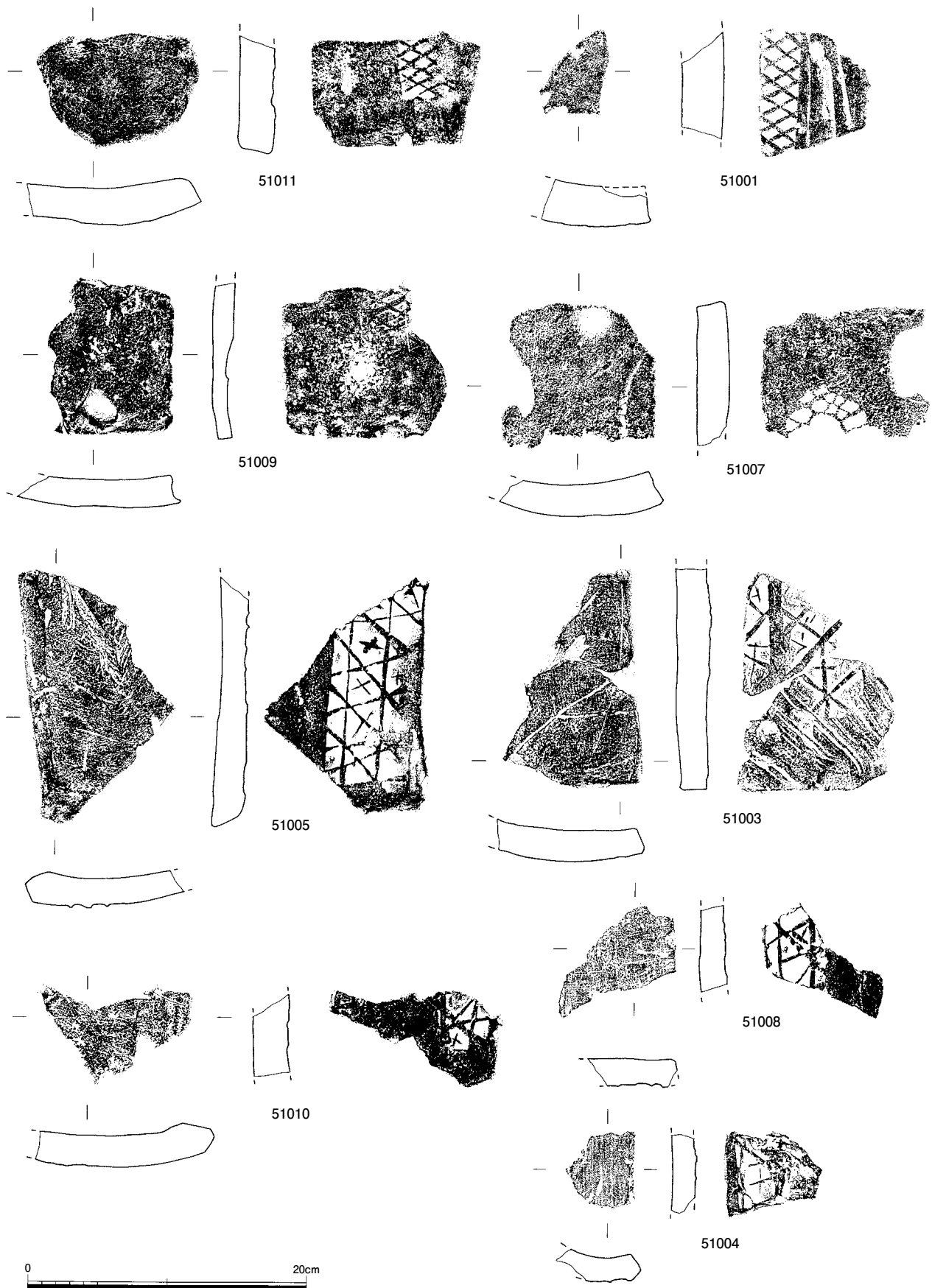


Fig.59 SD7032出土遺物実測図2(1/4)

焼成は軟質で、内外面とも風化による摩耗が著しい。11053は土師器高台付坏で坏部の大半を欠く。高台部分は高く、高台径も大きいことから大型の坏と推定できる。

11062・11063は瓦質土器片口鉢で、各破片は直接接合しないが同一個体の可能性がある。口縁部には注口がつき、内外面とも回転横ナデで調整する。

21003は叩石で、花崗岩製。計3面に叩打痕による凹みが残りに、叩石で使用される以前は砥石として使用されたとみられる。21002は砥石破片とみられ、叩石や磨石として使用された可能性もあり、一部に叩打痕とみられる微細な凹凸が残る。

Fig.59は瓦破片。図示したものはいずれも平瓦で、外面の文様によって整った斜格子文様と、斜格子や平行線文様の中に十字文をもつ文様の2種類に大別できる。

51011は瓦のコーナー部分で、上下ははっきりしない。凸面には叩打痕がつくが、右側では叩打痕が切れている。凹面の布目は確認できない。胎土色調は明褐色で焼成不良。軟質で摩耗が進む。51009もコーナー部分で上下ははっきりしない。凸面には斜格子文が確認でき、凹面にはわずかに布目痕が残る。凸面の中央部には叩打痕があり、葺瓦として使用後、破片を台石代わりに再利用した可能性がある。両面及び側面に成形時の指圧痕が残る。51001は凸面の格子目が端部で切れており、端部にのみ叩き目がつく。凹面に布目痕はない。51007は格子目と考えるが、小片で文様部分も限られているため確実とはいえない。格子目は粗く、途切れている線もみられる。

51005は瓦のコーナー部。側面はいったん切断した後で、再度ヘラ切りによって面取りを施し、整形している。凹面は全面に布目痕が残りに、紐の束の痕跡も転写されている。凸面の格子目は線の太さ、方向が一定でなく、格子目内の十字文も太さ・線の方向が不定である。この瓦の格子叩き目の工具は生水・寺隈地区で出土した平瓦（『香椎B遺跡』PL.194-81030）と同一で、鴻臚館跡出土平瓦（『元岡・桑原遺跡群 17』P.236, 図 170-65）とも同一である。胎土は薄褐色で硬質である。

51003は瓦のコーナー部分で、凸面に粗い板ナデ調整を行った後で格子目叩きを施す。格子目は線の太さや間隔が一定しない。格子目内には十字文を入れる。凹面は全面板ナデ。側面は切断後ナデで整える。この瓦の叩き具も鴻臚館跡出土瓦（『元岡・桑原遺跡群 17』P.236, 図 170-67）と同一とみられる。胎土は明灰白色で、やや軟質。51010は小片だが斜格子文と縦平行線で構成され、格子目内に十字文があることが確認できる。凹面は全面に布目痕が残る。側面端部は切断後ヘラ切りで面取りした後ナデで整える。51008は斜格子と縦平行線の中に不自然な十字文が入る文様をもつ。凹面は布目痕が残りに、側面は切断後ナデで整える。51004は小片で、凸面の格子目文様は瓦端部で切断されている。鴻臚館跡出土平瓦（『元岡・桑原遺跡群 17』P.236, 図 170-65）の格子目文様の一部と共通するよう見えるが、小片のため確証はない。凹面には布目痕が残る。

3) 小 結

SD7001～7024の柱穴群に関しては、柱穴の規則的な形状と配置から何らかの大型の建物を期待する見方もできようが、梁・桁の設定が難しく、一連の恒久的な建物として捉えるのは困難である。仮設小屋のような建物であれば、柱穴の規則性や規模がそぐわない。また各柱穴の深さが非常に浅く、土坑や墓壙と見ることも難しい。以上のことから現時点では遺構の性格は不明と言わざるを得ない。

SD7032から出土した遺物のうち、瓦については11世紀代と考えられ、鴻臚館跡等で類例のあるものと特定できたが、それに対応する建物は調査区内では未検出である。調査区東側の地点は、試掘の結果遺構が確認できなかったが、後世の造成の結果遺構が失われたことも想定でき、「里城」の小字名が残されていたこの地点に何らかの建物が存在した可能性を示すものであろう。

(8) 8区の調査概要

1) 概要

8区は東西に延びる丘陵尾根部の西側端にあたる。南側と西側は急な崖面で区画され、北側は造成によって形成された急斜面を挟んで9区に接する。調査区内の標高は東側で25.0m、西側端部で23.5mを測り、東から西に下りる緩斜面を呈する。8区と9区との境界は明確に定めておらず、8区・9区を合わせた面積は560.1㎡である。

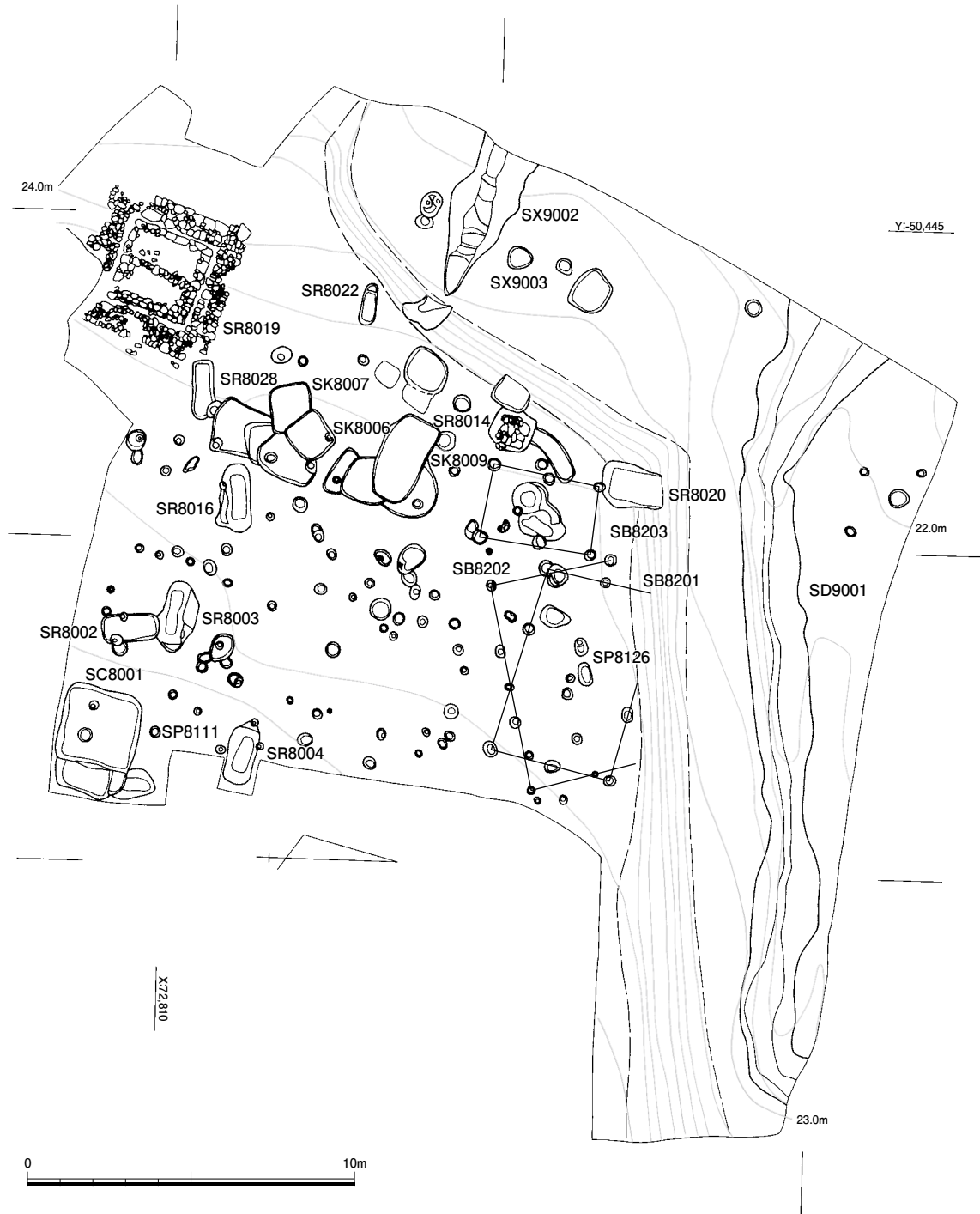


Fig.60 8・9区全体図(1/200)

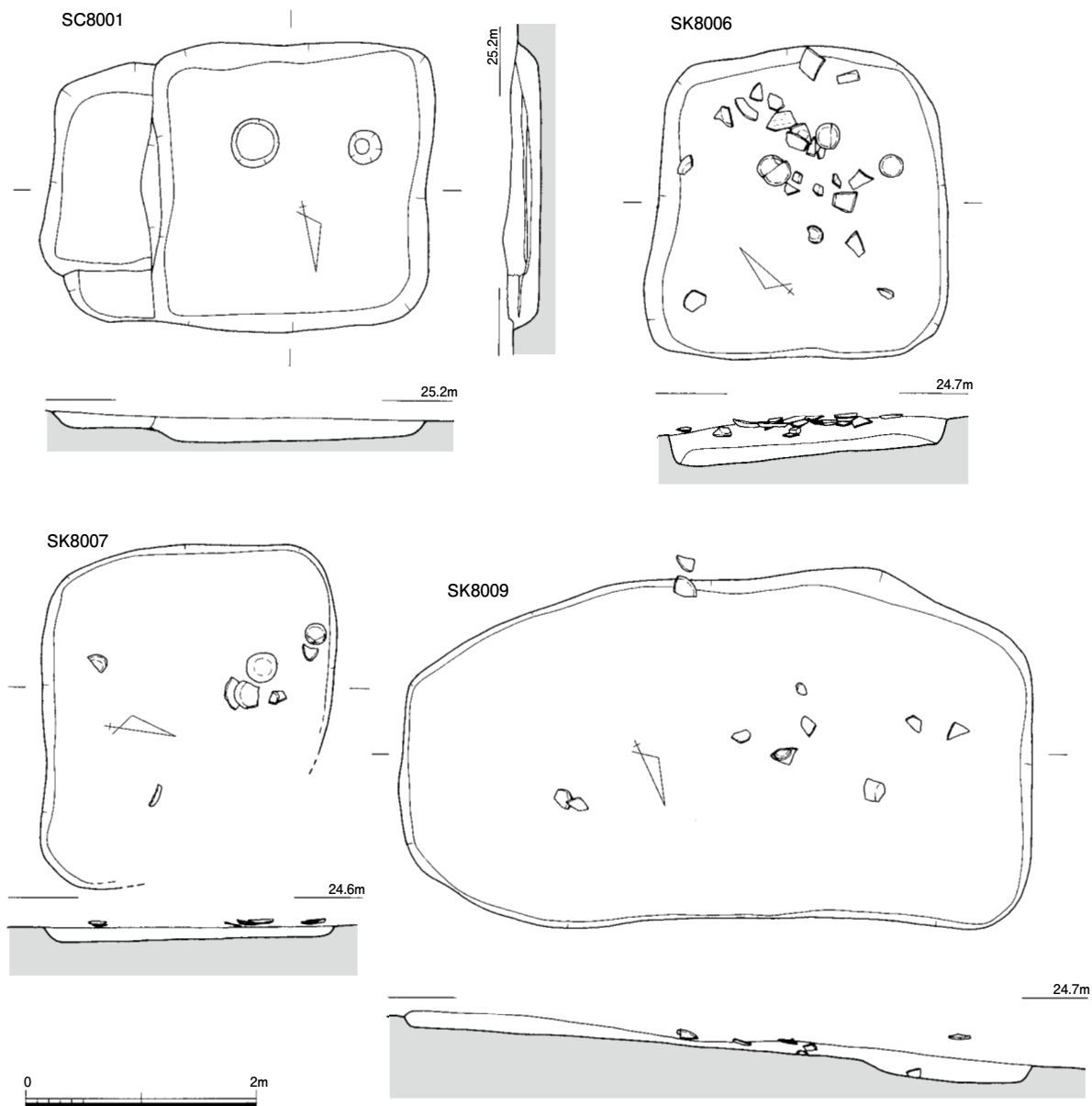


Fig.61 8区竪穴建物・土坑実測図(1/60)

8区北側と西側を区画する造成段は、8区の遺構が形成された中世前半には存在していなかったとみられ、SR8020やSX9002が造成段によって削られていることや、9区の大 half で下層の岩盤が露出していることもこれを裏付けるものである。おそらく中世前半には尾根上の平坦面は現状よりもかなり広がったと考えられ、今回の調査で得られた結果とは若干異なる景観が広がっていた可能性がある。

8区で検出された遺構は大型区画墓1基、土壙墓7基、火葬墓1基、竪穴住居1基、掘立柱建物3棟、ピット、土坑などである。

2) 遺構・遺物

1 竪穴建物

SC8001 (Fig.61)

調査区東端で検出された方形の竪穴建物。東側に張り出し部分があり、覆土に差がなく切り合い関

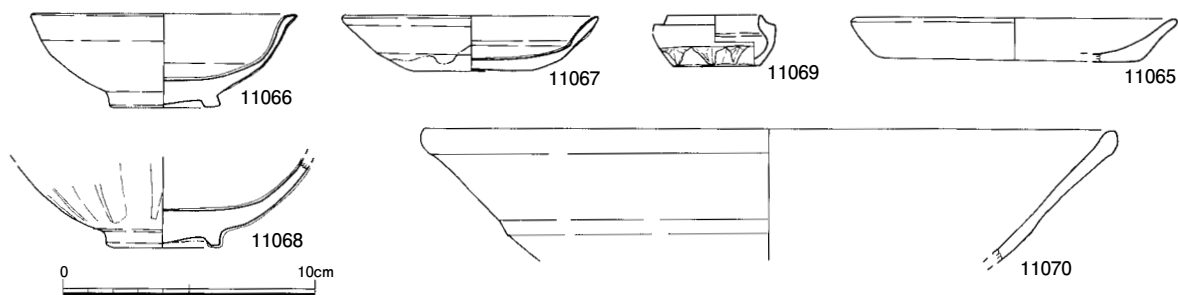


Fig.62 SC8001出土遺物実測図(1/3)

係が認められないことから、同一遺構と判断できる。西側の住居本体は1辺2.4mの正方形で、遺構面からの深さは15cm、床面は1辺2.2mの正方形で平坦である。床面南側には90cm間隔で柱穴が2基あるが、床面北側には柱穴やその他の設備はない。

西側の住居本体と東側の張り出し部分の間の壁面は段差をスムーズにするように一部削られ、東側張り出し部が住居への出入り口になっていたことを示している。北東側にはさらに1段高い部分があり、張り出し部分が段差によってさらに細かく区画分けされていたことが伺える。

出土遺物 (Fig.62) 11066は白磁皿。見込みはやや深く、体部は屈曲して開き、口縁は短く外反する。高台は低く太い。釉は明青灰色で外面は高台付近まで厚くかかり、高台は露胎。11068は青磁碗で、龍泉窯系の鎬蓮弁文碗とみられる。高台は低く、体部は丸く立ち上がる。釉は緑灰色で厚くかかり、外面は畳付まで施釉される。11067は青磁皿で、龍泉窯系とみられる。平底で、体部は屈曲して開く。釉は緑灰色で外面は底部付近までかかる。内外面ともに無文。11069は青白磁合子。底部は平底で、外面下半部には花卉を模したケズリを施す。口縁部は段がついて短く立ち上がる。遺構内からは蓋に該当する破片は出土していない。11065は土師器坏。底部は平底で、表面の剥落が著しく調整は不明。体部は直線的に開く。11070は土師器捏鉢とみられる。口縁端部が丸く膨らみ、体部は直線的に開く。表面の風化が著しく、内外面とも調整不明。

2 土坑

SK8006 (Fig.61)

調査区西側で検出された土坑。平面形は隅丸方形に近い不整形で一辺1.3m、遺構面からの深さは15cm程度と浅く、全体に皿状を呈する。床面は平坦で、遺構面の傾きに沿って西に緩く傾斜する。遺構覆土は暗褐色で粘性が強く、炭化物を多く含む。遺構内から陶磁器破片が多数出土している。

出土遺物 (Fig.63) 11074・77・78は土師器坏。11078・74は底部は回転糸切り。11077は体部が直線的に開き、底部は平底で回転糸切りとみられる。11075は白磁碗で、高台は高く薄手で、釉は灰白色で外面は高台付近まで釉を施す。見込みには沈線を回す。11076は白磁皿。底部外面付近は露胎。釉は灰白色で厚い。11073は須恵

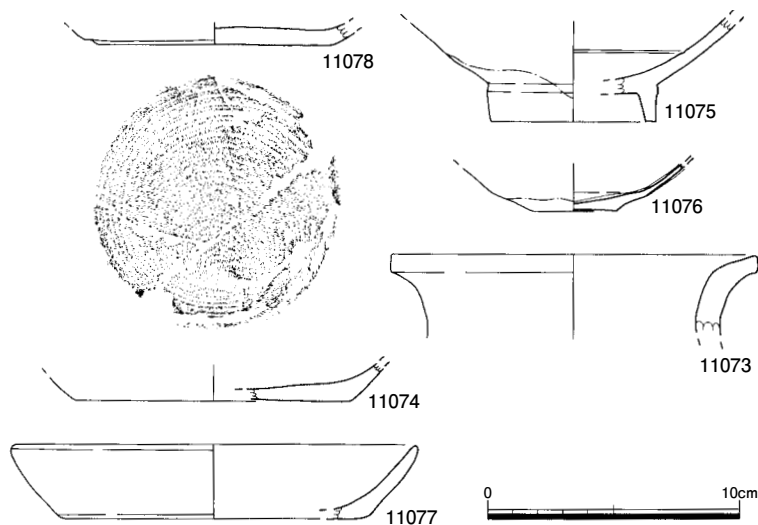


Fig.63 SK8006出土遺物実測図(1/3)

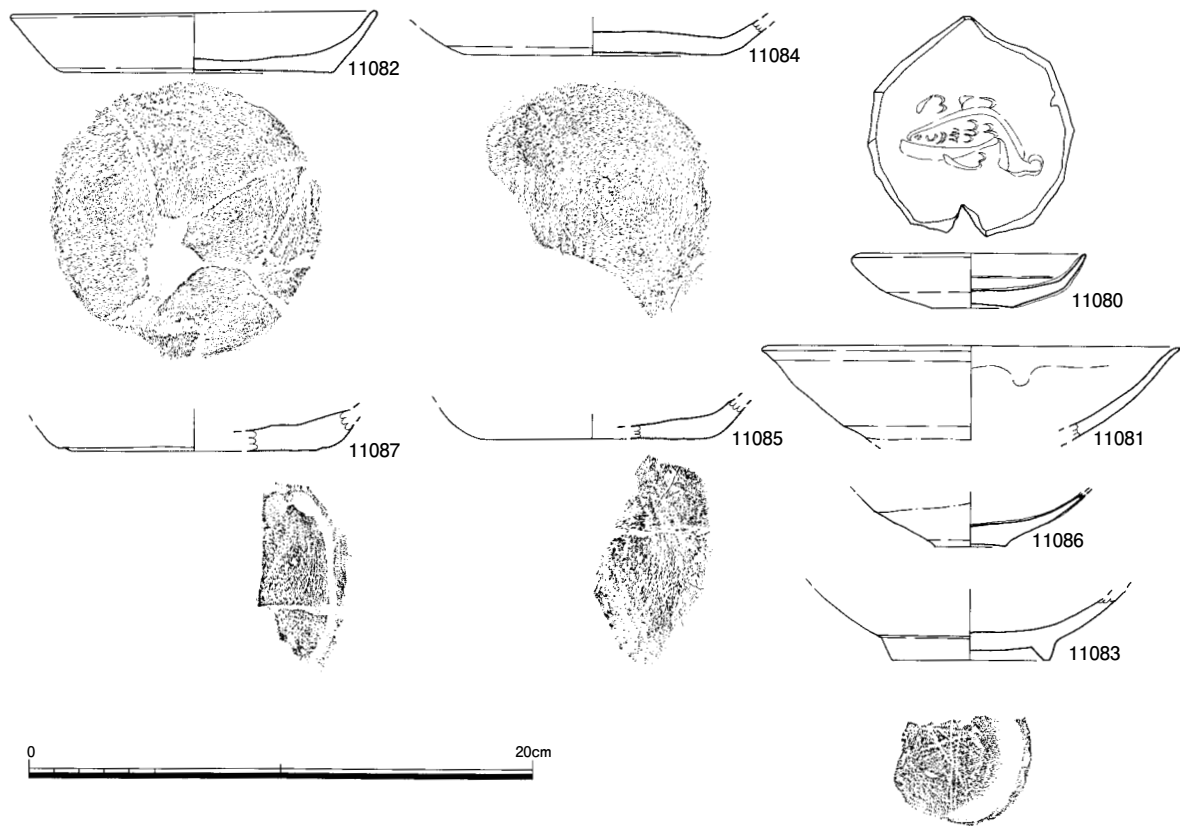


Fig.64 SK8007出土遺物実測図(1/3)

器で壺形土器の口縁部と見られる。口縁は短く外反し、頸部の器壁は厚い。

SK8007 (Fig.61)

調査区西側で検出された土坑で、SK8006に切られる。遺存部分より平面形は一辺1.3～1.4mの隅丸方形であることが推測できる。遺構面からの深さは10cm以下で、床面はほぼ平坦で、全体に浅い皿状を呈する。遺構覆土は茶褐色粘質土で、炭化物を含む。遺構内から陶磁器が多数出土している。

出土遺物 (Fig.64) 11082・84・85・87は土師器坏。11082は底部は回転糸切り。体部は直線的に開く。その他の坏も底部は回転糸切り。11080は龍泉窯系青磁皿。見込みに魚文を片彫りで描く。底部は上げ底で、釉を掻き取り露胎とする。体部外面と内面はオリブ灰色の釉が厚く施される。11081は白磁碗。口縁は端部を丸くつくり、ごく短く外反する。体部は浅く、わずかに丸みをもつ。明青灰色釉が内外面に厚く施釉される。11086は青白磁皿で口縁部を欠く。外面は中位まで施釉され、底部付近は露胎。11083は瓦器碗。低い高台が貼り付けられ、高台内にヘラ記号が刻まれる。

SK8009 (Fig.61)

調査区西側で検出された土坑。東西に長い不整形の土坑として検出したが、複数の土坑が重複している可能性もある。遺構は長さ2.7m、幅1.4mで、四隅は丸みをもつ。床面は西に傾斜し、西側部分で1段深くなるが、全体に浅い皿状を呈する。遺構覆土は茶褐色土で砂質分が多く、堅く締まる。

出土遺物 (Fig.65) 11094は白磁碗で底部を欠く。口縁は厚い玉縁につくり、体部は直線的に開くと推定される。外面は釉が口縁部直下まで施される。釉色は淡明青灰色。11091は高麗青磁碗。体部は丸く、口縁は直立し端部を丸く作る。釉色はオリブ灰色で内外面全体に施釉される。11093は青白磁皿。底部は平底で、体部はやや丸みを帯びる。釉は体部中位まで施され、釉色は明青灰色を呈する。

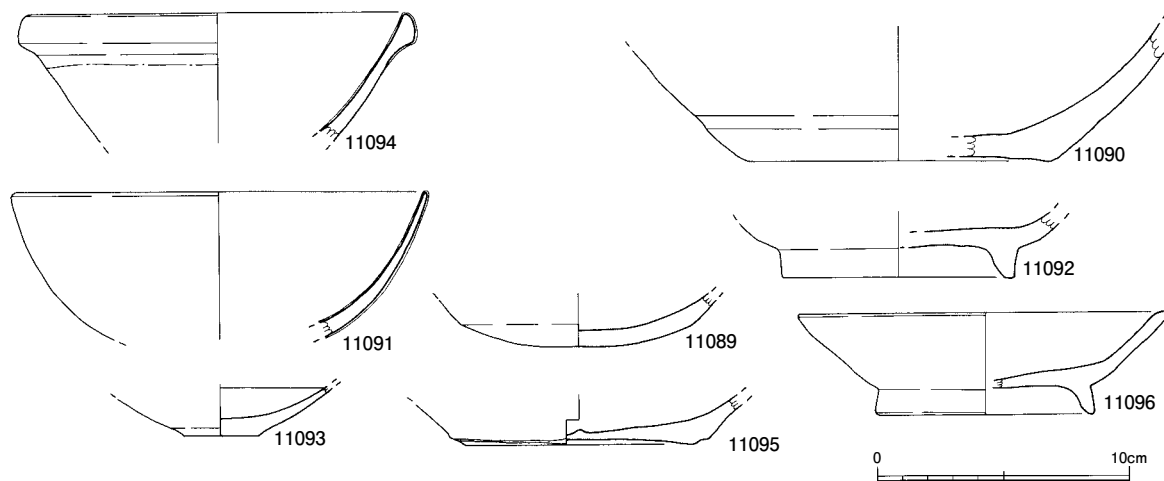


Fig.65 SK8009出土遺物実測図(1/3)

11090は陶器捏鉢で底部破片のみ確認できる。胎土は灰色で粗く、内面は使用による摩耗で平滑になる。11089・11095は土師器坏。11089は底部は丸く、底部外面に板目が確認できる。11095は表面が摩耗しているが、底部は回転糸切りとみられる。11092は土師器碗または台付坏とみられる。底部に低い高台を貼り付ける。11096は土師器台付坏。体部は浅く、直線的に開く。

3 大型墳墓

SR8014 (Fig.66)

調査区西側で出土した火葬墓。掘り方は平面形が円形で、上面で直径1.3m、床面で直径80cm、遺構面からの深さは1.6mである。

遺構の構造は、遺構面付近の最上部に上石を配列し、上石の下は約50cmの深さで石材のない部分があり、その下部に約50cmの厚さで積石を主とする中間層、さらに30cmの厚さで石材が疎らな層、最下部で蔵骨器とその周囲に石材を積み上げた層の各層からなり、重層構造になっている。

上石部分は9個の大型の石材が3個ずつ3列に隙間なく並べられ、検出時点ではその上に拳大の石が置かれていた。築造時には拳大の石が遺構上部に積み上げられていたと推測できる。上石は上面の高さが揃うように並べられており、中央部がやや低くなっているが、これは遺構覆土が締まっていく過程で中央部が沈下したものと考えられる。上石直下の土層が細かく乱れているが、これは覆土沈下にもなう周囲からの土砂が上石の隙間から流入した結果と考えられる。その下層で炭化物を含む灰色土が薄く堆積するが、上石の設置前に遺構内で火を焚いて祭祀を行った可能性があることを示す。

上石の下層では明褐色土を主体とする土が厚さ約50cmで堆積する。この層は人為的な埋戻しによる層で、各種の土をブロック状に含み、柔らかい。石材や遺物は全く含まれない。

明褐色土層の下は約50cmの厚さで石材を主体とする中間層が堆積する。この層の上面で明灰褐色粘土の薄い層が堆積しているが、これは上層の明褐色土と下層の暗灰色土が接触部で混合したもので、意図的な堆積ではないと考えられる。中間層で使用されている石材は上石よりも一回り小型の石材で、大きさや形状を整えるための加工が行われた痕跡は認められない。石材は隙間なく積み上げられているが、石材の形状を整えて積み上げることはしておらず、石積みの中には大小の石材が無規則に混在している。また、この層より以下の覆土には大量の炭が含まれており、埋葬時には土ではなく炭が詰められていたものと考えられる。

中間層の下部には石材が疎らな層が堆積している。上石の下層の明褐色土層とは異なり、疎らながら石材があり、また遺物も存在する。この層で検出された遺物は土師器皿と土師器盃が主で、四方に

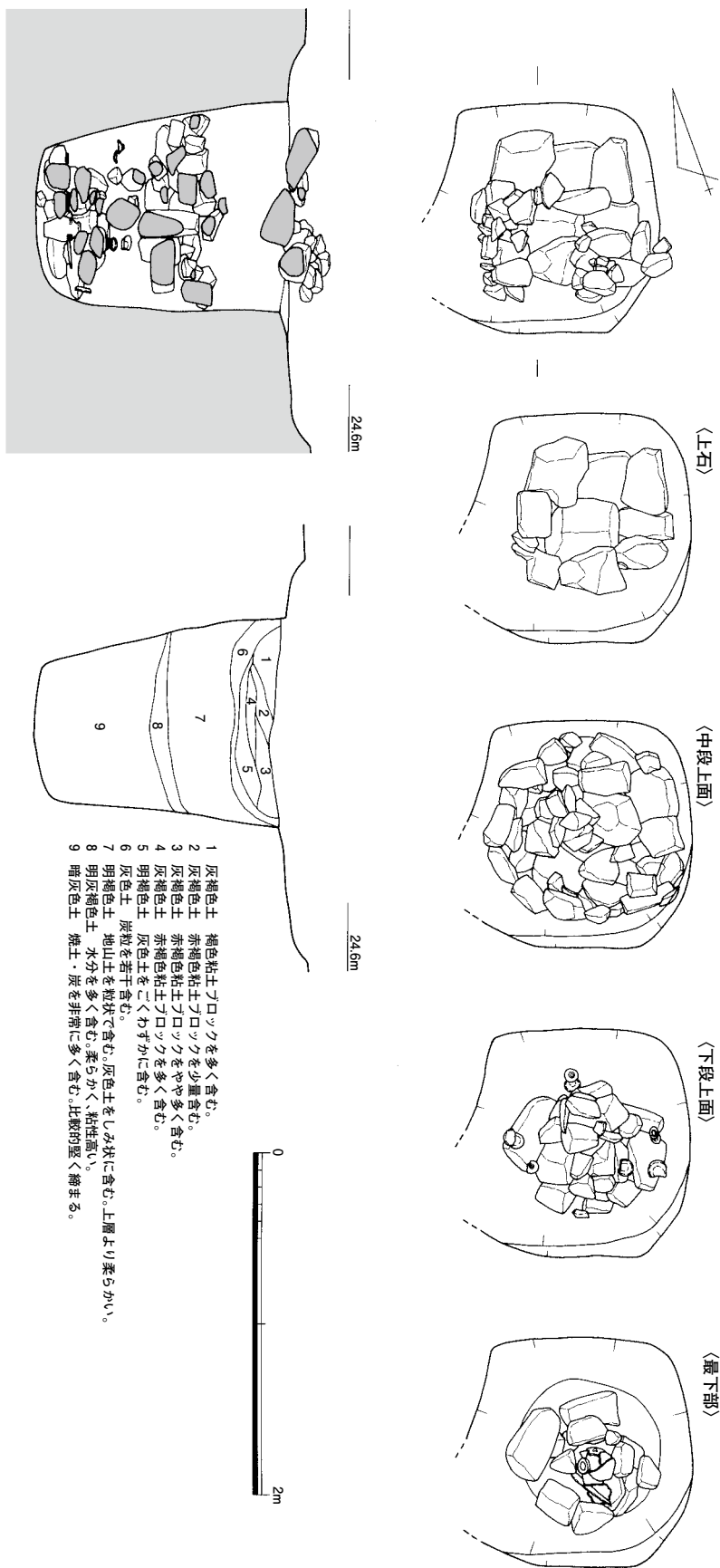


Fig.66 SR8014遺構実測図(1/40)

配置された状態で確認された。この層を埋める段階で祭祀を執り行い、四方に皿と盃を供えたということが考えられる。

最下層では中央に蔵骨器として四耳壺を設置し、その上に別の四耳壺破片で蓋をし、蔵骨器の脇に湖州鏡と短刀を供えている。これらの遺物を内包するように紡錘形に石を積み上げることが看取できる。遺物の損傷がほとんどなかったことから、この層の石材は非常に丁寧に積み上げられたとみられる。

四耳壺内からは1体分の焼骨が出土した。

これらの各層の堆積状況、および覆土の土質から、この遺構の埋葬過程を復元すると以下のようなになるだろう。

1. まず墓壙を井戸状に掘削し、蔵骨器を設置する。

2. 蔵骨器の周囲に石材を1段敷き詰めて蔵骨器を固定し、石敷きの上に湖州鏡と短刀を添える。

3. その上に紡錘形に石材を積み上げ、炭をある程度詰めて平坦面をつくる。この時点で一度祭祀を行い、四方に皿と盃を供えたとみられる。

4. さらに炭を積み、墓壙の深さの中間部分で大量の石材を積み上げて「中ぶた」のように墓壙を封じる。

5. 土砂で墓壙を埋め戻し、上石を設置し、掌石を積み上げる。

これらの構造は同時代の経塚の構造と非常に近く、福岡県

みやこ町の松田1号経塚(1127年)を類例として挙げるができる。使用されている四耳壺の型式も同一である。

出土遺物(Fig.68・69) 32001の湖州鏡と短刀は錆着し、分離できなかったため、そのままの状態で図化した。湖州鏡は直径12.8cm、鈕高7mm、縁部厚4mmで、中央にごく小さな鈕が付き、縁は厚くつくる。鏡全体が凸面を呈し、鏡面・鏡背は全体に緑青を吹き、鏡背には厚い錆が付着する。鈕は半円形で鑄造後溶接されたものとみられ、鈕孔は錆で塞がれる。

銘文は陽刻で、毛筆書体で太く書かれ、「湖州真石念 二叔家照子」の10文字が確認できる。短刀は残存長34.7cmで、柄先端を欠く。直刀でフクラ切先を呈する。刃部長は28.2cm、茎との境界は両関とみられる。刀身以外の金具等は出土していない。31001は刀子で、四耳壺内部から出土した。遺存状況が悪く、原形をとどめていない。刃部は薄い。茎は細く、刃部に対し斜めにつく。両関とみられる。

Fig.69は遺構内出土の土器類。11097・11103～11105・11・12・17の7点は土師器小型坏で、盃とされる。ほぼ同形同大で、胎土も共通する。体部は浅く、丸みを帯びる。高台は低く貼り付けられる。11110・14～16は土師器皿で炭層内から出土したもの。いずれも底部糸切りで、11114が底部やや丸底で、ヘラ切り後ナデて仕上げしており、他は底部が回転糸切り。遺構下部で出土した遺物と異なり、完形のものはなく、いずれも破片または割られている。11113は炭層から出土した土師器台付坏で、高台部は太く短い。11101・02・06～09は炭層下部及び最下層から出土した土師器皿で、11109が底部ヘラ切りで、他は底部が回転糸切り。11099は11098の破片の中に混在して出土しており、他の土師器皿と異なる意味合いを持つともみられる。

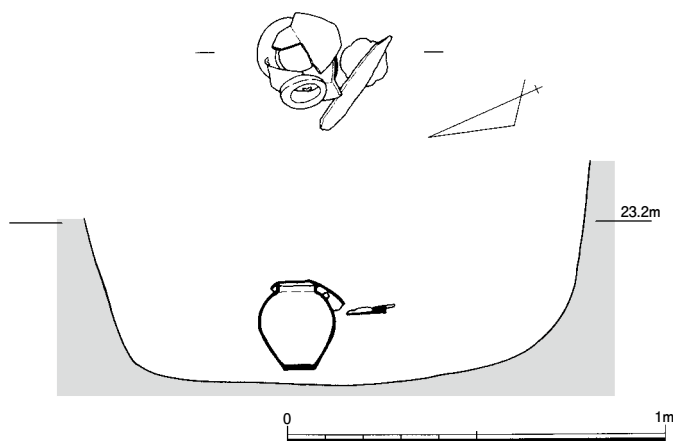


Fig.67 SR8014遺物出土状況実測図(1/20)

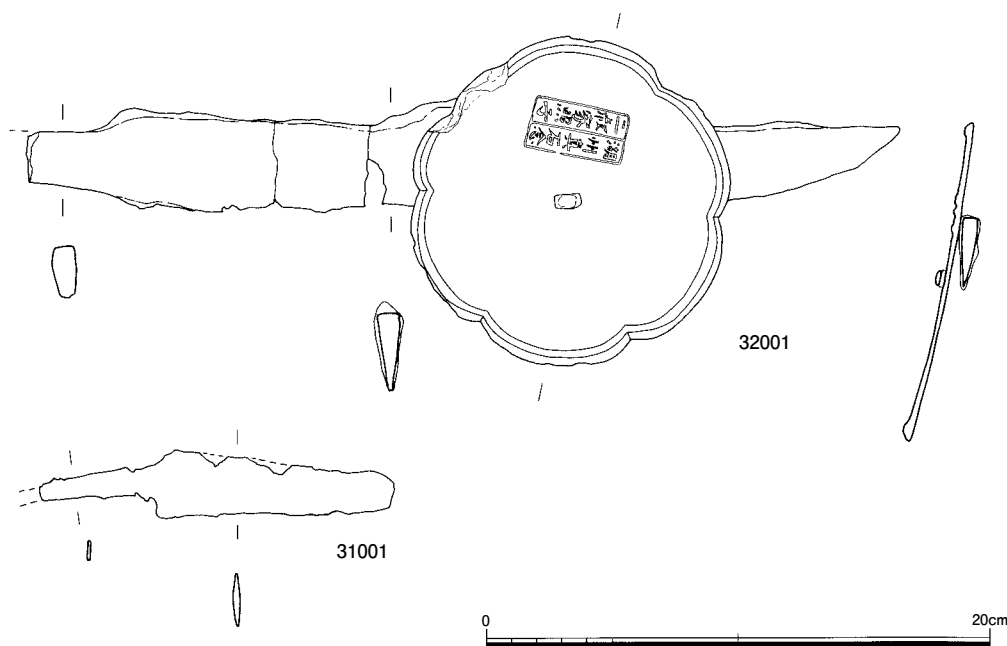


Fig.68 SR8014出土遺物実測図1(1/3)

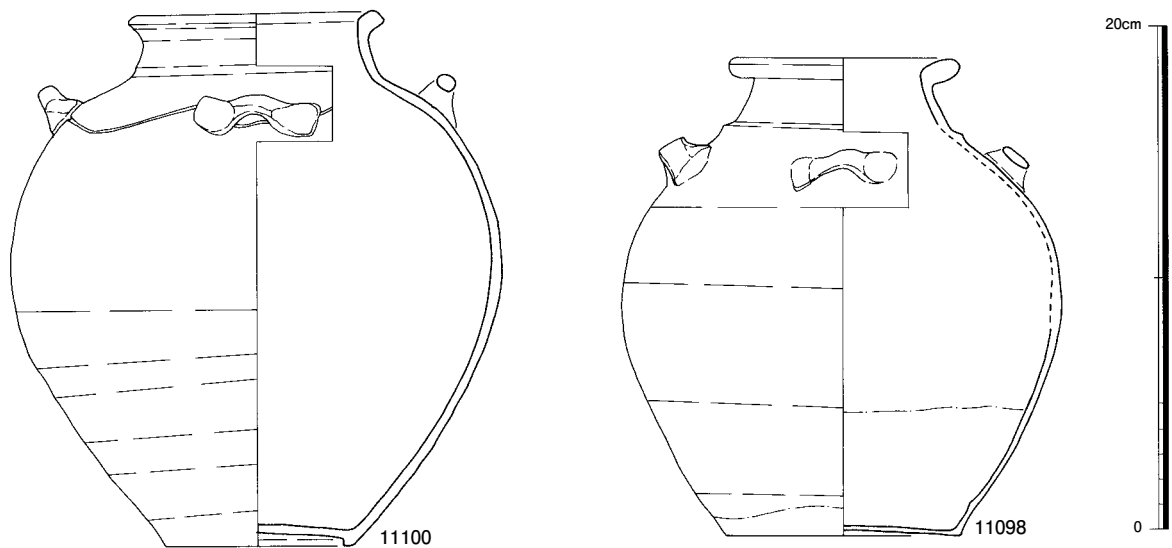
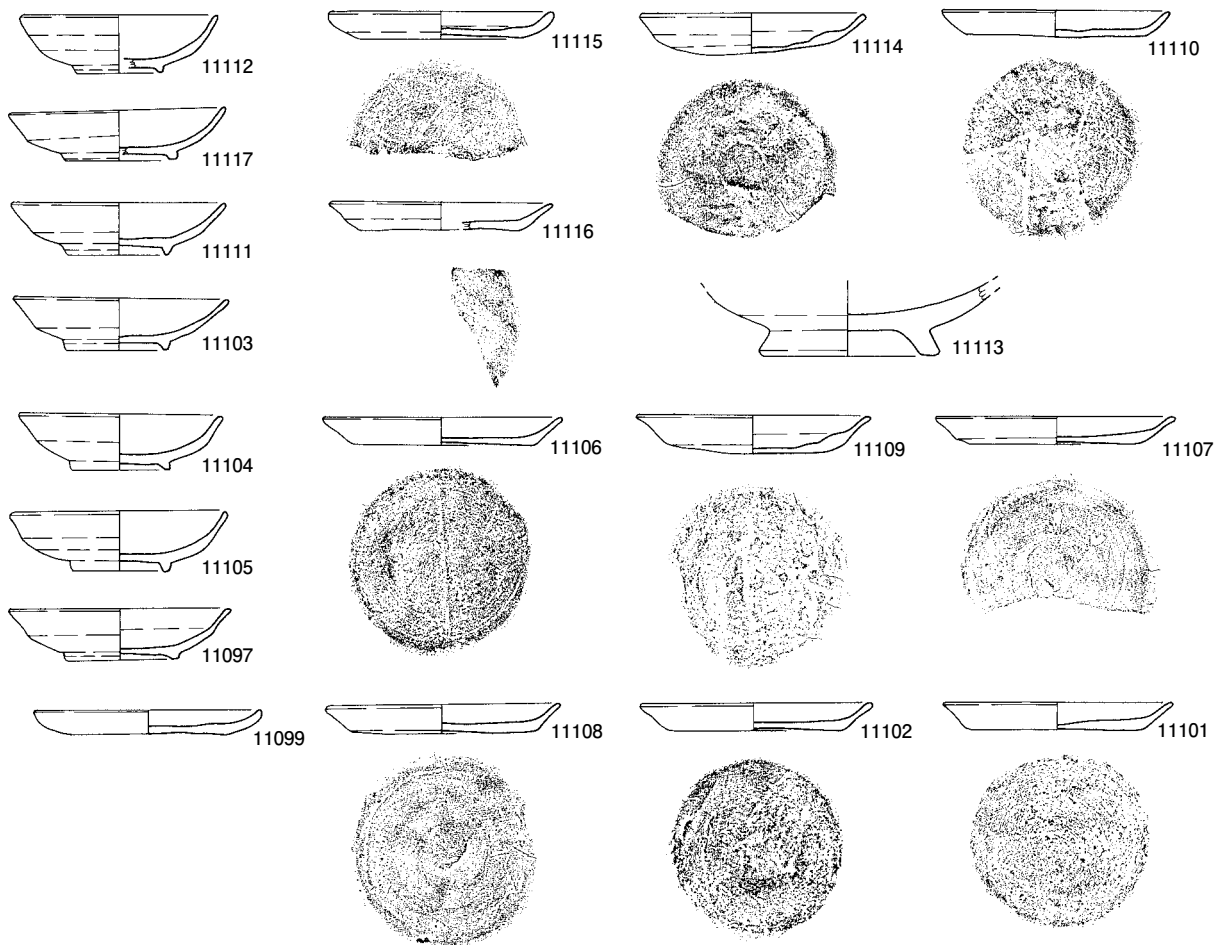


Fig.69 SR8014出土遺物実測図2(1/3)

11100は陶器四耳壺で、ほぼ完形。表面は無釉で、口縁部は短く外反し、頸部は短く細い。胴部は肩が張り、最大径は胴部上位にくる。肩部に波状線を1条回し、その上から把手を4ヶ所貼り付ける。外面上部はナデ、外面下部は回転ケズリ。11098は11100の蓋として使用されていた陶器四耳壺破片で、接合の結果完形に近い形に復元できた。口縁は屈曲して短く外反し、胴部は丸く、胴部最大径は胴部

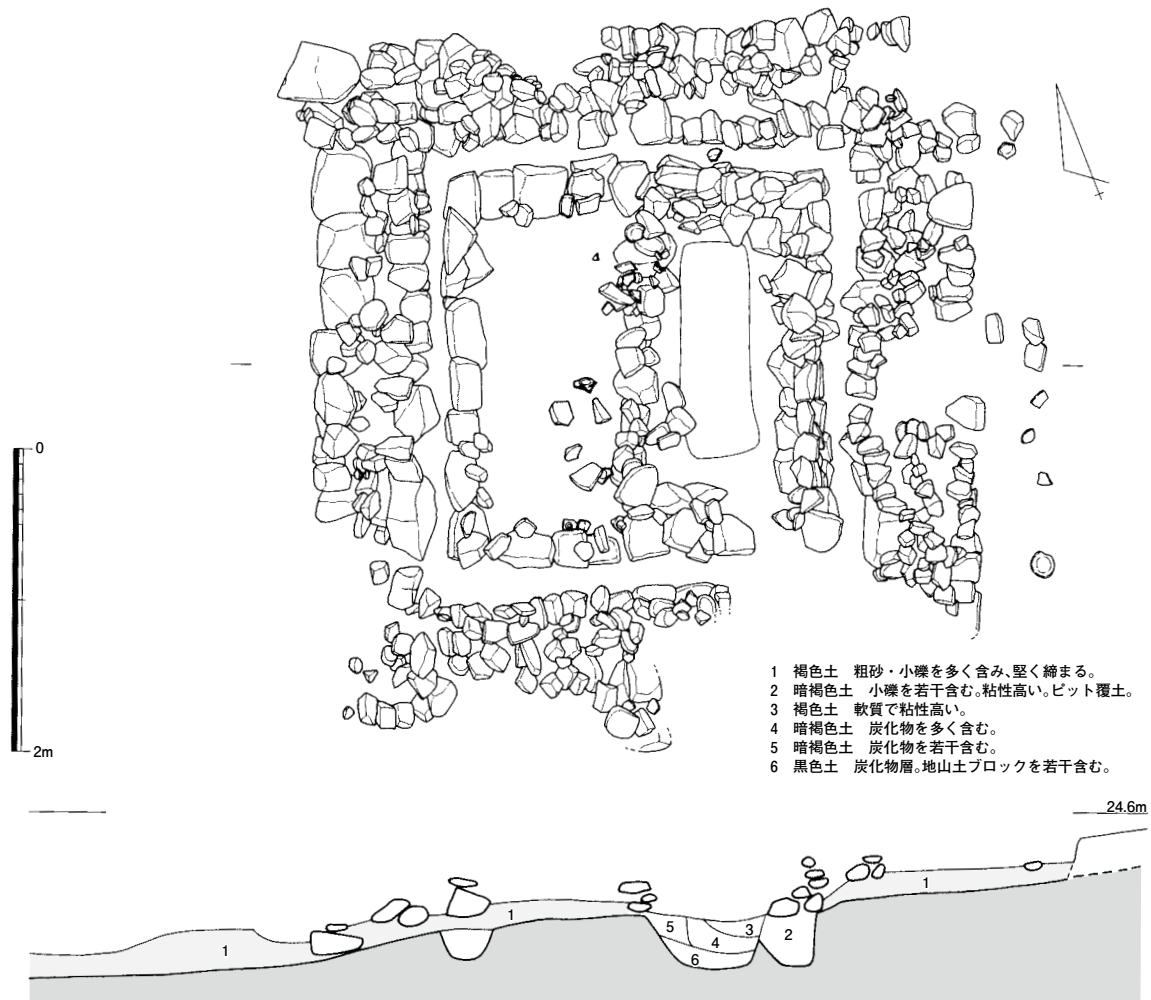


Fig.70 SR8019遺構実測図(1/50)

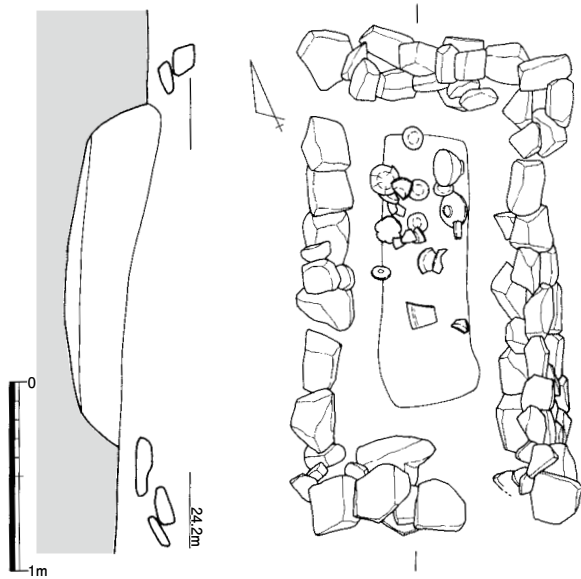


Fig.71 SR8019墓壇実測図(1/40)

中位にくる。肩部に粘土帯を4ヶ所貼り付けて把手としている。外面に黒褐色の釉が施されているが、ほとんど剥落して胎土が露出している。

SR8014からは白磁や青磁は出土していない。これも注目すべきことであろう。

SR8019 (Fig.70)

石積みの基壇をもつ墳墓で、基壇周囲には帯状の列石部分が作られ、全体で二重の基壇をもつ。中央の方形基壇の規模は南北2.6m、東西2.6mでほぼ方形。周囲の帯状の列石部分を含めた規模は南北4.6m、東西4.4mである。南東隅の部分は木株により崩壊している。

当初、8区調査区の南側境界付近で石材が散布する部分を確認したことから、調査区を一部拡張して表土を除去したところ、積石状の遺構を検出した。この時点では遺構の性格を把握できず、上

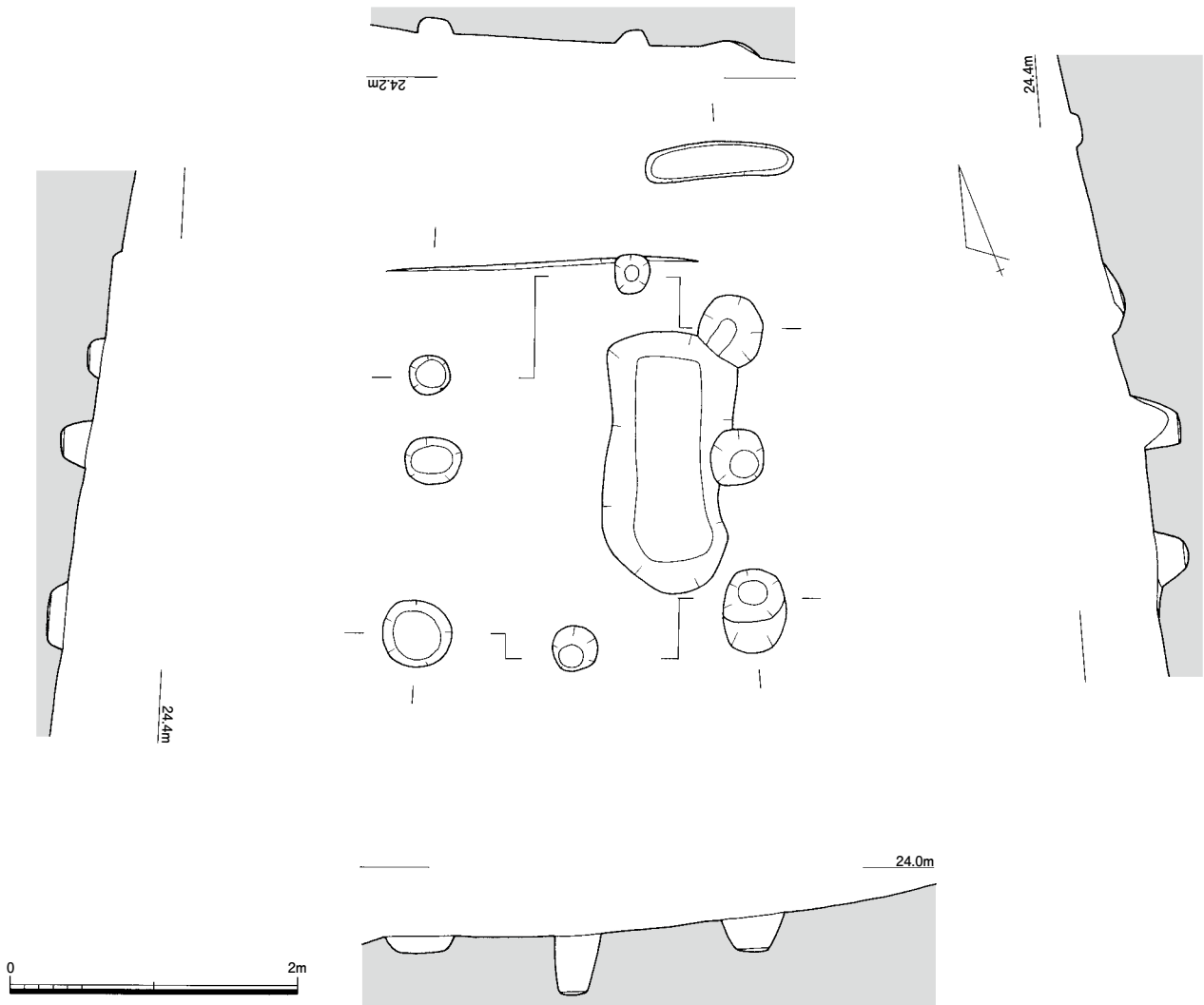


Fig.72 SR8019地山面実測図(1/50)

部の積石を除去したところ、積石の下部で基壇を検出した。このような経過で調査を進めたため、遺構上部の積石部分の記録は墓葬としての問題意識を欠いた部分的な状況記録にとどまっている。積石は検出時点で基壇から20cmほどの高さで積まれていた。石の積み方は粗く、積石の間隙が広かったり、下部の石と接していない石材が多く見られるなど、人為的に積み上げられた安定したものではなく、崩落した石材が堆積したような状況であった。下部の石材と接していない不安定な石材を除去すると、中央の方形の基壇と周囲の帯状の列石を確認できた。

中央の基壇は、周囲に大型の石材を1段ないし2段並べて方形の区画を作っている。石材が大型のものは1段、小型で薄い厚さの石材は2段重ねられ、全体として基壇上面のレベルを整えている。また石材は外側に面を揃えて配列しており、基壇外周のラインも非常に整っている。基壇の各所で使用されている石材に若干の差異があり、基壇西面には横方向に長い、大型の石材を使用して隙間なく配列している状況が確認できる。北面と南面には大型の石材を使用しているが、並べ方は西面ほど整っておらず、石の間に隙間があったり、基壇上面のレベルが整っていない部分もみられる。東面には小型の石材を使用し、積み方も粗い。これは墳墓の正面が西面で、墳墓全体の正面観を重要視したことによるものとみられる。後述するが、周囲の基壇にも同様の傾向がみられる。

中央基壇の内部は、東側に主体部となる墓壙があり、西側半分には遺構はみられない。墓壙周囲に

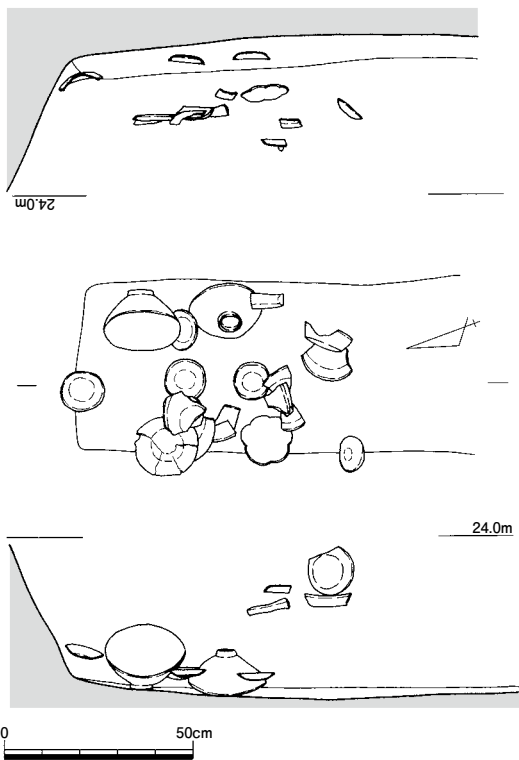


Fig.73 SR8019墓壇遺物出土状況(1/20)

は小型の石材を使用した石積みが見られ、基壇内部を「日」字状に区画しているように見える。但し、石積みの構造としては、まず墓壇周囲に小型の石を積み、その後基壇周囲に列石を並べており、墓壇周囲の積石は基壇周囲の列石よりも1段高く積まれている。

墓壇前面の基壇内部西側では、基壇盛土上面と石積み上面に陶磁器をはじめとする遺物が散布しており、埋葬後この場所で祭祀行為を行ったことが伺える。

基壇の周囲には帯状の列石が巡っている。列石幅は60cmで、基壇とは10～20cmの間隔をおいて巡っている。列石の遺存状態は悪くないものの、東側で崩落した状況が見られ、東側と北側では木株によるとみられる崩壊・空白部分が生じており、南側は丘陵斜面にそって崩落しており、外側面は完全に失われている。列石のコーナー部が良好に遺存しているのは北西側だけである。

列石の石材も基壇部と同様、西側部分に使用されている石材は大型で整った形状をしている。外側に面

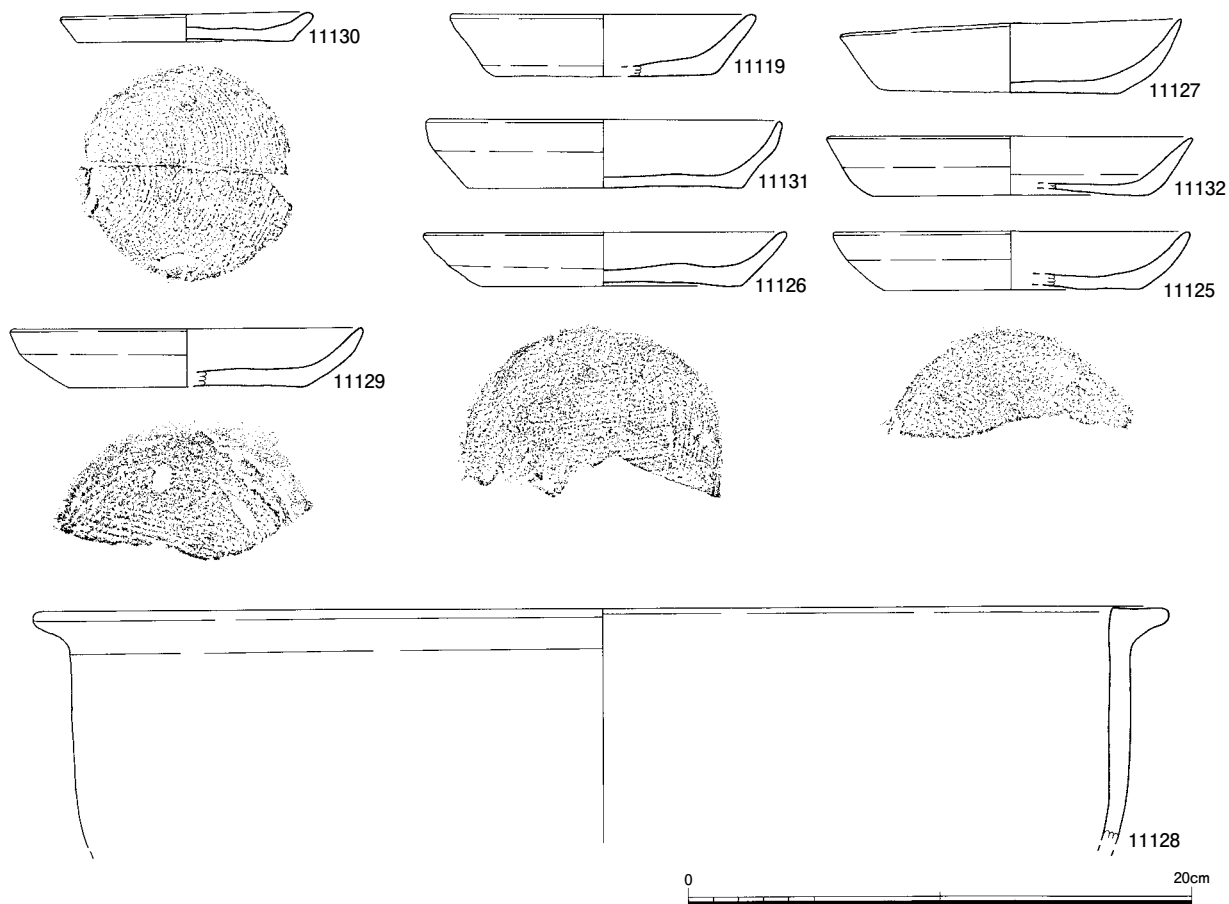


Fig.74 SR8019出土遺物実測図1(1/3)

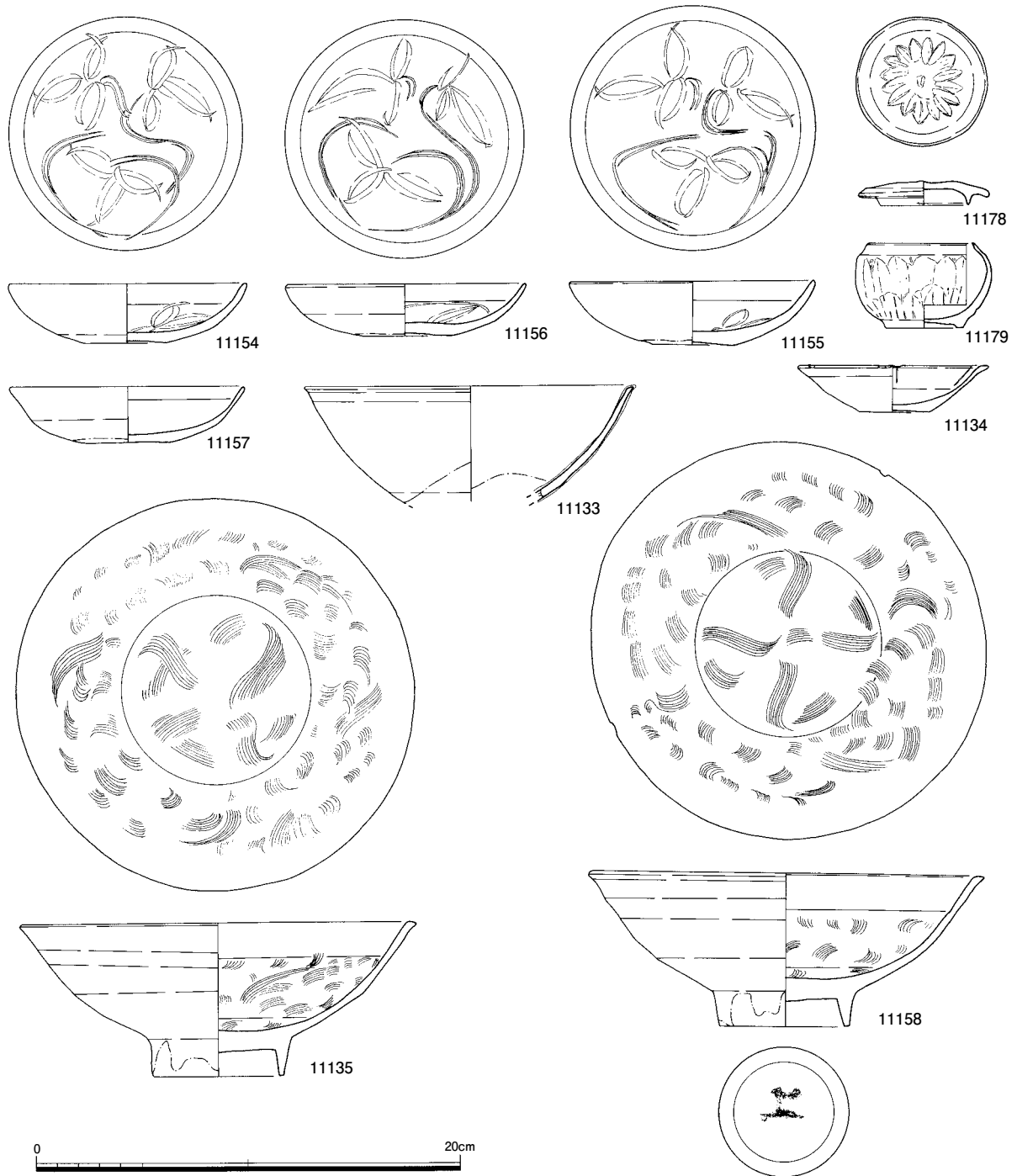


Fig.75 SR8019出土遺物実測図2(1/3)

した部分には特に大型の石材を使用しており、北西隅に使用されている石材がこの墓葬の中で最も大きな石材である。西側部分は内側に面した部分にも大きめの石材を使用しており、これらは基壇部と同様、西側からの正面観を重要視したことによるものと考えられる。西面以外の箇所の列石は、内外に面した部分の石材はやや大きめの石材を使用しているが列石内部は拳大の小型の石材を使用しており、西側との構造の差は歴然である。

列石上面は丘陵斜面の傾斜に沿って東から西へ傾斜しており、列石上面の比高差は東西で約40cmである。

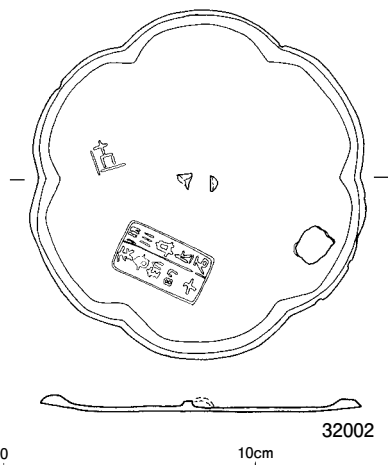


Fig.76 SR8019出土遺物実測図3(1/3)

墓壙は基壇東側に位置し、主軸を南北方向にとる。掘方は隅丸方形で、床面は緩くカーブし、床面と壁面の境界は明瞭ではなく、壁面がゆるく上方に開く。このことから横断面は箱形ではなく割竹形に近い形状である。

墓壙の覆土は、最下部に黒色土層が堆積しており、棺の下部に炭が敷かれていたことが分かる。その上層は基壇盛土に土質が近い土砂が堆積しており、木棺の腐朽によって流入した土砂とみられ、基壇上部の積石も墓壙内に落ち込んでいる。墓壙内からは陶磁器、湖州鏡などの遺物が出土している。陶磁器のうち白磁は墓壙北側中央と東壁付近に集中して出土した。中央部には白磁皿が列状に置かれており、皿はいずれも正置で検出され、黒色土上面で検出されていることから、木棺の床板下または木棺内の床面に並べて置かれていたものとみられる。東壁付近の白磁碗・白磁皿は横置・倒置で、

木棺内の側部に置かれていたものが落下したものと推定される。湖州鏡は墓壙東側で鏡面を上にして出土しており、木棺内または木棺上部に置かれていたものが落下したものであろう。主体部上層の褐色土中から土師器坏・皿が出土し、これらは棺上に置かれたものか、あるいは埋葬直後の祭祀で使用されたものとみられる。

基壇・列石を全て除去し、地山面の状況を確認したところ、基壇部分と重複する範囲に2間×2間の掘立柱建物が出土した。これらの柱穴は切り合い関係から墓壙掘削以前のものであることが確認できる。柱穴掘方は径や床面レベルに差があり、柱間も一定でない。このことからこの建物の機能として、葬送行為のための仮小屋と考えるのが適当であろう。

出土遺物 (Fig.74 ~ 79) Fig.74は墓壙内から出土した土師器で、完形で遺存するものはなく、故意に破碎されたことも想定できる。11130は土師器皿で、底部は回転糸切り。11129以下は土師器坏。11129・11131は体部が屈曲気味に内湾し、底部は回転糸切りで板目がつく。11119はやや小型で、体部は直線的に開き、底部は回転糸切り。11126は底部は回転糸切りで板目がつく。11127・11132は風化が進み、詳細不明。11125は体部がやや丸く、底部は回転糸切りで板目がつく。11128は土師器の鉢または鍋の口縁部。口縁部はコの字形に外側に突出し、上面は平坦につくる。外面は縦方向ハケ目、内面は横方向ハケ目。

Fig.75は墓壙内から出土した磁器。11154～57は白磁皿。11154～56は同形同大で、内面見込みに片彫りで3弁の花文を3輪描く。釉は灰白色で薄く、外面は体部下部まで施釉される。底部は平底で露胎。11157は墓壙内の北端中央で出土した白磁皿で、無文。釉は灰白色で薄く、外面は体部下部まで施釉される。底部は平底で露胎。内面上部に段を持つ。

11178・11179は青白磁の蓋付小壺。墓壙内の中層で出土し、木棺上に置かれていたものとみられる。蓋は体部が浅く、小壺との接合部には返りが付く。上面には片彫りで菊か牡丹の花文が描かれる。小壺は体部が丸く、底部には低い高台を作る。釉は明青灰色で艶をもち、蓋は内外面施釉、小壺は体部下部まで厚く施釉され、高台と高台内面は露胎。蓋・小壺ともに優品である。

11134は青白磁皿。口縁は6弁輪花で作られる。釉は明青灰色で、薄く施釉され、底部は露胎。

11133・11135・11158は白磁碗。11133は墓壙中層で出土したもので、上部からの落ち込みである。口縁は短く外反し、体部は丸い。釉は明青灰色で、内外面とも下部は露胎。11135・11158は墓壙北東壁際で出土したもので、口縁は屈曲して短く外反し、体部は浅い。高台は高く薄い。内面に櫛描文を施

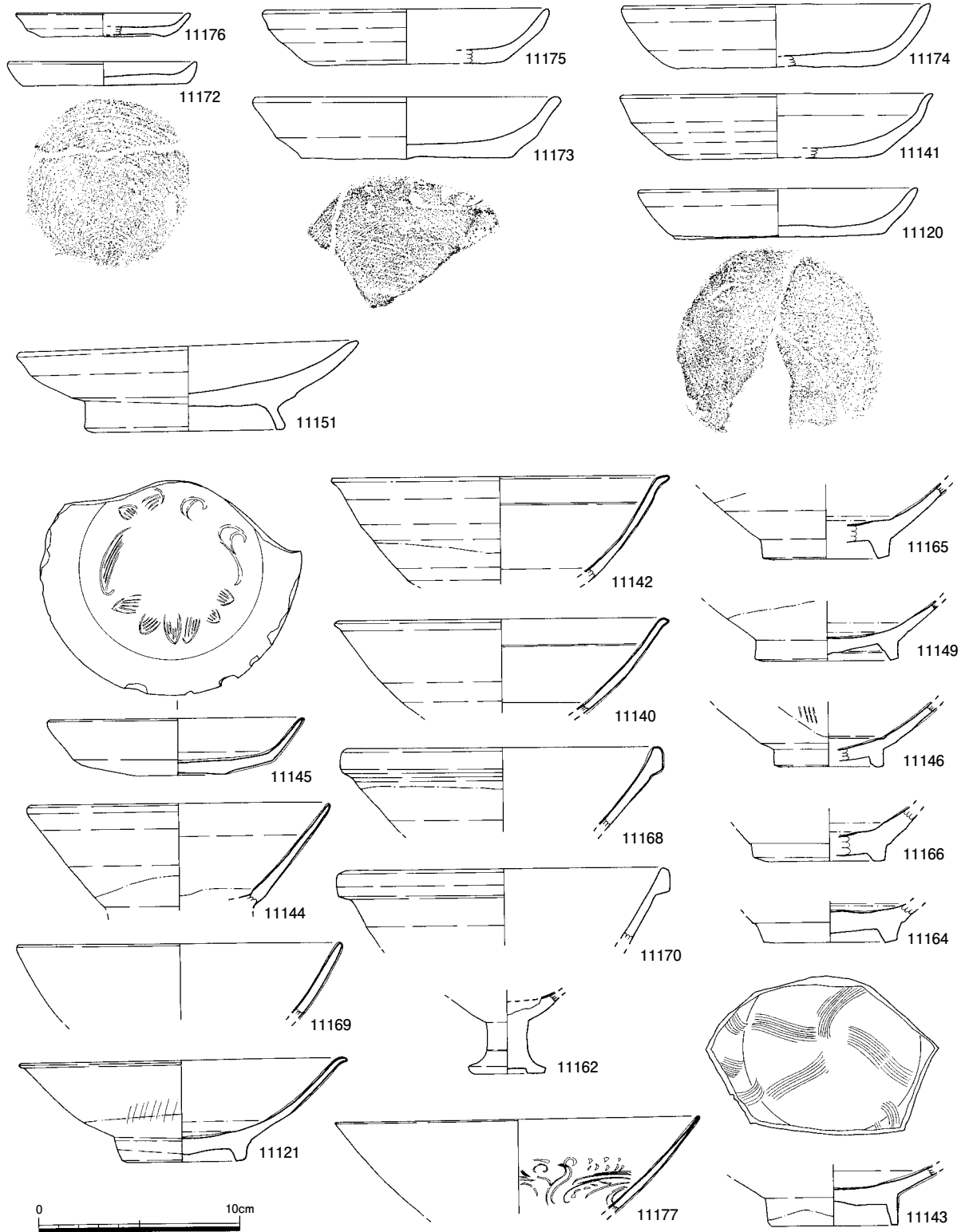


Fig.77 SR8019出土遺物実測図4(1/3)

文する。釉は灰白色で高台付近まで施釉され、壺付と高台内側は露胎で、11158は高台内側に「上」の墨書がある。

Fig.76は湖州鏡で、調査時に誤って突いた際の穿孔が残る。直径13.7cm。6弁の花弁形で、鈕は欠けて痕跡のみ残る。鏡背は全体に緑青に覆われ、銘文と記号状の文字がいずれも陽刻で書かれる。銘に

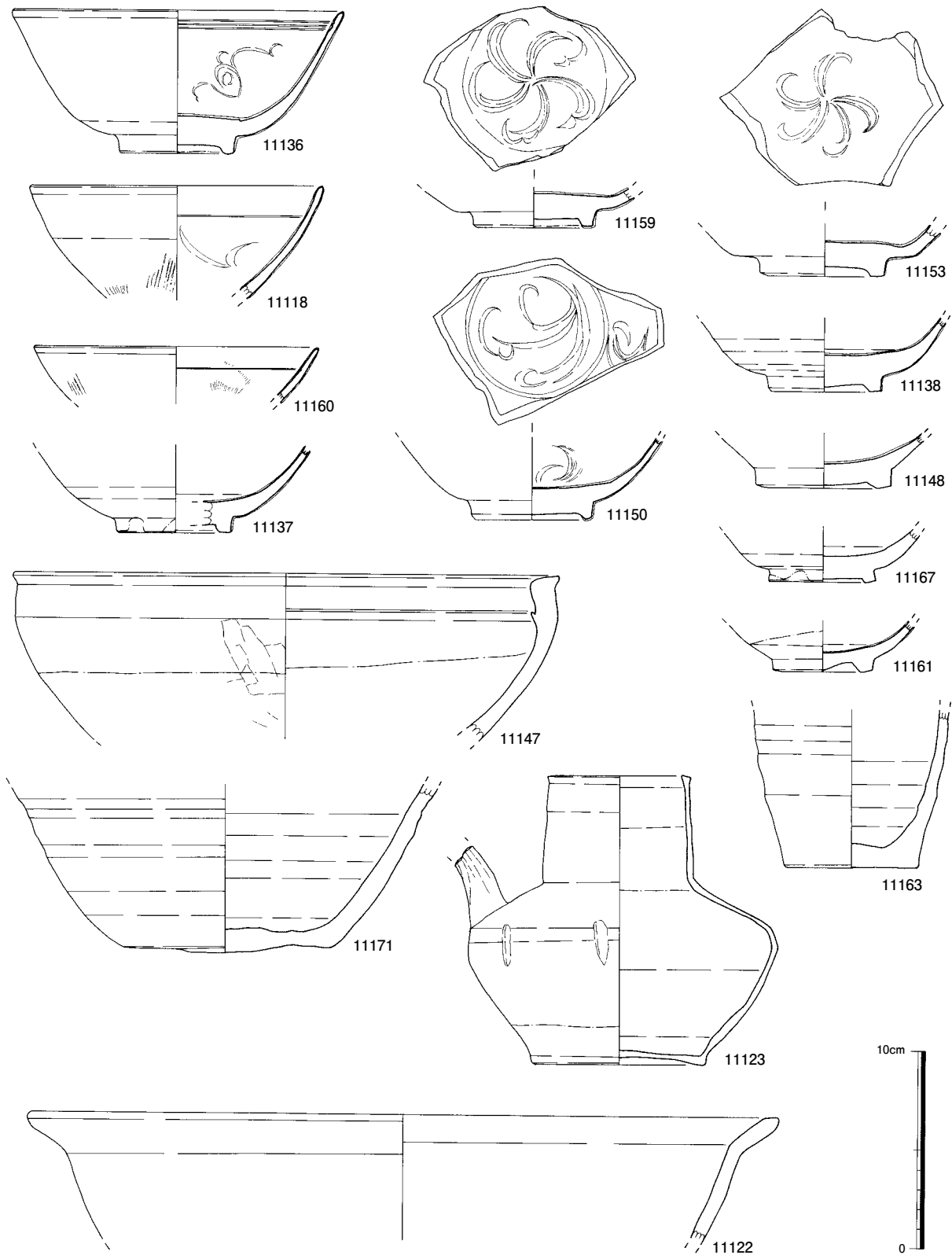


Fig.78 SR8019出土遺物実測図5(1/3)

は「湖州真正石 家青銅照子」の10文字が記されている。記号状の文字は直線で構成され、意味不明。鏡面は銀色を保ち、一部は黒変するが緑錆はほとんどなく、凸面状である。周縁は太い玉縁状を呈する。

Fig.77は積石下の基壇面および列石上面で出土した遺物。11176・11172・は土師器皿。11172は底部回転糸切りで、体部は低い。11173～75・41・20は土師器杯。いずれも底部は回転糸切りとみられ、11173・11120は底部に板目が付く。体部は屈曲気味に内湾する。11151は土師器台付杯。高台は径が大きく、高く作られる。体部は浅い。11145は白磁皿。体部は屈曲して開き、底部は平底。釉は灰オリーブ色で底部のみ露胎。内面見込みに櫛描きで花文を描くが、中心部は摩耗して文様が見えない。11144以下は白磁碗で、いずれも破片。11144は体部が直線的に開き、釉は灰白色で内外面とも下部は露胎。

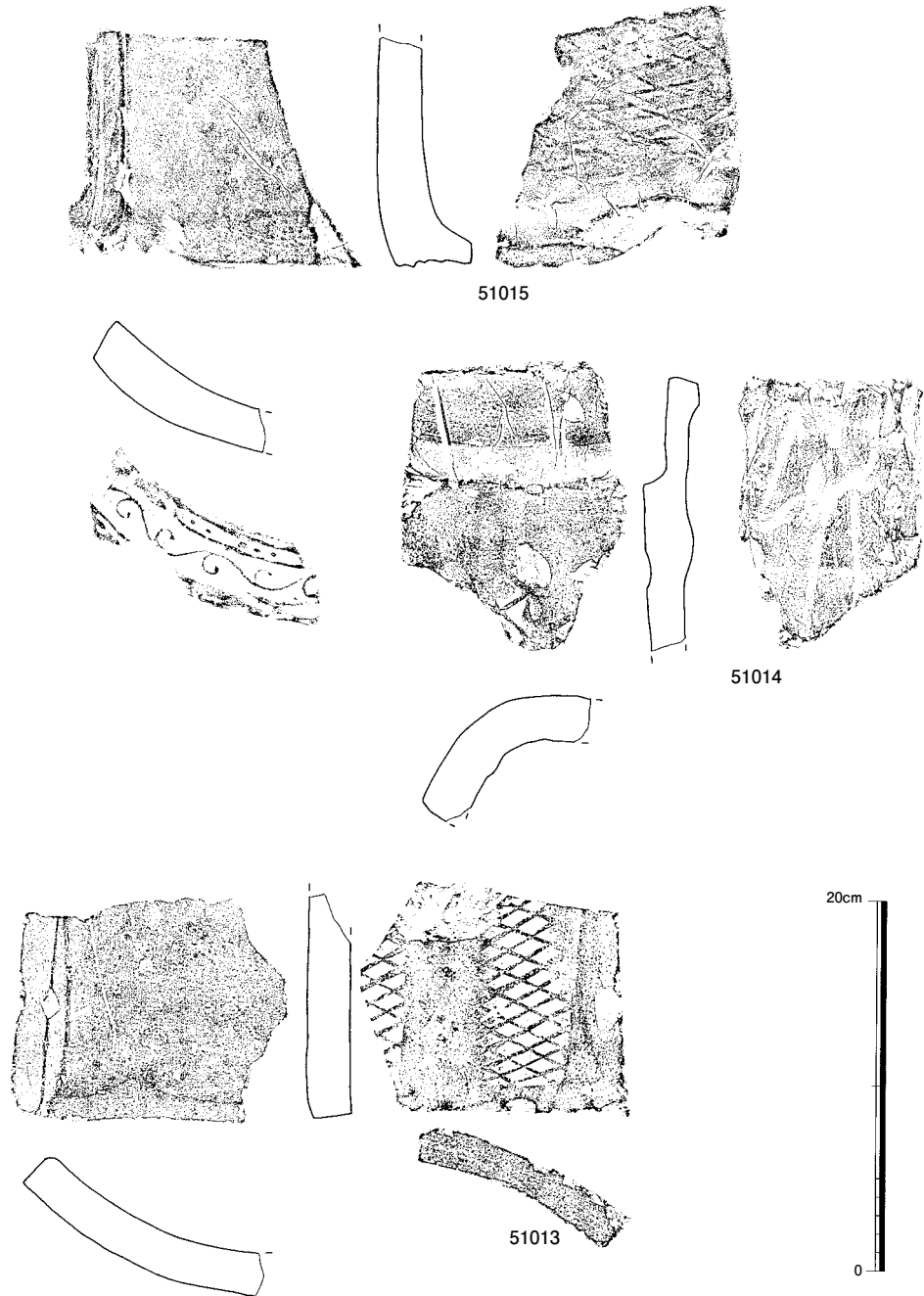


Fig.79 SR8019出土遺物実測図6(1/4)

11169は体部が丸く、釉は灰色で内外面とも厚く施釉される。11121は基壇上から墓壙内に落ち込んだもので、口縁部は短く外反し、体部は浅く、高台は低い。釉は灰白色で、外面は体部中位まで施釉し、内面見込みの釉は円形に剥ぎ取る。11142・11140は口縁部が短く外反する。釉は灰白色～明青白色で厚い。11168・11170は口縁部が玉縁形になるもの。11168は体部が直線的に開き、釉は明緑灰色で外面は口縁下部まで施釉され、内面は釉が厚い。11170は灰橙色の釉で薄く施釉される。11165・11149は高台が高く厚い。釉は灰白色で外面下位は露胎。内面見込みは釉を円形に剥ぎ取る。11146は内外面に櫛描文がわずかに遺存する。内面見込みに段をもつ。釉はオリーブ灰色で外面は体部下位まで施釉される。11166は高台が低く、釉は灰橙色で外面は露胎、内面見込みは釉を円形に剥ぎ取る。11164も高台が低く、釉は灰白色で内面見込みの釉を円形に剥ぎ取る。11143は内面見込みに櫛描文が施文される。

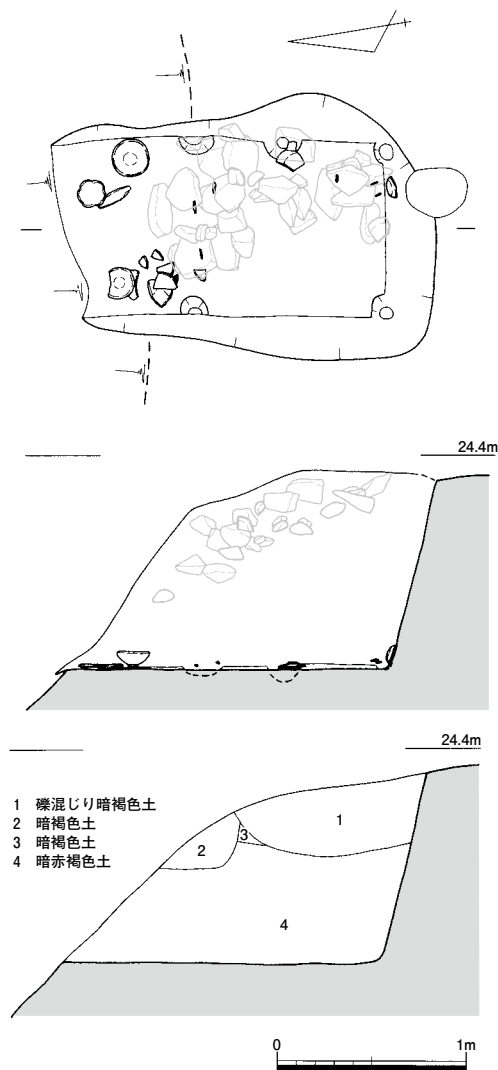


Fig.80 SR8020遺構実測図(1/40)

高台は高く薄く作られる。釉は灰白色で、外面は高台外側まで施釉される。

11162は染付の仏飯器で上層からの混入品とみられる。外面に赤色の短線が施文される。11177は青磁碗。釉は淡い明緑灰色で、内面には片彫りで文様が彫られる。

Fig.78は積石上や積石周囲で出土した遺物。11136以下は青磁碗。11136は内面には雲文が描かれる。釉はオリーブ灰色で、厚く施釉される。11118は外面に櫛描文、内面に片彫りで文様を描く。釉は灰青色。11160は内外面に櫛描文を施す。釉は灰青色。11137は底部で高台は低く削り出される。釉はオリーブ灰色で外面は高台上端まで施され、壘付と高台内部は露胎。11159は底部見込みに片彫りで花文を描く。11150も内面見込みに片彫りで草花文を描く。釉はオリーブ灰色で壘付きまで施釉される。11153は内面見込みに片彫りで花文を描き、釉は緑灰色で高台外面まで厚く施され、壘付きと高台内部は露胎。11138は内面見込みに片彫りと櫛描文を施すが、小片で文様は不明。釉はオリーブ灰色で高台外側まで施され、壘付と高台内部は露胎。11167は龍泉窯系青磁で、釉はオリーブ灰色で高台上端まで施釉される。11161は同安窯系青磁で、釉は明緑灰色で外面は体部下側までの施釉である。

11148は白磁碗。外面は露胎、内面は施釉され、釉は不透明で厚い。

11163は陶器壺で、薄灰色の釉が施される。底部は平底で体部は細く延びる。11147は陶器捏鉢で、口縁部は太く、端部がわずかに外側に突出する。口縁内面直下に蓋受けの返りがつく。釉は灰白色で内外面とも上部のみ施釉される。11171は瓦質の捏鉢で、底部はナデ整形、外面下部は回転ヘラ削り。

11123は陶器水注。基壇部と列石部の間の溝から出土したもので、把手と注口先端を欠く。口縁部から頸部にかけて直立し、胴部は肩が張り、底部は平底で、全体に薄手のつくりである。釉は暗褐色で外面は体部下側まで施釉される。肩部に縦方向の刻目状の切り込みが施される。

11122は土鍋。基壇面にあったものが墓壙に落ち込んだもので、Fig.74の11128とともに墳墓周囲で煮炊を行ったことを示している。

Fig.79は基壇面で出土した瓦。51015は軒平瓦で、瓦当面には唐草文と連珠文がみられる。凸面には斜格子文タタキが施される。51014は丸瓦で、玉縁がつくられる。凹面には布目痕が残り、凸面には斜格子文タタキの痕跡がわずかにみられる。51013は平瓦で、凸面には斜格子文タタキ痕が見られ、凹面には布目痕が残る。SR8019周辺からはこの他にも瓦破片が出土しているが、これらの瓦を使用した建物については確定できない。

SR8020 (Fig.80)

調査区北西隅に位置する木棺墓。遺構北側部分は造成によって大きく削られている。墓壙の本来の

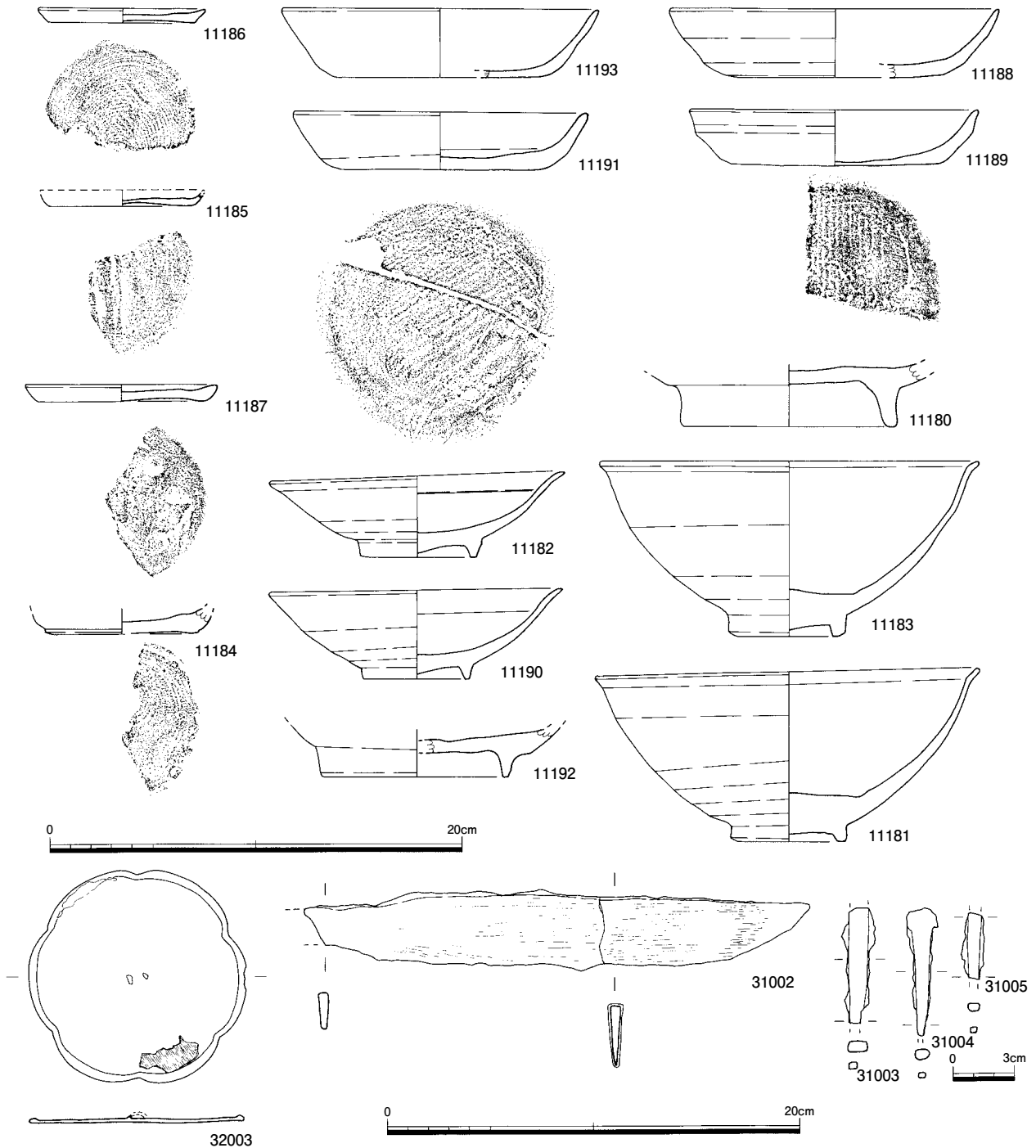


Fig.81 SR8020出土遺物実測図(1/3)

形状は隅丸方形とみられる。遺構内の遺物の出土状況からみて、床面部分は本来の形状から大きく削られていないと推測できる。

遺構の規模は、床面で幅90cm、長さ1.7mである。遺構面からの深さは最大で1mで、遺構上面は現状で幅1.4m、長さ2.0mを測る。遺物のうち、頭位近くにあると見られる白磁碗や湖州鏡の位置、床面に掘られたピットから、床面の本来の長さは2.0m前後と推定できる。墓壙の規模は、調査区内の他の土壙墓と比較して、床面幅が約2倍の広さで深さが極めて深く、このことからこの木棺墓が他の土壙墓とは異なった上位クラスの墓葬であることが推測できる。

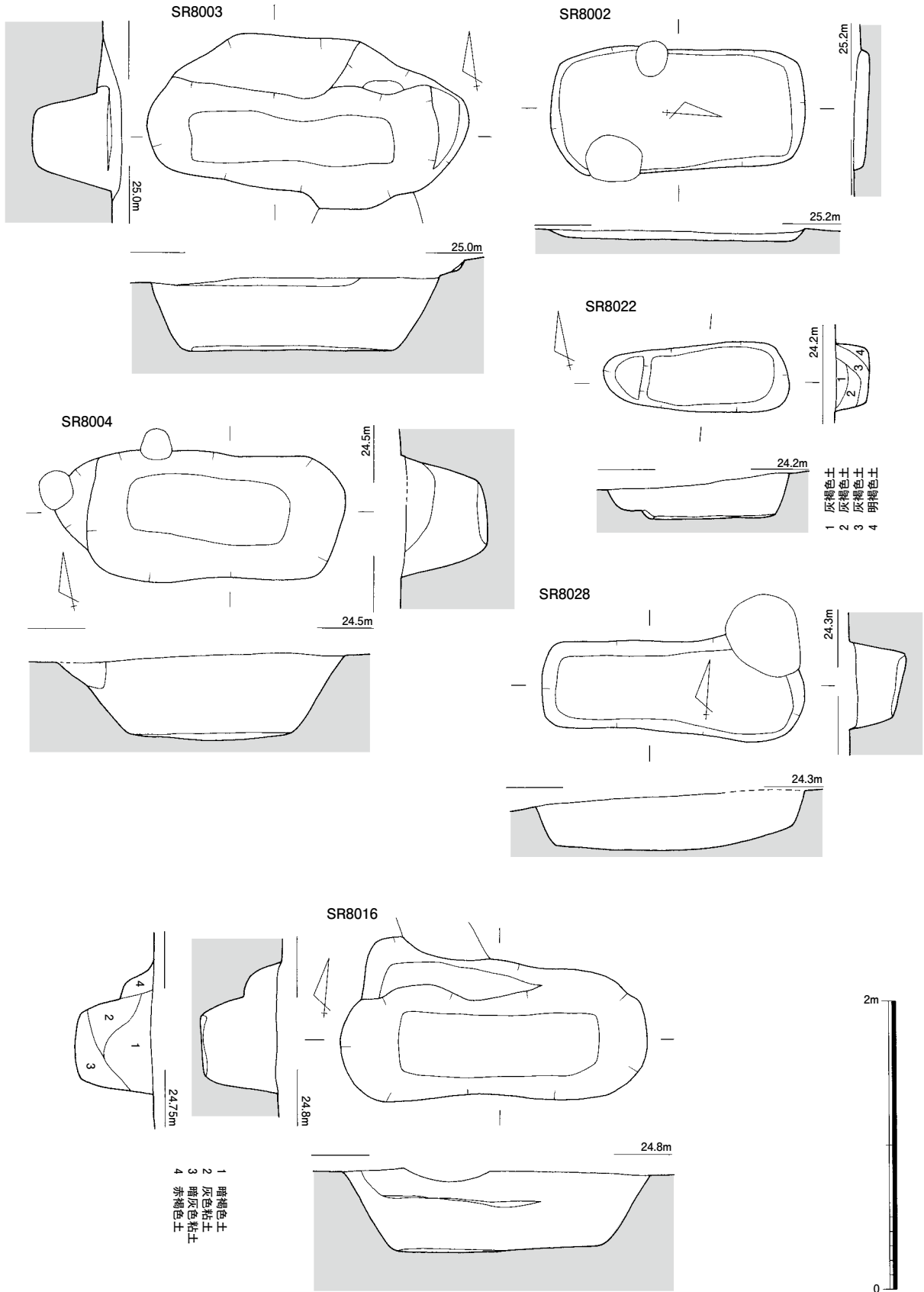


Fig.82 8区土墳墓遺構実測図(1/40)

床面は各辺が直線的で、整った長方形を呈する。南側側壁の両サイドと側壁中央部に小型の柱穴が掘られており、本来は削られた北辺の側壁にも同様の柱穴があったものとみられる。柱穴の径より直径5～6cmの柱が壁に沿って立てられていたとみられ、墓壙壁面に土留めのための壁が作られていた可能性がある。遺物は床面直上で検出されており、床面北側に完形の碗や湖州鏡などの重要な遺物が集中していることから、被葬者の頭位は北向きだったとみられる。

床面の遺物の出土状況を見ると、墓壙南側で坏などの土師器破片が散布しているのが確認できる。一方墓壙北側では東側で完形の青磁碗と湖州鏡・短刀が位置し、西側では白磁碗・青磁碗が割れた状態で出土した。

これらの状況から副葬遺物の本来の場所を特定することは困難ではあるが、湖州鏡・短刀は棺内に置かれていたものが原位置を保っているとみられ、東側の青磁碗は棺外に置かれ、埋められたもの、西側の白磁・青磁は人為的に割られて棺外に置かれたと見ることもできよう。墓壙中央部と南側に棺釘がみられ、この範囲が木棺の幅と考えられ、木棺の幅は約50cmと推定できる。

湖州鏡は鏡面を上に向けて水平に置かれ、短刀はその横に置かれている。湖州鏡の下面には板材が遺存しており、棺材か化粧箱の底板と考えられる。

側壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、墓壙全体は箱形を呈する。遺構覆土は暗褐色土と暗赤褐色土で構成され、本来の墓壙埋土の上層に流入土が堆積している。また墓壙上層に多量の礫石が落ち込んでいるのが確認でき、墓壙上部に礫石が積まれていたと考えられる。

出土遺物 (Fig.81) 11185～87は土師器皿。いずれも高さが低く、浅い。底部は回転糸切りで板目が残る。11184・88・89・91・93は土師器坏。11184は上部を欠き、底部は回転糸切りで底部周囲に段をもつ。その他の坏は体部表面の風化が進んでおり、11191・11189は底部が回転糸切りで板目が付く。11180は高台付坏で、高台は高く作られる。

11182・11190は白磁碗。墓壙北西側で11182の下に11190が重なって出土した。11182は口縁部が緩く外反し、体部は浅く、高台は径が大きい。釉は明青灰色で外面は体部下側まで施される。11190も11182とほぼ同型同大で高台が若干小さめである。釉は灰白色を呈する。

11183・11181は青磁碗。11183は墓壙北西側で破碎された状態で出土し、破片を接合してほぼ完形に復元できた。口縁はわずかに外反し、体部は丸く、高台は低い。釉は灰緑色で外面は畳付から高台内部まで施される。11181は墓壙北東側でほぼ完形の状態で出土した。11183とほぼ同型同大で、釉はオリーブ灰色で高台外側まで施釉され、畳付と高台内側は露胎。両者とも龍泉窯系青磁碗である。11192は土師器碗で、墓壙上層の礫石の隙間から出土した。墓上祭祀に使用されたものとみられる。

32003は湖州鏡。径は10.6cmで、調査区内で出土した3面の湖州鏡のうち最小である。鈕は痕跡のみ残り、鏡縁は細い玉縁状に作られる。鏡面は平面で、銀白色を呈して光沢を保つ。一部は灰色に変色し、緑錆が吹く。鏡背は灰色～黒色に変色しており、銘文はない。板材の一部が鏡背に付着しており、柾目の木目が確認できる。漆や顔料は確認できない。

31002は短刀。残存長は24.5cmで、柄頭部分を欠く。全体に木質が遺存しており、木目の方向から見て鞘とみられ、短刀は鞘に入った状態で副葬されたことが確認できる。刀の下面には別の板材が付

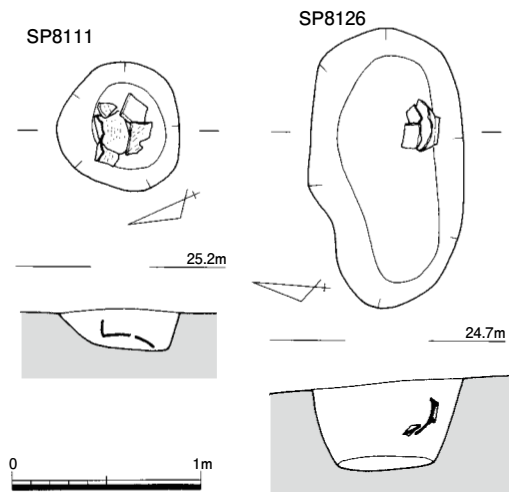


Fig.83 8区遺構実測図(1/40)

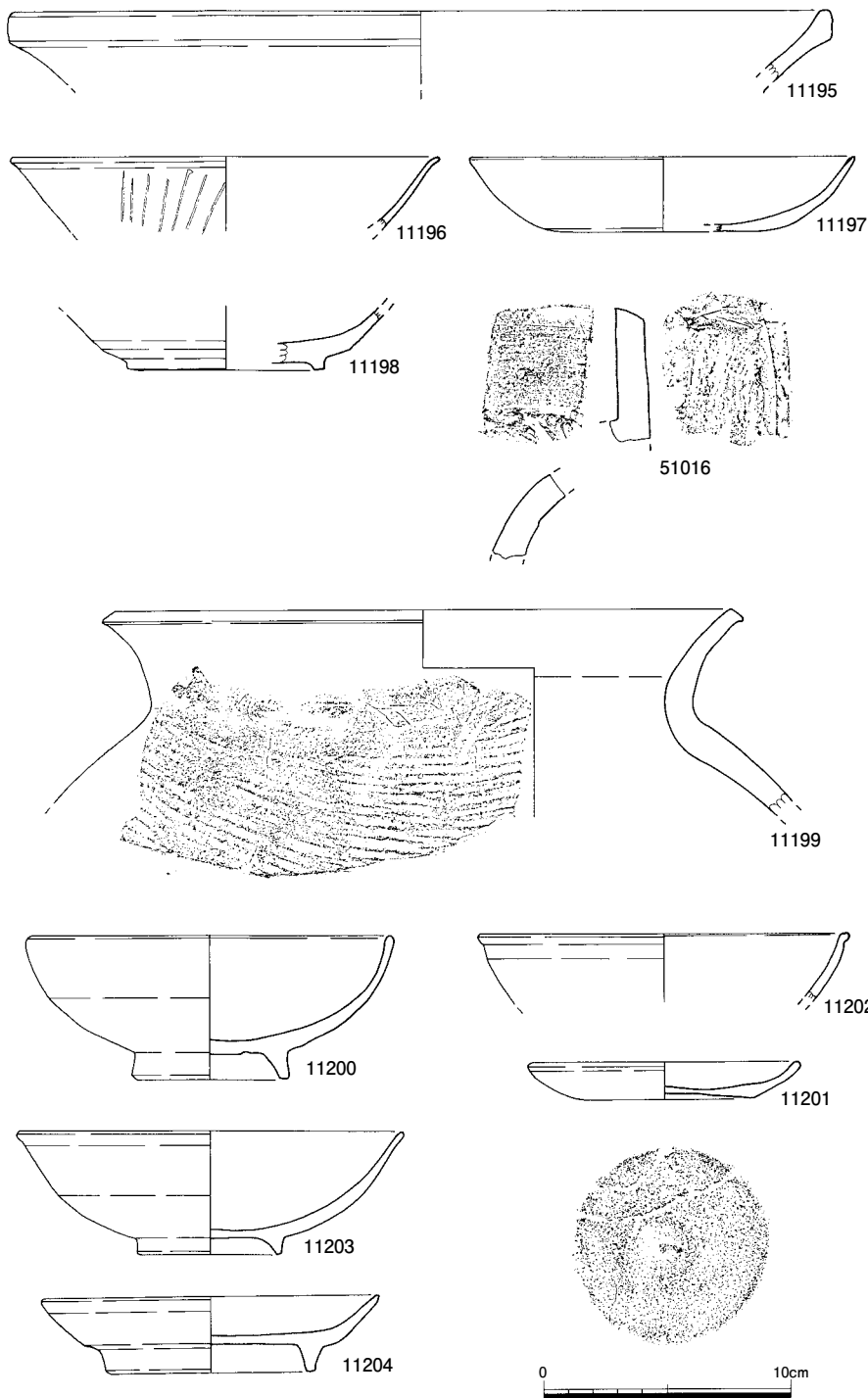


Fig.84 8区出土遺物実測図(1/3・瓦は1/4)

墓壙掘方は隅丸長方形で、床面は楕円形に近い。規模は遺構面で全長1.8m、幅90cm、墓壙床面で長さ1.15m、幅45cmである。壁面は床面からやや開き気味に立ち上がり、墓壙西側では上端が崩れている。2基の柱穴と切りあっており、墓壙が柱穴より先行する。遺構内からは陶磁器の破片が出土したが、図示できるものはない。素口縁の白磁小片を確認しているが、墓葬に直接伴うものではなく、埋土に混入したものとみられる。

SR8016

墓壙掘方は隅丸長方形で、墓壙北側上部にテラスがあり、別の土坑が切りあっているとみられる。

着しており、棺材か化粧箱の板材とみられる。木質を除去していないため、刀の正確な形状は把握できないが、現状で観察した結果、フクラ切先で、鏝はなく、両関とみられる。

31003～31005は鉄釘で、床面上で検出した。いずれも断面は四角形で、31004は釘頭部が残る。木質が付着するものはない。

4 その他の土壙墓 (Fig.82)

SR8002

長方形の浅い皿状の遺構で、土壙墓が削平されたものとみられる。全長1.8m、幅90cmで、床面はほぼ水平である。墓壙内からは陶磁器の破片が出土したが、図示できるものはない。

SR8003

SR8002に切られる。平面形は不整形で、遺構下部で箱形の墓壙を確認した。規模は遺構面で長さ2.2m、幅1.2m、墓壙床面で長さ1.4m、幅40cm。床面はほぼ水平で、壁面は開き気味に立ち上がる。遺構内からは陶磁器の破片が出土したが、図示できるものはない。

SR8004

遺構面で全長2.1m、幅90cm、墓壙床面で長さ1.4m、幅40cmである。床面は平坦で、壁面は開き気味に立ち上がる。柱穴と切りあっており、墓壙が柱穴から先行する。墓壙内からは陶磁器の小片が出土したが、図示できるものはない。

SR8022

楕円形の墓壙をとる土壙墓。全長1.3m、幅45cm、墓壙底面の長さは1.1m、幅40cmで、他の土壙墓と比較して若干小型である。床面は平坦で、西側に1段高いテラスをもつ。覆土は灰褐色土を主とし、炭化物を含んでおり、東側の土坑群に伴う炭化物が流入した可能性がある。

出土遺物 (Fig.84) 11195は捏鉢口縁部破片で、小片である。東播系とみられる。

SR8028

墓壙形態は長方形で、北東側は柱穴によって切られる。規模は遺構面で全長1.8m、幅60cm、墓壙床面で長さ1.6m、幅40cmである。床面は東側がやや上がり、壁面は床面は開き気味に立ち上がる。遺構内からは陶磁器の破片が出土したが、図示できるものはない。

5 掘立柱建物

SB8201

調査区北側で確認できた掘立柱建物で、北西端は造成段によって削られている。建物規模は東西5.8m、南北3.8mである。桁行3間、梁行2間で、柱間寸法は桁行1.9～1.95m、梁行1.8～2.0mである。柱穴は直径30～50cmで、いずれもほぼ円形である。

出土遺物 (Fig.84) 建物南東側の柱穴SP-8117からは図示可能な遺物が2点出土した。11202は土師器碗で、口縁端部は短く外反し、体部は丸みを持つ。小片で摩滅著しい。11201は土師器皿で、底部は回転ヘラ切り。

SB8202

調査区北端に位置する掘立柱建物で、SB8201と建物方向を違えて重複しており、北側部分は造成段によって削られている。建物規模は東西6.4m、南北3.8m以上であることが確認できる。調査区内で桁行3間、梁行2間以上を構成する柱穴が遺存しており、柱間寸法は桁行2.0～2.2m、梁行1.8～2.0mである。柱穴は直径15～60cmで特に西側梁行中央の柱穴が大型であるが、全体に小型の柱穴が多い。

SB8203

調査区北西側で確認できた掘立柱建物で、南北棟である。建物規模は南北3.5m、東西2.1mで、桁行2間、梁行1間である。柱間寸法は桁行1.55～2.0m、梁行2.1mである。柱穴は直径20～40cmで、南東隅の柱穴が隅丸方形で他の柱穴は円形である。建物軸がSB8201と方向が近く、同時期にSB8201の付随建物として存在していた可能性がある。

6 その他の遺構・遺物 (Fig.83)

SP8111

調査区南西側で検出したピットで、内部から須恵器甕の破片が集中して出土した。破片は相互に接合せず、遺構内で土器が破碎された状況は認められなかった。このことから、別の場所で破碎された土器の一部をこのピットに埋納したものとみられる。

出土遺物 (Fig.84) 11199は須恵器で甕形土器。口縁は外反し、端部は面取りを施して整える。胴部は丸く膨らむものとみられ、外面は横方向の平行タタキ。内面はタタキ当て具痕をナデ消している。

SP8126

楕円形のピットで、長さ74cm、幅40cm、遺構面からの深さは25cmである。SB8201・8202のほぼ中央に位置する。床面から10cmの高さで土師器碗が横置の状態出土した。

出土遺物 (Fig.84) 11203は土師器碗で、内面が黒色に処理された、いわゆる黒色土器A類にあたる。体部は浅く、口縁部は外反気味に立ち上がる。高台は低く小さい。12世紀代のものであろう。

その他の遺物 (Fig.84)

11196はSK8025出土の白磁碗。体部は浅く、直線的に開く。外面に縦方向の櫛描文が施文される。釉は灰白色で厚い。11197はSK8026出土の土師器坏。内外面とも摩滅著しい。SK8025・8026はSB8203内に位置する不整形土坑。11198は青磁碗でSK8027出土。高台は低く、釉は灰緑色で高台外側まで施釉され、畳付と高台内側は露胎。51016は丸瓦で瓦当との接合部にあたり、SK8027出土。凸面は横ナデ、凹面には布目痕が残る。SK8027はSR8014を切る形で西側に隣接する土坑。西側を造成段で切られる。

11200は土師器碗でSP8113出土。体部は丸く、底部には高台を貼り付ける。11204は土師器台付坏でSP8127出土。体部は浅く、高台は径が広く高めである。

3) 小 結

8区の中で特筆すべき遺構・遺物はSR8014・SR8019・SR8020の3基の大型の墳墓とそれに伴う副葬品であろう。墓葬の規模や副葬品の質からみて上層階層の墓地であったことは疑いない。時期的には、SR8014が蔵骨器に使用された四耳壺より11世紀後半～12世紀前半と推定される。SR8019が墓壙内から出土した白磁より12世紀後半～13世紀前半に築造されたものと考えられ、SR8020は13世紀後半から14世紀前半とみられる。

副葬された土器の様相からみる限り、各墓葬の間には各々100年前後の時間差があり、同一家族の累代墓とするには不自然である。また、いずれの墳墓にも湖州鏡が副葬されていること、小壺等の化粧用具をもつものがあることなど、被葬者の性別が女性であることを暗示する要素が見られる。このような点を考慮すると、これら3基の墳墓の被葬者は、一族累代の中で特殊な地位にあった女性の墓ということが言えるだろう。「特殊な地位」の具体的な内容については現段階では明らかにできない。しかし、墳墓の立地が生水地区の建物群を見下ろす位置であり、さらに南西方向に香椎宮を望む場所であることなど、被葬者の地位を想定する材料には事欠かないと思われる。

(9) 9区の調査概要

1) 概要

9区は8区の北側と西側に隣接している区画で、8区とは約1.5mの高低差がある。標高は最高所で23.3m、最も低い地点で21.7mで、東から西、南から北へ緩く傾く斜面上で遺構を確認した。

8区との境界に1.5mの段差があること、9区の遺構面の大半が花崗岩盤であることから、9区全体が大規模な造成によって形成されたことがわかる。9区の北側は更に段差がついて里道に続くなど、9区の周辺は大規模な造成が行われていることが伺える。

9区で検出した遺構は、溝状遺構1基、階段状遺構1基、土坑、柱穴である。検出できた遺構が、造成以前のものか造成以後に作られたものかで遺構の意味合いが大きく異なることが考えられる。

2) 遺構・遺物

SD9001 (Fig.85)

調査区北側で検出した溝状遺構。調査区内で25mの範囲を確認しており、さらに北側と西側に延びていたと考えられるが、いずれの方向も造成によって削られており、溝は遺存していないとみられる。溝の形状は直線的で、東側端部では北側に屈曲する形状である。断面形状は明瞭な箱形やV字形などの溝特有の形状とはならず、溝の南側面は明瞭に落ち込むものの、北側面はごく緩く立ち上がり、断面形はL字形に近い形状になっている。また、溝の西端はごく浅く、両側の壁面と床面の境界が不明瞭である。

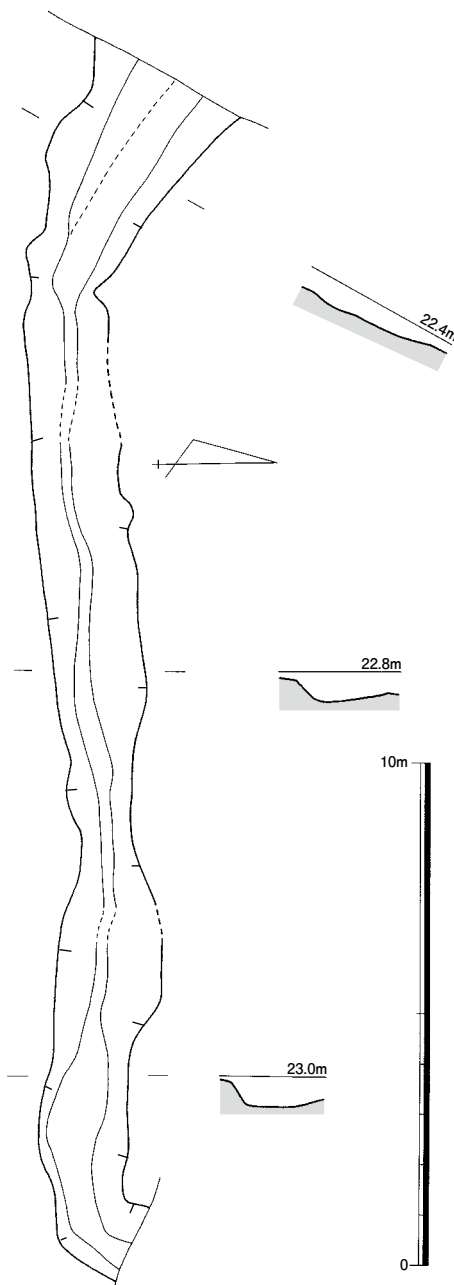


Fig.85 SD9001遺構実測図(1/150)

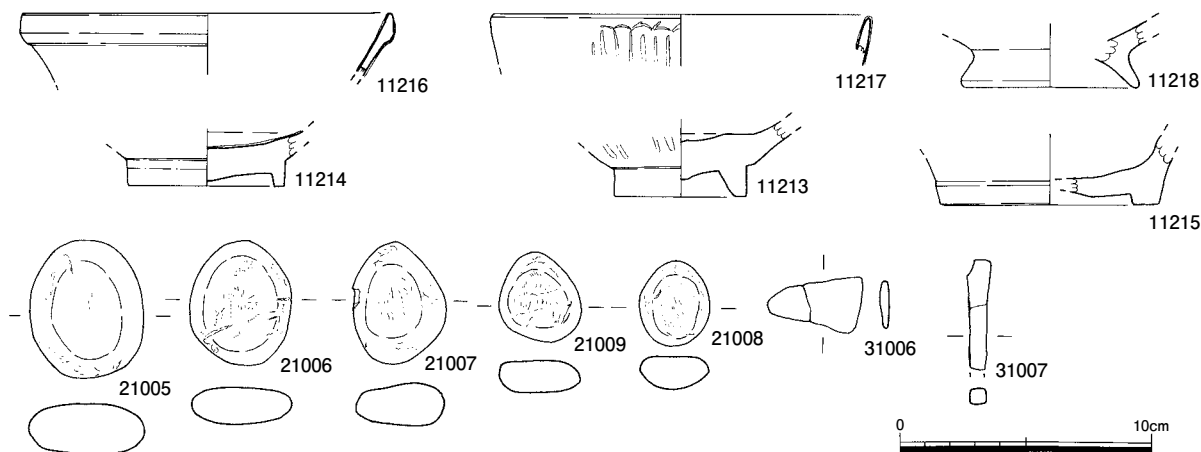


Fig.86 SD9001出土遺物実測図(1/3)

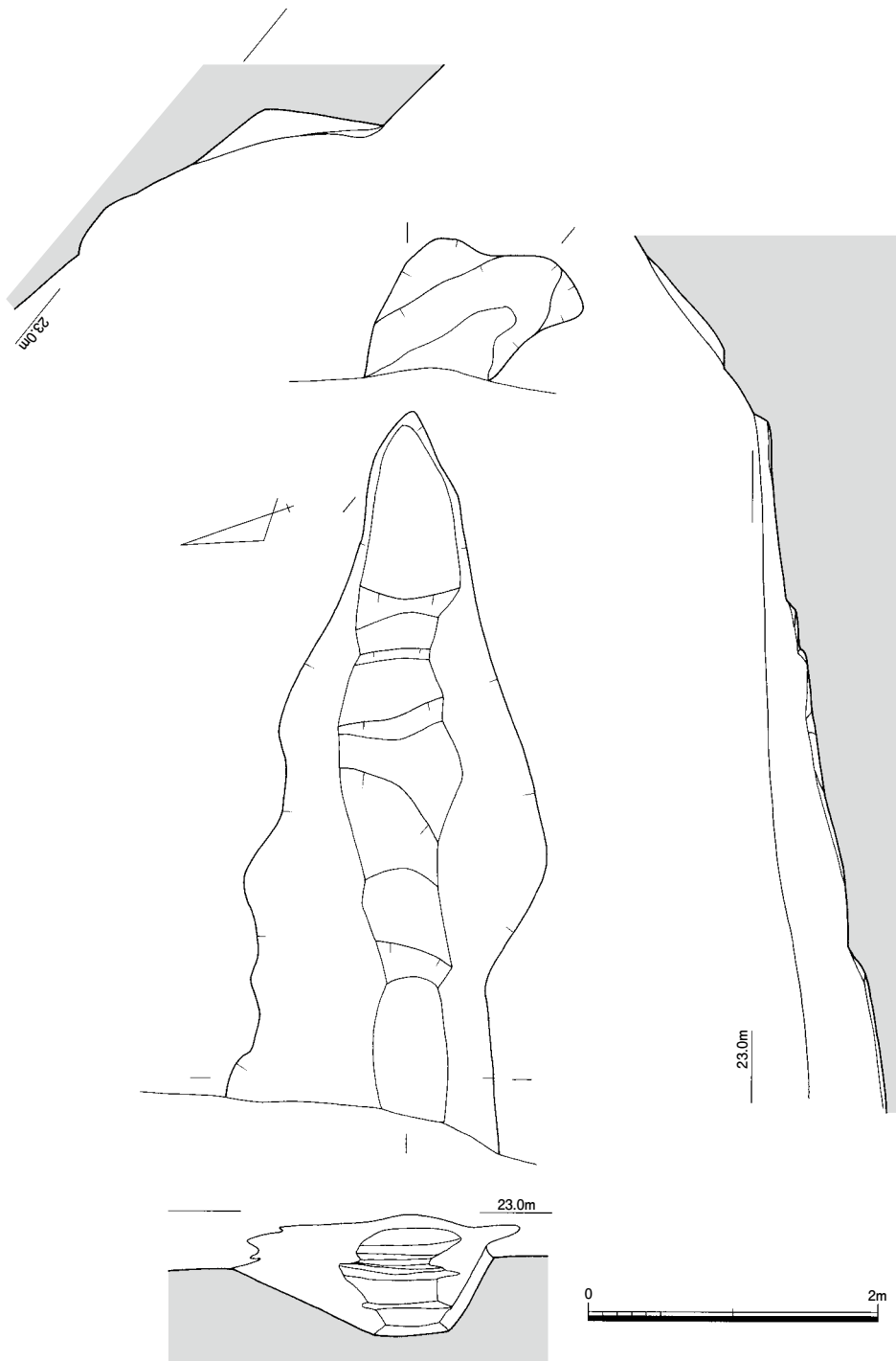


Fig.87 SX9002遺構実測図(1/50)

出土遺物 (Fig.86)

11216・11214は白磁碗。11216は口縁部で、口縁部は玉縁状につくる。釉は淡青灰色で厚く施釉される。11214は底部で高台は厚く削り出し、畳付幅は狭い。釉は淡青灰色で、外面は高台上端まで施釉される。11217・11213は青磁碗。11217は口縁部で、外面は口縁直下に弧線を描き、その下部に縦方向の線を描く。弧線と縦線は対応しない。釉はオリーブ灰色で内外面とも厚く施される。11213は底部で、外面に縦方向の櫛描文が施され、同安窯系青磁とみられる。釉は明緑灰色を呈し、外面は露胎で、内面には薄く施釉される。11218は土師器碗。高台は外側に大きく開く。11215は褐釉壺の底部。外面は高台部も含め回転ヘラ削りで仕上げられ、内面は回転ナデ。釉は褐灰色を呈する。

色を呈する。

21005～21009は石礫とみられる丸石。大きさは3.4～5.5cm、重量は20.9～86.7gと差がある。加工痕はなく、自然の川原石を使用したものとみられる。実際に投石されたものがこの溝に堆積したものか、あるいは防御用として近隣に貯蔵されていたものが流れ込んだものであろう。

31006は鉄製品の破片。板状で、用途不明。31007は鉄釘で先端部を欠く。

SX9002 (Fig.87)

調査区西端で検出された溝状の遺構で、東西2つの部分に分かれる。床面の形状からみて、階段状の遺構と推定される。

東側部分は8区への斜面部分にあたり、斜面を上るような形状である。幅は主軸に直行する方向で80cm、床面幅は50cmである。東側と西側の比高差は85cmで、床面の傾斜は約40度でかなりの急勾配である。西側部分との接合部は造成のために削平されているが、接合部分で南に屈曲しているようにみられる。

西側は直線的に延び、調査区内で長さ4.9mを確認する。床面は東から西に向かって傾斜し、従って遺構面での検出幅は西側ほど広がり、西端部で幅1.9mを測る。床面は幅50～80cmで、東側と西側の比高差は90cmで、東側よりは傾斜が緩い。床面には浅い段差が5段確認でき、この段差よりこの遺構が階段として使用された遺構であることが推測できる。

出土遺物 (Fig.88) 11220は白磁碗口縁部で、小片である。大きめの玉縁状口縁をつくり、釉は灰白色で厚く施釉される。11219は青磁皿。体部は屈曲して外反気味に開く。釉はオリーブ灰色で、外面は体部中位まで施釉される。51018は丸瓦。凸面には斜格子文タタキ痕が残る。凹面には布目痕がつく。

SX9003 (Fig.89)

SX9002北側で検出した円形の土坑。南北長80cm、東西長70cm、遺構面からの深さは10cmで、浅い皿状を呈する。SX9002に隣接し、関連する可能性がある。出土遺物は小片で、図示できるものはない。

その他の遺物 (Fig.90) いずれも遺構面上で検出したもの。11222は白磁碗。口縁部は短く外反し、体部は浅い。釉は灰白色で、厚く施釉される。11223は白磁小壺で、合子の可能性もある。体部は丸く、高台は低く小さい。釉はオリーブ灰で、高台上端まで施釉され、高台外面と高台内側は露胎。11221は青磁碗底部で、体部は丸く、高台は厚く削り出す。釉は灰オリーブ色で厚く施釉され、外面は高台外側まで施される。内面見込みに砂目痕が残る。

3) 小結

検出した遺構のうち、SX9002は削平以前に掘削された遺構である可能性が出土遺物から推定でき、11世紀後半～12世紀前半には存在した可能性がある。すなわち、8区の墳墓群と同時期に存在したことが想定でき、SX9002が8区へ登る階段状遺構である可能性を考慮すると、この遺構が墳墓群への参道だったことも考え得る。

SD9001からは15世紀に下る青磁碗破片が出土しており、SD9001がこの時期まで下ること、さらには9区を形成した造成工事が15世紀に行われたことも示唆している。SD9001から石礫が出土していることは、当時の社会状況を反映しているようで、非常に興味深い。

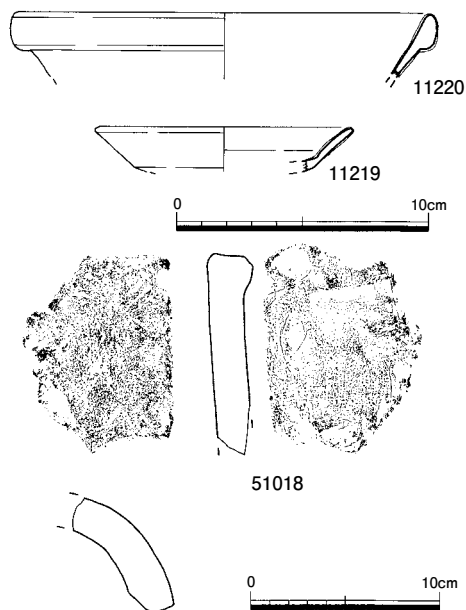


Fig.88 SX9002出土遺物実測図(1/3・瓦は1/4)

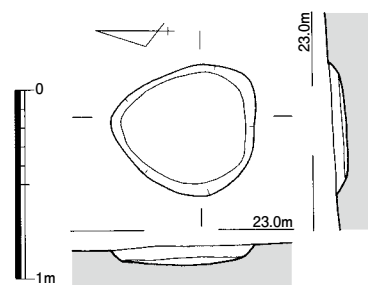


Fig.89 SX9003遺構実測図(1/40)

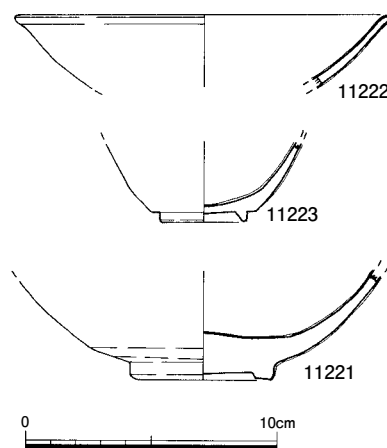


Fig.90 9区出土遺物実測図(1/3)

(10) 10区の調査概要

1) 概要

10区は9区の西側に位置する。道路予定部分が調査区として設定され、調査面積は148.8㎡である。9区と10区の間には直線的な段が形成されており、その高低差は4mである。

遺構面は20cm程度の厚さの表土の直下にある未風化の頁岩岩盤で、造成によってこの範囲が相当の削平を受けていることが確認された。調査区北側ほど頁岩の風化度合いが少なく、削平を大きく受けていると推定できる。遺構面上層は暗褐色土、耕作土が薄く堆積している。

出土した遺構は土坑、ピットの他、竪穴建物1基、土壙墓1基、門とみられる2基1対の土坑である。調査区の範囲が狭く、大型の土坑は調査区外に及んだため、部分的な調査にとどまっている。

2) 遺構・遺物

1 土坑・土壙墓 (Fig.93)

SR10001

調査区南端で検出した土壙墓。北側は別の土坑と切りあっており、土壙墓が土坑に先行する。墓壙東側は調査区外に及ぶ。床面は平坦で、壁面は小口部分で傾斜が緩く立ち上がる。遺構内から土師器破片などが出土したが、小片で図示できない。

SK10002

調査区南西側で検出した土坑で、西側は調査区外に及ぶ。平面形は不整形で、北側と南側に土坑状の掘り込みがみられる。北側の掘り込みは浅い箱形を呈し、人為的な要素が強い。南側の掘り込みは床面に大きな凹凸があり、木根の可能性もある。

出土遺物 (Fig.94) 11224・11225は土師器皿。11224は体部が低く立ち上がり、底部は回転糸切り。11225は底部は回転糸切りで板目がつく。

SK10003

調査区南側で検出された土坑。検出面で長さ90cm、幅70cmの隅丸長方形、床面で長さ45cm、幅30cmの楕円形を呈する。遺構面からの深さは70cmで、他の遺構に比べて深く、SK10001、SK10010のような土壙墓と推定される土坑とほぼ同じ深さであることから土壙墓の可能性もある。

出土遺物 (Fig.94) 11226は土師器坏。体部は直線的に開く。底部は回転糸切りで、周縁部に板目がつく。11227は土師器碗の底部。高台は外側に開き、やや高く作られる。

SK10005

調査区中央部で検出された楕円形の土坑で北西側を他の遺構に切られる。全長1.25m、幅60cm、床面の長さ1.2m、幅45cm。床面北側に柱穴を1基確認する。床面は平坦で、全体に箱形を呈する。遺構形状から、土壙墓の可能性を指摘しうる。

出土遺物 (Fig.94) 11230～36は土師器皿。いずれも底部は回転糸切り。11237は土師器坏。体部は直線的に開き、底部は回転糸切り。11238は青磁碗。外面に鎬蓮弁文を片彫りで施す。釉は灰緑色でやや厚めに施される。

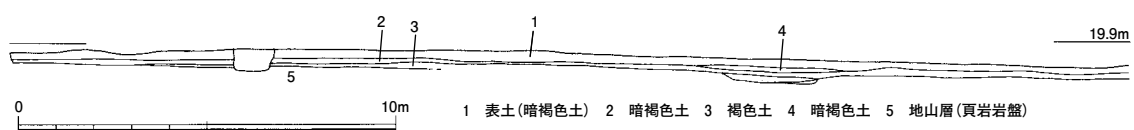


Fig.91 10区東壁土層図(1/200)

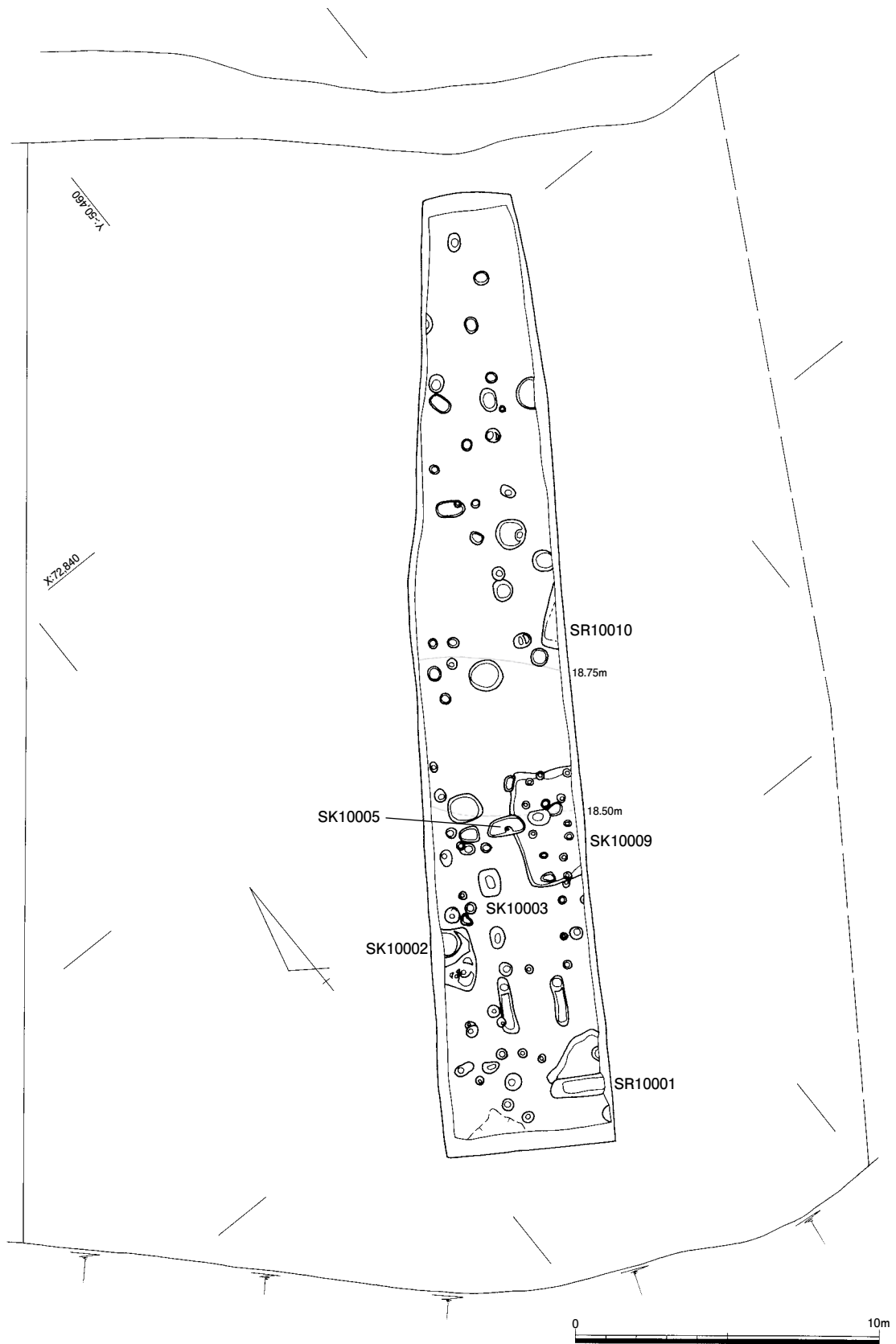


Fig.92 10区全体図(1/200)

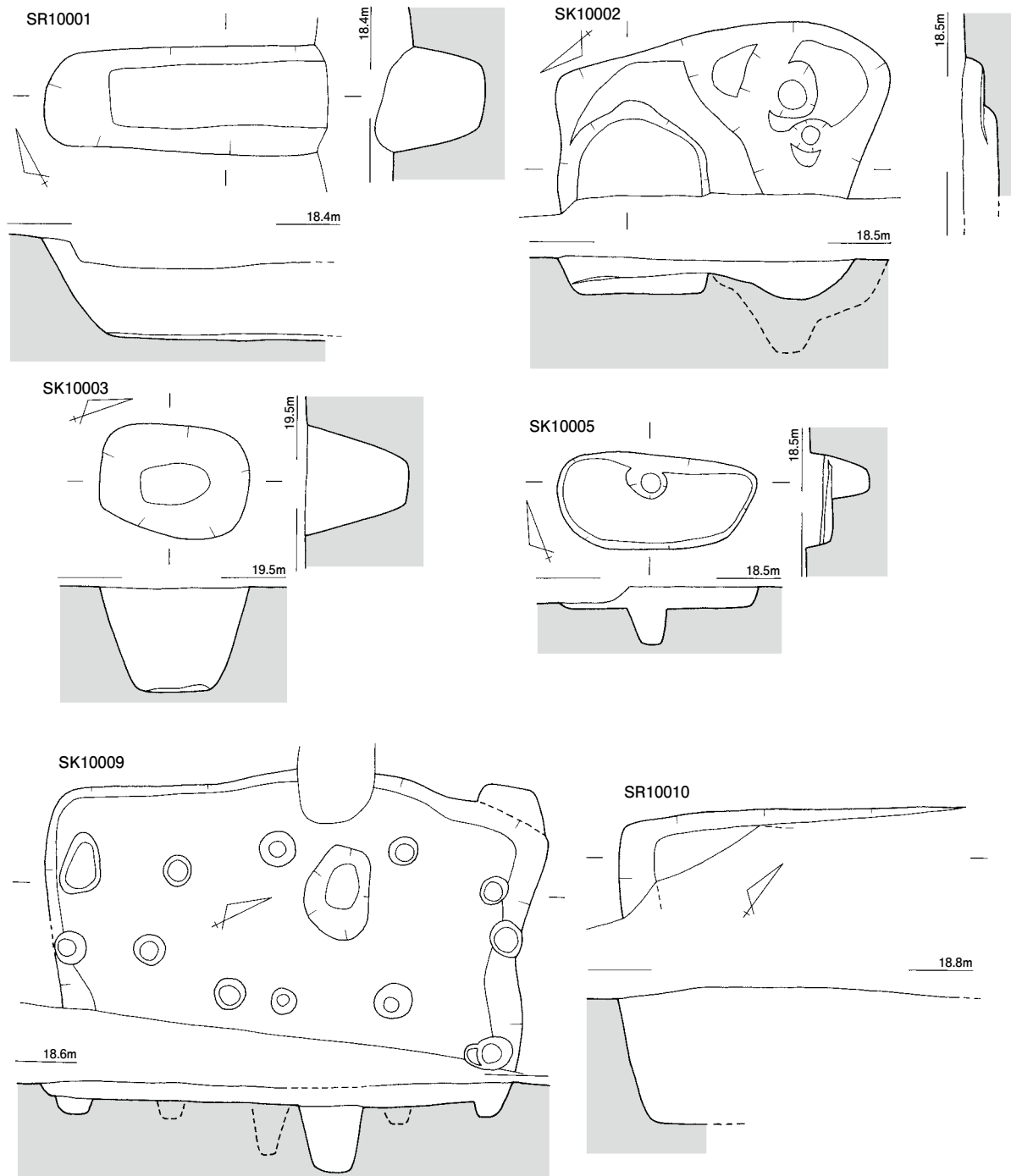


Fig.93 10区遺構実測図(1/40)

SK10009

調査区南側で検出された土坑で、全体は方形の竪穴建物と考えられる。遺構規模は南北方向で3.6～3.9m、遺構面からの深さは15cmである。床面は平坦で、南側がわずかに低くなる。床面上に柱穴が多数確認される。

出土遺物(Fig.94) 11240は土師器皿。口縁端部を欠いているため、直径は不明。内外面の風化が進み、底部調整も不明である。11239は土師器坏。これも内外面の風化のため、調整は不明である。

SR10010

調査区中央部東側で検出された土坑で、調査区内で確認できた範囲は西側コーナー部分のみである

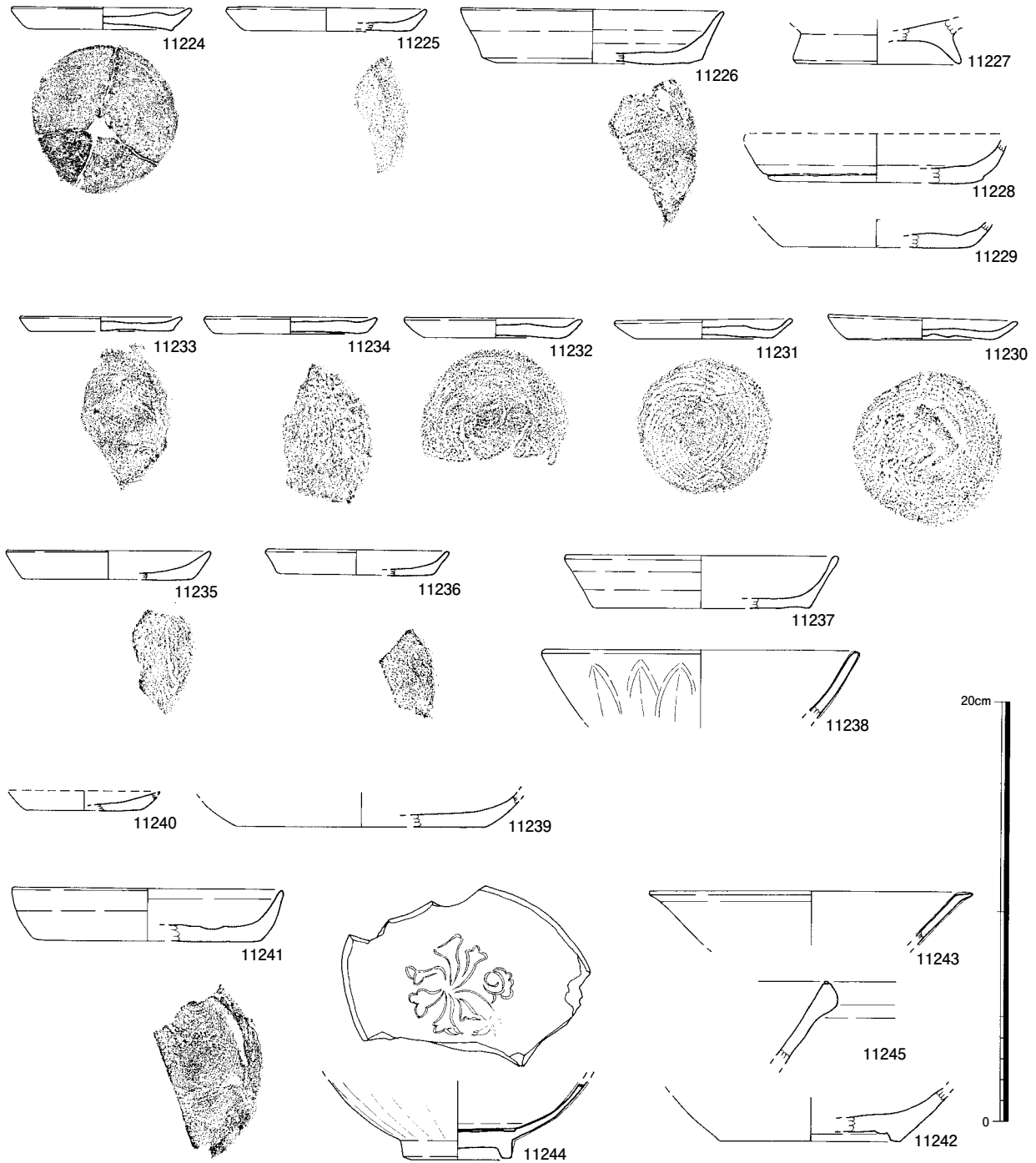


Fig.94 10区出土遺物実測図(1/3)

ため、遺構の規模は不明。遺構面からの深さは85cmである。床面は平坦になるとみられ、壁面は床面から屈曲して直線的に立ち上がる。遺構形状からみて土壙墓と推定される。

出土遺物 (Fig.94) 11241は土師器坏。体部は太めで、底部は回転糸切り。11244は青磁碗。内面見込みに印判で花文を施す。釉は灰緑色で、外面は高台外側まで厚く施釉され、畳付と高台内部は露胎。11243・11245は白磁碗。11243は口縁部が短く外反し、釉はオリーブ灰色で厚く施される。11245は青灰色釉。11242は陶器壺。四耳壺の底部と推定できる。内外面とも無釉で、胎土は灰白色を呈する。

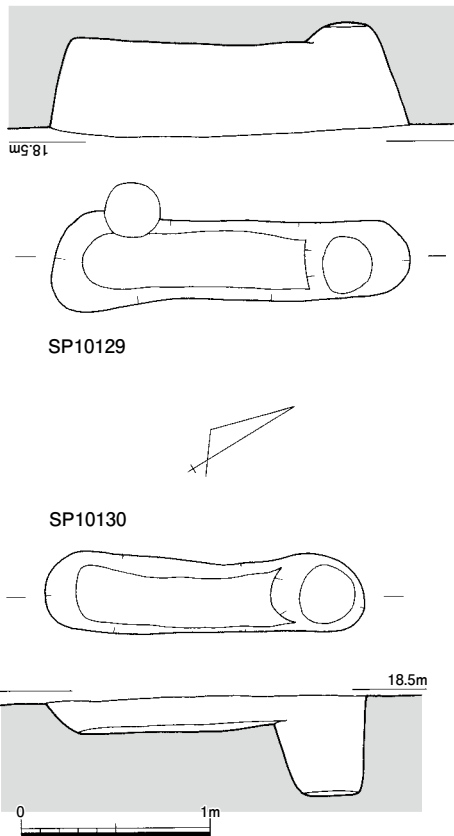


Fig.95 SP10129・SP10130遺構実測図(1/40)

2 その他の遺構

SP10129・SP10130 (Fig.95)

調査区南側で検出した1対の柱穴である。南西側に溝状の掘方が延びており、この部分に控え柱が立てられていたことが考えられ、門遺構と推定した。門の方向は丘陵南側斜面に向いている。遺構内からは土師器の破片が出土しているが、小片で図示できず、時期も不明である。

3 その他の遺物 (Fig.96)

11246はピット出土の土師器坏。底部は回転糸切りで板目がつく。以下は遺構面上層からの出土。11248・49は土師器皿。小型で、底部は回転糸切り。11247は土師器大皿。11250は土師器坏。風化で表面調整は不明。11255は白磁碗で釉は淡明青色。11254は青磁皿。釉は灰色で、外面は体部中位まで施釉される。11253は青磁碗。内面に篋描文が施される。釉は灰緑色。11252は青磁碗で、釉は灰オリーブ色で厚く施される。11251は陶器捏鉢。東播系で灰白色の胎土である。

3) 小 結

調査の結果、造成面に濃密に遺構が存在することが確認された。年代が直接判明する遺構は少ないが、遺構面上層に包含される土師器皿が15世紀以降に下る可能性があることなどから、段造成を行い遺構が築かれた年代を14世紀後半～15世紀と想定したい。

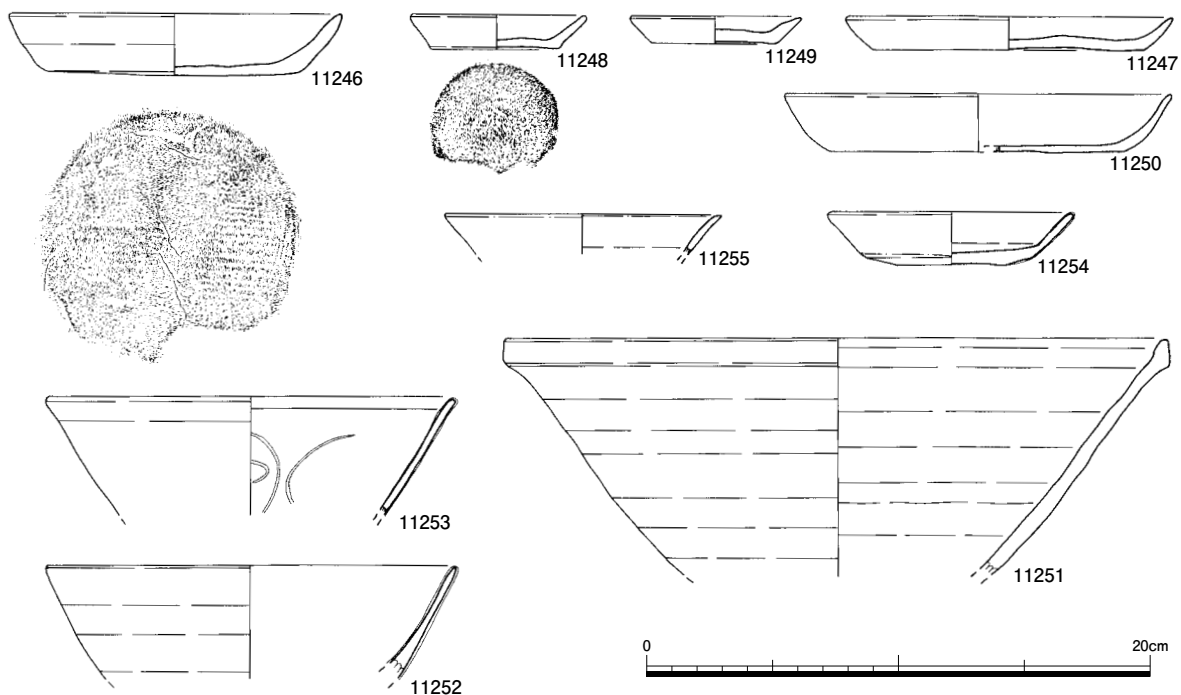


Fig.96 10区出土遺物実測図(1/3)

3. 自然科学分析

炭化物の放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。試料は、4区竪穴住居SC40007・SC40009、中世墓SR8014・SR8019で採取した炭化物である。

この測定方法を用いた場合、分析試料が木炭の場合においては確実な外皮部分を測定しない限り、遺構実年代より古い年代が示される。

パリノ・サーヴェイ株式会社からは詳細な報告書が提出されているが、ここでは報告書から抜粋した測定結果を掲載する。

No.	遺構	状態 (樹種)	樹種	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 BP	Code No.
1	4区竪穴住居跡 (SC4009)	炭化材	クスノキ科	AaA	1,630±20	-28.58±0.39	1,570±20	IAAA-110720
2	4区竪穴住居跡 (SC4009)	炭化材	クスノキ科	AaA	1,650±20	-29.19±0.33	1,580±20	IAAA-110721
3	4区竪穴住居跡 (SC4009)	炭化材	アカガシ亜属	AaA	1,640±20	-29.28±0.35	1,570±20	IAAA-110722
4	4区竪穴住居跡 (SC4007)	炭化材	スダジイ	AaA	1,530±20	-26.76±0.44	1,500±20	IAAA-110723
5	4区竪穴住居跡 (SC4007)	炭化材	スダジイ	AaA	1,650±20	-29.93±0.28	1,570±20	IAAA-110724
6	4区竪穴住居跡 (SC4007)	炭化材	アカガシ亜属	AaA	1,610±20	-28.88±0.35	1,550±20	IAAA-110725
7	4区竪穴住居跡 (SC4007)	炭化材	モチノキ属	AaA	1,640±20	-30.99±0.32	1,540±20	IAAA-110726
8	8区墓墳 (SR-8014)	炭化材	サカキ	AAA	940±20	-28.25±0.29	890±20	IAAA-110727
9	8区墓墳下層 (SR-8014下層)	炭化材	サカキ	AaA	1,060±20	-32.95±0.35	930±20	IAAA-110728
10	8区墓墳 (SR-8019)	炭化物	—	AaA	1,910±20	-30.98±0.32	910±20	IAAA-110729

1)処理方法は、酸処理—アルカリ処理—酸処理(AAA処理)で、アルカリ濃度が1N未満の場合はAaAと表記している。

2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

4)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

Tab.2 放射性炭素年代測定結果

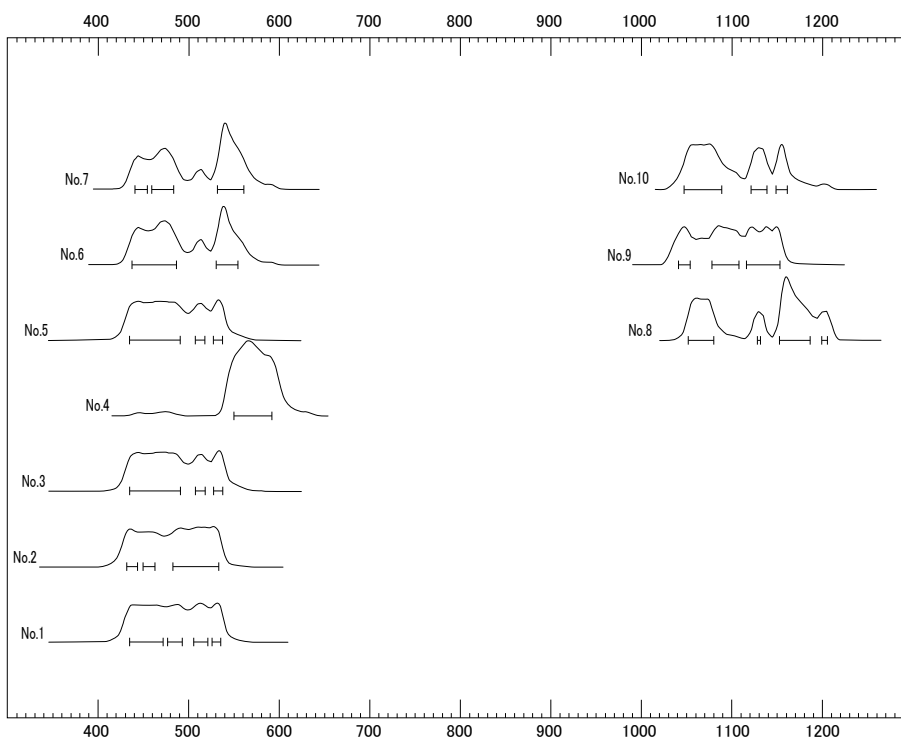


Fig.97 暦年較正結果

第Ⅳ章 結 語

本章では、香椎B遺跡におけるこれまでの調査成果を踏まえて、今回の調査成果をまとめると共に問題点を示し、今後の周辺地域における検討課題としたい。

1. 遺構変遷の概観

【古代以前】

旧石器時代からの遺物が出土していることから、本地域は古より人々が生活の場としていたことは明かであるが、遺構としては7世紀前半の大日古墳が最古であった。今回の調査で、人々の定住性を示す古墳時代の竪穴住居が丘陵裾部に展開し、集落規模で存在していたことが明らかとなった。ただし、この古墳時代の集落が後世の谷部における集落に連続していくものではない。

【11世紀後半～12世紀前半】

丘陵部に湖州鏡を副葬する火葬墓が設けられる。谷部は整地地業が行われ、掘立柱建物を中心とした施設が出現する。この時期の香椎廟は大宰府の擁護下に在ったことが軒丸瓦048A・049等から知ることができ、寺院の存在が十分に推定される。以前の想定より早い段階から谷部全体に生活遺構が広がっていたものと思われ、10世紀に遡る可能性を秘めている。

【12世紀後半～13世紀前半】

石積み基壇を持つ墓が丘陵に築かれる。谷部には谷を横断して区画された敷地に掘立柱建物を中心とした屋敷群が営まれ、隆盛期を迎える。

【13世紀後半～14世紀前半】

湖州鏡等を副葬する土壙墓が丘陵に築かれる。谷部には溝で区画された敷地に掘立柱建物を中心とした屋敷群が営まれる。

2. 課題

【建物群の性格】

12世紀～13世紀において谷部に展開する建物群は、その特異性が出土遺物の貿易陶磁器などから指摘されるとともに、香椎廟や大宰府との関連なくして存在しないことが言われている。さらに、13世紀の谷部に承天寺などと同じく、中国産軒瓦の出土を根拠として、谷部に中国産軒瓦で葺かれた伽藍が宋商人もしくは貿易関係者の援護により建立された可能性が高いことも指摘されている。今回の調査でも明確な根拠を見いだすことはできなかったが、これまでの想定よりも早い時期から形成されていたことは間違いない。

【被葬者の特異性】

小結で述べているように、丘陵で検出された三基の墓は埋葬形態が異なるものの、湖州鏡や多くの磁器を副葬し、被葬者が香椎廟に関連する特別な地位の女性であることを推定させる共通点を持つ。さらに、博多遺跡なみに貿易陶磁器の出土量を見せる谷部に形成された屋敷群の特異性と関係している可能性が高く、観世音寺再建の際に用いられた軒丸瓦と同じ範型の軒瓦が屋根を飾る建物との関連も考えられる。ただ、三基の埋葬年代は副葬された遺物から100年ほどの年代差を想定したが、一方で炭素年代測定が示す数値と合致しない試料が在ることから、その原因を明らかにする必要がある。

図 版 PLATES



(3区調査風景)



1960年(昭和35年)の調査地周辺地形と推定古代海岸線

【国土地理院所蔵写真】



2001年(平成13年)の調査地周辺地形と推定古代海岸線

【国土地理院所蔵写真】



1949年(昭和24年)の調査地と周辺字名

【国土地理院所蔵写真】



1949年(昭和24年)の調査地と周辺地形

【国土地理院所蔵写真】



1961年(昭和37年)の調査地と周辺地形

【国土地理院所蔵写真】



1975年(昭和50年)の調査地と周辺地形

【国土地理院所蔵写真】



1987年(昭和62年)の調査地と周辺地形

【国土地理院所蔵写真】



1998年(平成9年)の調査地と周辺地形

【国土地理院所蔵写真】



2004年(平成15年)の調査地と周辺地形

【国土地理院所蔵写真】



(1) 調査地調査前遠景(南から)



(2) 調査地遠景(南から)



(3) 調査地遠景(南から)



(4) 調査地遠景(南から)



(5) 調査地現況(南から)



(1) 調査地調査前遠景(南東から)



(2) 調査地遠景(南東から)



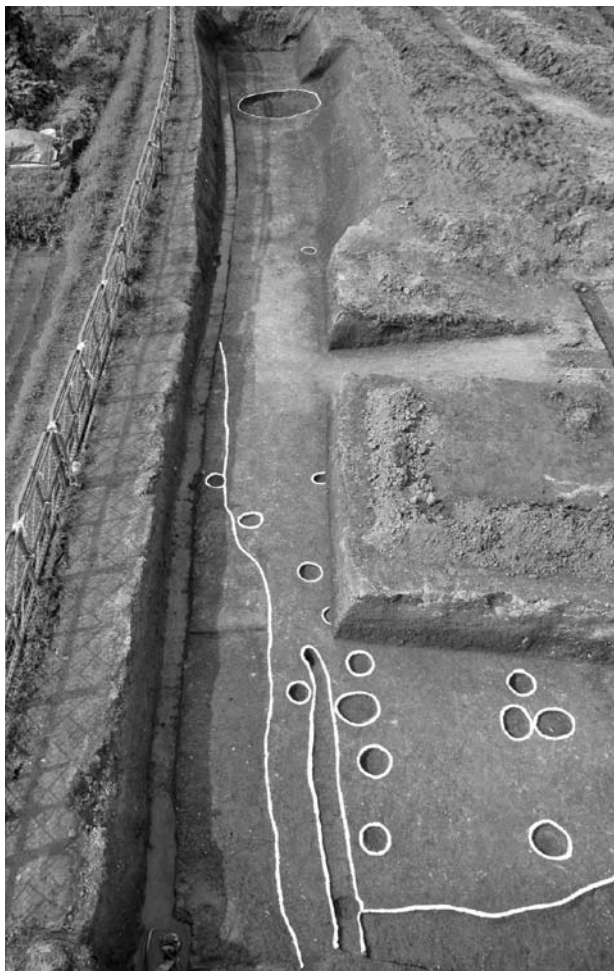
(3) 調査地遠景(南東から)



(4) 調査地遠景(南東から)



(5) 調査地現況(南東から)



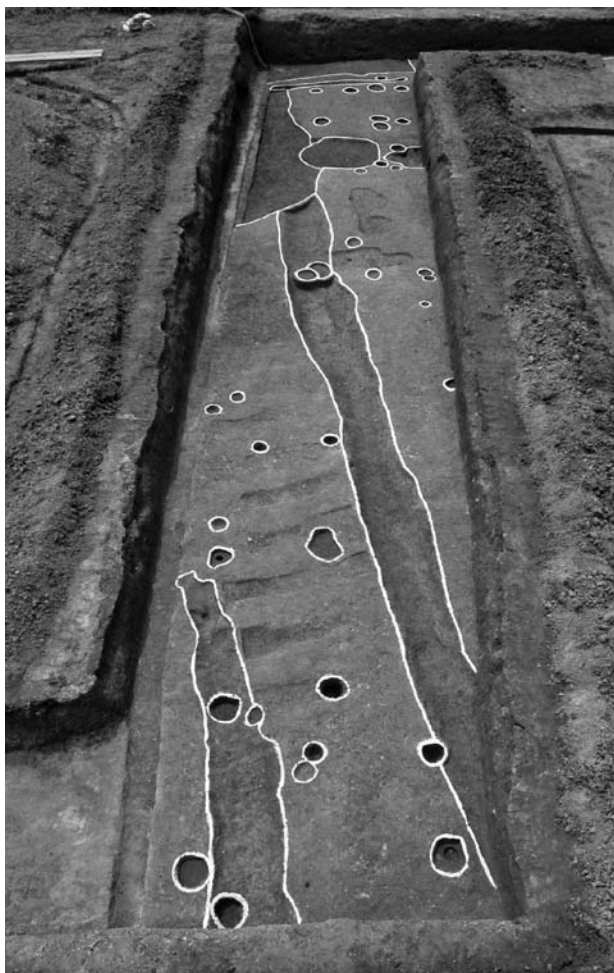
(1) 1区北部遺構検出状況(南から)



(3) SE1010検出状況(東から)



(4) SE1010堆積状況(東から)



(2) 1区南部遺構検出状況(東から)



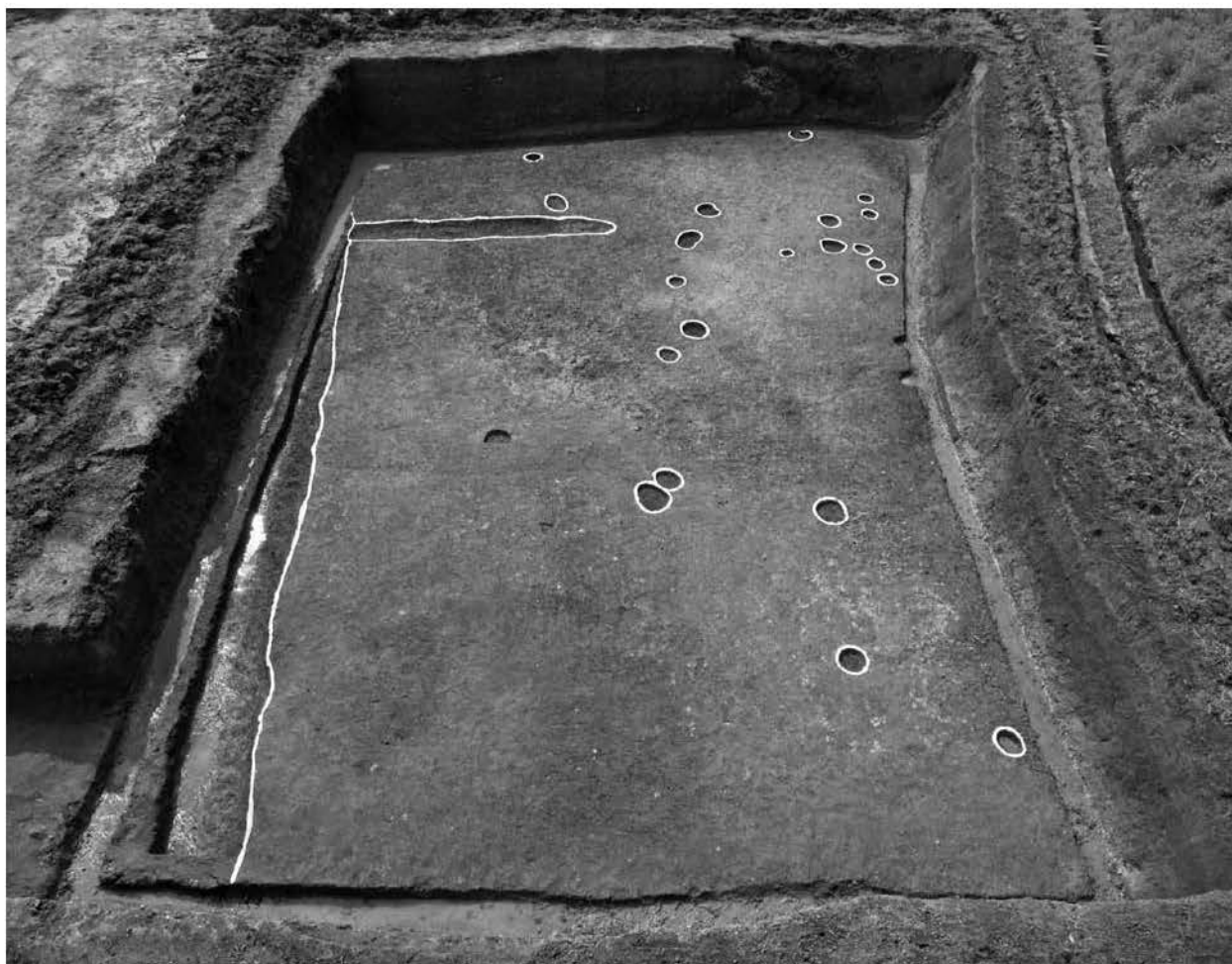
(5) SE1010完掘状況(東から)



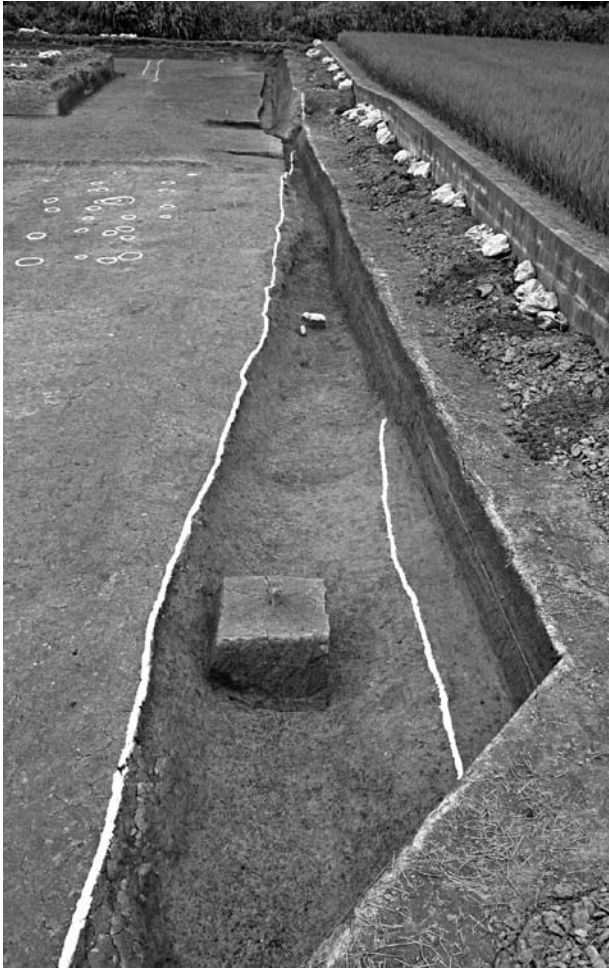
(6) SE1013堆積状況(北から)



(1)2区遠景(南から)



(2)2区遺構検出状況(東から)



(1) SD3001 (南から)



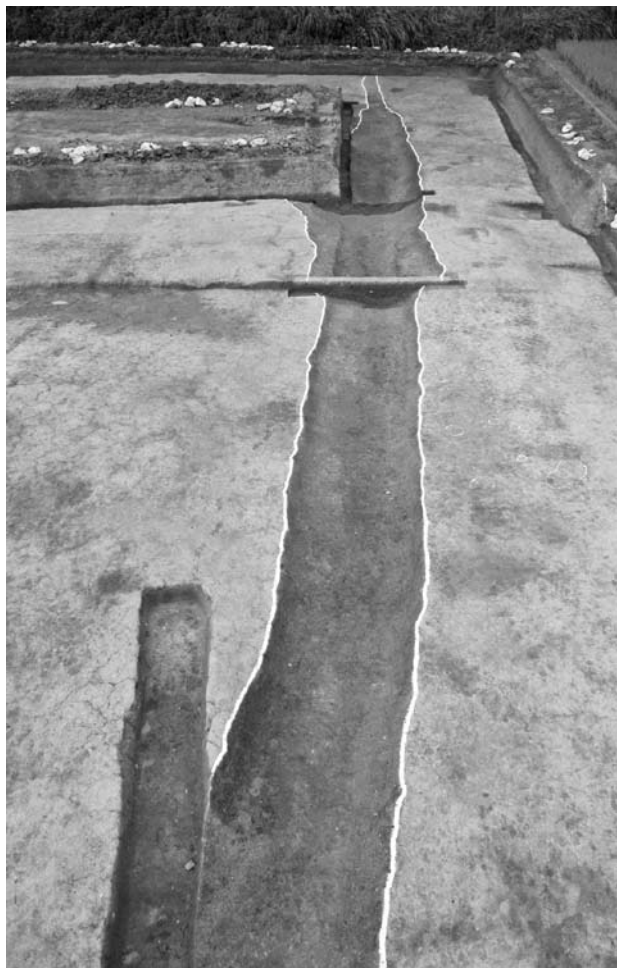
(2) SD3001土層 (北から)



(3) SD3002 (西から)



(4) SD3001・SD3003 (南から)



(1) SD3003(南から)



(2) SD3003土層(南から)



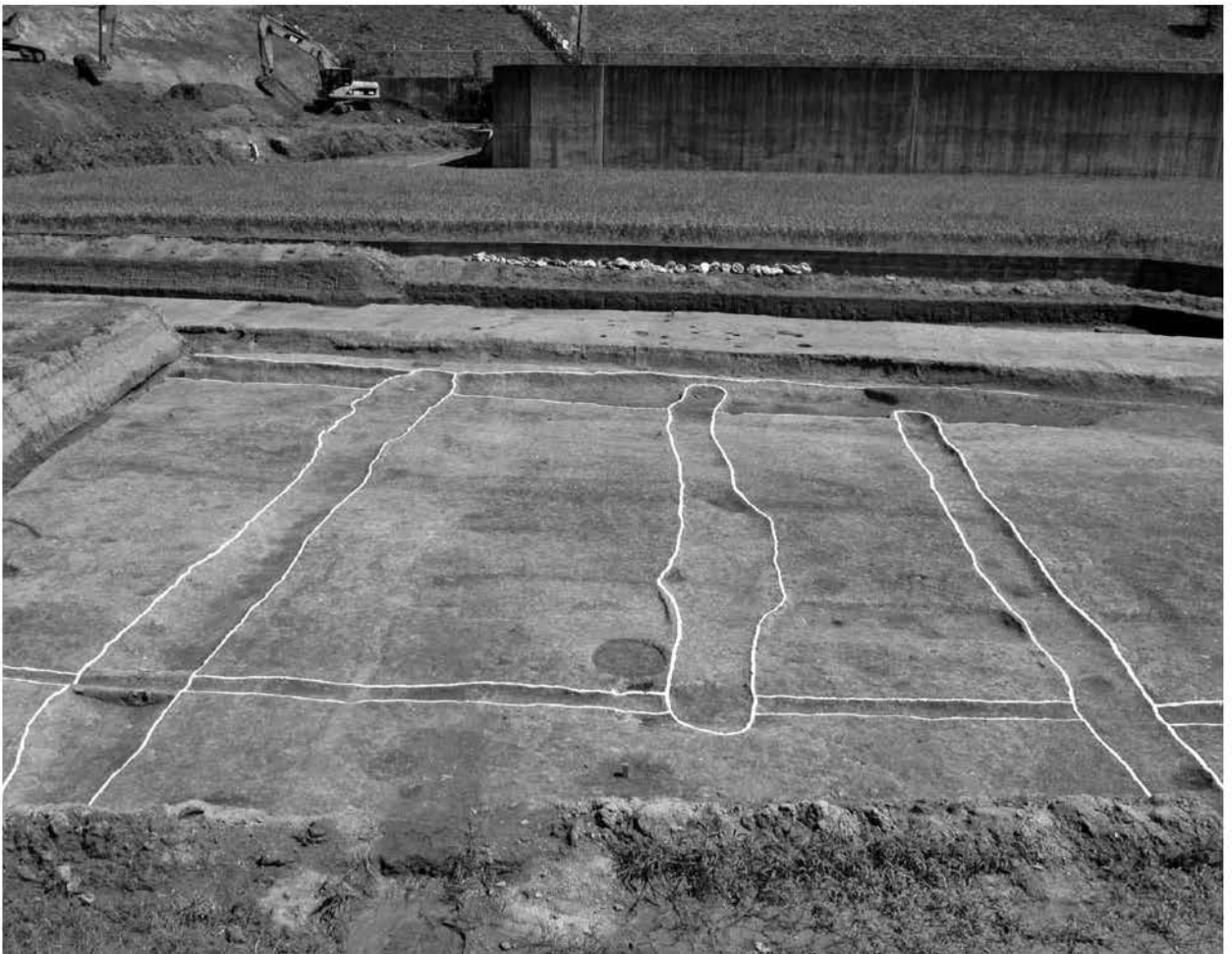
(3) SD3012(東から)



(4) SD3003・SD3012(北から)



(1) SD3004～ SD3007(南から)



(2) SD3004～ SD3007(西から)



(1) SD3010(北から)



(2) SD3008(南から)



(3) SD3010(南から)



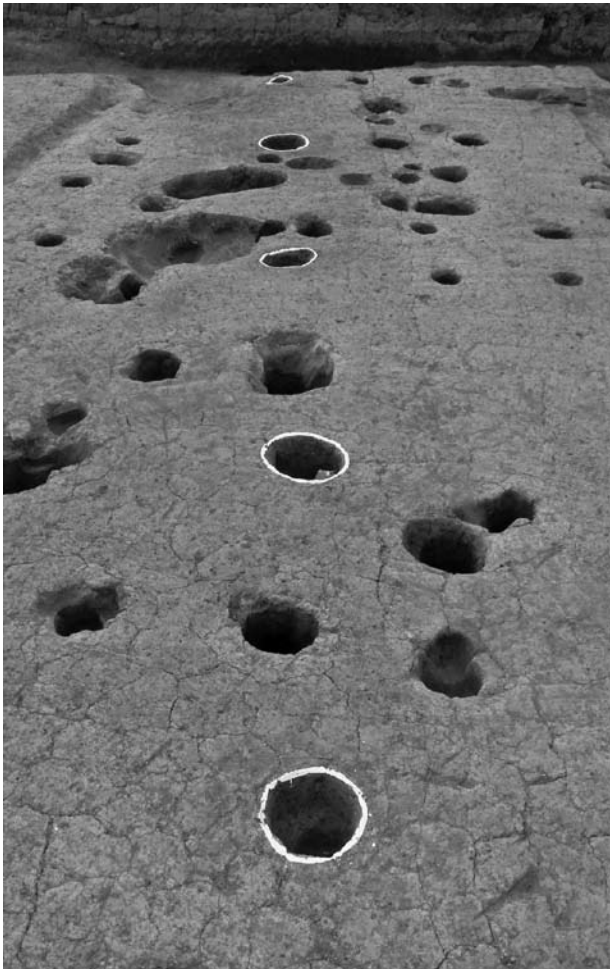
(4) SE3015(南から)



(5) SK3013検出状況(西から)



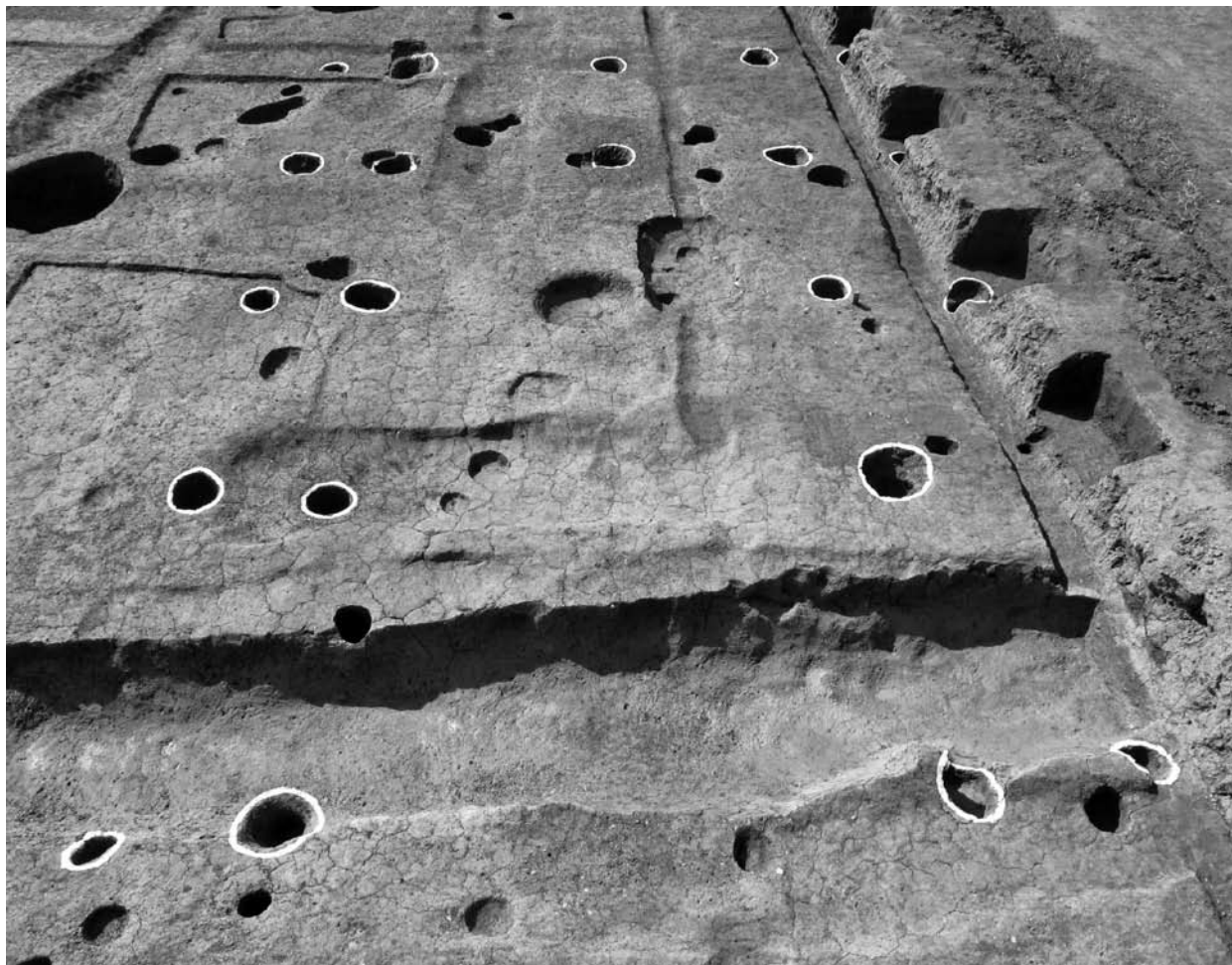
(1) SA3120(東から)



(2) SA3140(北から)



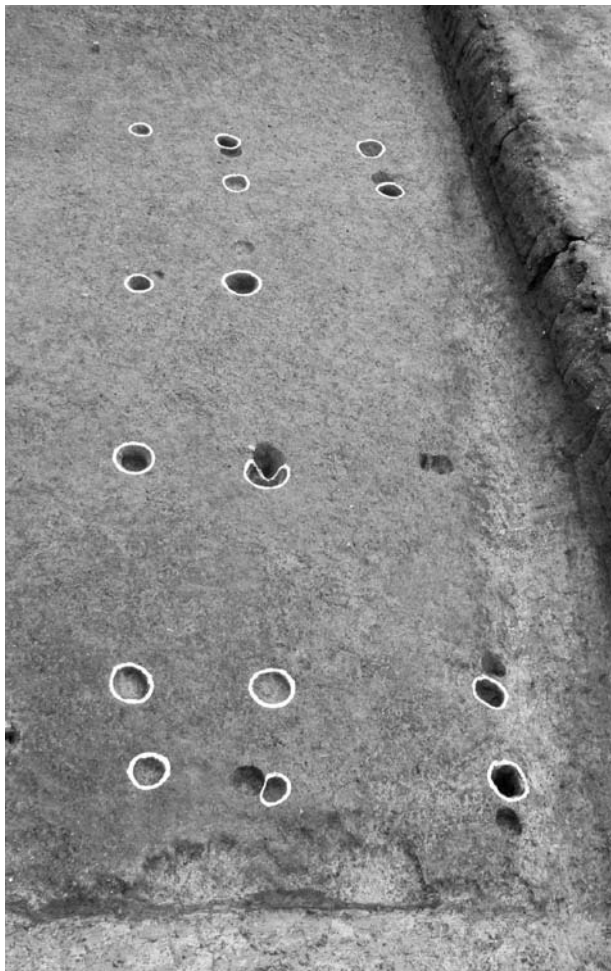
(3) SA3150(北東から)



(1) SB3100(北から)



(2) SB3110(東から)



(3) SB3025(西から)



(1)4区発掘前状況(東から)



(2)4区第1面遺構検出状況(東から)



(1)4区第2面遺構検出状況(東から)



(2)4区竪穴住居SC4009(南から)



(1)4区竪穴住居SC4007(南から)



(2)4区竪穴住居SC4007(東から)



(1) 竪穴住居SC4007カマド土器出土状況(南から)



(2) 竪穴住居SC4007カマド土器出土状況(東から)



(3) 竪穴住居SC4007カマド土器出土状況(南から)



(4) 竪穴住居SC4007カマド土器出土状況(南から)



(5) 竪穴住居SC4007カマド(南から)



(6) 竪穴住居SC4007カマド(東から)



(7) 竪穴住居SC4007カマド(南から)



(8) 竪穴住居SC4007カマド(東から)



(1)5区第1面遺構検出状況(西から)



(2)5区第2面遺構検出状況(西から)



(1) 6区全景(北西から)



(2) 6区全景(北から)



(3) 6区南壁土層(北から)



(1) 7区全景(西から)



(2) 7区1面全景(東から)



(3) 7区2面全景(東から)



(4) SD-7032(北から)



(5) 7区東壁土層(西から)



(1) 7区全景(東から)



(2) SC-8001(北から)



(3) SK8006(西から)



(4) SK8007(西から)



(5) SK8009(北から)



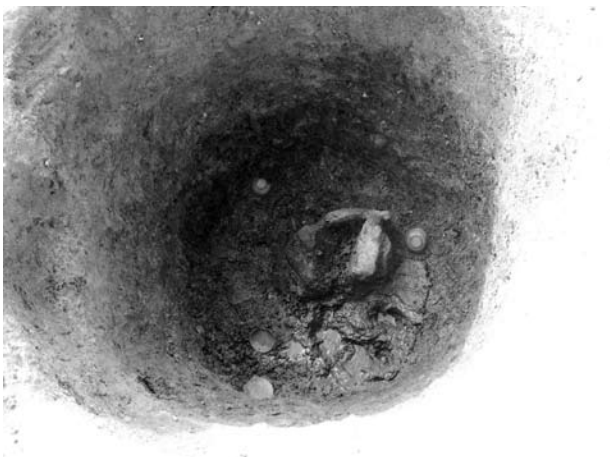
(1) SR8014蔵骨器・副葬遺物(北から)



(2) SR8014上段石積み(北から)



(3) SR8014中段石積み上面(東から)



(4) SR8014下段上面(東から)



(5) SR8014蔵骨器出土状況(東から)



(1) SR8019(北西から)



(2) SR8019(西から)



(3) SR8019主体部(西から)



(4) SR8019副葬品出土状況(南から)



(5) SR8019地山整形(南西から)



(1) SR8020(北から)



(2) SR8020(東から)



(3) SR8020 副葬品出土状況(南から)



(4) SR8003(南西から)



(5) SR8004(南から)



(6) SR8016(北東から)



(7) SR8022(北東から)



(1) 9区西側(南から)



(2) 9区北側(西から)



(3) SX9002(東から)



(1) 10区全景(南から)



(2) 10区全景(北から)



(3) SR10001(西から)



(4) SK10002(東から)

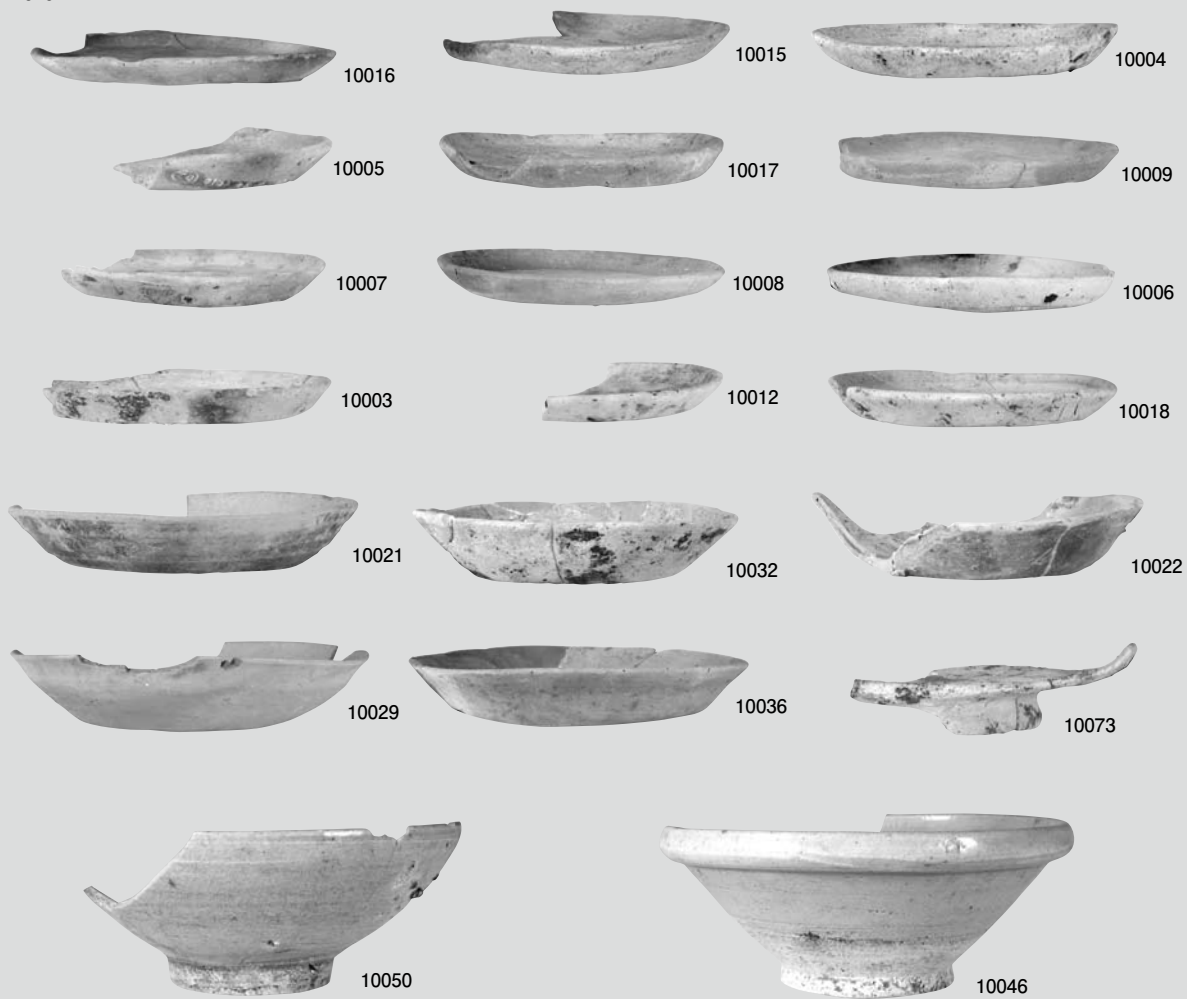


(5) SK10009(西から)

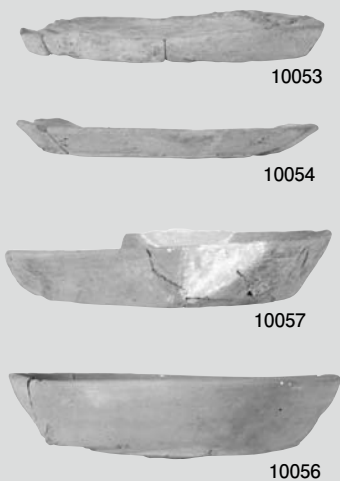


(6) SR10010(西から)

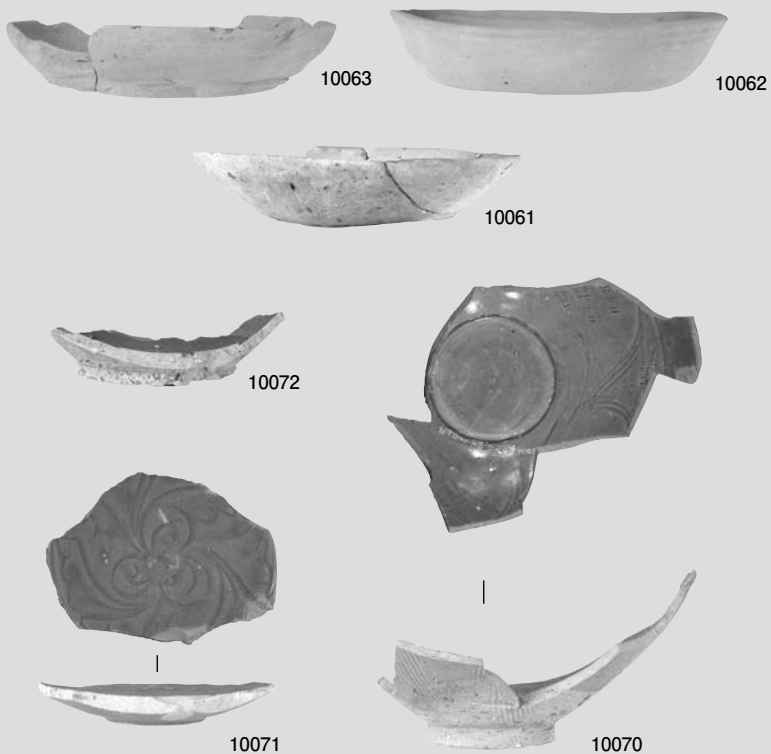
SE1010



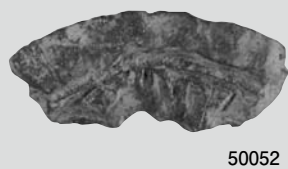
SE1013



SK1007



1区遺構検出



1区出土遺物

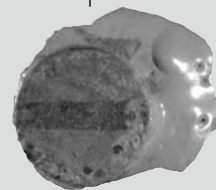
SD2001



10084



10085



SX2005



10090



10089



10093

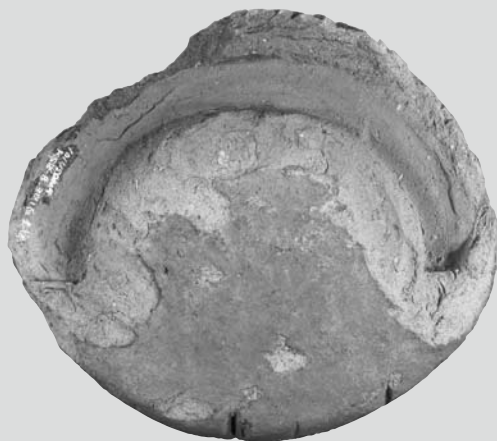


10088

3区遺構検出



50014



SB3130(柱穴)

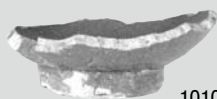


10297

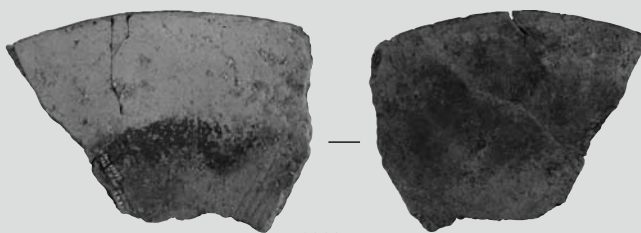


10298

SD3001



10100

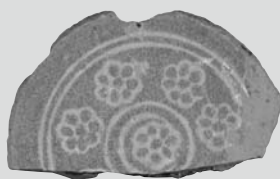


10099

SD3002



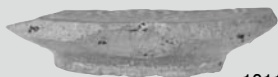
10101



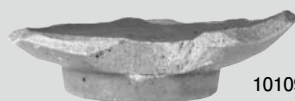
SD3003



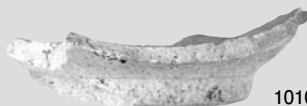
10105



10111



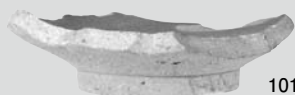
10109



10104



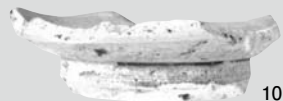
10112



10113



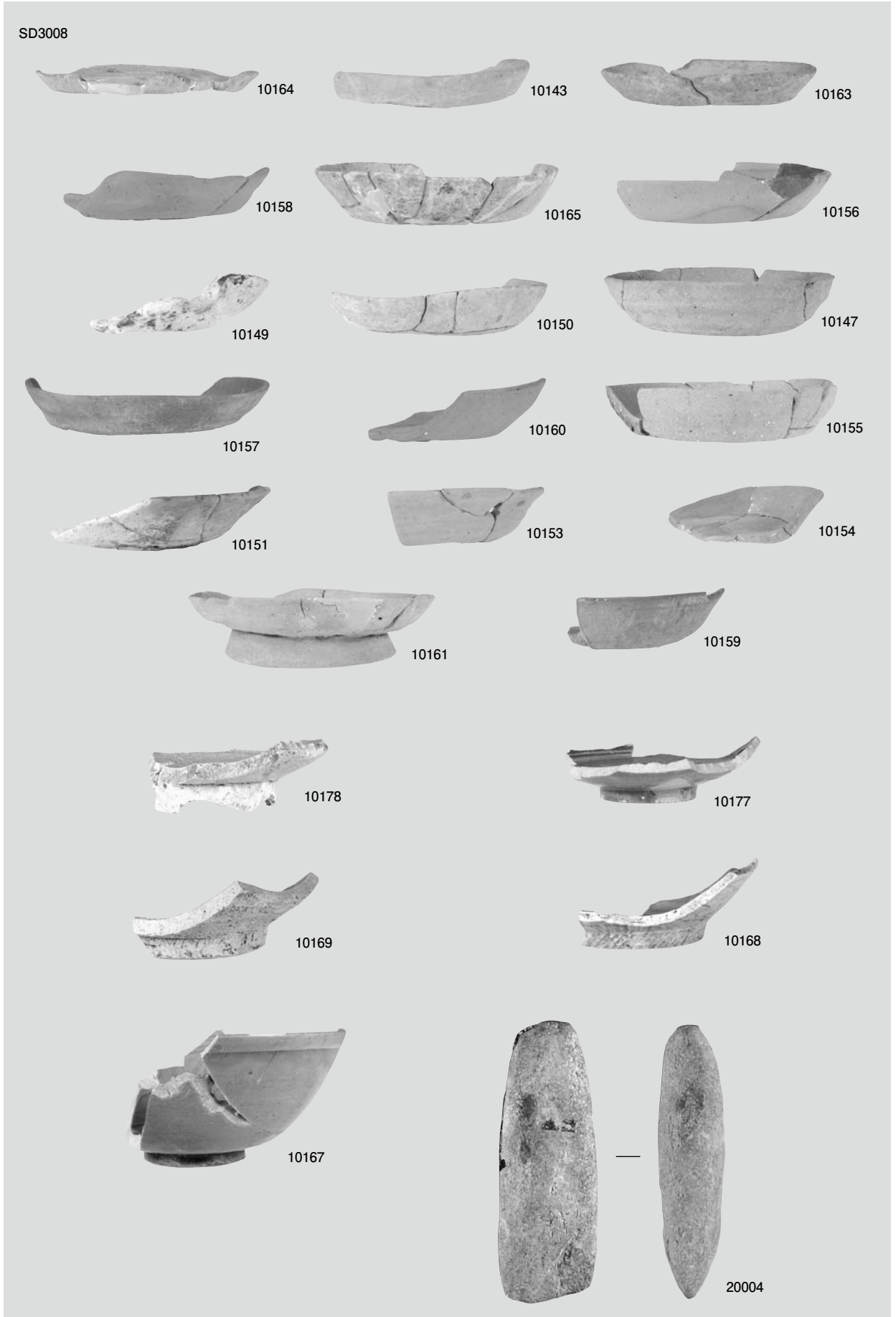
10177



10116

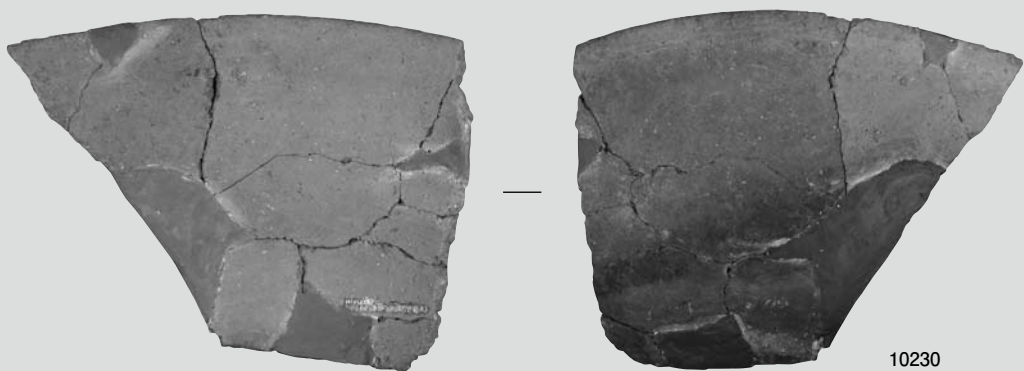
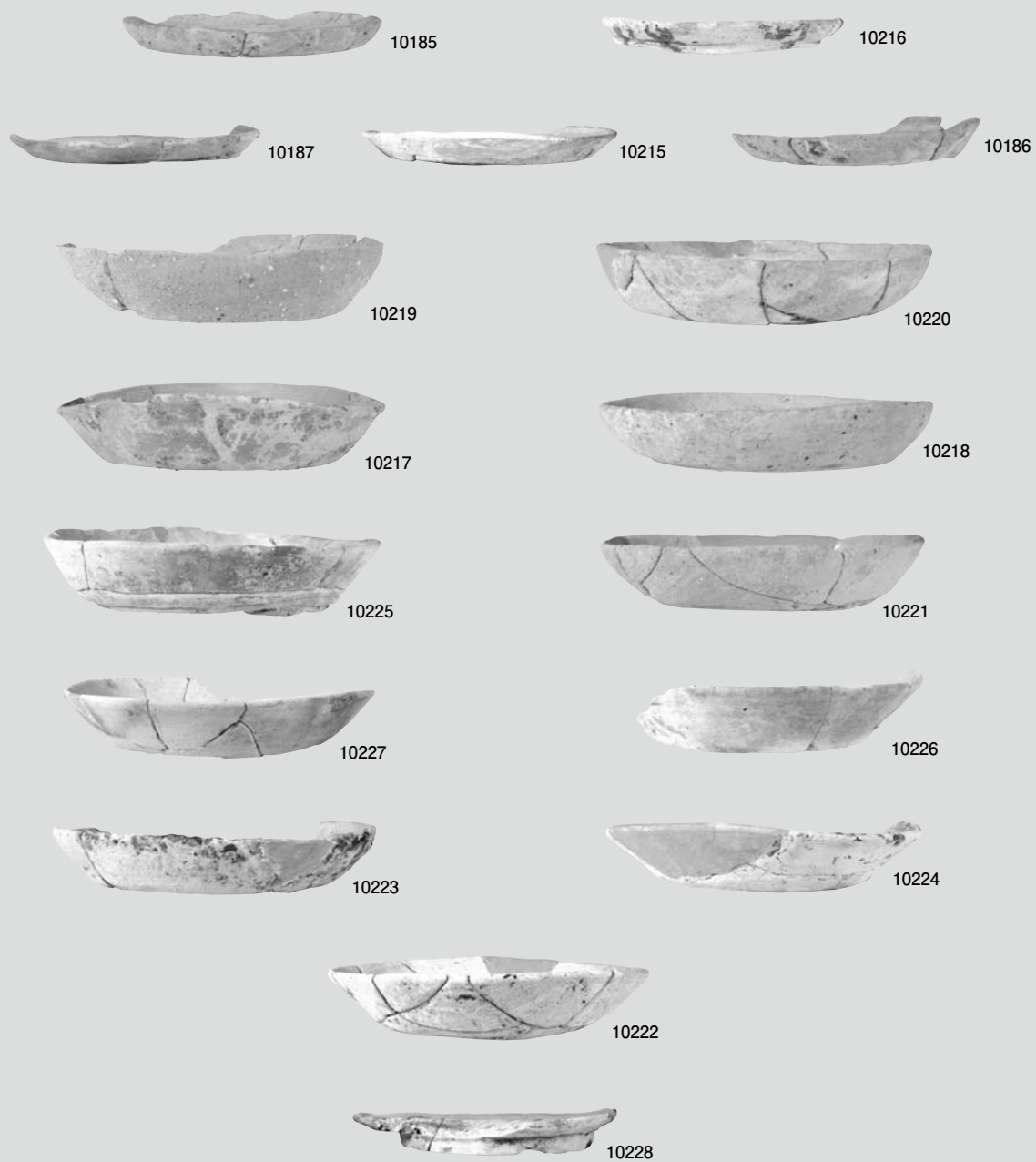


10354



3区出土遺物

SD3010(黒灰色粘質土)



3区出土遺物

SD3010(黒灰色粘質土)



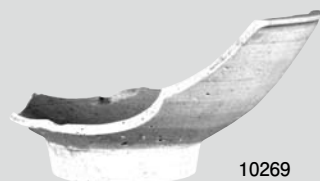
10272



10271



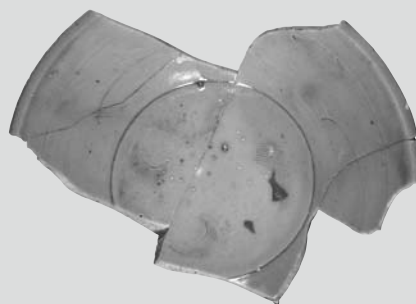
10273



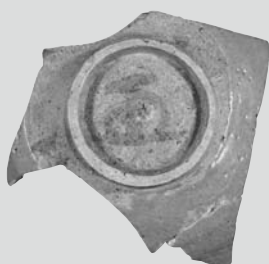
10269



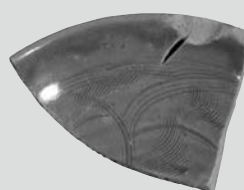
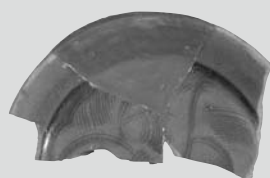
10277



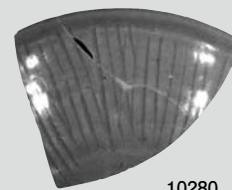
10270



10278



10280



3区出土遺物

SD3010(茶灰色粘質土)



10194



10193



10197



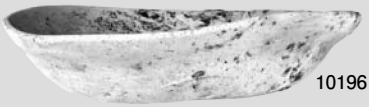
10198



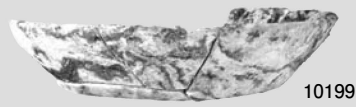
10204



10202



10196



10199



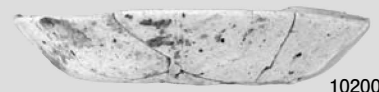
10206



10192



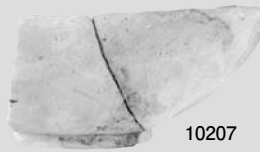
10201



10200



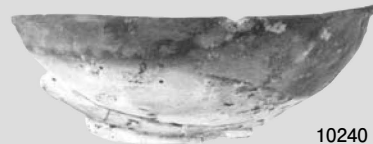
10208



10207



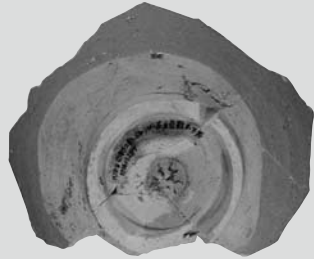
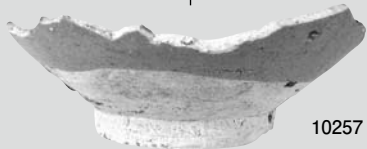
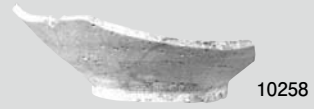
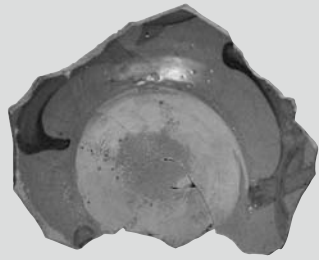
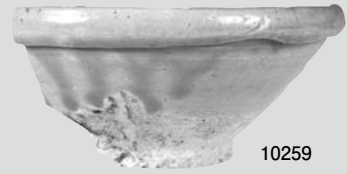
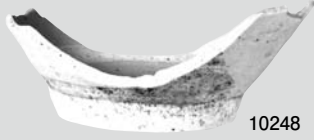
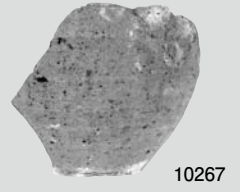
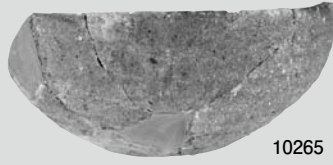
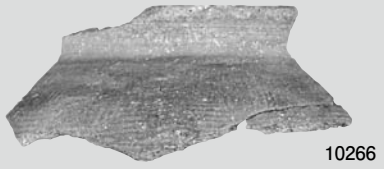
10237



10240

3区出土遺物

SD3010(茶灰色粘質土)



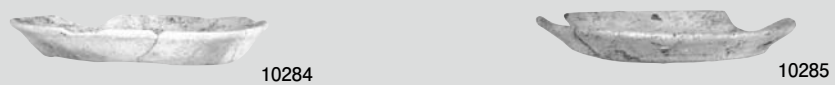
SD3010(青灰色粘質土)



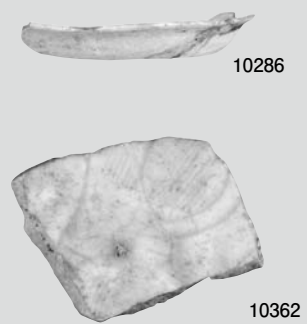
SD3012



SD3017



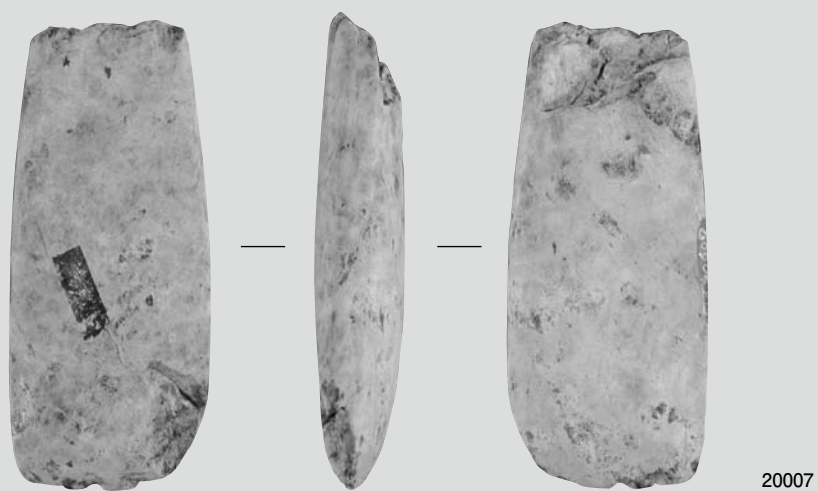
SD3019



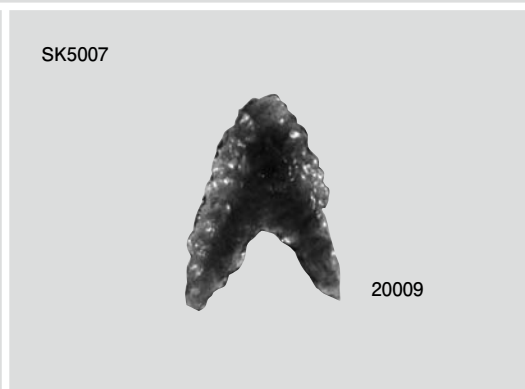
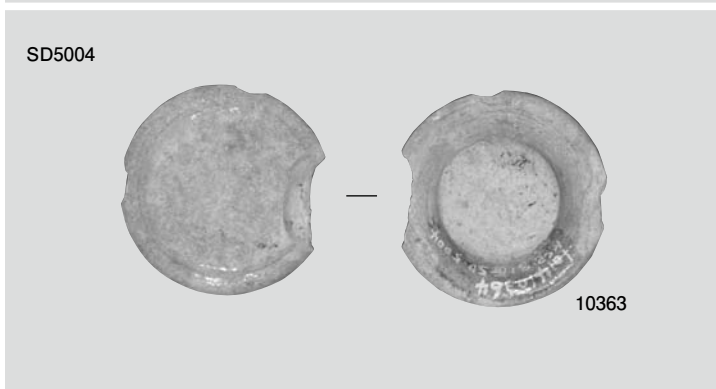
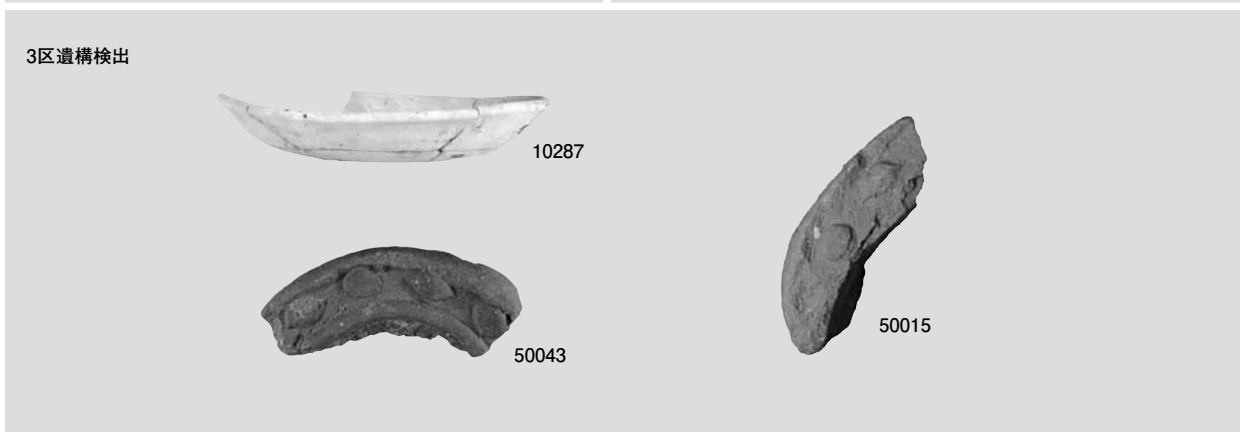
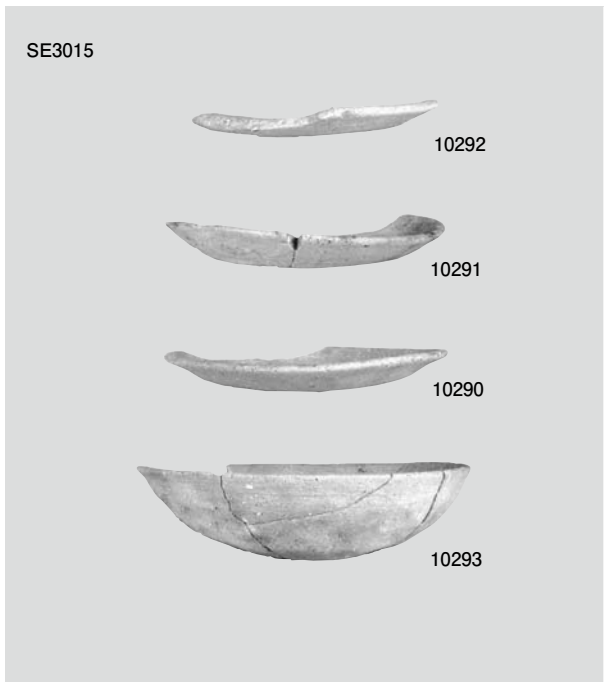
SD3023



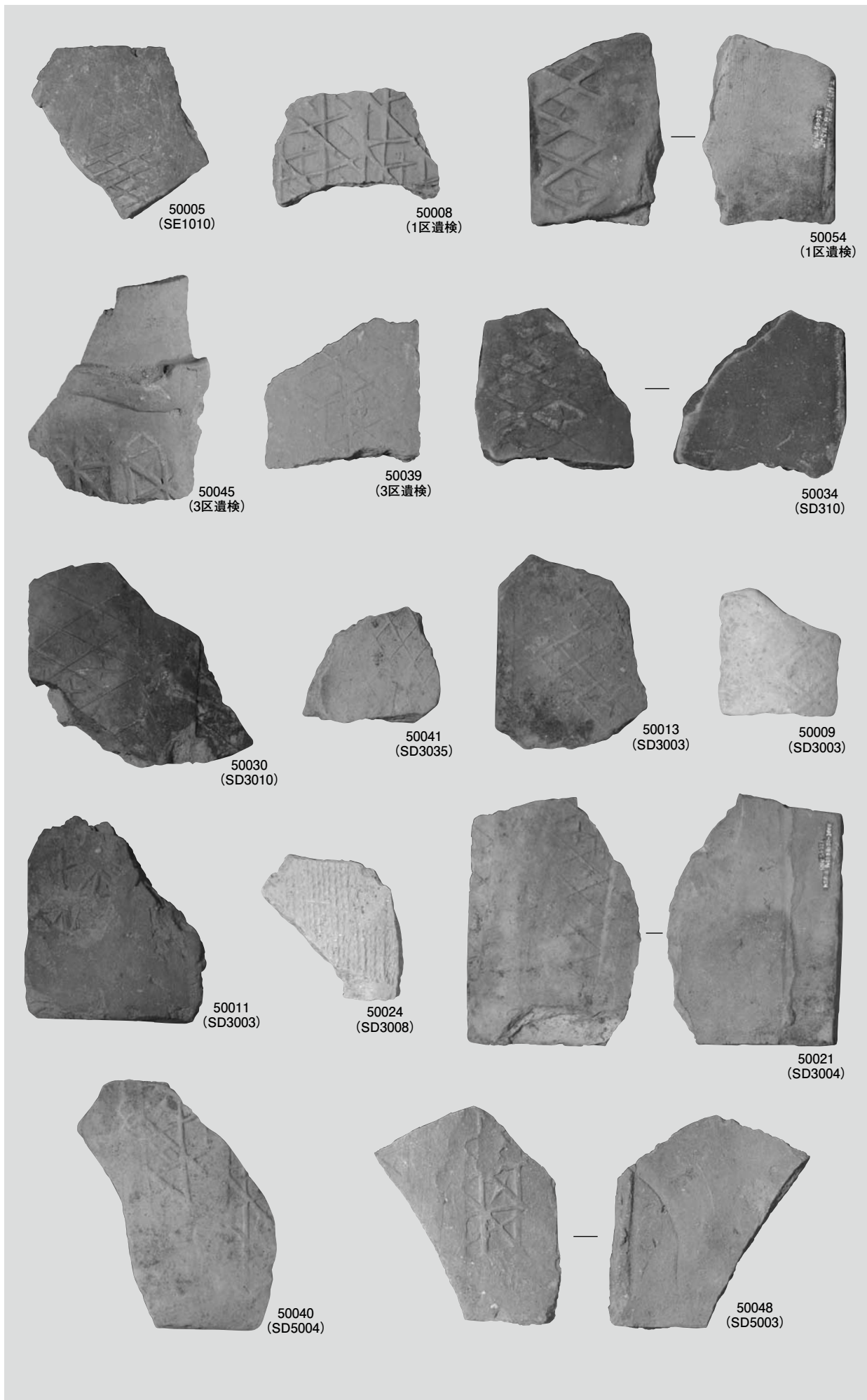
SD3027



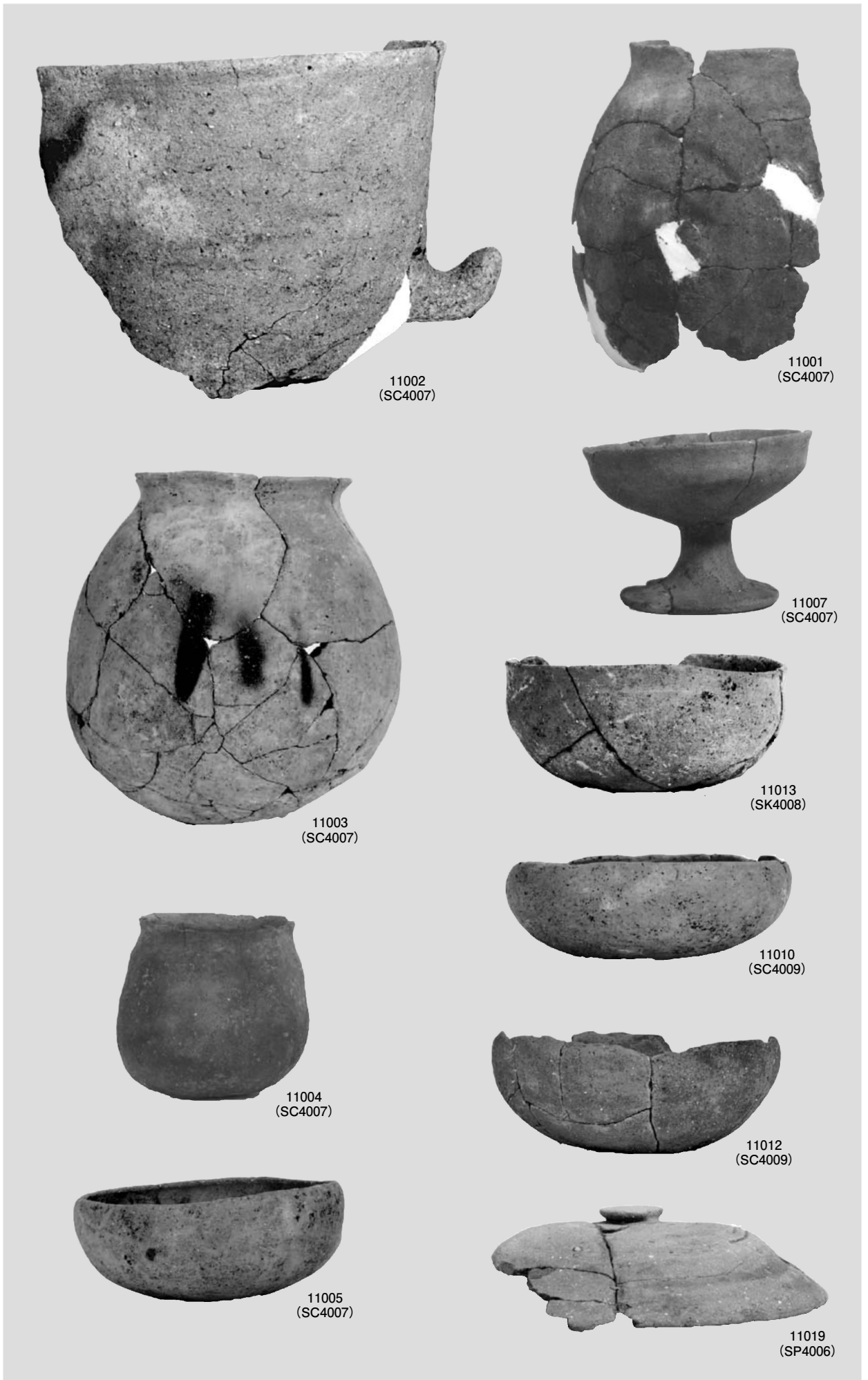
3区出土遺物



3区・5区出土遺物



1~5区出土丸瓦・平瓦



4区出土遺物



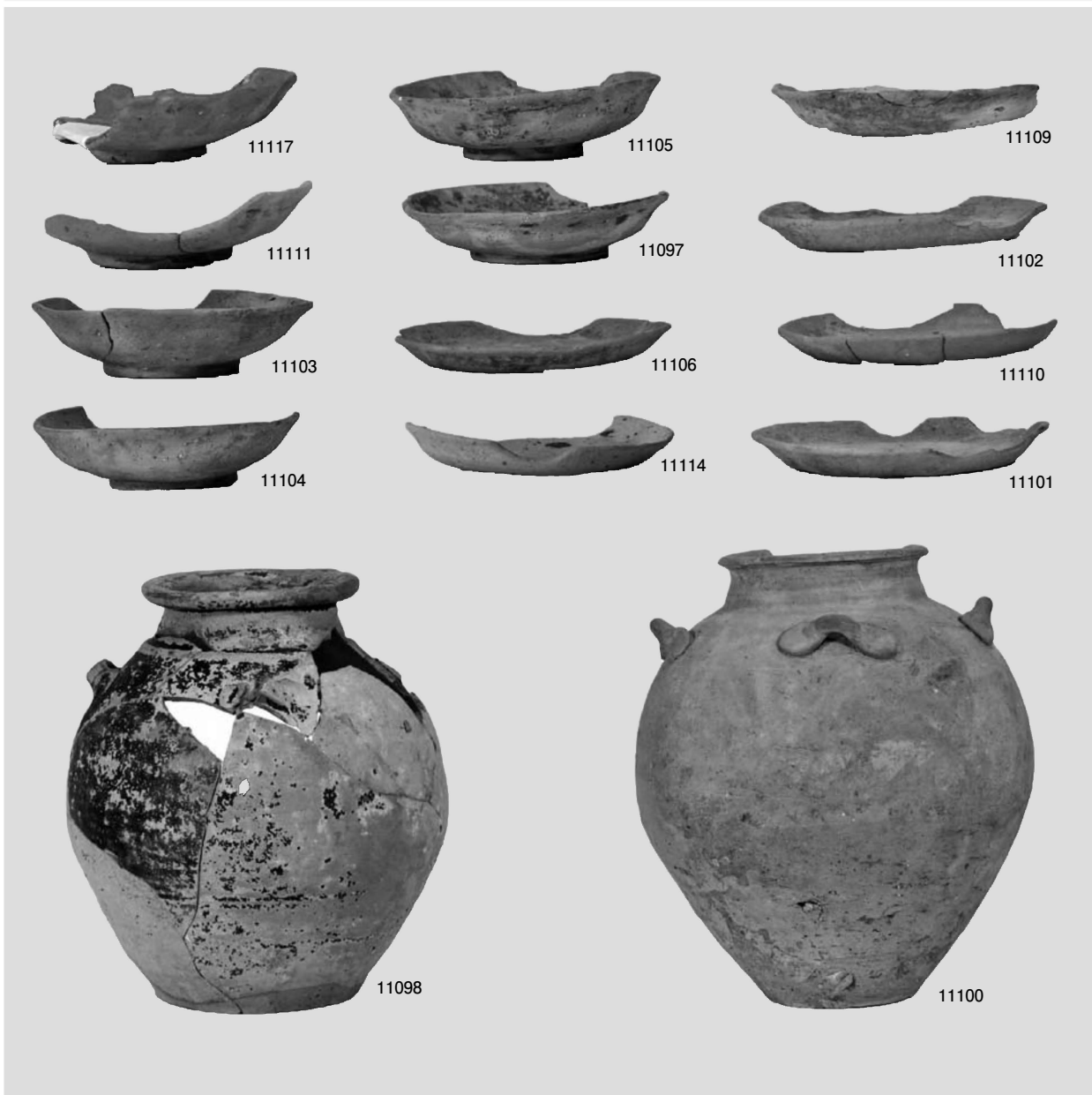
32001



32002



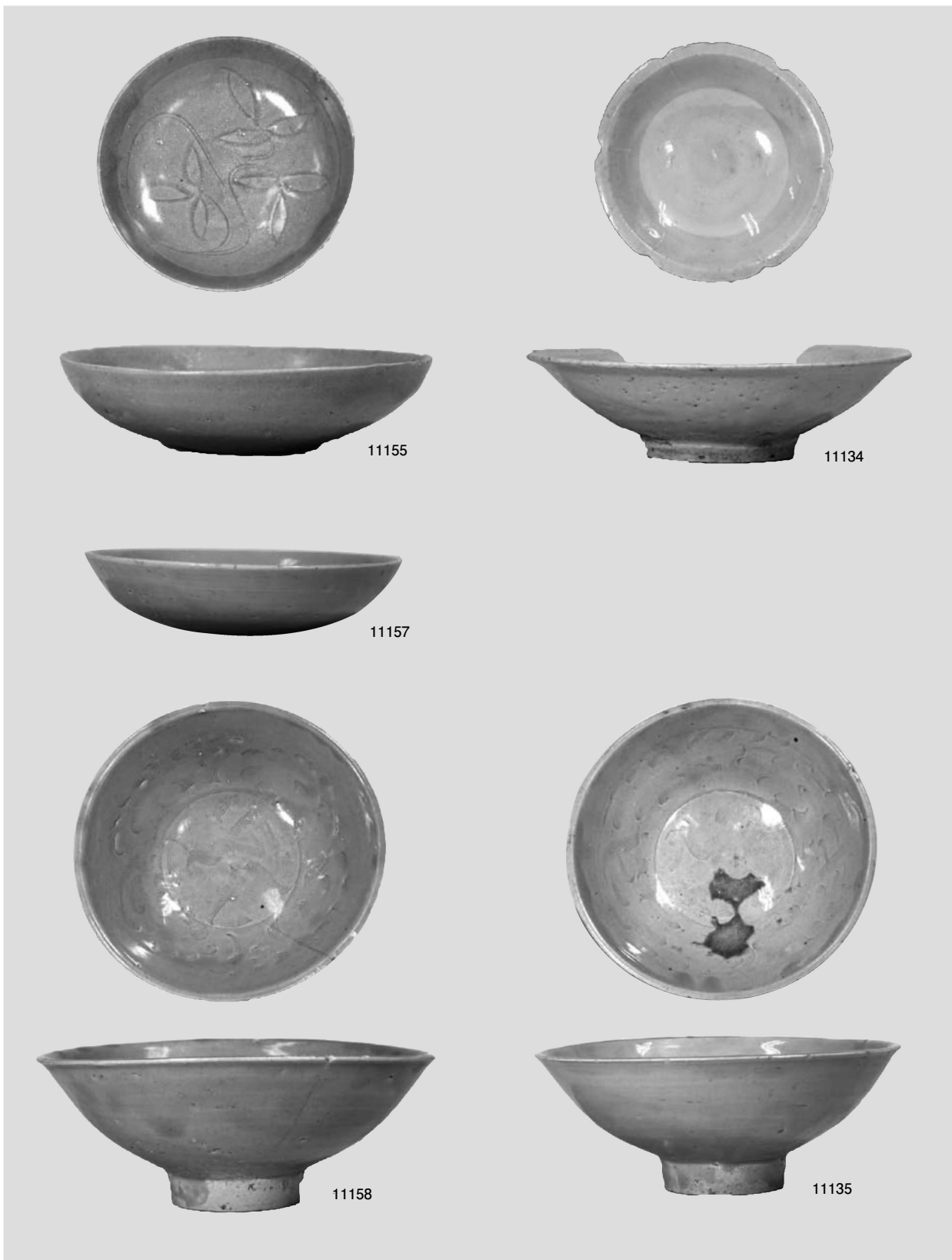
32003



8区SR8014出土遺物



8区SR8019出土遺物1



8区SR8019出土遺物2



8区SR8020 出土遺物

報告書抄録

書名ふりがな	かしいびいせき		
書名	香椎B遺跡 2		
副書名	香椎B遺跡第8次調査報告		
巻次	2		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1186		
編者名	瀧本正志		
著者名	大塚紀宜 瀧本正志		
編集機関	福岡市経済観光文化局 埋蔵文化財調査課		
発行機関	福岡市教育委員会		
機関所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 Tel. 092-711-4667		
発行年月日	2013年3月22日		
遺跡名ふりがな	かしいB いせき	北緯 (世界測地系)	33° 39' 16"
遺跡名	香椎B遺跡 (第8次調査)	東経 (世界測地系)	130° 27' 23"
所在地ふりがな	ふくおかけんふくおかしひがしくかしいあざしょうず	市町村コード	40130
遺跡所在地	福岡県福岡市東区香椎字生水ほか	遺跡番号	0317
調査原因	宅地造成	調査期間	2010.06.22 ~ 2010.11.19
種別	集落・墓	調査面積	2651.2㎡
主な時代	中世	主な遺物	土師器・瓦質土器・須恵器・磁器・石製品・銅鏡・鉄製品
特記事項	中世墓・屋敷跡		

香椎 B 遺跡 2

—香椎 B 遺跡第8次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1186集

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
Tel 092(711)4667

発行日 平成25年(2013年)3月22日

印刷 株式会社 博多印刷
福岡市博多区須崎町8-5